

「下伊那のかけ踊」調査報告書

平成二十一年度

文化庁「変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成の推進事業」

文化庁



「下伊那のかけ踊」調査報告書

平成二十一年度 文化庁「変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成の推進事業」

下栗のかけ踊り〔長野県飯田市〕



拾五社大明神社境内でのかけ踊り（平成 21 年 8 月 15 日）



拾五社大明神社内での式礼の祭り（平成 21 年 8 月 15 日）

和合の念仏踊り [長野県下伊那郡阿南町]



熊野社での和讃（平成 21 年 8 月 13 日）



林松寺での庭入り（平成 21 年 8 月 14 日）

日吉の念仏踊り（日吉の大社念仏）〔長野県下伊那郡阿南町〕



送り盆 庭入りの行列（平成 21 年 8 月 16 日）



橋の上で角灯籠を燃やす（平成 21 年 8 月 17 日）

大河内のかけ踊り〔長野県下伊那郡天龍村〕



新盆宅でのかけ踊り（平成 21 年 8 月 14 日）



念仏堂前の念仏和讃（平成 21 年 8 月 14 日）

坂部のかけ踊り〔長野県下伊那郡天龍村〕



金毘羅様の庭でのかけ踊り（平成 21 年 8 月 14 日）



堂の庭での引け踊り（平成 21 年 8 月 14 日）

向方のかけ踊り [長野県下伊那郡天龍村]



長松寺境内での送り盆の和讃（平成 16 年 8 月 17 日 橋都正氏撮影）



かんぴょうえ様の踊り（平成 16 年 8 月 17 日 橋都正氏撮影）

満島神社の秋祭り（かけ太鼓）〔長野県下伊那郡天龍村〕



前宮（南の森）からお練りの出発（平成 21 年 10 月 18 日）



満島神社（原の森）境内でのかけ太鼓（平成 21 年 10 月 18 日）

中井侍秋例祭（宿入り・道中囃子）〔長野県下伊那郡天龍村〕



小高明神境内での太鼓踊り（宿入り）（平成 21 年 11 月 28 日）



道行きの途中で踊られる笠くずし（平成 21 年 11 月 29 日）

温田の樽木踊り〔長野県下伊那郡泰阜村〕



南宮神社での樽木踊り（平成 21 年 8 月 22 日）



樽木踊りの行列（平成 21 年 8 月 22 日）

口絵写真…口絵写真は平成二十一年に実施された現地調査において撮影したものである。

ただし、「向方のかげ踊り」については平成二十一年に実施されなかったため、橋都正氏が平成十六年に撮影したものを使用した。

序

当調査報告書は、平成十一年度に国より記録作成等の措置を講ずべきものとして選択されていた「下伊那のかけ踊」についてのものである。当該伝承が今日衰滅、変容の恐れがあることから、平成二十一年度に文化庁事業「変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成の推進事業」として社団法人全日本郷土芸能協会が請け負い、当協会内に組織された我々調査報告書作成委員会のメンバーがその具体的な作業を執り進めた。当調査報告書の作成に当たり、特に留意した点をはじめに記しておきたい。

第一章 「下伊那のかけ踊」総説

長野県の下伊那地方に集中的に分布している「かけ踊り」（ところにより、念仏踊り、樽木踊り、かけ太鼓、盆踊り、とも）について、伝承地域の歴史と地理、各個別伝承の概要、下伊那のかけ踊りの特色と歴史的展開の三項に分けて、総括的に全貌を見渡せるように記述した。

第二章 「下伊那のかけ踊」現地調査報告

盆や祭礼時における当該伝承の現地の行事次第に実地に立ち会い、つぶさに調査記録してとりまとめた九件の伝承についての個別の記述である。いずれの伝承地の調査においても、行事の初めから終わりまでビデオカメラにより映像記録化して文章記述の際に活用をはかったが、殊に芸態の記述においては大変参考となった。

第五章 「下伊那のかけ踊」調査を終えて

当該伝承はかねてより研究者間で注目されてきたもので、次のような議論をよんできた。柳田国男、折口信夫、中村浩などが言及してきた「かけ踊り」という言葉の解釈の問題、「下伊那のかけ踊」では盆踊りと一つになっている例が多いのだが、それに関連して盆踊りの展開をどう理解すべきかの問題、さらに「下伊那のかけ踊」と三河や遠州など隣接地域の類似芸能との関わりはどうかという問題等である。実地調査にあたった我々調査報告書作成委員達の間で、それぞれの現地調査を通じて得た知見をもとにしながら、これらの課題を一步でも先に進めてみようとの趣旨で話し合った内容を記したものである。

おわりに、今回の現地調査を通じて、当該地域の高齢化、少子化に起因する地域の急激な人口過疎化のなかで、最近中絶されてしまった伝承地や、今まさに中絶しかかっている所、あるいは衰退せんとしている姿を呈している地等を目の当たりにし、今回の記録報告書作成事業がまさに時宜にかなったものであったことを実感した。

例 言

- 一 本書は、平成二十一年度文化庁事業「変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成の推進事業」に係る報告書作成業務として、社団法人全日本郷土芸能協会が実施した「下伊那のかけ踊」の調査報告書である。
- 二 調査は、調査報告書作成委員会を設置、長野県下伊那地方に伝承される「かけ踊」と総称される九地区の民俗芸能を調査対象とし、芸能公開日に伝承団体、市町村教育委員会の協力を得て詳細な調査を実施した。
- 三 調査班を芸能公開日に合わせて七班編成し、調査員、及び記録員が現地調査を行い、九箇所の詳細調査を、第二章「下伊那のかけ踊」現地調査報告として掲載した。
- 四 現在、中断あるいは廃絶している過去の伝承を、第三章中断、廃絶している「下伊那のかけ踊」調査報告としてまとめた。
- 五 「下伊那のかけ踊」の悉皆的な目録は、第四章悉皆目録として掲載した。
- 六 調査を終えた感想や伝承の現状などについての討議を第五章にまとめた。
- 七 参考にした文献等の資料は、第六章「下伊那のかけ踊」関係資料として掲載した。
- 八 芸能の名称は平成二十一年現地調査時の確認による。
- 九 伝承地名称は各市町村教育委員会からの回答による。

目次

口絵写真	1
序	11
例言	12
第一章 「下伊那のかけ踊」総説	15
第二章 「下伊那のかけ踊」現地調査報告	27
「下伊那のかけ踊」分布図	29
下栗のかけ踊り〈飯田市〉	30
和合の念仏踊り〈阿南町〉	41
日吉の念仏踊り（日吉の大社念仏）〈阿南町〉	53
大河内のかげ踊り〈天龍村〉	67
坂部のかげ踊り〈天龍村〉	77
向方のかげ踊り〈天龍村〉	87
満島神社の秋祭り（かけ太鼓）〈天龍村〉	94
中井侍秋例祭（宿入り・道中囃子）〈天龍村〉	101
温田の樽木踊り〈泰阜村〉	109
中村 茂子	109
久保田裕道	101
星野 紘	94
星野 紘	87
星野 紘	77
橋都 正	67
城所 恵子	53
久保田裕道	41
橋都 正	30

第三章	中断、廃絶している「下伊那のかけ踊」調査報告	119
	梨久保の樽木踊り〈泰草村〉	120
	中村 茂子	
	中断、廃絶している「下伊那のかけ踊」分布図	127
第四章	悉皆目録	129
第五章	「下伊那のかけ踊」調査を終えて	132
第六章	「下伊那のかけ踊」関係資料	155
	調査報告書作成委員会	159
	「下伊那のかけ踊」現地調査実施日・調査班	159
	協力者一覧	161

第一章

「下伊那のかけ踊」

総説

「^{しもいな}下伊那の^{おどり}かけ踊」総説

中村 茂子

はじめに

「かけ踊り」には歴史的に二種類の形式があつて、その一種は集落から集落へ日を追つて踊り継いでゆく形式のものであり、もう一種は踊りをかけられたら、逆に踊りをかけ返す形式のものである。前者の代表例としては、伊勢から始まつて東西に踊り継がれた「伊勢踊」をあげることができる。また後者の例としては、江戸時代の初期にかけて京都で流行した小町踊りをあげることができる。小町踊りは、京都の町々で七夕の前夜から当日にかけて、華やかな装束の町娘によつて踊られたもので、しかけられた踊りは踊り返さなければ縁起が悪いといわれて競い合った。しかし、江戸時代中期には衰えて、江戸の小町踊りは、太鼓の拍子に合わせて歌を歌うだけの伝承であつたという。長野県松本市に伝承されている子供の祭り「ぼんぼん」は、江戸中期の小町踊りの伝承を継承した内容であるという（註1）。現在、「かけ踊り」という名称で伝承されている民俗芸能は、岐阜県郡上市（旧郡上郡）の各地と、長野県下伊那郡の各地に見られるもので、さまざまな点で多少の差異は見られるものの、その形式や踊り歌には共通点が多い。

筆者は、かつて岐阜県郡上市（現郡上市）「^{かのみす}寒水のかけ踊り」と、その周辺に伝承されている「かき踊り」を中心とした論考「かけ踊の研究」を執筆しており（註2）、その経験を踏まえて総説を担当させて頂くことにした（写真「寒水のかけ踊り」）。岐阜県郡上市のかけ踊りと長野県下伊那のかけ踊りの最大の差異は、その行われる時期と目的であり、郡上市各地のほとんどの伝承が、九月初旬から十月初旬にかけて行われる氏神の祭礼（かつての八朔祭り・収穫期を目前にしての氏神祭り）に踊られていたのに対して、下伊那郡の場合は盆の時期に行われる新仏供養を中心としたかけ踊りに、念仏踊り・盆踊りが結びついた形式で伝承されている地域が多いことである。新仏供養と無関係に氏神祭り

として伝承されているのは、^{やすおかむめくた}泰阜村温田の樽木踊りと^{てんりゅうむらつしま}天龍村満島のかけ太鼓・^{なかいざむらい}同村中井侍秋例祭である。以下、調査対象となつた下伊那の九カ所の踊り、および、その周辺地域の芸能について概略を記し、その上で筆者が考える「下伊那のかけ踊」の地域的特色と現在に至つた歴史の変遷について追究してみたい。



「寒水のかけ踊り」白山神社の踊り



「寒水のかけ踊り」中桁前の踊り

一 地理と歴史

下伊那郡およびかけ踊り伝承地域の地理と歴史については、『日本歴史地名体系』二十巻 長野県の地名（註3）・『角川日本地名大辞典』20長野県（註4）を参考資料として、簡単に記しておこう。

下伊那郡

下伊那郡は長野県南部の天竜川中流域に位置し、旧伊那郡の南半分を占める。郡中央部を天竜川が北から南へ流れ、支流が田切地形を形成して天竜川に注いでいる。天竜川右岸は木曾山脈によつて木曾郡・岐阜県と境を接し、木曾山脈を源流とする松川・阿知川・和知野川^{わちの}などが東流して天竜川へ入り、左岸は赤

石山脈によって山梨県・静岡県と境を接して、赤石山脈を源流とする小渋川・遠山川などが西流して天竜川へ入る。下伊那郡の南は茶臼山・新野峠・青崩峠によって、愛知県・静岡県と境を接している。「伊那」の文字は「続日本紀」「三代実録」「延喜式」「和名抄」に用いられ、江戸時代に「伊奈」と記されるが明治になって旧に復した。郡名の起源は天竜川流域の開拓者であった猪名部氏にあるとされている。

近世、下伊那郡の東岸一帯では、御館被官制度と呼ばれる特殊な小作慣行が残存し、中世的な名主（地侍）が土着して名請人になったため、被官（作人）が本百姓として独立できず、中世的村落が未解体のまま近世村落が形成された。中期以後、被官層の解放運動が盛んになり、千村氏預かりの幕府領のうち、赤石山脈・伊那山脈・木曽山脈の榎・檜などの森林資源を有する村々は、年貢として榎木を納める榎木成村に設定された。

また、下伊那地方の一揆は、近世初期から明治初頭にいたるまでに、九十八件の報告がなされている。南山騷動は天竜川東岸の白川藩領南山地方から起こり、計画性・組織力によって最小限の犠牲で幕府領並みの金納要求を勝ち取った一揆として知られている。

明治四年の廃藩置県以後、同九年に長野県となり、同十二年に上伊那郡・下伊那郡に分かれた。下伊那郡は近世末の飯田城下ほか一六九村が、明治二十二年の市町村制施行時には一町四十一村となり、昭和五十四年には五町十四村、平成十一年には三町十四村、平成十七年には三町十二村となり、現在に至っている（註5）。

阿南町（新野・和合・日吉）

阿南町は昭和三十二年に天下条村・旦開村・和合村が合併し、町制が施行して成立した。下伊那郡の南部に位置し、北東に泰阜村、南東に天龍村、南は愛知県北設楽郡豊根村に接している。高原状の新野地区を除くと起伏の多い傾斜地帯であり、和合川・売木川が中央部を流れている。新野は高冷地のため夏涼しく、学生村の発祥地であり、当地に伝承されている「雪祭り」は、国指定重要無形民俗文化財である。谷間の和合は平坦地が少なく、山林面積が広く傾斜

地を利用した畑作が多い。宮下家は和合に土着した郷主であり、代々金吾（大家）を襲名して庄屋を世襲してきた。日吉は『長野県町村誌』には「和合の支村にして大永元年（一五二一）一村になる」と記されている。氏神伊勢社の祭り「御鍛祭り」が四月二十九日に行われている。

天龍村（大河内・坂部・向方・満島・中井侍・大久那）

天龍村は昭和三十一年に平岡村・神原村が合併して成立した。下伊那郡の南部に位置し、南は愛知県北設楽郡豊根村・東南を静岡県水窪町（現 浜松市天竜区）に接している。中央部を南流する天竜川の流域に、わずかに平地が開けている他は山岳地帯である。天竜川をせき止めた平岡ダム・佐久間ダムがあり、温暖多雨多湿の気候で基幹産業は林業である。大河内は明治八年に合併して神原村となり、さらに合併を繰り返して現在に至っている。稲作、畜産、観光に力を入れている。また、池大神社一月五日の祭りには湯立て神楽が奉納され、坂部の冬祭り・向方のお潔め祭りとともに「天龍村の霜月神楽」として、国指定重要無形民俗文化財である。坂部・向方も明治八年に合併して神原村となり、さらに昭和三十一年に天龍村となって現在に至っている。坂部には十四世紀半ば頃に熊谷家が入って開拓を始め、「熊谷家伝記」が残されている。「冬祭り」が行われるのは一月四日である。向方は標高が高く、農業の経営規模が小さく、椎茸栽培などが行われている。「お潔め祭り」が行われるのは一月三日である。満島は明治八年の合併により平岡村となり、昭和三十一年に天龍村となって現在に至っている。江戸時代には満島番所があつて、天竜川下しの材木・榎木や行人も改められ、この番所は明治初期まで継承された。満島は天龍村の中心地であり、商店街が形成され、産業・経済の中心をなしている。中井侍も満島とともに天竜川左岸の山間地で、天竜川に沿って走るJR飯田線の北から為栗・平岡・鶯栗・伊那小沢・中井侍といった駅がある。大久那も明治八年に大河内・坂部他と共に合併して神原村となり、昭和三十一年の合併以後、現在に至っている。

泰阜村（温田・梨久保）

下伊那郡の南部に位置し、北から東北を飯田市、南は天龍村、南西は阿南町

に接している。天竜川が西端を南流し、山林が村の八十三パーセントを占めて急峻である。JR 飯田線が天竜川東岸を通り、村内に温田駅がある。南山村は泰阜村の南部に位置し、江戸期を通して幕府領であり、江戸時代初期から樽木成村となった。天正十九年（一五九一）の信州伊奈青表紙の縄帳には田本・大畑・温田・漆平野・我科・野尾（現梨久保、田本に属していた時代もある）など十二カ村であったが、正保四年（一六四七）十二カ村が一村扱いとなり、大南山として村高五八五石余と記載されている。さらに、元禄十五年（一七〇二）より南山村に復した。

飯田市（下栗）

下栗は旧上村の大字であり、平成十七年十月に飯田市に合併となった。現在の居住者表示は、飯田市上村（具体的な番地）となっている。

二 天龍村のかけ踊りと盆踊り

天龍村には、平成十一年に「下伊那のかけ踊」として国の無形民俗文化財に一括選択されたうち、大河内・向方・坂部の三地区にかけ踊りが伝承されている。天龍村は、南北に長い長野県の最南端に位置し、静岡県・愛知県との県境にあつて、芸能の宝庫として知られている「三遠信」地域的一端である。はじめに、各地区のかけ踊りについては、『天龍村史』下巻、その他を参考資料として、伝承の概略を記してみよう（註6）。

一 大河内のかけ踊り

現行、かけ踊りは八月一日の午前中から準備が始まり、各戸主が出て「盆道づくり」（祠堂や道路の清掃）を行い、集会所（かつて祠堂）に集まって「切草づくり」（かけ踊りに使用する柳・切子灯籠の修理・作成）を行う。新仏を迎える家では、酒一升を添えて「かけこみの願い出し」を受け付けてもらい、夜に常会を開いて十四日の日程等を定めた後、集会所の庭でかけ踊りの練習をする。かつて、この日は「中老さまの踊り」と称し、かけ踊りのあと「すくいさ」「十六」などという盆踊りを踊った。六日「盆花迎え」は、全員でかけ踊

りの練習と盆踊りを踊るが、かつて、この日に青年たちが祈願堂に集まって「若い衆の踊り」（かけ踊りの練習）を行い、「かけこみの願い出し」を青年会長が受け付けた。七日「伽藍様の祭り」は、欄宜・区長・氏子総代が早朝に「大伽藍」と書いた紙旗を持って池大神社へ参詣し、念仏（和讃）を唱える。十四日夜、踊り手一同は念仏堂（愛宕堂）に集まり、和讃を唱えてから行列を整えて「かけこみ願い出し」のあつた新盆の家々へ、年長女性宅から六字の名号を書いた旗を持って練り込む。途中庚申の祠の前を通過する時は「花の和讃」を唱えてから進行する。最初に新仏の家の庭でかけ踊りを踊り、その場で整列して盆棚に向かつて和讃を唱える。次に座敷に上がって「水むけの酒」を頂き、踊り手以外の人々も加わって庭で盆踊りを踊る。最後に盆棚に向かつて整列し、「新盆おいとま」和讃を唱え、次の家（二番目からは廻りやすい順）へ移動する。一軒で二時間程度を要するため、三・四軒が限度であり、新仏が多い年は十五日におよぶ。かけ踊りの一行を迎える新盆の家では、親戚一同が集まって「百八タイ（二〇八本の松明）」を作り、行列の囃子が聞こえてくると「百八タイ」に点火し、行列はこの明かりに導かれて庭へ練り込んで来る。行列次第は、次の通りである。

① 六字の名号旗 ② 切子灯籠 ③ とりさし ④ 一の太鼓 ⑤ 鉦 ⑥ 二以下の太鼓 ⑦ 柳の順番である。十六日夜は、新盆の灯籠を愛宕堂の庭へ運び、端に立てて盆踊りを踊った。十七日午前零時近く、踊り手は愛宕堂に向かつて整列し、十二本の旗（愛宕大神・池大神・当所大伽藍・八王神・東大神・西大神・水神山の神・郷主様・有縁無縁様・神々様・庚申様・津島様・秋葉大権現金毘羅大権



大河内のかけ踊り

現・南無阿弥陀仏」の神仏に對して、それぞれの和讃を唱える（本来は、各祠堂へ詣でて唱えた）。続いて盆踊りになり、その最後に「八幡」を踊って、新盆の灯籠を担ぎ、「ナンマイダンボ く」と繰り返しながら庚申様へ行き、碑に向かって「花の四節」を唱え、灯籠を焼却して後ろを振り向かず無言で帰宅する。

二 向方のかけ踊り

八月一日、基本的に各戸から一人が出て墓掃除と道の草刈りをし、夕方各戸の庭で「迎えダイ」を焚き、夜、かけ踊りの稽古を始める。七日頃に長松寺では施餓鬼棚を作る。かつて新盆の家では「百八タイ」を作ったが、現在は作らない。十二日夜、かけ踊りの踊り手は長松寺に集まって「拍子ぞろえ（かけ踊りの総仕上げ）」を行う。十四日夜、各戸ごとに墓で迎えダイを焚き、新盆の家ではこの日と翌日十五日の昼間に僧侶を家へ迎え、新盆供養をした後、念仏を唱えて「タイトボシ（家から墓まで百八タイを灯す）」をしてから墓参りをする。夜は長松寺でかけ踊りと盆踊りを行う。

かけ踊りは、最初に寺の手前からジョウド（もと十王堂跡か）まで「拍子ぞろえ」（祇園囃子で進み、三回ほど繰り返して元の位置に戻る）を行う。次に、行列を整えて長松寺の山門まで祇園囃子で進み、境内に立てた迎えダイに点火するのを合図にして、行列は境内へ繰り返す。この時の行列次第は、次の通りである。

①大提灯 ②一番柳 ③一番太鼓 ④二番太鼓 ⑤一番やっこ ⑥鉦 ⑦五番太鼓 ⑧二番柳 ⑨六番太鼓 ⑩七番太鼓 ⑪二番やっこ ⑫四番太鼓 ⑬三番太鼓 ⑭小提灯の順番である。踊り手の一行は、長松寺境内に入ると本堂に向かって整列し、「庭入り（挨拶踊り）」を踊る。次に輪になって「かけ踊り（庭はめ踊り）」を踊る。その後に、大正頃までは「大念仏」を唱えていたという。次に本堂内で酒肴をいただき、庭において盆踊りを踊り、「蚊ばらい踊り」「引け踊り（世の中踊り）」を踊って、ジョウドまで戻る。昭和二十年以前には新盆の家々を廻っていたという。

十五日は各戸の墓でタイを焚き、十六日午前零時過ぎ（早朝）に精霊棚を送り、夕方遅い時間に送りダイを焚いて、夜、新盆の家では灯籠を担いで長松寺に集まり、これを庭端に立てて盆踊りを踊る。十七日午前零時に新盆の家で準備した松明（長さ20cm、直径10cmほどの薪）を燃やし、これを囲んで男たちが小さな輪になって座し、「送り盆唄」をうたう。盆踊り最後の曲である「八幡」を踊ってから、新盆の家の者が灯籠を持って輪を作り、上下に揺れる灯籠の中に着物の裾をまくり上げた男二、三人が入って、飛びつくような所作をする「かんばんようえ様踊り」を踊る。これは盆に迎えた新仏を残らず帰すための踊りであるという。続いて、山門を出て

二〇〇メートル程の場所・マトオサンバ（的納め場）へ「ナンマイダンボ く」と唱えながら行き、灯籠を焼却して傍らに座った男たちが「送り盆唄」を鉦・太鼓に合わせてうたい、後ろを振り返らずに帰宅する。かつて、女性や子供は、新仏に彼の世へ連れて行かれるので、送り盆に行っていないといわれていたという。なお、八月二十四日にも長松寺で盆踊りを踊るが、現在伝承されている盆踊りは、「スクイサ」「高い山」「十六」「音頭」「おさま甚句」の五曲である。



向方のかけ踊り

三 坂部のかけ踊り

かけ踊りは、八月十四日（かつて旧七月六日・七月十日・七月十四日）に阿弥陀堂近くの堂の庭（もと分校の庭）で、「堂の庭踊り」「伽藍踊り」「御観音踊り」「阿弥陀踊り」という輪踊りが踊られている。その後、踊り手一行は行列を整えて、三〇〇メートル程離れた八幡森の下にある金毘羅様へ行列を練

って行く。行列次第は、次の通りである。

①とりひげ二人 ②槍二人 ③薙刀二人 ④灯笼一人 ⑤太鼓 ⑥鉦の順番である。一行は金毘羅大権現・秋葉大権現の石碑がある庭に練り込んで、「金毘羅踊り（金毘羅様庭踊り）」を踊る。しばらく休憩した後、盆踊り（中庭）を踊り、再度かけ踊りを踊ってから堂の庭へ戻り、「引け踊り」でかけ踊りを終了する。

かけ踊り発生の由来について、地域の伝承では寛政元年（一七八九）に、七日七夜にわたる大雨が降り、坂部本村上の山に地割れが生じたため、雨止めを祈願して始めたのがこの「願かけ踊り」であり、盆とは別の行事であったという。しかし、明治四十一年までは、新盆の家々を廻る「新盆掛け踊り」が行われており、古記録には次のような盆の和讃が残されているという。「伽藍踊り」「観音踊り」「長者和讃」「新盆掛け踊り歌」「野辺の送り」「七ツ子の歌」「賽の河原」「送り念仏」「堂にて送り盆」「僧歌」であり、かけ踊り歌は「花間」「歌油売」「関東出羽の者の歌」「米搗き」「里奉公」「仙松踊り」、盆踊り歌として「すくいさ」「のうさあ」「十六」「御嶽山」「高い山」「追分」「甚句」「新吉原」「遠州浜松」「おっさま」「音頭」「さしょう」「八幡引け踊」「笹の踊」「すってしょう」「相撲甚句」が、記されているという。しかし、現在伝承されている盆踊りは七曲程度である。



坂部のかけ踊り

四 その他（満島・中井侍・大久那）のかけ踊り

ア 満島神社の秋祭り（かけ太鼓）

満島神社の秋祭りは、例年十月第二土曜・日曜（明治四十年まで九月十五・十六日、翌年から大正十二年まで九月二十七・二十八日、翌年から平成二年まで十月十四・十五日）に行われている。明治四十一年の神社合祀によって、満島神社が鎮座していた位置が、北東端（原の森）に移ったことから、繁華街に近い南西端に遙拝所「前宮（南の森）」を設けた。明治末期に満島地区内の祭りや芸能を一括して、さらに新しい芸能を加えて実施するようになったのが、現在の秋祭りであるという。宵宮の夕刻、本宮（原の森）から御輿を中心としたお練りの行列が発発して、途中三カ所の御旅所（田村・長野・南）で休憩し、「前宮」に一泊する。お練り行列は、翌日本祭りの正午に前宮を出発し、三カ所の御旅所を経て御宮にもどる。お練りの途中で民家や商店・会社などから「所望」のかけ声がかかると、芸能を演じてご祝儀を受ける。お練りの行列次第は、次の通りである。

①奉納旗（少年たち） ②「かけ太鼓」と鉦の囃子（青年たち） ③神楽獅子二頭と大名行列（壮年者たち） ④「ご宝物」（中学生たち） ⑤御輿（神職・氏子総代・神社関係者・巫女（浦安の舞を舞う中学生）など） ⑥「傘づくし」のお囃子（老年者たち）で、総勢二〇〇人程である。行列の二番目で進行する「かけ太鼓」は、青年十数人が踊る太鼓踊りであり、現在祭りの代名詞となっている。装束は法被に足袋、紙緒の草履、菅笠を被り、それぞれが太鼓を持って、鉦の囃子に合わせて太



満島神社の秋祭り（かけ太鼓）

鼓を打ちながら逆回りに踊る。本祭りのお練りの最後に、夜、本宮へ練り込む時には、菅笠を脱いで踊ることになっている。踊りとは別に、盆のかけ踊りの庭ほめ歌に似た歌が伝えられており、この歌を所要所で歌う。その場所は、宵宮のお下りでは「原の森の唄（神社出発の前）」「四方名所の唄（神社出発の時）」「四方名所の唄（前宮到着の時）」「南の森の唄（前宮到着後）」であり、本祭りのお上りでは「南の森の唄（前宮出発前）」「四方名所の唄（前宮出発の時）」「四方名所の唄（神社到着の時）」「原の森の唄（神社到着後）」「鎮めの唄（神社境内で最後のお礼踊りの時）」である。これは各地区のかけ踊り歌を満島神社に合わせた詞章にかえているもののように、「かけ太鼓」は昭和三十年頃まで「かけ踊り」と称されていたという。「かけ太鼓」の伝承やお練りの形態などから、神社合祀以前に行われていた「かけ踊り」を、青年たちの踊る「かけ太鼓」として、祭りのお練り行列に組みこんだ可能性が大きいという。

イ 中井侍秋例祭（宿入り・道中囃子）

中井侍の祭りは、例年十一月末の日曜午後（昭和二十三年の復活後から平成十年まで十一月二十三日、戦前は十一月二十五日）に、白山権現（表の森）と小高明神（三河屋の森）で、一年交代で行っている。近年までは不生の十四所権現（お家の森）も加えての持ち回りで、さらに古くは、十一月二十五日に不生と中井侍が一年交代で行い、中井侍の二社は交互に担当していたという。この三社は、宮沢家（大屋）、その別家・原田家（三河屋）、大平家（お家）それぞれの氏神であるが、同時に中



中井侍秋例祭（宿入り・道中囃子）

井侍地区全体の祭りにもなっている。現在の祭りは、前日の「宵練り」と当日の「道中練り」があつて、その後に行われる湯立て祭りで構成されている。

「宵練り」は、本来は中井侍で本祭りが行われる場合は不生の神社へ御輿の渡御があり、不生で本祭りが行われる場合は、中井侍のどちらかの神社へ渡御があつて、神霊はそこで一夜を過ごした。現在は中井侍から不生の集会所に渡御し、翌日までそこに安置する。本祭りの「道中練り」は、不生にある富生橋の南側で「宿踏み」をしてから行列を練り出し、祭場の神社へ練り込む。行列次第は、次の通りである。

①塩祓い（塩と洗米） ②露払い（剣を振る男子） ③踊り子（花笠をつけ、扇と幣を持つ女子） ④旗 ⑤御輿 ⑥音頭取り（大傘をさす） ⑦楽屋連中（大太鼓・小太鼓・笛） ⑧参拝者の順番である。行列が「道中囃子（祇園囃子）」で進行する合間に、「笠くずし（本来は笠づくしであろう）」が踊られる。行列が神社の鳥居を通過すると、「宿踏み」として輪になり、「鎮め」「宮ほめ」が歌われる。「鎮め」の詞章は「東西しずまれ おしずまれ しずめて踊りを出しましょう」と始まり、かけ踊り歌と共通している。「宿踏み」が行われている間に、御神体が御輿からお宮へ移される「神移し」が行われる。

ウ 大久那のかけ踊りと盆踊り

大久那地区でも、昭和十年頃までかけ踊りが行われており、七月七日を「習い」（阿弥陀堂の庭で踊りの練習をする）、十四日（十三日の場合もあった）に新盆の家でかけ踊りおよび盆踊りをした。十六日は「送り盆」で、阿弥陀堂の庭に新仏の灯籠を集めて盆踊りを踊り、午前零時を過ぎると近くの新仏を送る場所へ行って念仏を唱え、阿弥陀堂の庭へもどって灯籠と柳を焼いた。この時「露が来ないうちに送れ」といわれていたという。

踊り手は、長着の着物に襷掛け、白い紙垂れをつけた菅笠を被り、太鼓十人（鉦打ち数年の経験者、鉦二人（小学生）、笛二人、柳一本、灯籠二本（南無阿弥陀仏と書いた垂れをつける）で構成されていた。地区の伝承では、かけ踊りは三河から伝えられ、盆の手踊りは、新野へ行って習ってきたという。

三 阿南町の念仏踊りと盆踊り

一 和合の念仏踊り

この念仏踊りは、昭和三十八年に県の無形民俗文化財に指定され、昭和四十七年に国の無形民俗文化財の選択を受け、さらに平成十一年に「下伊那のかけ踊」として他地区と共に国の無形民俗文化財に一括選択された。このような経歴からも明らかのように、長野県を代表する念仏踊りの一種といえよう。現行和合の念仏踊りは、八月十三日から十六日（近世期は旧七月盆、明治以降昭和六十年までは新暦七月盆の四日間行われ、新盆の家では「七日日」に新仏を迎える準備を始める。祭壇を設けて親戚などから贈られた供え物や灯籠、提灯などを飾る（かつては、一日がかりで切子灯籠を作った）。八月十三日昼に、でんでこ館（林松寺境内に平成九年頃設置された念仏踊りの伝承館）に集まり、「はたつき（念仏踊りに使用する諸道具一式の整備）」を行う（かつては林松寺本堂で行っていた）。十六日にも、破損した道具類を補修する「はたつき」が行われる。各家では夕方迎え火を焚き、精霊様にうどんを供えて家中皆で食した後、念仏踊りの踊り手はでんでこ館に集合する。午後八時に各自熊野社へ向かう。熊野社では、氏子の人々が明かりをつけて行列を待ち、行列の代表数名が神殿で盆期間中の無事を祈願する。行列次第は、次の通りである。

- ① 灯籠（古老） ② 旗 ③ ヒッチキ
- ④ 太鼓打ち・太鼓持ち ⑤ 鉦・笛
- ⑥ ヤッコ ⑦ 花 ⑧ 柳。

神社境内で踊られる念仏踊りは、「庭入り」「念仏」「和讃」で構成され、終了後に再度行列を整えて本村の大屋（和合を切り開いた宮下家）へ向



和合の念仏踊り

かう。ここでも「庭入り」「念仏」「和讃（庄屋の前の庭ほめ）」を行って、その後林松寺へ向かう。寺の境内で「庭入り」だけを踊って終了する。かつてはその後盆踊りが行われた。

十四と十五日は、林松寺境内だけで「庭入り」「念仏」「和讃」が行われ、特に「念仏」は二辺返し（二回繰り返す）で唱えられる。新仏のない年でも、一回は「念仏」を唱える。また念仏踊りに先立って盆踊りが踊られる。新盆の家では昼間に「タイトボシ」を行っており、夜には寺の本堂に集まり、位牌の側に提灯を置いて、念仏踊りが行われている間中、交互に線香を手向ける。伝承されている新仏供養の和讃は「野辺の送り（天寿全うの人）」「釘抜き（六十歳以前の人）」「血の池（お産で亡くなった人）」「花和讃（乳飲み子）」「西院の河原（子供）」の五種である。十六日は「精霊様送り」で、新盆の家では午前零時になると祭壇の供物、灯籠、提灯を各家で定めている場所にまとめて燃やし、全員で合掌して「七・五・三」の念仏を唱える。十六日の念仏踊りは十三日同様に踊り、熊野社、大屋、林松寺（かつては寺・大屋・神社）の順に「庭入り」だけを踊るが、かつてはこの日も盆踊りが踊られた。

大正十五年までは、新盆の家々へ練り込んで念仏踊りを踊ったが、昭和になつて寺に新仏を集め、合同で行うようになった。かつて、新盆の家々へ向かう途中の辻々で「辻念仏」を行つたため、行列の到着が遅くなり、念仏踊り後に酒肴が出された後、さらに盆踊りが踊られていた。新盆の家へ踊りに行くことを「お念仏を授けに行く」「太鼓を授けに行く」といい、依頼されれば他集落へも出かけて行つたという。

二 日吉の念仏踊り（日吉の大社念仏）

現行の念仏踊りは、八月十三日・十六日の午後八時過ぎから八幡様境内で行われている。氏神八幡様神社の境内には阿弥陀様が祀られており、念仏踊りの諸道具も八幡様社屋に保管されている。念仏踊りは和合から伝播したと伝えられ、和合と同様に「庭入り」「念仏」「和讃」で構成されている。しかし、和合では「和讃」の後に盆踊りが踊られているのに対して、当地では「念仏」と「和讃」

の間に「すくいさ」などの盆踊りが挿入されている。「庭入り」の行列次第は、次のようになっている。

① 灯籠 ② 旗 ③ 鉦 ④ 締太鼓 ⑤ まんじゅう笠 ⑥ ヤッコ ⑦ ヒッチキ

⑧ ささら ⑨ 傘 ⑩ 花 の順序で庭入りして輪になり、太鼓持ちと太鼓打ちは向かい合い、太鼓打ちは笠を被り、樽ぼちを持って太鼓を打ちながら体を左右にゆすり、「ソリヤ」というかけ声ではねるように踊る。灯籠その他の諸役は、道具を上下に動かしながら体をゆする動作をする。「念仏」は、踊りではなく二組の太鼓持ちと太鼓打ちが立ち上がって、打ちながら念仏を唱える。和讃は八幡様にあげる「たいしゃねぶつ」で、「東西し生まれおしづまれ……」という詞章で始まる。その他の和讃には「新盆和讃」さいのかわら「血の池」がある。かつて、八月十四日には日吉村の開祖である宮平公主宅くへいこうめしと八幡様の二カ所で踊り、十六日には精霊灯籠せうりやうろうで「送り念仏」をしたというが、地元で記録がなく不明である。

四月二十九日に氏神伊勢社の祭祀に行われる「お欽祭り」で知られる日吉に、念仏踊りが伝承されていることは、ごく最近まで知られていなかった。地元の人によると、念仏踊りを見学に来る人はこれまでも何人かはあったというが、本格的な調査は今回が初めてになる。



日吉の念仏踊り（日吉の大社念仏）

三 新野の盆踊り

有名なこの盆踊りは、平成十年に国の無形民俗文化財に指定されており、現行では八月十三日から十六日までの四日間と二十四日に「かくし盆」と称して

踊られている。八月十三日昼過ぎ、盆踊りが踊られる通りの清掃や市神様の側へ音頭櫓の組み上げなどの準備を行い、夕方迎え火を焚いて新盆の家の庭などで盆踊りを踊る。十四日昼、墓地で「タイトボシ」が行われ、百八タイを燃やす。夜に市神様の前で神事を行った後に盆踊りが始まり、翌朝まで続く。十五日も夕方から盆踊りが始まり、十六日早朝午前零時を過ぎた頃、新盆の家では供物や提灯を持って近くの水辺に行き、念仏を唱えながら燃やして精霊送りをする。各戸も同様に行う。

十六日夜、新盆の家では切子灯籠を音頭櫓の周囲に下げてから踊り始める。十七日朝、踊りの最中に切子灯籠を下ろして「和讃」を唱え、次にお太子様の前でも「和讃」を唱える。踊りは盆踊り最後の曲である「能登」に変わり、お太子様からもどった行列が通過した所から、「能登」の踊りをやめて行列の後部へ加わり、長い行列となって地区境へ向かう。踊りが終了するのを惜しんで行列の通過を妨げる一団も出現する。地区境では切子灯籠を積み上げ、行者が呪文を唱えて九字を切り、刀で道切りをしてから灯籠に火をつけ、同時に音火花をあげる。一同は「秋唄」を歌いながら後ろを振り返らずに家路につく。このような一連の行事を「踊り神送り」という。

四 飯田市下栗のかけ踊り

現行下栗のかけ踊りは、毎年八月十五日の午後に行われている。終戦後は、雨乞い踊りとして行われたが、その後昭和四十六年までの中断を経て、昭和四十七年八月に復活した。現行の行事次第については、『長野県の民俗芸能―長野県民俗芸能緊急調査報告書―』（註7）、および『信州の芸能』によって記してみよう（註8）。

午後一時頃、地区民が十五社大明神じゅうごしやうだいみょうじんに集まり、宮元欄宜を中心とした宮世話人が拝殿に座し、一般区民は一段低くなった舞処まいじょに向き合って座し、「座付けの御神酒」をいただく。次に欄宜たちが、六根清浄ろくこんしょうじやうの祓いや般若心経を唱え、続いて「浄めの神楽」と「本神楽」を唱え、区民は鈴を鳴らしながらこれに唱和する。この「御神楽」は、「遠山霜月祭」の唱え詞と共通しており、神前に

「御神酒上げ」があつて後、神事を終了する。直ぐに、宮世話人から「かけ踊り」諸役の発表があり、踊り手は準備をして神社前で配置につき、最初の踊りが踊られる。踊りの配置は次の通りである。太鼓持ち二人が神前に背を向け、その前に太鼓打ちが神前に向かつて立つ。その背後に棒振り二人とその下手（向かつて左）に小女郎四人が一列に並んで立ち、禰宜と宮世話人らの音頭取りが、配置の上手に位置して神社拝殿に向かつて踊りを奉納する。二度目以後は、全ての踊りを東方に向かつて踊る。次に、社殿の外に出て鳥居の内側で踊り、こまでを「お宮踊り」という。次に、宮下の庭へ行つて「宮下の踊り」を踊り、最後に禰宜以下三人が、井戸端にある「子安三社大明神」の石碑まで出かけて行き、金幣と二本の旗を納めて御神酒を供え、お下がりをいただいて神社へ帰る。中休みの後、午後三時半頃から神社で直会があり、かけ踊りを終了する。夜、宮下の庭で盆踊りを行っている。

かつて、八月十五日午後十五社大明神で「大宮前の踊り」を踊つてから、集落内神仏の祠堂をすべて廻つて踊つた後、屋敷地区と小野地区を廻つて、最後に一番奥六・七キロ離れた大野地区の子安神社で踊り、大野地区でもてなしを受け、一泊していた時期があつた。十六日はゆっくり下栗にもどつて、氏神で夕方「帰り踊り」を踊り、一旦家に帰つて送り盆を済ませ、午後八時から盆踊りを踊つたという。かけ踊り発生の伝承は二種類あつて、一つは天正（一五七三～九二）の頃、遠山土佐守の圧政と疫病、干魘の中で、住民が氏神への祈願祭として始めたというものであり、もう一つは大野地区に落ち着いた平家一族が伝えた踊りであるとい



下栗のかけ踊り

う（註9）。

五 泰阜村の樽木踊り

樽木踊りは平成十八年以後温田の南宮神社祭礼に奉納されるだけの伝承になつてしまつたが、別称「南山五百石祭り」と称されて、昭和二十年の敗戦以前までは、旧七月二十日に行われた漆平野村小鷹神社祭礼を皮切りに、二十一日の我科村八幡神社祭礼、二十二日の温田村南宮神社祭礼、二十三日の大畑村諏訪神社祭礼、二十四日の田本村池田神社祭礼、二十五日の同村梨久保の池野神社祭礼というように、日を追つてそれぞれの神社氏子によつて奉納されていた。現行、温田の樽木踊りおよび平成十七年を最後に中断した梨久保の現状については、現地調査報告で記すことにして、平成十七年まで行われていた梨久保の樽木踊りについて『長野県の民俗芸能―長野県民俗芸能緊急調査報告書』を資料として記してみよう（註10）。梨久保の樽木踊りは、十月九日、池野神社祭礼の宵宮に宿へ集合し、御神酒をいただいた後、宿の庭で「宿踊り（笠揃え）」を踊る。踊り歌の詞章は、主として宿ほめである。宿になるのは、その年に新築・結婚などの目出度い行事があつた家が務めたという。次に行列を整えて池野神社へ向かう。行列次第は、次の通りであつた。

① 池大社旗 ② 灯籠

（白1・赤2・青2） ③

柳 ④ 笛 ⑤ 太鼓（大・小） ⑥ 鉦の順番であつた。道中に囃される笛の曲は、「岡崎」「祇園囃子」「桜拍子」（古くは「数え歌」「真金」があり、子供たちが屋台を引いた）であつた。神社鳥居前では、鳥居脇に祀られてい



温田の樽木踊り

る秋葉様・金毘羅様・蚕玉様などに対して「鳥居踊り」を奉納した。行列は参道の石段を登った神社庭に進んで輪になり、三周してから柳・灯笼・旗などを中心に立て、その周囲を踊り手（太鼓・鉦）が円陣になって「お宮踊り」を踊った。その後、社務所で「おふるまい酒」を頂き、一息ついた後、踊り手以外の人々も加わって、「笠破き」をして諸道具を神社倉庫に納めて終了した。旧七月に行われていた頃は、「おふるまい酒」の後に盆踊りを踊ったという。

おわりに―「下伊那のかけ踊」の地域的特色と歴史的展開―

「下伊那のかけ踊」は、芸態的にはほぼ共通点が認められるという観点で、平成十一年に国の無形民俗文化財として選択された。しかし、それらの種目名や目的、構成、期日上には差異が認められる。さらに、かつて各地区で行われていた「かけ踊り」を再構成し、別の祭礼の一部に組み込んだ天龍村「満島神社の秋祭り（かけ太鼓）」や「中井侍秋例祭（宿入り・道中囃子）」などの伝承がある一方で、天龍村「大久那のかけ踊り」や泰阜村五カ所の「樽木踊り」などが廃絶している。「下伊那のかけ踊」の主要な特色を整理すると、以下のようになる。

一 芸能構成

- ① 踊り宿に集まり装束を整えて行列を繰り出し、最初に「宿の庭の踊り（笠揃え）」を踊った後、再度行列を整えて次の踊り場へ進行する。道中に祀られた神仏の祠堂や辻などで、それぞれにふさわしい「ほめ歌・踊り」を奉納する。
- ② 最終的には、氏神の庭で「神社前の踊り」と「笠破き」を踊って終了する。伝承地によって、かけ踊り・念仏踊り・盆踊りが、地区独自の方式で構成されている。
- ③ 新仏供養の儀礼は、地区によってさまざまであるが、新盆の家々を廻って踊る場合、または全ての位牌を寺に集め、寺の庭で一括して踊る場合などがある。
- ④ 伝承地・踊り場によってかけ踊り、念仏踊りの後、または合間に踊り手以

外の地区民を加えて盆踊りを踊る。

二 行列次第

- ① 氏神名を書いた旗を中心として、地域に祀られている神仏の旗、新仏供養を目的とした六字の名号旗など多数
 - ② 切子灯笼（白・赤・青など五本程度）
 - ③ 柳（一本）
 - ④ 踊り手（太鼓三／五人・鉦一／二人）
 - ⑤ 笛（多数）
 - ⑥ 伝承地によって棒振り（奴）・ササラ・花・小女郎（女性）などが加わる。
- #### 三 踊りの目的
- ① 新仏供養（天龍村・阿南町）
 - ② 祭礼芸能（天龍村・泰阜村・飯田市）
- #### 四 芸能種目名
- ① 天龍村の「かけ踊り」「盆踊り」「かけ太鼓」
 - ② 阿南町の「念仏踊り」「盆踊り」
 - ③ 泰阜村の「樽木踊り」
 - ④ 飯田市下栗の「かけ踊り」

発生、由来、伝承についても各地区さまざまであるが、天龍村大河内では現在でも疫病神をムラ境まで送る「神送り」行事の伝承が見られ、この行事は春にミコシ（藁で上下二段の輪をつくり、これに色紙をつけた煤竹の幣束二十二本を刺し、中央に柳の幣束一本を立てる。上段の藁に竹の棒二本を横にさす）を作り、祈願堂（愛宕堂）近くの「神様の休石」にミコシを乗せ、禰宜が唱え詞をして拝む。その後、禰宜を先頭に男二人がミコシを担ぎ、鉦を叩きながら「神墓」へ行く。観音様の石碑のもとにミコシを安置して禰宜が唱え詞と共に拝み、後ろを振り返らずに帰る。かつて、同様の行事が向方や坂部、大久那でも行われた記録が残されているという。江戸時代以前から行われた記録があるという疫病神を送る「神送り」の行事は、少なくとも天龍村のかけ踊りと深く関わっ

ているように思われる。春の疫病神送りの行事が、盆の新仏（御霊）を鎮送する行事・新仏供養にも応用され、鎮送行列の中心に、御幣を最先端に立てた「柳」を加えることで、新仏の御霊を御幣に集め、同時に行列が通過する道中に祀られている祟り神も行列に巻き込んで、氏神の庭で「笠破り」をすることで祝い鎮める。さらに新仏の供物や切子灯籠を燃やすことで、新仏（御霊）を無事に彼の世へ送り返す。天龍村の「かけ踊り・盆踊り」阿南町の「念仏踊り・盆踊り」は、新仏供養を主目的としたもので、踊りの行列や踊り歌の詞章が新仏を送る寺だけではなく、地域の開祖宅や氏神、さらに地区内のあらゆる祠堂と深く結びついている事実が、「神送り」の行事を下敷きにしたことを物語っている。

下栗のかけ踊りは、祟り神を褒め称えて各地区を廻り、踊りの行列に巻き込んで集め、氏神に祝い鎮めることで、恵みの雨を得られると信じてきた。また、秦草村の樽木踊りも同様の方法で、来年も年貢の樽木を完納することができると信じた。

折口信夫は「掛け踊り」というタイトルで次のように述べている。「私どもの郷里（大阪南郊）などでは、御祭りに屋臺を曳く時にもたゞ踊る時も普通「えらいやつちや・まけなよ」と申しました。「ちようさや ちようさや」は舊式で、単に「えらいやつちや／＼」を繰り返すのは最新式だと思つて居りました（大正五年十一月「郷土研究」第四卷第八號）」（註11）。「ちようさやちようさや」は京都祇園祭りの山車を引く時のかけ声であるのに対して、「えらいやつちや／＼」は、山車や踊りに疫病神などの祟り神を巻き込んで褒め称える詞であり、行列に巻き込んで祟り神を移動させる目的を意味しているのが、「掛け踊り」であると記しているように捉えた。筆者も「かけ踊り」を同様の意見に考えている。

註

- 1 『信州の芸能』（信濃毎日新聞社編集局編 昭和四十九年二月二十八日）194～198頁
- 2 前嶋茂子「かけ踊の研究」（『芸能の科学』3 東京国立文化財研究所芸

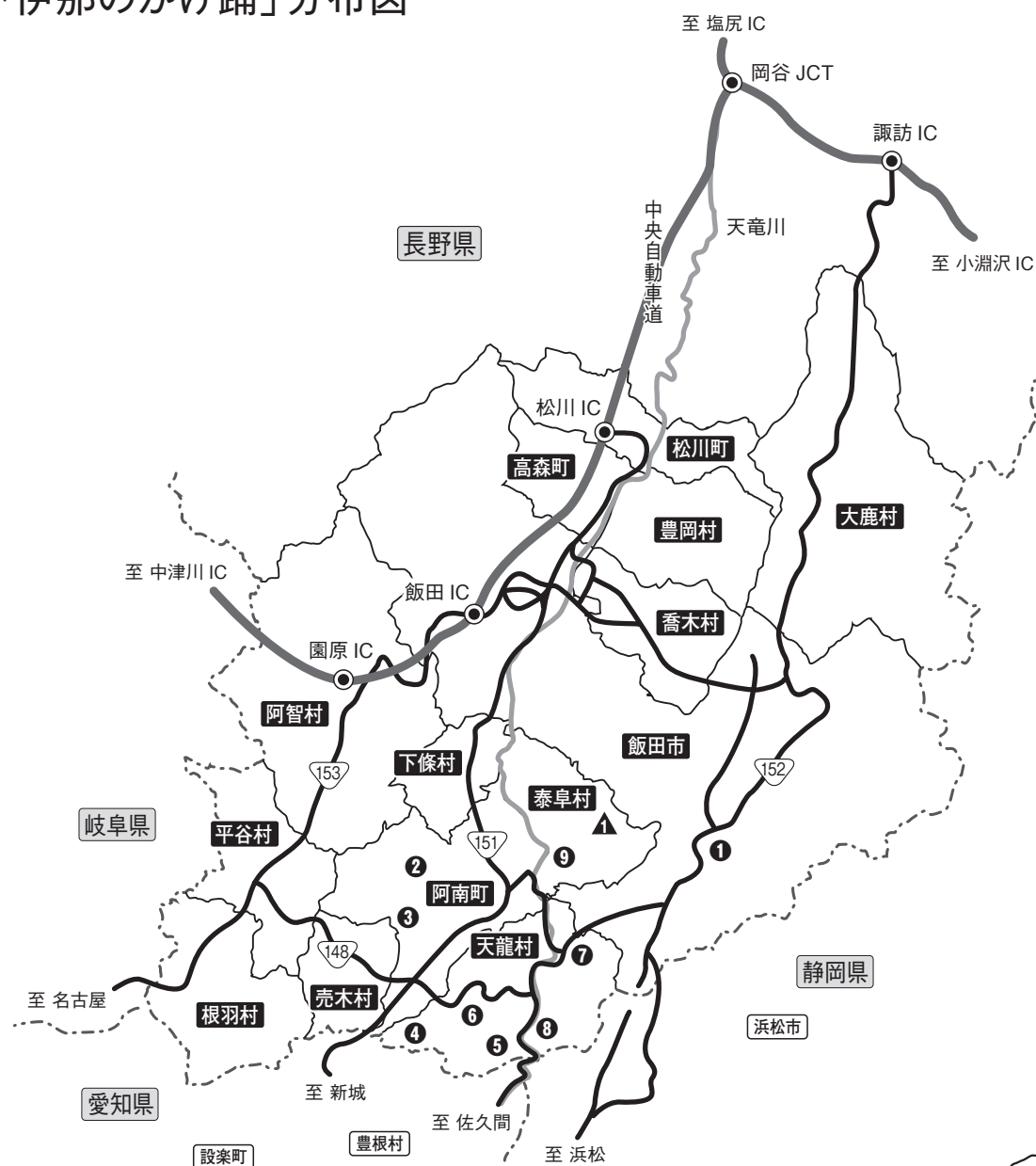
- 能部編 平凡社 昭和四十七年三月三十一日）1～41頁
- 3 『日本歴史地名体系』二十巻 長野県の地名（一九七九年十一月二十五日 平凡社）
- 4 『角川日本地名大辞典』20 長野県（編纂委員会 竹内理三編 一九九〇年七月十八日 角川書店）
- 5 『全国市町村要覧（平成十七年版）』（市町村自治研究会編 平成十七年十一月一日 第一法規）
- 6 『天龍村史』下巻（天龍村史編纂委員会編 平成十二年十一月二十日 ぎょうせい）
- 7 『長野県の民俗芸能―長野県民俗芸能緊急調査報告書―』（長野県教育委員会編・発行 平成七年三月三十一日）69～71頁
- 8 註1に同じ。62～65頁
- 9 中村 浩『かけ踊り覚書』（信濃毎日新聞社 昭和五十八年七月一日）72～111頁
- 10 註7に同じ。67～68頁
- 11 『折口信夫全集』第三十巻（折口博士記念古代研究所編 昭和四十三年四月二十五日 中央公論社）381頁

第二章

「下伊那のかけ踊」

現地調査報告

「下伊那のかけ踊」分布図



現在行われている「下伊那のかけ踊」

- ① 下栗のかけ踊り〈飯田市上村下栗地区〉
- ② 和合の念仏踊り〈阿南町和合〉
- ③ 日吉の念仏踊り(日吉の大社念仏)〈阿南町和合日吉〉
- ④ 大河内のかけ踊り〈天龍村神原大河内地区〉
- ⑤ 坂部のかけ踊り〈天龍村神原坂部地区〉
- ⑥ 向方のかけ踊り〈天龍村神原向方地区〉
- ⑦ 満島神社の秋祭り(かけ太鼓)〈天龍村平岡〉
- ⑧ 中井侍秋例祭(宿入り・道中囃子)〈天龍村平岡中井侍地区〉
- ⑨ 温田の樽木踊り〈泰阜村温田地区〉

中断している「下伊那のかけ踊」

- ▲ 梨久保の樽木踊り 〈泰阜村梨久保地区〉

※伝承地名は各市町村教育委員会からの回答による



下栗のかけ踊り

橋都 正

はじめに

下栗は長野県南部の飯田市上村、南アルプス聖岳の麓、遠山谷本谷川を遡った最奥の集落である。標高七〇〇〜一〇七〇メートルの急傾斜地（最大傾斜三十度）に拓かれ、日本のチロルともよばれている。過疎化が進み平成二十一年八月現在、世帯数五十二軒、人口一一九名。昭和三十年代の人口は三〇〇名を超えていたという。

下栗のかけ踊りは、支那事変が起きた昭和十二年ごろ中断し、戦後まで行なわれることが無かった。昭和四十七年四月「下栗のかけ踊り」として復活したが、三十六年間という長いブランクがあり、踊り手も一世代〜二世代も跳んでしまったので、普通りの復活は出来なかった。

例えば、現在「下栗のかけ踊りは、雨乞いの踊りである」と、地元でも語られ、調査報告書や観光パンフレットでも雨乞いの踊りと書かれているが、明治・大正・昭和の初めまでは、旧暦七月十五・十六日に行なわれる盆の行事であった。また踊りの名称も、昭和四十七年復活以降は「下栗のかけ踊り」と呼んでいるが、戦前、中断する以前は「シデ踊り」と呼ぶことが多かったようである。

本報告書では、前半で現在行なわれている下栗のかけ踊りの様子を記述し、後半の、六 由来・信仰・変遷の項（34頁）で、明治・大正時代のかけ踊り（当時は「シデ踊り」の様子を、筆者が四十年前の昭和四十五年に聞き取った調査から記述した。



下栗より望む風景

一 名称

下栗のかけ踊り

二 伝承地

長野県飯田市上村下栗地区

三 期日・場所

毎年八月十五日

下栗の、①拾五社大明神社じゅうごしゃだいみょうじんしゃの舞処、②同神社境内および③同神社下の下栗交流会館前広場（駐車場）の三ヶ所において、かけ踊りが行なわれる。



四 伝承組織

現在、かけ踊りの実施は、毎年八月十五日に「下栗保存会」の人達によって、踊られているが、下栗保存会は、国指定重要無形民俗文化財「下栗の霜月祭」の舞の保存が主目的の保存会である。そしてかけ踊りは保存会が全てを取り仕切るわけではない。昔からの慣習として、区民全員が拾五社大明神社の氏子であることから、下栗区自治会と下栗保存会（舞を舞う人中心の団体）が一心団体となつて実施され、費用はすべて下栗区自治会の予算で賄われている。

現地で保存会と呼んでいる組織は、単に舞を舞う人たちの練習と、同時に新人養成のための集まりを指す呼び名であり、かけ踊りの実施団体ではない。

五 行事（芸能）内容

現在の「下栗のかけ踊り」

（一）次第

平成二十一年八月十五日午後一時、村人たち（かけ踊り保存会員、下栗区の役員ほか住民）が、下栗の産土社「拾五社大明神社」に集まり、皆で茶碗酒を立ったまま一杯ずつ飲んで、準備に取りかかる。手分けして清掃。作業を分担して、縄の張替え、御幣、金幣、紙旗二本ほか祭具を作り、太鼓、鉦、タレを付けた菅笠など、かけ踊りの準備を整える。

午後二時過ぎ式礼の祭り開始。数珠を持つ禰宜たち五人は神社拜殿に座り、村人たちは舞処にゴザを敷いて禰宜と対面して座る。下栗区長と宮元禰宜の挨拶のあと、座附けの酒と呼ばれる茶碗酒を飲み、式例の祭りが始まる。

式例の祭は、参加者それぞれ塩払いをして、宮元禰宜の音頭取りで拾五社大明神社の神々に向かつて①祝詞、②一切成就の祓い、③三種の太祓い、④六根清浄の大祓い、⑤般若心経、⑥浄めの神楽（その一、その二、七五三引きまで）を唱える。



祭具作り

宮元禰宜（太夫）が打つ太鼓の囃子にのつて、副禰宜四人と村人たちは、それぞれ右手に鈴を持って唱和する。式礼の祭りに歌う「神楽歌など」は、九 詞章（37頁）に掲載する。

式礼の祭りが終わると時刻は午後三時。いよいよ「下栗のかけ踊り」を始める身仕度にかかる。身仕度は神社の舞処を使って仕度を整える。

かけ踊りの演技は、①拾五社大明神社の舞処、②外へ出て神社の境内、③神社下の下栗交流会館前の駐車場（広場）の三ヶ所で行なわれる。

（二）衣装・楽器・道具など

太鼓打ち（二人）、太鼓持ち（二人）、棒振り（二人）は、紺の股引の上に浴衣掛け、浴衣をシッパサミ（尻挟み）シタスキ掛け、頭に鉢巻、素足に白い紙緒のワラ草履。太鼓打ち、太鼓持ち、棒振りは、それぞれ一人は赤タスキに赤鉢巻、他の一人はそれぞれ白タスキに白鉢巻と、紅白に統一されている。

鉦叩き（二人）は禰宜が勤め、烏帽子に拾五社大明神社の白い上着。平成二十一年八月の調査日には、人手不足のため、鉦叩きを経験豊富な禰宜の一人が勤めたので、衣装は禰宜の装束で行ったものらしい。

子女郎（小学生の女子四人）は、真っ赤な着物に、長いシデを垂らした菅笠、白足袋に白い紙緒のワラ草履。

楽器は、大型の太鼓二個、鉦一個。棒振りの棒は六尺



踊り手たちの身仕度



子女郎



式礼の祭り

(180cm)の棒に、紅白のテープを巻き、棒の両端に白い房が付けられているもの二本。

ほかに、白い御

幣一本、金の御幣

一本、神社名を書いた幟旗二本。それぞれ長さ二メートル余の竹竿に取付けられている。

奉納する神社名を書いた幟旗は、一本には《奉納 拾五社大明神社、八幡大神、両八幡神社》と下栗本村にある神社名が、もう一本には《奉納 津島牛頭天王、子

安神社、池大明神》と下栗上区(屋敷、小野、大野)にある神社名が書かれている。

(三) 演目・芸態

かけ踊りの最初は、笛の囃子で始まり、太鼓・鉦を打ちながら踊る。

真ん中で演技する太鼓・棒振りの列の右手には、欄宜五人と下栗区長ほか長老、村人たちが縦に並び、かけ踊りの唄を歌う。宮元欄宜は金幣を、長老二人が奉納神社名の旗二本を持ってならんでいる。赤い着物を着て、垂れを垂らした菅笠の小学生子女郎四人は、太鼓棒振りの左手に一列に並んで踊る。

踊りは、長老や村人たちが肉声で歌う次項「下栗のかけ踊りの唄」(34頁)にあわせて、太鼓打ちは鉦を、太鼓持ちは太鼓を左右に振りながら踊る。唄が一節終わると笛の囃子が入り、太鼓持ちがしっかりと抱えている太鼓を、太鼓打ちが激しく踊りながら打つ。

その後ろに続く棒振りも、太鼓打ちの足つきに合わせて踊りながら、紅白に



太鼓と鉦



棒振り



幟旗

飾った房の付いた棒を左右に振り、太鼓が鳴ると棒を回転させる。

鉦叩きも太鼓打ちに合わせて同じ足つきで、鉦を打ちながら踊る。

太鼓の左手に縦に並ぶ子女郎四人は、菅笠の左右のあご紐を両手で持ち、太鼓打ちの足つきに合わせて左右に踊り、太鼓が鳴ると頭(笠)と体を左右に振る。

唄の一節ごとに、この動作を繰り返す。

二回目の神社境内の演技も、下栗交流会館前の三回目の演技も、一回目と全く同じ演技である。

三回の演技で、かけ踊りは終了し、拾五社大明神社の舞処で、かけ踊りを見に来た村人(区民)もかけ踊りの関係者も、全員一緒に莫座に座り、車座になって直会を兼ねたご苦労会が行なわれる。

直会の準備中に宮元欄宜と副欄宜の二人が、かけ踊りに使った金幣と神社名が書かれた奉納旗を、神社の下、井戸端(元旅館)の右手草むらにある、「子安様の前宮」の石碑の前に納めて、お参りして帰ってくる。

行事次第

3. 下栗交流会館前広場



2. 神社境内



1. 拾五社大明神社 舞処



4. 子安様の前宮



子安様の前宮へ奉納旗を納めに行く



長老達の唄

(四) 詞章(平成二十一年八月現在の詞章は、九 詞章参照)

昭和四十七年四月、下栗のかけ踊り復活に際し、古老たちが記憶を辿り、復元した「下栗のかけ踊りの唄」は、左記のとおり(復活当時、熊谷好文さんより聞き取り)。

○一、東西、東西 お静まれ、静めて お唄を お聞きやれ

○二、遠山様の一の御門を眺むれば、つばめが二羽来て巢をかけた

○一、今日も出てきて ひと巣かけ、三巢四巢七巢 八巢かけた

一、遠山様の 扇子をかりて五葉の松、一の小枝に 米がなる

○一、二のや小枝に 銭がなる、三つの小枝に 宝なる

一、米蔵 銭蔵 宝蔵、四方四面に 蔵を建て

○一、橋の上で 魚を釣れば、十三子女郎が 水を汲む

○一、魚釣竿を さらりと投げて、十三子女郎がコシヨ (腰を) しめる

一、この天竺の 黒雲ご覧、富士のお山を巻きまわす

○一、この天竺の 二の池で、十三子女郎が菅を刈る

一、水は出もせで 泉差す、黄金の茶碗が 千揃ふ

○一、式に申せば まだ長けれど、作り小唄は これまでに

○一、踊りを止めて 稼ぎをなされ、また来る冬も 雪が降る

(最後の二句をもう一度繰り返して終りとなる)

最後に、「エンサッサー エンサッサー」の掛け声で締めくくる。

平成二十一年八月十五日現在、下栗のかけ踊りで歌う唄は、昭和四十七年当時に比べ、下記の変化が出ている。①右の唄十三番のうち○印のみを歌ってかけ踊りを踊り、他は省略している。②最後の《踊りを止めて稼ぎをなされ》は、六番の《米蔵、銭蔵、宝蔵》の次に挿入し、七番の唄として歌っている。③最後にもう一度繰り返して歌う唄は、《式に申せば、まだ長けれど》の歌詞一節のみである。

昭和五十二年上村民俗誌刊行会発行「南信州・上村 遠山谷の民俗」に、岡井一郎氏が、下栗のかけ踊りを書いており、「かけ踊りの歌詞は次のようである」

として詳細な歌詞を掲載している。昭和四十七年四月下栗のかけ踊り(シデ踊り)復活以降に、古い歌詞を記した文書などが発見されたものと思う。

昭和四十七年、下栗のシデ踊り復活当時の唄は、岡井一郎氏の採集した唄と対比してみると、神様ごとの唄のごく一部分が、断片的につなぎ合わされており、随分省略されている。

岡井一郎氏採集の「下栗のかけ踊りの古い歌詞」は、九 詞章に掲載する。

六 由来・信仰・変遷

明治・大正時代の「下栗のシデ踊り(かけ踊り)」

昭和十二ころ「シデ踊り(かけ踊り)」が中断した以前のシデ踊りについて、筆者が昭和四十五年に、下栗の(故)野牧政男さん(明治三十四年生れ)、および(故)大川長男さん(明治三十四年生れ)等に聞いた話を、以下箇条書きに要約してみたい。

なお由来については昭和四十五年、当時の古老たちに聞いてみたが、「明治より以前、江戸時代から行われていることは間違いないが、いつ、どこから習い覚えたのかは、全く判らない」とのことであった。

(一) 下栗のお盆は、昭和の初めまでは七月(旧暦)に行われており、お盆のシデ踊りは毎年七月十五日と十六日の二日間行っていた。お盆が新暦に変わった後は、八月十五、十六日にシデ踊りという踊りを行なった。明治以前から行われていた事は確かだが、何時の頃から始まったのかは定かでない。

(二) 旧暦七月十五日には、昼間シキリ(式例)の祭りがお宮(拾五社大明神社)で行なわれ、夕方からはシデ踊りが行なわれた。

(三) シデ踊りは、歌にあわせて太鼓を叩きながら踊り、子女郎と呼ばれる小学生の女の子がシデを垂らした笠を被って踊った。笛の囃子もあった。棒振りも出たし、ヤナギも出ていた。

(四) 八月十五日のシデ踊りは、下栗のお宮で仕度を整え、①お宮で一踊り(お庭踊り)、②次にガラン様(ガラン様踊り)、③阿弥陀様、④本村にある子安様の前宮、⑤宮下(野牧権さん宅の屋号、踊り平とも呼んだ)で一踊りずつ踊り、

⑥お宮へ帰って、皆で一杯（お酒を）飲んでから盆踊りも踊った。

（五）翌日十六日のシデ踊りは、下栗上区の大野（下栗本村から約六キロメートル、徒歩一時間半ほど山奥の集落）の神社子安様まで踊って行った。踊る場所は、①お宮（拾五社大明神）、②屋敷の天王様、③中入りの稲荷様、④赤ナギ様、⑤大野のお堂（ガラン様）、⑥大野の子安様と踊って終了し、家に帰ってきた。

（六）大正時代までは、十六日には毎年大野まで行ったが、昭和になって一年おき（二年に一回）となり、やがて大野までは行かなくなった。そして、支那事変の昭和十二年ころ、本村でのシデ踊りも出来なくなってしまった。

（七）シデ踊りの子女郎（当時は十二人）の女の子が足りないときは、男の子にも踊らせることがあった。オラ（私、野牧政男さんのこと）も小学校のとき、赤い着物を着せられ、シデを垂らした笠を被せられて、女の子と一緒に子女郎を踊らされたことがあった。

（八）大川長男さんの話では、支那事変の昭和十二年頃、お盆のシデ踊りが中断し、以来お盆のシデ踊りは昭和四十七年まで行われなかった。お盆のシデ踊りは、およそ三十六年間中断していたことになること。

大正から昭和の「雨乞いのシデ踊り」のこと

雨乞いのシデ踊りは、下栗本村から大野の子安様まで、雨乞いを祈念して踊ってゆくものであった。筆者が昭和四十五年、および四十七年に聞き取った「雨乞いのシデ踊り」の、昔の様子についての話を、以下箇条書きにまとめる。

（一）大川長男さんは、雨乞いのシデ踊りについて、科学的知識も普及した明治の終わりごろで途絶えたのではないかと思う。その後、ほんの何度か行なわれた程度であると思うが、私は大正四年に行われた雨乞いのシデ踊りに、十五才で参加したことが一度だけあるとのこと。

（二）野牧政男さんによると、シデ踊りは毎年七月のお盆に踊る以外に、雨乞いするときにもシデ踊りを出した。雨乞いは、中郷のお池へ行って雨乞いを行い、池のお水を貰ってきた。

それでも雨が降らない時は、大きな声や大きな音を出すと雨が降るといわれ

ており、シデ踊りを出した。雨乞いのシデ踊りは、大野まで踊って行った。踊る場所はお盆の十五、十六日と同じく、お宮から本村の神様を廻り、そのあと下栗上区（屋敷、小野、大野）の天王様、稲荷様、赤ナギ様、お堂、子安様であった。それでもまだ雨が降らない時は、「逆さ踊り」ということをした。逆さ踊りは大野まで踊って行き、村の人たちは家に帰るが、ネギ様と長老四、五人が大野へ泊まる。村の人たちは翌朝また大野へ集まり、大野から逆に本村のお宮へ踊って帰ってくる。これを「逆さ踊り」といった。

（三）胡桃沢正重さん（明治三十八年生れ）は、私は大野まで行く雨乞いのシデ踊りに二回参加した経験がある。大正十二年ころ十八歳の時と、戦後間もない頃の二回である。そのほか子供の時（大正四年頃、私が十才頃）に一度見た記憶があるとのこと。

（四）昭和七年下栗生れの男性は、終戦直後「雨乞い」のため行なった「シデ踊り」に参加していた。「日照りが続いた昭和二十二年夏のことだった。中郷のお池様へ行って、お水をお迎えして来たらシデ踊りを始めた。この時は、大早魃で下栗本村から大野の子安様まで練って行き、大野へ一泊して翌日『逆さ踊り』で下栗に帰ってきた。その時は本村へ帰り着かないうちに雨が降ってきた』そうである。

これが下栗で「逆さ踊り」を行なった、最後の雨乞いのシデ踊りであった。

（五）下栗小野の成沢福恵さん（昭和三年生まれ）から聞いた話では、シデ踊りは、日照りが続くと下栗本村から大野の子安様まで踊って行った。子女郎は小学生の女の子が踊ったが、大野まで行くのは長距離であるので、小学一、二年生では体力的に無理。小学五、六年生の女の子が、笠にシデを付けて大野まで踊って行った。小野の小学生も子女郎として参加したそうである。

（六）以上の話を総合すると、「雨乞いのシデ踊り」は、明治の終わりに中断して以来、大正元年から数えて平成二十一年まで九十八年間に、ほんの三回ほど（大正四年、大正十二年ころ、昭和二十二年）しか行なわれていなかったらしい。

（七）（故）野牧政男さんによると、雨乞いのシデ踊りは、村中の総意による「雨乞いの大願」が掛かった時に行なった。

お池山へ雨乞いに行っても、「逆さ踊り」をしてもまだ雨が降らない時は、お宮の霜月祭りのお面を出した。お面を出したのを、子供の頃（明治時代）一度だけ見たことがある。雨乞いの時は、お粥を煮て食べるようになっていた。

（八）胡桃沢平人さん（大正九年生れ）は、雨乞いのシデ踊りの行列には二本の幟旗を紙で作る。昔から、一本には「奉納十五社大明神、八幡大神、両八幡神社」（下栗本村に祀られる神）と書き、もう一本には「奉納津島牛頭天王、子安神社、池大明神」（下栗上区の屋敷、小野、大野に祀られる神）と書くことになっていた。大野の子安様には池大明神も祀られているから、奉納旗にも池大明神の名前を書き、雨乞いのシデ踊りが、大野子安様まで練りこんで行った理由は、池大明神様が祀られているからだと思う。

（九）熊谷好文さん（大正十二年生れ）は青年の頃、何度かお盆と雨乞いのシデ踊りを経験していて、昭和四十七年四月の「シデ踊り（かけ踊り）」復活には、熊谷好文さんを中心に下栗の古老たちが集まり、皆で記憶を辿り、踊り、笛、太鼓、シデ踊りの唄、棒振りを復活することが出来たとのことであった。

復活当時、すでに過疎化、少子化が進んでおり、子女郎は小学生の女子の出演が不可能で、中年の奥さんたち四人が子女郎をつとめた。また太鼓の踊りほか青年たちの役についても、シデ踊り経験者を中心に中老の男性が出演して復活した。

（十）子供の頃、子女郎としてシデ踊り（かけ踊り）に参加した熊谷節さん（大正十年生まれ）によると、昔のシデ踊りは、子女郎（十二人）以外は男の子（青年）が行なった。モモヒキをはいて、ナガギ（着物）をシッパサミ（尻挟み）して踊った。支那事変までの子女郎は、十二人で踊った。私が子供の頃は、シデ踊りの行列と踊りに、ヤナギ（柳）竹のヒゴに色紙を切った花などを貼り付け、竹の先の藁ゾトに差し、束にして縛り付けたものも出ていたが、昭和四十七年復活した時、ヤナギは復活出来なかった。

七 所見

最初にも述べたように、下栗のかけ踊りは昭和十一年ころまでは、盆の十五日、

十六日に行われていた盆の行事であった。名称も当時は「かけ踊り」とも言われたが、一般的には「シデ踊り」と呼ぶことが多かったようである。子女郎が被る菅笠に長いシデを垂らすことから、シデ踊りと呼ばれたのであろう。

そして雨乞いの時には大きな音を出すすといとされ、このシデ踊り（かけ踊り）が利用されて雨乞いに踊られたが、雨乞いは毎年行なわれていたわけではない。昭和四十七年、三十六年中断していたシデ踊りが復活されたが、明治・大正時代の旧暦盆のシデ踊りを知る人は、世代交代により生き残っている人は、ごく少なくなっていた。そのため復活にかかわった人たちは、戦後昭和二十二年に行われた「雨乞いのかけ踊り」の印象が強かったため、復活後は「下栗のかけ踊りは、雨乞いの踊りである」と言われるようになってしまったものと思われる。

また復活当時、筆者が見た下栗のかけ踊りは、太鼓・棒振り・子女郎・鉦叩き、それぞれ別々の身振り・動作があったように思うが、現在踊られている踊りは、全部が全く同じ動作に統一され、変化してきている。

過疎化による激しい人口減少に見舞われている下栗の現状をみると、踊りの若い後継者を養成する厳しさが窺われる。

なお、下栗の隣部落に当たり、下栗と同じく本谷川沿いの須澤（旧木沢村）にも、盆に行われていたシデ踊りがあったが、すでに消滅しており、その詳細は不明である。

八 記録・文献

- ① 地元下栗の歌本『霜月祭々事記』（神楽歌集・下栗のかけ踊り唄あり）
- ② 飯田市民俗調査報告書『遠山谷北部の民俗』（飯田市美術館・柳田國男記念伊那民俗学研究所編 平成二十一年三月）
- ③ 『南信州上村 遠山谷の民俗』（上村民俗誌刊行会編発行 昭和五十二年二月）

九 詞章

『神樂歌など』 *次第順に記す

(平成七年 下栗区 下栗霜月祭保存会 『信州遠山郷土村下栗 拾五社大明神 霜月祭々事記』より)

祝詞

掛巻もかしこき大神の廣まへにおそれみ畏みも今日唯今
神國根源のはらひをもつて清め奉るゆゑあしき災ひたゝ
りある共諸のけがれさはりは餘所外へはらひ除けて春の
雪うしほの泡のごとくけし失ひて祈願圓滿感應納受なご
しめ給へとまうす (其餘は心にまかす)

大打の神言

此の大と申すは伊勢の国天が岩戸を押し開き、大音を小
音に小音を大音に天地静かなれと打ち鳴せば神は喜こぶ
悪魔は除ける

一切成就祓

極て汚も滞無れば穢とはあらじ内外の玉垣清淨と申す

三種太祓

瓊矛鏡笑賜祓賜清賜

天地一切清淨祓

天清淨地清淨内外清淨六根清淨と祓給ふ天清淨とは天の
七曜九曜二十八宿を清め地清淨とは地の神三十六神を清
め内外清淨とは家内三寶大荒神を清め六根清淨とは其身
其體の穢を祓給清め給ふ事の由を八百萬の神等諸共に小
男鹿の八の御耳を振立て聞し食と申す

六根清淨大祓

天照皇太神の宣く人は則天下の神物なり須掌靜謐心は則

神明との本主たり莫令心神是故に目に諸の不淨を見て心
に諸の不淨を見耳に諸の不淨を聞て心に諸の不淨を聞
鼻に諸の不淨を嗅て心に諸の不淨を不嗅口に諸の不淨を
言て心に諸の不淨を不言身に諸の不淨を觸て心に諸の不
淨を不觸意に諸の不淨を思ひて心に諸の不淨を不想此時
に清潔よき偈あり諸の法は影と像の如し清く淨ければ假
にも穢こと無し説を取ば不可得皆花よりぞ木實とは生る
我身は則六根清淨なり六根清淨なるが故に五臟の神君安
寧なり五臟の神君安寧なるが故に天地の神と同根なり天
地の神と同根なるが故に萬物の靈と同體なり萬物の靈と
同體なるが故に爲所無願而不成就矣無上寶神追加持

般若心經

摩訶般若波羅蜜多心經
觀自在菩薩。行深般若波羅蜜多時。照見五蘊皆空度一切
苦厄。舍利子。色不異空。空不異色。色即是空。空即是
色。受想行識。亦復如是。舍利子。是諸法空相。不生不滅。
不垢不淨。不增不減。是故空中無色。無受想行識。無眼
耳鼻。舌身意。無色声香味觸法。無眼界。乃至無意識界。
無無明。亦無無明尽。乃至無老死。亦無老死尽。無苦集滅道。
無智亦無得。以無所得故。菩提薩埵。依般若波羅蜜多故。
心無罣礙。無罣礙故無有恐怖。遠離一切顛倒夢想。究竟
涅槃三世諸仏。依般若波羅蜜多故。得阿耨多羅三藐三菩
提。故知般若波羅蜜多。是大神呪。是大明呪。是無上呪。
是無等等呪。能除一切苦。真実不虛。故説般若波羅蜜多呪。
即説呪曰。羯諦羯諦。波羅羯諦。波羅僧羯諦。菩提薩婆訶。
般若心經。

御神酒上げ

此の御神酒と申すは 御初の中より取り出し火を切りて
水を生じ甘露味わいたる物なり、祭り外しがありまして
も、受け取り外しのないように幸々ときこしめし給へ

申して申さぬ事はなし、雀の千声より 鶴の一声と御聞
給へ (三種祓を三回唱える)

浄めの神樂

- 一の、きよめする 惣谷川の ヤンヤーハーハー
滝の水 落ちて 清まれと ヤンヤーハーハー
 - 二、七滝や 八滝の水を ヤンヤーハーハー
くみ上げて 森清まれと ヤンヤーハーハー
 - 三、諏訪の池 湖水の水を ヤンヤーハーハー
くみ上げて 宮清まれと ヤンヤーハーハー
 - 四、津の国の 亀井の水を ヤンヤーハーハー
くみ上げて 御座清まれと ヤンヤーハーハー
 - 五、バシヤダラヤ パンジの水を ヤンヤーハーハー
くみ上げて 大清まれと ヤンヤーハーハー
 - 六、産土の 湖水の水を ヤンヤーハーハー
くみ上げて 欄宜清まれと ヤンヤーハーハー
 - 七、七浜や 八浜の塩 ヤンヤーハーハー
結び上げて 幣清まれと ヤンヤーハーハー
 - 二の一、東方南方大神小神方のまします処 ヤンヤー
ハーハー
きよむには 三浦の塩で ヤンヤーハーハー
 - 二、西方北方大神小神方のまします処 ヤンヤーハ
ハーハー
きよむには 三浦の塩で ヤンヤーハーハー
 - 三、中方十二ヶ方大神小神方のまします ヤンヤー
ハーハー
きよむには 三浦の塩で ヤンヤーハーハー
- 七五三引神樂
- 一、七五三を締め 清谷のお七五三 ヤンヤーハーハー
引くよ引く 七重も八重も ヤンヤーハーハー
 - 二、七五三を締め 御魂屋のお七五三 ヤンヤーハー
ハー
引くよ引く 七重も八重も ヤンヤーハーハー
 - 三、七五三を締め 四方のお七五三 ヤンヤーハーハー
引くよ引く 七重も八重も ヤンヤーハーハー
 - 四、七五三を締め 鳥居のお七五三 ヤンヤーハーハー
引くよ引く 七重も八重も ヤンヤーハーハー

掛踊り唄 ※平成二十一年八月現在では○印のみでかけ踊

りを踊る。

○一、東西東西 御鎮まれ

鎮めて御唄を 御聞きやれ

○二、遠山様の 一の御門をながむれば

つばめが二羽来て 巢を掛けた

○一、今日も出て来て 一巢掛け

三巢、四巢、七巢、八巢掛けた

一、遠山様の扇子かかりて

五葉の松 一の小枝に米がなる

○二、二のや小枝に 銭がなる

三つの小枝は 宝なる

一、米倉 銭倉 宝倉

四方四面に 蔵を建て

○一、橋の上で 魚を釣れば

十三子女郎が 水を汲む

○一、魚釣竿を さらりとなげて

十三子女郎が 腰を締める

一、此の天竺の 黒雲御覧

富士の御山を 巻きまわす

○一、此の天竺の 二つの池で

十三子女郎が 菅を刈る

一、水は出もせて 泉差す

黄金の茶碗が 千搦い

○一、踊りをやめて 稼ぎをなされ

また来る冬も 雪が降る

○一、式に申せば まだ長けれど

作り小唄は 此れまでに (くりかえし)

岡井一郎採集『下栗のかけ踊りの古い歌詞』

(昭和五十二年 上村民俗誌刊行会発行『南信州上村 遠

山谷の民俗』より)

一、宮下の庭

東西鎮まれお鎮まれ

鎮めて小歌をおききやれ

その身で御座れやをなびやれ

作り小歌を見せませす

きりりと廻われや

きりりと廻わりて歌を出せ

さても見事や、見事な御庭や

このよな御庭で踊るなら

ちりちり小草が右からからまつて

黄金小花が足につく

その身で御家を眺むれば

柱なんぞは赤銅で

円いタルキは皆黄金

その身でふきじを眺むれば

北と南は京紋づくり

西と東は瓦ぶき

その身で御座敷眺むれば

金物はいちよやまな板なんぞは

程もない

その身で御座敷を眺むれば

たちや刀はきりもない

その身で腰を眺むれば

七間厩に七匹つないで

中なる駒にはあぶみさす

二、お宮踊り

(一) 笹らたもらは宮竹たもれ

御宮の床ならはりならせ

さても見事や見事な御宮

このよなお宮で踊るなら

ちりちり小草が右からからまり

小銭小菅が足につく

その身で御宮を眺むれば

柱なんぞは赤銅で

小まいたるきは皆黄金

たるきしりへは金橋かけて

その身でふきじを眺むれば

北と南は京紋造り

西と東は瓦ぶき

その身で拝殿ながむれば

金の御幣が一二本

錦の旗が一二本

たちや刀はきりもない

その身で鳴り物眺むれば

鉦や太鼓はちりじりと小傘は二二かい

それより踊り子きりもない

じきに申せばまだ長けれど

作り小歌はこれまでに

(二) 遠山のせんすかりて五葉の松

一の小枝に米がなる

二のや枝には銭がなる

三つの枝には黄金成る

米倉銭倉お金倉

今日から繁昌呼びよせて

四方四面に蔵建てて

これにおつまれなよ殿こ

末を申せばまだ長けれど

作り小歌はこれまでよ

三、あみだ様の踊り

(一) お寺のせん水眺むれば

さても見事や菊の花

お寺詣りてせん水かかりを眺むれば

一にから梅二に牡丹

一にから梅二に牡丹
二に夕やく咲いたる花は散りもせで
蓄の花が散る如く

(二) 遠山殿の一の御門を眺むれば
つばめが二羽来て巢をかける
いくら掛けると見て見ると
昨日のほりて一巢かけ
今日も二巢も掛けようもの
三巢四巢七巢八巢かけた
なんと言ふて囀る出て聞けば
世の中よかれ稲よかれ
世の中良くて稲良くて
本年の俵はどこにつむ
今日から番匠呼びよせて
四方四面に蔵七つ
これに御積まれな殿御

四、がらん踊り

(一) 踊る中へと錢百投げて
そりよう取る女子は吾が妻
さてよい所に御住みやる
さても見事な地藏さま
後は藤が岩を巻く
前をば小川が流れてる
八幡太郎が腰にさしたるたちかりて
七谷八谷木を切り出して
前なる小川へ橋をかけ
金次が仕事にや何によさせる
金次が仕事にや魚つらしよ
橋の上でと魚つれば
一三子女郎が水をくむ
二五の殿が腰しめた
魚つり竿をさらりと投げて
一三子女郎が腰しよしめる

許せよ放せよ上袂放なせ
後から御殿が続くに
続かばままよあのよなばんぶる男をば
かれらがためにはばんぶり男
俺らがためには稚子じゃもの

(二) この天竺の黒雲ごらん
富士のお山を巻き廻わす
二番かもしの歌読みに
枕の下が池となり
元結がとれて蛇となる
どれとて差出す女もない
三人は供につれ廻せ

(三) 此の天竺の二の池で
一三子女郎が菅を刈る
二五の殿が菅さらす
なんにしよとて菅さらす
糞にしよとて菅さらす
糞になるまい笠にしよ
殿御のめす笠はそり笠
皆武士は網笠
信濃の奥の山中で
水は出もせで泉さす
黄金の茶碗が千揃い
だれにくませずこの泉
万じゅうの乙姫に皆くみ投げて
ににわもれくんでもかいてもつきばこそ

五、みだ様踊り

(一) 伊勢の吉田の藤殿が
錢にも金にも事かかぬ
万手長者のひと娘
宝くらべに負けたげな
清水のやくしへ願をかけ

子だからを授けて下さらば
白みの鏡を三枚揃えて
三年続けて参ります
それでも子宝が授からで
わいらがかもじをさらりとなくて
天の川原でこりを取れば
色よい肌が見えてしよろ
やれうれしやと云うまに
伊勢へ七度熊野へ八度
あたご様へは月参り

(二) 信濃の奥の上村で
ことも大そなことを見た
黄金の小白を千揃い
黄金の小さねを千揃い
七四人で米をつく
米をつく中でその中で
どれが目につく旅の人
ゆんでの八まきかきのかたばら
これが目につく旅の人
目についたなら連れてござれよ旅の人
わいらも質の流れた
連れて行かずも金がない
まだはるばるで長の旅
七八おいて連れて帰れ
こんど見てやる上方で
どれがこなたの髻どのか
黒金のくつわをかまして
きりりと廻るが髻ござる
髻どのなればもう一目見てやろ
あの松原なりかくす
あの松原のつらのにくさよ
根も葉も枯れて畑となれ

(三) 此の天竺の紅やが娘は

日本一の御手ききで
京都の御くげへ御縁談
そこで姑の言うことに
岩を袴にたてと言う
岩を袴にたてたれば
岩たつ小刀お出しやれ
岩たつ針を御出しやれ
やれ恐ろしや嫁御どの
嫁御の口はじゃの口
嫁御の口がじゃの口なれば
姑の口は竜の口
末を申せばまだ長けれど
つくり小歌はこれまでに

(四) ここは岡崎七瀬がしようじや

ここはおせんが立つ島よ
おせん立つかと出て見れば
立たずおせんは立ちもせで
大きな白波たちでしよろ
白波小舟が立ちてしよろ

(五) うらが殿様あきうどござる

今年はメて田を作る
稲はしがれる鍋はない
関のかじやに鍋打ちに
一年たつてもまだも来ぬ
二年たつてもまだも来ぬ
三年三月文が来た
文の上書読んだれば
かじやの聲になるとある
三人子供を引きつれて
さればこれから手間ましにと
乞うたれば
御手間のことなら出しもせで

油をしめよごま三升

ごまなら三升ばかりだじよよ
せめて七升もよこしやがれ
油をしめせと綿三把
綿なら三把はかなんだじよよ
せめて七把もよこしやがれ
元結によれと紙三帖
紙なら三帖はかなんだじよよ
せめて七帖もよこしやがれ
それでも御手間がたらはずば
一代健せと金の一〇〇両も出しましょう

和合の念仏踊り

久保田裕道

一 名称

和合の念仏踊り

二 伝承地

長野県下伊那郡阿南町和合

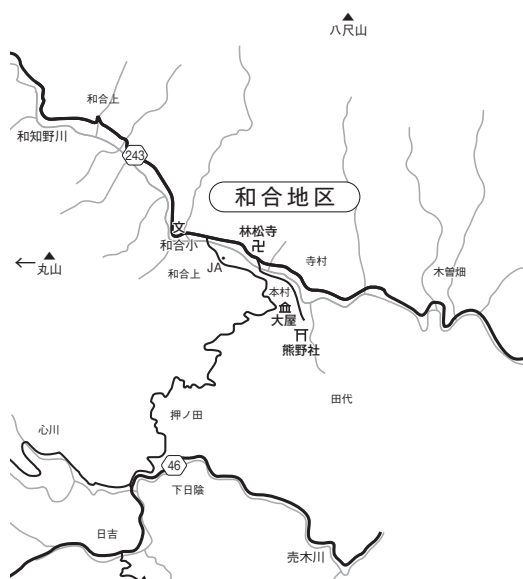
三 期日・場所

八月十三日 熊野社・大屋（宮下家）・林松寺

十四日 林松寺

十五日 林松寺

十六日 熊野社・大屋（宮下家）・林松寺



熊野社



林松寺

四 伝承組織

「念仏踊り保存会」が、昭和二十三年に設立され、以後の伝承母体になっている。和合は約一六〇戸から成り、その中の約一三〇戸が保存会の会員になっている。会費は平成二十一年時で年間一〇〇〇円と定められている。

保存会ができるまでは、青年会（古くは若い衆）が主体となって運営した。やはりその範囲は和合全域であるが、中でも参加者が多いのは本村と木曾畑であった。和合上からの参加は、伝統的に少ない傾向にあった。参加できるのは小学校を卒業した十四、五歳以上の男子で、練習が始まるとやってきて加入を願った。加入儀礼などは特になく、世襲といったこともない。

新たに参加すると、まず「太鼓持ち」から始める。太鼓持ちをすることで、リズムを覚え、それからヤッコ、ヒッチキと経験して太鼓に至り、好きな役を担当できるようになる。ただ、ヒッチキと太鼓は若者が担うのが普通で、灯籠と旗は、見識の高い長老格の者に限られた。花・柳については特に決まりがなく、近年では女性や子供が持つことが多くなっている。

笛は、現在では子供たちが男女問わず参加している。子供が参加するようになったのは、昭和四十六年頃から。伝承者が少なくなったために、和合小学校に依頼して参加を呼びかけた。当初は小学五、六年生のみが参加していたが、後に他の学年も参加するようになった。最初は大人用の笛を使っていたが、後で子供用の笛が寄贈されたために、それを使うようになった。なお、平成十年頃から、和合小学校では七月に「和合の日」を設けており、学校を挙げて郷土

に関する学習を行う。その中の一時限分が念仏踊りの笛や盆踊りの「おんたけ」などを習う時間として設定されている。

また、念仏踊り期間中に林松寺境内には、テントが建てられ、受付・案内および扇子や書籍の販売が行われる。これを担当するのは、和合公民館長以下、各地区の役員である。ただし、日吉と東部地区役員は除外されている。

五 行事（芸能）内容

（一）次第

平成二十一年の様子を時系列に沿って述べてゆく。盆に先立つ準備としては、八月九日に林松寺のでんでこ館に集まって芝刈りなどの準備を行う。

八月十三日 十三時三十分のでんでこ館に集合し、道具類の準備をする。これを「はたつぎ」と称する。かつては毎年作り変えるものも多かったが、現在では壊れていない限りはそのまま使う。ただし、笠と太鼓の桴のシデだけは毎年必ず新しくする。

はたつぎが終わると一旦自宅に帰るが、十九時三十分には再びでんでこ館に集合する。それから支度を整えて、二十時になると銘々で熊野社へと出発する。道具などは軽トラックなどを用いて運ぶ。

二十時二十分、熊野社境内に一行が到着すると、まず代表者何人かが拝殿に上がって無事を祈願し、神酒を頂く。かつては神主が祝詞をあげたという。その後、拝殿前の向かって右側に「庭入り」の行列が並ぶ。ここで保存会長から集まった人々に向けての挨拶があり、続いて二十時三十分、庭入りの行列が進み出る。灯籠を先頭に旗、ヒッチキ（ヒッチキ棒・ササラ）、太鼓打ち、鉦、ヤッコ、花・柳の順で並ぶ。笛は並ばずに、拝殿に向かって左側に立つ。灯籠の「さーよーい、そーりゃー」の掛け声で一行は社殿向かって右側の広場を、右回りに回りだし、およそ一周したところで太鼓持ちが入ってきてヒッチキ拍子に変わる。かつては三周したが、大変なので一周半で太鼓持ちが入るようになったという。ヒッチキ拍子でタイコと鉦は踊りながら打ち、ヒッチキの棒とササラの二人は激しくぶつかり合いながら踊る。広場を大きく一周すると拝殿

前に並び「庭入り」は終了。

二十時四十五分、続いて「念仏」が始まる。太鼓持ちが太鼓を持って拝殿に背を向けて横に並び、それに相対する形で太鼓打ちが並ぶ。その後方に立つ古老の念仏にあわせて太鼓を叩いてゆく。この時、鉦は叩かない。念仏が終わって二十時五十七分、最後の「和讃」となる。熊野社では「神の前の庭ほめ」の和讃を唱える。太鼓打ちは自分で太鼓を持って、音頭取りの和讃に合わせて叩く。二十一時八分、「和讃」を終えると、次の場所に移動となる。熊野社の境内を出発し、林松寺方面に引き返すように歩いてゆくと間もなく「大屋」と呼ばれる宮下家に着く。一行は特に道行きの隊列を組むわけではなく銘々で歩いてくる。大屋は、和合の草分けとされる旧家。奥座敷が開放され、軒に提灯が一つ灯され、当主らが庭を向いて着座して念仏踊りの一行を迎える。座敷の奥には位牌や掛け軸などが並べられている。

最初に道路で列を整えると、二十一時十九分、熊野社同様に灯籠を先頭に「庭入り」で入場してくる。奥座敷の前で一周した後にはヒッチキ拍子に変わり、それが終わると二十一時三十分「念仏」に移る。さらに二十一時四十二分、「和讃」。大屋では、「庄屋の前の庭ほめ」の和讃となる。

二十一時五十八分、大屋での念仏踊りが終わると、最後に林松寺へと向かう。この時はまた道具と共に自動車で移動する者が多い。林松寺に到着すると、でんでこ館前で隊列を組み、二十二時十三分「庭入り」で本堂側に進んでゆく。本堂前で右回りに一周するとヒッチキ拍子に変わり、これまで同様に踊る。二十二時二十五分、ヒッチキ拍子が終了すると、この日は林松寺では「念仏」「和讃」を唱えることなく終了となる。以前は、この後で盆踊りが踊られたという。八月十四日 翌八月十四日は、夜になって林松寺境内で盆踊りと念仏踊りが行われる。それに先だって、新盆の家では昼間のうちに「たいとぼし」と呼ばれる行事を各家で行った。

平成二十一年の某家では、十四日の十四時に庭で木片に火をつける迎え火から始まった。庭には切り灯籠が吊されている。次いで、予め用意された砂の敷き詰められた木箱にろうそくを百八本たててゆき、そこに火を灯す。この家の

本箱は魚の行商に用いたもので、大きさは、56・5cm×26・5cmで深さが10cm。中に入れる砂は、前日に川から採ってきたものである。これを、軒先に小さな机を出してその上に置き、参集者が取り囲む。すべてに火が灯ると、そこに参集者全員が順に水と米とをかけてゆく。水は皿にためたものを、南天の葉でかける。続いて皆、その場でしゃがみ両手をあわせて拝むようにして念仏を唱える。念仏は「ナムアマミダーア、ナムアマミダーブツ、ナムアマミダーブツ、ナムアマミダーブツ、ナムアマミダー」が一つのフレーズになっており、これを繰り返してゆく。音頭取りは、唱えながら仏壇用の鉦を鳴らし、七回、五回、三回の切れ間でチンチンチンチンと早打ちして全員で深く拝む。故にこれを「七五三のお念仏」とも称する。

火がすべて消えた頃に終了となって、十四時十五分、一同は座敷に上がる。座敷では「ふだらくや紀州つなみは御熊野の那智のお山にひびく滝つせ」で始まる「西国三十三ヶ寺御詠歌」を皆で唱和してゆく。長老が新盆の祭壇前で鉦を鳴らして調子をとっている。そして十七番の御詠歌が終わったところでコップに注がれた砂糖水が全員に配られる。かつては飯茶碗に砂糖湯を入れていたという。さらに二十七番目が終わったところで仏前の供えものを下げて、ご飯から水へと変える。御詠歌が終わるのがおよそ十五時。本来であれば、この後で「善光寺三十三番御詠歌」も唱えられたが、ここでは省略されていた。このあと飲食があつて、夜になると林松寺に集まって新盆の供養を行う。かつては「たいとほし」の後で庭に念仏踊りが踊られたという。

夜に入つて十九時三十分頃から林松寺本堂前で盆踊りが踊られる。ただし、平成十八年頃までは、念仏踊りが終わってから盆踊りを行っていた。和合での盆踊りの曲目には「すくいさ」「おんたけ」「十六」「高い山」などがあるが、現在は専ら「すくいさ」「おんたけ」を中心に踊っている。踊りは新野に共通するものが多いが、「おんたけ」だけは和合独自のものであるという。盆踊りの際には誰が踊ってもよいので、最初は数人で始めるが、次第に大きな輪になつてゆく。やがて二十時になると盆踊りは終了。でんでこ館に念仏踊りのメンバーが集まって支度を始め、二十時二十分頃本堂左手の広場に本堂に並ぶ。最

初に保存会長からの挨拶があり、二十時三十分、「庭入り」で本堂前に進んで時計回りに回る。ここは十三日と同じである。

ヒッチキ拍子が終わつて「念仏」を唱えるのが二十時四十五分から二十時十分。十三日より念仏が長いのは、「二辺返し」といつて、十四・十五日は二回繰り返すためである。続く「和讃」は二十一時十分から二十一時四十分。ここでは新仏供養の和讃となる。その詞章は新仏の享年や性別によつて異なり、天寿をまつた人には「野辺のおくり」、六十歳未満で亡くなると「釘抜き」、お産で亡くなると「血の池」、子どもだと「西院の河原」、生まれてすぐに亡くなると「花和讃」となる。対象者がいない場合でも、一度は唱える。

八月十五日 十五日は、前日十四日と同じスケジュールで演じられる。十九時三十分から盆踊り、二十時三十分より念仏踊りとなり、二十一時四十分終了。

八月十六日 八月十六日、この日は午前零時を迎えると共に各家庭で「精霊様送り」が行われる。盆の供え物や灯籠、提灯を近くの沢などに持って行き燃やすのである。ここで「たいとほし」の時と同様の七五三のお念仏が唱えられた。また木曽畑地区では、「送り和讃」が唱えられるという。

午後になると、念仏踊りのメンバーはでんでこ館に集まって再び「はたつき」を行うが、前日に道具類を確認して特に壊れていなければ省略する。平成二十一年も特に行わなかった。またこの日だけ念仏踊りの一行に「南無阿弥陀仏」と書かれた旗が一本加わる。この旗は以前は大屋が用意していたが、現在は保管してあるものを使う。

夜になつてからの念仏踊りは、十三日同様、熊野社から始まり、大屋、林松寺と移動する。以前は逆に林松寺から大屋、熊野社へと移動した。これは道具の保管場所が熊野社であつたためと言われるが、信仰的な理由があつたのかどうか不明である。熊野社での開始は二十時二十分、この日は「庭入り」だけで「念仏」「和讃」はない。ヒッチキ拍子に変わった踊りが終了したのが二十時三十二分。続いて大屋に移動し、同様に「庭入り」が二十時四十二分～五十一分。林松寺に戻つての「庭入り」が二十一時十二分～二十三分。これでこの年のすべての念仏踊りが終了となる。

行事次第

8月16日

熊野社



熊野社への庭入り



熊野社での念仏踊り

林松寺



林松寺

大屋



大屋

8月14日・15日

林松寺



新盆供養



盆踊り



庭入り（ヒッチキ拍子）



念仏



和讃

大屋



大屋での念仏



大屋での念仏踊り

林松寺



庭入り



庭入り

熊野社



会長挨拶



熊野社庭入り



庭入り（ヒッチキ拍子）



念仏



和讃

たいとぼし(8月14日)



ろうそくに火を灯す



念仏を唱える



御詠歌を唱える

(二) 扮装・楽器・道具など

太鼓 太鼓は曲げ物を用いた「曲げ胴」となる。ヒノキを薄く削ったものを曲げてカンバ（ヤマザクラ）の皮で留めている。皮は、馬、鹿、牛などの腹の皮を用いたが、牛が最も丈夫で穴が開かない。また、かつては馬が骨折したなどという話を聞くと、皮をもらって太鼓に用いたという。八個あるうちの四個は江戸から明治にかけて作られたものとみられる。大きさは直径53〜55cm、胴の長さが44〜46cm。古い太鼓の方が若干小さめになっている。

桴は、桐の木で作られる。年数が経って目が細かな木がよいとされる。桴の元方にはシデと呼ばれる切り紙をつけておく。桴には、個々の太鼓と決められた組み合わせがあり、いい音色が出る太鼓があるとその桴を持って帰って次回も他人にとられないようにしたものだという。大きさは、直径3・5cm、長さ30cm。



太鼓



桴

ヒッチキ棒・ササラ ヒッチキは、二人一組となり、ヒッチキ棒を持つ者とササラを持つ者に分かれる。ヒッチキ棒は、長さ142cm、直径2cmの竹の棒の両端にそれぞれ7cm程度の紙のシデをつけたもの。ちょうどつり合いののとれる重心に紐が結びつけてあり、そこを持って回転させられるようになってい

る。ササラは、摺りざさらで溝のついた方とそれを摺るための割竹から為る。溝のついた方は、長さが短いもので32・5cm、長いもので38cm。直径3〜4cmの竹を、持ち手の12〜14cmの部分を残して半分に割り、そこにギザギザの溝をつけたもの。溝は十三段に刻むのが正しいものとされるが、異なるものもある。摺る方は長さが短いもので32・5cm、長いもので34cm。直径が3・5〜4cm。持ち手の13〜15cmの部分を残して細かく割かれた竹である。ササラは毎年作るわけではなく、使えなくなったものがあるとその分を補充していく。竹は虫が

喰う時に切ってきてはいけないとされる。

なお名前の由来は定かではないが、田植えの時などに集まってくる足の長い虫をヒッチコガッチコと呼ぶことに由来するのではないとも言われている。

ヤッコ ヤッコが振り回すヤッコは、茅を竹の先につけて作る。茅は事前に頃合いを見て刈ってきておき、八月七日に作るようになってい



ヒッチキ棒



ササラ



ヤッコ

鉦 現在使用しているものは、昭和四十七年に名古屋で購入したもの。それ以前のもものはひびが入って使えなくな



鉦

旗 青地の木綿に「南無阿弥陀仏」の六字名号を染め抜いた幟。右に「天保七申年」、左に「六月吉日」とある。天保七年（一八三六）のオリジナルではなく、

それをもとに染め抜いたものである。なぜ天保七年であるのかについては、特に伝わっていない。布の長さが194cm、幅32cm。それを取り付ける竹の長さが219cm、横棒が64cm。なお、中村浩氏の記録によれば、昭和五十三年に使っていた旗は「天保六年六月日」と書かれていたという。

十六日に使われる「紙旗」は、紙に「南無阿彌陀仏」の名号を墨書したものの。かつては大屋から渡されたというが、現在は保存会長が作ったものを破れない限り毎年使用している。紙の部分が長さ152cm、幅28cm。竹の長さが211cm、横棒が46cm。



旗



紙旗

切子灯籠 竹棒の先に吊り下げて持つ灯籠。古くは灯明、後にロウソクの明かりとなったが、二十年ほど前から乾電池式の電球を灯すようになった。灯籠部分は長さ35cm、直径21・5cm。長さ42cmの竹棒につけられており、90cmほどのシデなども取り付けられている。そしてそれを吊り下げる竹が、長さ193cm、横棒が46cm。ここでのシデは青赤白緑黄の五色が用いられている。色紙は新野で購入してくる。他にハナと呼ばれる造花もつくが、かつてはタオルで作った。現在の灯籠は平成十八年に作り替えたもので、それまでよりもやや大ぶりになっている。



切子灯籠

花・柳 花と柳は、竹の先にマキワラと呼ばれる藁束を麻縄でしばって取り付け、そこにハナやヤナギをつけた割竹を挿す。ハナは色紙を花びら状に切ったもので、ヤナギは細かに切ったもの。花は竹棒が長さ157cm、マキワラが長さ33cm、割竹が98cm。柳が竹棒138cm、マキワラ33cm、割竹106cm。

割竹の本数は決まっていないが、

花は二十二本、柳は三十二本であった。現在はやっていないが、かつては踊りが終わるとこのハナやヤナギを競って取り合い、持ち帰って畑に挿せば虫除けになると言われた。どちらの飾りも虫供養の意味があるという。

笛 笛は、六孔のものをを使う。かつては手作りしていたが、現在のものは購入したもの。また、子どもが携わるようになって子ども用の笛十二本が寄贈された。

衣装 衣装は、かつては決まっていなかったが、現在では統一されている。太鼓打ちと鉦は麻葉柄の半被に水玉柄のパンツ。白い布の帯と襷をつけ、頭にはシデのついたすげ笠を被る。この笠のシデと、太鼓のバチのシデだけは現在でも毎年作り替えている。シデは、神・仏と人間との間の境目を示すものだという。

ヒツチキも同様の衣装であるが、帯と襷とが赤布になる。ヤツコは傘模様の着物の裾をたくしあげて着し、手ぬぐいをほおかぶりにする。ここまでの役は全員裸足である。

太鼓持ちは浴衣に豆絞りの手ぬぐいをはちまきにして雪駄を履く。灯籠・旗は羽織袴に雪駄。花・柳と笛は浴衣に下駄、もしくは雪駄となる。



花



柳



笠

衣 装



旗



ヤッコ



ヒッチキ (ヒッチキ棒)



太鼓



花・柳の衣装



灯籠



ヒッチキ (ササラ)



鉦

(三) 演目・芸態

太鼓 庭入り、「さあーよい、そーりゃ」の掛け声で叩き始める。左手に太鼓を下げ、「さあー」の部分で右足を軸にして身体を進行方向右向きから左向きに半回転させる。右手の桴もこの時大きく振りかぶり、よいのところで「ドン、ドンドン、ドンドン、ドン」と叩く。二、四、六回目のドンのところでは右足膝を地面につけて低い姿勢になる。その後、「ひょーおっ」の掛け声で左足を軸に左向きに半回転し、「ドン、ドンドン、ドン」と叩く。これを繰り返してゆく。

ヒッチキ拍子になると、太鼓持ちが太鼓を水平に持つので、そこに向かって左足を前に出し、大きく振りかぶって打ち始める。ドン(左)、ドン(右)、ドンドンドン(左右左)、「そりゃ」の掛け声が入って、ドンドコ(右左右、ドンドコ(右左右) ドンドンドン(右左右)。ここでまた「そりゃ」が入って始めに戻る。最初の「そりゃ」の後は叩く時に軽く両足跳びをし、最後のドンドンドンで右左右と踏み、最後の右は後方に伸ばす。

太鼓は、先頭をハナタイコ、最後尾をシリタイコと呼び、ハナタイコに最も上手な者が、シリタイコにその次に上手な者が配置される。また中央にも上手な者が配置され、初心者ははさむような形になるため、初心者は両脇を見ながら叩くことができる。

「念仏」になると太鼓は一変して静かな音を刻む。やはり太鼓持ちが水平に持ち、太鼓打ちは桴を下から支えるようにして握り、太鼓の縁にあてている。その間、別の者が脱いだ笠を上下に振って太鼓打ちの背後から風を送る。念仏の節の変わり目に「ドンドン」と二回、あるいは四、八回打つ。最後に願文を唱えた後に「ドンドンドコドン、ドンドコドンドンドン」と打ち始め「なーみだんぼ」の声に続いて「ドンドンドコドン」といったリズムをやや激しく三十秒程度打って終了となる。

「和讃」の時は左手で太鼓を持ち、足を揃えて膝を屈伸させながら左右に身体を振り、和讃を音頭取りに続いて復唱してゆく。一節が終わるところで「ドン、ドン、ドンドンドン」「そーりゃ」、の掛け声が入って「ドンドンドン、ド

ン」。再び音頭取りの和讃、復唱と同様に繰り返してゆく。

その他の楽器・役 鉦は基本的に太鼓と同じ所作となる。ただし、「念仏」の時だけは鉦は入らない。

ヒツチキは、和合だけの役である。道化役でもあり、また見物人が取り囲んでいる踊りの場所を広げる意味を持つともいう。二人一組で同方向を向いて立ち、並んだ内側の足を前方に高く上げて外側の足で跳び、お互い激しくぶつかり合う。ササラは摺り合わせ、ヒツチキ棒は回転させ、最初の四拍でぶつかり合った後、次の四拍で離れて半円を描くように動き、反対向きで再びぶつかりあう。これを繰り返す。

ヤッコは、庭入りでは太鼓同様に最初は「さあー」の声で右足を軸に右側を向き、「ひょーお」で左足を軸に左向きになる。本来であれば、この時、手にしたヤッコの茅が大きく開く。ヒツチキ拍子になると右左右、左右左のステップで内外を交互に向いてゆく。

六 由来・信仰

和合の草分けである大屋（宮下家）の祖は、菅原道真の末裔、道家だと伝えられている。この道家が弘長三年（一二六三）、鎌倉騒動が起きた際に長男である金吾善隆と共に遠州宮口（現静岡県浜松市）から落ちのびて、和合を開村したという。

その後、江戸時代になって寛保二年（一七四二）、善隆より数えて十五代目の金吾（雷公五郎助）が江戸に免租願いに出た帰路、信州の川中島（現長野県長野市）に立ち寄り、そこで習得した踊りが現在の念仏踊りの発祥だと由来伝承では語られている。

ただしあくまでも口碑であり、現在では和合でも「信憑性には疑問」（『和合の念仏踊り』）と言われているおり、むしろ宮下家の祖が遠州大念仏の地域から来ていることが注目されている。

念仏踊りに関わる施設としては、まず林松寺がある。林松寺は、正式名を金王山林松寺といい、臨済宗妙心寺派に属する。近世期には現在の役場出張所の

南側に新野の瑞光院（曹洞宗）の末寺があったという伝えがある。しかし、これが焼失したことで現在地に林松寺が建立されたのだという。

盆の期間中、林松寺では新盆供養が行われるが、念仏踊りは信仰的な繋がりをしていない。したがって単なる踊りの場所というだけで、寺との関わりは一切ない。ただ、昭和初期にいた和尚は毎回念仏踊りを見に来ており、その婿は笛で参加していたという個人的な関係はあった。

一方、十三日と十六日の念仏踊りの出発点となる熊野社は、棟札の年号から安政三年（一八五六）に祀られたのではないかと考えられる。この他、巾川で祀られていた権現宮、諏訪宮の享保九年（一七二四）の棟札もあることから、それ以前の社祠も合祀されていることが窺える。現在の社殿が建てられたのは明治二十一年のことで、社名はその時に熊野神社とされたというが、昭和二十八年に熊野社と変更されている。

この熊野社には現在でも、丸山・山弟子・八尺山神・愛宕・御鉾・若宮三社が合祀されている。丸山は「丸山さま」と呼ばれ、八月一日が祭日となる。丸山は、本村から西の方角にある山で、丸山高津神社が祀られている。古くは現在より高い位置に祀られていたが、昭和三十八年に鈴ヶ沢の現在地に移った。日吉や帯川など比較的に広い信仰圏を有していた。また、以前は八月一日の祭礼にチョボイチと呼ばれる丁半博打が行われることで有名であったという。

「山弟子」は、ヤマデシヤマノカミとも言い、鈴ヶ沢・和合・平谷の境に祀られる。十一月一日が祭日である。山弟子の近くには「大腹さま」が祀られており、かつてこれも合祀したところ事故が起きたために、もとに戻している。「八尺山神」は、個人で祀った八尺山の神で、明治後期に祀り始めたもの。隔年で十月に祭りをおこなう。愛宕と御鉾は、心川で祀られていたものを合祀したのである。さらに明治二十五年に改築された際には白山、熊野、伊良胡神社も合祀された。この他、境内には秋葉山大権現・金毘羅大権現、三界萬霊等の石碑がある。

熊野社の祭日は四月五日が春祭、十月五日が例祭となる。氏子区域は、宮沢上、宮沢下、大月、西の平、三度、寺村上、寺村下、木曾畑、上和合、本村、押の

田、田代、心川、鈴ヶ沢。和知野川の川上にある宮沢から下流の木曽畑までと、本村から山を越えた押の田を含めて、売木川の支流である鈴ヶ沢川の流域がその範囲となっており、別の念仏踊りを持つ日吉は含まれない。なお、社殿内には「金の中」の奉納額が多く飾られている。これは祭礼時に弓射を行い、的を射たものが、的中を記念して奉納する。的は境内から山住沢を挟んだ場所に設置し、境内から射た。和合に限らずこの近辺では弓が盛んで、日置流などの流派があった。そのため近隣の社寺で同様の「金の中」奉納額を数多く見ることができる。

七 変遷

現在、「念仏踊り」の名称が一般的に使われているが、中村浩氏によれば昭和三十年代には「念仏行列」あるいは単に「念仏」とだけ呼ぶのが普通であったという。

念仏踊りの期日は、近世期には旧暦七月の盆に行っていたが、新暦が採用されてからは新暦七月の盆（七月十三―十六日）に行うようになった。しかし八月の月遅れ盆が一般的になったため、昭和六十一年から八月十三―十六日に変更されている。七月に行っていた頃は、まだ梅雨の最中であつたため、雨が多かった。

念仏踊りに用いる道具類は、かつては熊野社に置いていた。後に林松寺本堂の裏に置くようにしたが、湿気がひどく、現在のものでこ館の下にプレハブを建てたが、ここも室温が高く保存には適さなく、でんでこ館を建てるに至った。これに伴って、かつて熊野社に保管していた頃には十六日の最終日は林松寺、大屋、熊野社という順で進んだが、その逆コースへと変更した。

また一時期、林松寺での念仏と和讃を本堂の中でやっていたことがあった。大雨が降った際にそうしたことがあって、その後しばらく本堂で続けていたが、現在は屋外に戻っている。

盆の習俗としては、かつて盆期間中は男女の交際期間とされた。特に盆踊りの際には、踊っていると女性の方からサインが出るので、そうすると二人連れ

だつて決まった場所に行ったという。そうした誘いがないと「あの人はちつともお呼ばれがない」などと噂され、また「あの人は何回だ」といった話が交わされた。また、和合の念仏踊りが新暦七月に行われていた時分には、八月の月遅れ盆になると、新野まで三里も四里も歩いて通つたものだという。

和合周辺の念仏踊りとして、かつて心川でも念仏踊りがあつたが廃絶し、その太鼓を和合に持ってきたという話がある。また日吉にも念仏踊りがあり、三十年ほど前に和合から習っていた、ただし、それ以前からあつたのではないとも言われている。和合から伝えられたとされる念仏踊りとしては、愛知県豊根村川宇連かわうれのものがあつた。太鼓は和合よりも小さなものを使っている。

八 所見

四日間に渡って行うこと、約一三〇戸が保存会に参加していること、保存会で詳細な記録『和合の念仏踊り』を発行していることなどから考え、下伊那のかげ踊りの中で最も伝承状況はよい状態にあるということが出来る。しかしそれでも実際の演者は少なく、所役毎の人数には余裕がないために、誰かが不参加になるとその穴を埋めるだけの余裕がなく、欠員となってしまう傾向にある。また和合小学校の児童が笛で参加しているが、児童数自体が少ないために後継者を育てることが難しいことも将来の不安材料と言えよう。

新盆の家を回って踊るかけ踊りの形式は絶えてしまったが、現在なお熊野社、大屋、林松寺を回るスタイルは維持されている。特に熊野社と大屋では「庭ほめ」が歌われることから、念仏踊りとはいえ新仏供養以外の要素が窺われることも特色と言えよう。また念仏踊りの行事ではないが、新仏供養のタイトボシでは、天龍村の方と似たしゃがむタイプの念仏が見られる。十六日の送りも家毎の行事になっているが、そうしたものを総じて考えれば、盆行事として多様な行事を有する貴重な伝承だといえよう。

九 記録・文献

① 中村浩『かけ踊り覚書』一九八三年 信濃毎日新聞社

②念仏踊り保存会編著『南信州の秘境和合の念仏踊り』一九九二年 念仏踊り保存会

③念仏踊り保存会編著『和合の念仏踊り』二〇〇七年 念仏踊り保存会

十 詞章

念仏や和讃などかつては口伝であったが、現在は昭和二十二年に書かれたものを印刷して使っている。それ以前に『和合の念仏行列』という冊子には昭和七年に宮下武市氏が書き留めた和讃全文が載っているといい、中村浩氏が『かけ踊り覚書』に転載している。

和讃

「神の前の庭ほめ」

東西静まれ お静まれ 静めて小唄を 出します
吾らが村の稔氏子 丸山様へと皆よりて
お鳥居はるかに眺むれば 黄金の鳥居で先ず見事
黒石なんぞを敷並べ 七重のおしめで先ず見事
生け垣なんぞを眺むれば 杉に小松を植え添えて 床はくがいです見事
官立ちはるかに眺むれば 檜やさわらがぎりぎり 杉の子育ち先ず見事
いざさら庭へと走り込み お庭かがりを眺むれば
黒石なんぞを敷並べ 白砂まかせて先ず見事
東のかがりを眺むれば 梅や椿が咲乱れ これこそ春の景色なり
南のかがりを眺むれば 珍らしはすに花が咲く 水に映りて面白い これこそ夏の景色なり
西のかがりを眺むれば 尾花すすき 菊の花 これこそ秋の景色なり
北のかがりを眺むれば 清し松に雪が降る これこそ冬の景色なり
婦命朝来この山は 四方四節の花の森 お堂やなんぞを眺むれば 下は切石きりつ石
八棟造りでまずみごと
八棟造りの破風には 竜やたつのうずら票
お柱なんぞを眺むれば おしやだん柱は白銀 扉は奈良の唐金
ふきしは ならのこけら葺き 七重のおすみで先ず見事 彫物はるかに眺むれば
鶴や亀や 松に竹 波につよいわ鯉のうお 獅子にぼたんや 竹に虎
唄は数しき多けれど
お庭にはお名残り惜しけれど わしらも先へと急ぎます 庭入り小唄はこれまで

「庄屋の前の庭ほめ」

東西静まれ お静まれ 静めて小唄を 出します
吾らが村の惣百姓 庄屋様へと皆よりて
門からはるかに眺むれば 御門柱は白金 杉に小松を植え添えて 床は鴨雁で先ず見事
御門はるかに眺むれば 御門柱は白金 扉は奈良の唐金
葺地なんぞを見てやれば 此の川池の鴨のとり はがい揃えて先ず見事
いざさら御庭へ走り込み お庭かがりを見てやれば
黒石なんぞ敷並べ 黄金 小砂とかき混ぜて
こしと打ちては ほこりも立たず 先ず見事
四方ぐるらを眺むれば 色々 泉水数知れぬ
屋造りはるかに眺むれば 垂木は黄金のしけ垂木 八棟造りで先ず見事
八棟造りの破風には ぞうや龍のうずら雲 内の棟体見てやれば
綾錦を千竿ばかりかけ並べ
七五はたちの乳児達が むしがいめさるのまず見事 いざさら内へと走り込み
御馬屋はるかに見てやれば あしげの駒が千ばかり
紅梅栗毛が 千ばかり毛揃いめされて先ず見事
作場馬とて数知れぬ お茶の間なんぞを見てやれば 黄金の茶釜でお茶を煮る
黄金の柄杓でお茶をくみ 七五はたちの乳児連がお茶をくむ手は良い手元
お座敷なんぞを見てやれば あやのへりを敷き並べ
錦のへりを敷き並べ かんたの枕を敷き並べ
四方ぐるらを眺むれば 弓矢 鉄砲立ち並べ 太刀や薙刀かけ並べ 具足兜かけ並べ
奥の間の間の四畳敷 武士の行儀でお住みやる
これがお庭の福江の木 こがね花咲く銭がなる
あまり踊れば花が散る 花の散るまにいざ帰れ
お庭にお名残り惜しけれど わしらも先へと急ぎます
庭入り小唄はこれまで

「新仏供養の和讃」(枕ことば)

東西静まれ お静まれ 静めて小唄を 出します
信濃が奥の鴨が池 さてその池の端にこそ 大きな杉が三本ある
元にはつたが生えかかる うらには鴨が巣をかけて 池の中へと舞い降りて
羽をは浪にたたまれる 足は氷に詰められて
朝日のさすのを待ちかねて 夕日のかげの悲しさに
親に不幸な鴨の鳥 親に不幸はいたすまい 父よ母よと泣いて立つ

「野辺のおくり」(天寿をまつとうした人)

東西静まれ お静まれ 静めて小唄を 出します
味気無いぞよ我が親は 無常の風にさそわれて
ひとつの息が通わねば えだ木の子供が力なく
七重のびょうぶを引きまわし 手取り足取り片付けて
此の世を立ち退くその時は

一家一門集まりて ともこほうばい立ち寄りて 旗や天蓋さしかけて
広きが島へ送り出す 広きが島の中ほどに 七尺深さに土蔵を掘り
中へうずめる あわれさよ 五尺高さに墓を積み
墓のしるしに松植えて松はひとなる親恋し

いつか八月盆が来りや 親のみ墓へ参らずが 間も無く八月盆がきて
親のみ墓へ参り候 左のおん手に 水を持ち 右のおん手に 香や花
腰には鎌をしのばせて 親のみ墓へ行き着いて まいなる草をば鎌で刈る
いまなる草をば手でみしる よそと見たるみそはぎで

親に水をはなむける 刈りたる草をばおし寄せて その身はそこに草枕
少しとろめくその夢に 姉ごのかみと我がかみと 柄杓にまげて水をくむ
水向するのはいもの 柄杓のつゆやら涙やら
小袖の袖をしぼる程 唄は致しき多けれど 水向小唄はこれまで

「釘抜き」(六十歳未満で亡くなった中折の人)

東西静まれ お静まれ 静めて小唄を 出します
そもそも関東の下つけの 日光山のふもとにて 悪性したる商人が
一人まします候いば 無常の風にさそわれて 間もなく商人相はてて
えんま帳へとつけたまう えんまはその由御覧して
しゃばの商人今来たか 冥土へとうても通されぬ しゃばへとうても帰されず
しゃばへ通してこの事は 釘念仏の縁起なり

く日く日は多けれど 四十九日と申するに 四十九本の釘を打つ
さて打つ釘の長さこそ 八寸にまた四寸一尺二寸の三色ある
頭に五つ肩に六つ 胸と腹とに十四本 足と腰とに二十や四つ
打たれる時の悲しさは 天はお経の雲の幕

下は奈落の底までも ひびくばかりわいばかり
しゃばに子供の有るものは 和尚を呼びに行く時に 頭の五つの釘抜ける
和尚のお経の功力にて 肩の六つの釘抜ける 茶湯茶向の功力にて 胸と腹との釘抜ける
踊りや念仏の功力にて 足と腰との釘抜ける

しゃばに子供の無いものは よもや抜けずとゆるがすと
念仏さんべ返しは なかふちをかけ五へんかえ
みよいんだあを二つ言うて なかでふちをあけるべし
いざさらそろえいざそろえ そろえておひま申します

「血の池」(子どもを産んで死んだ人)

東西静まれ お静まれ 静めて小唄を 出します
味気ないぞよわが妻は 後産のひもが解けかねて
胸には七重の戸が建たり 目には五色の雪が来て
無常の風に誘われて 死にて冥土へ行く時は
親子一門集まりて ともにほう輩集まりて あまたのとどをたのみこし

広きが原へ送り出し 広きが原の程に 七尺四方の土蔵を掘り
土蔵へうずめる哀れさよ 高さ五尺の墓を築く
墓のしるしに花立てて 花はしなびる妻恋し
哀れないぞよいまさらし 洗い流したその水は
神を清めて清まらぬ 仏にたむけて受け取らぬ

積もり積もりて池となり こいすの地獄にとどまれて
産まず地獄を眺むれば
八万途上の血の池に 髪は浮き草身は沈む あらおそろしの鬼様が
女波雄浪を打ち立てて 我れ喰ひ吞ますと かき来れば

其の時何をば頼むべし 御地藏棟を頼むべし 浮かぶと夕日も更になし
しゃばに残りし我が殿御 血ぶん教と申するに一枚授けてくれたなら
首より髪が浮すが 二枚三枚授けたら さても我が身も浮かばすが
我が殿御のせいふんに 血ぶん教をも授けたり 七千念仏たむけ候
念仏や踊の功力にて 八万余丈の血の池も 汗手の山と成り浪の そりりようと浮か
び候
いざさら揃えさら揃え 揃えておひまを申します

「西院の河原」(子どもで亡くなった人)

東西静まれ お静まれ 静めて小唄を 出します
払い清めて奉る しもに次第の天きようなり ここにあわれをとどめしか
しゃばと冥土の界なる 西院の河原にとどめたり
一つや二つや三つや四つ 十より内のみとり子が
広き河原に集まりて 楓のような手を広げ いさこをよせては塚をつく
小石を拾って塔を積み 一丈積んでは父の為 二丈積んでは母の為

三丈積んでは郷里兄弟 我が身の為と回向を

いずれ仲良く遊びしも 花園山へはい上り 色よき花を集め持ち
折り取る花は何々ぞ 牡丹しやくやく百合の花 花を集めて持ち遊ぶ
足ははだして悲しけり 幼き子どもが力なく はや日も晩に傾けば
持ちし花をば振捨てて 西へ向いては父恋し 東へ向いては母恋し
わつと泣くその声が 谷にこだまがひびくれば あらおそろしや鬼様が
熱鉄棒を引き上げて 幼い者を追い回し 責めさいなめしありさまは
目もあてられぬしだいなり 西院の河原のありさまは 例えていわんかたもなし
いざさら揃えさら揃え 揃えてお暇を申します

〔花和讃〕（産まれてすぐに死んだ人）

東西静まれ お静まれ 静めて小唄を 出します
婦命朝来花和讃 余り我が子が恋しさに 花のお寺に参り候
花を作りしながむれば 咲きたる花は散りもせぬ つばみの花が散る如く
（以下不詳）

〔送り和讃〕（庭引きの歌）

ありがたけれの六字を これのお庭に申置く 受取り給へそうりよ様
受け取り給へ庭の神 おいとま申すぞ御大主様 お庭にや御名残り惜しけれど
わしらも先へと急ぎます 御りよがい申したよその人 余り踊れば花が散る
花の散るまにはよかれ やんさ踊りはこれまで
秋風たてば木葉散る 来る冬も雪が舞う
踊りをやめてかせぎよせよ 新引きなざるなそうりよ様 来年八月早よござれ

〔和讃の終わりの文句〕

今宵は曇れ 蚊が喰いまする 仰がせ給え音頭衆様
音頭衆様には仰ぎはせぬが 音頭衆様仰がれた ゆへなる御墓はあみだぶつ
中なる御墓が志やか 如来下ふる 御墓がほととぎす
墓の上なるほととぎす 墓の上なるほととぎす
まことめいどの鳥なれば
我が親師匠がたりきがう 我らが親は血の池に ういつしづうんで
流れてその時 せがきがはち
いざさら揃えさら揃え 揃えてお暇を申します

盆踊り

「すくいさ」

すくいさにきたにコリヤ
すくい とらしょーよ ひとすくい（後略）

「おんたけ」

おんたけやまの エーむねのこおりはむねのこおりはいつとける
ソリヤコイ むねのこおりは あさひでとけるヨエ
むすめしまだは むすめしまだは ねてとける ソリヤコイト（後略）

「十六」

ことしや じゅうろく ささげのとしだーエ
たれにつませる はつなりを
はつなりをエ だれにつませる はつなりを（後略）

日吉の念仏踊り（日吉の大社念仏）

城所恵子

一 名称

日吉大社念仏

二 伝承地

長野県下伊那郡阿南町和合日吉

三 期日・場所

（一）期日 日吉では盆の行事を大社念仏と称している。八月十三日の迎え盆を同じく大社念仏とも言い、送り盆・ソウリヨウ様（精霊流し）を十六日に行っている。

（二）場所 盆行事は県道から売木川を渡った向い組地区の八幡様社屋前の十メートル四方ほどの広場で行われる。この広場は日吉の住民の集まれる場所として他の年中行事にも利用されている。



日吉の全景



八幡様

四 伝承組織

以前は豊村であったが、昭和二十三年七月和合と売木に分村し、日吉は和合の小字となる。その後昭和三十三年に阿南町和合と変更、現在に至る。平成二十一年の戸数は二十二戸。第二次大戦後三十六戸の時代もあったらしいが昭和から平成になる頃には、三十二、三戸と減少傾向にある。人口は三十九名。そのうち二十五歳未満が三名（女二、男一）。二十五歳～六十歳未満が五名（女二、男三）。六十歳以上が三十一名（女十六、男十五）。即ち子世代が三、親世代が五、高齢者が三十一と圧倒的に高齢世代が多い。時代で見ると、明治・大正生まれが二十八、昭和生まれが八、平成生まれが三で、男女合せた平均年齢が七十・五歳になる。

このような年齢構成の日吉では、地区の全員三十九名が保存会員である。保存会は三十年前に結成された。しかし保存会単独で盆の行事を行うのではなく、地域全体の組織である区と合同で行事に当たっている。区は中組、入り組、向う組、巢山組の四組に分かれ、各組は四戸から八戸で一組を形成している。各

組から役員一名を選出して区長が全体をまとめている。区長の任期は一年。見直しで二期まで。保存会長の任期は三年。助成金など外部との交渉や、運営費用の按配などは区が行い、実際の活動は保存会が当たる。その保存会も盆には日吉大社念仏保存会として十三日・十六日の八幡様での祖霊の送迎行事に当たるが、四月二十九日に行われる氏神伊勢社のお鉾祭りにはお鉾祭り保存会として区と共催で行事に携わるといった具合である。費用は区費として半期五千元を年二回各家から徴収している。このほか、お賽銭や材木を売った残金もお供物や宮司の礼金などに当てる。太鼓の革の張替え、神輿の修理など多額の費用を要する場合には公的補助金を申請する。

五 行事の内容（平成二十一年の行事を中心に）

盆の行事は盆の入りから灯笼流しまで地域で伝統的に行ってきた流れがあり、その中には各家で行うものと、地域全体で行うものがあり、地域の行事だけを取出すことは出来ないので、必要な各家の行事も含めることにする。

（一）次第

準備 七月中旬道路の草刈と道具類の準備

地域の行事

十三日：午後八時三十分頃 八幡様屋内に参集

午後九時四十分 大社念仏開始

庭入り ①行列 ②ヒツチキ

午後九時五十五分 念仏

小休止

午後十時五分 盆踊り

午後十一時 和讃

午後十一時三十分 終了

十六日：午後八時三十分頃 八幡様屋内参集

午後九時三分 送り盆開始

庭入り ①行列 ②ヒツチキ
休憩
念仏

小休止

午後九時十六分 盆踊り

午後九時二十二分 休憩

午後九時四十五分 新仏の庭入り

午後十時四分 ①行列 ②ヒツチキ

午後十時十五分 念仏

午後十時三十分 新仏の和讃

休憩

午後十一時八分 盆踊り

十七日：午前零時五分 送り盆和讃

午前零時二十分 ソウリヨウ流し

午前零時四十分 終了

（二）扮装

一代前の頃には浴衣に草履ばきであった。時代が変わり、洋服が日常着になつて現在の現在は普段着で行っている。

（三）楽器

〔楽器・道具〕参照（55頁）

（四）道具

〔楽器・道具〕参照（55頁）

楽器・道具

楽 器



打面の長さ5.1cm・打面の直径3.1cm
の長さ26.5cm

撞木 1

凸面の直径18.7cm・深さ5cm・鐙の
直径21cm・内径18cm・内側の深さ
4.3cm 銘 明治三十二年二月信
心松下春夫松村末松 側面の
耳から紐を通し持つ部分に木
片をつけ、凸面を打つ



鐘(伏せ鉦足付)(真鍮製) 1

革の直径55cm 曲げ輪胴の直
径44cm
胴の長さ41.5cm・締緒孔15個・
縄締め



太鼓(長胴締太鼓) 2

割竹の長さ43cm・直径約4cm
鋸菌刻みの長さ46cm・共に半
分まで刻みや割り



ささら(摺りささら) 2対

全長31.8cm・直径3.8cm 持ち手側
に五色の紙垂を付ける



太鼓桴(桐材) 2対

道 具



番傘の縁に白色の垂を糸で綴じ付
ける。柄の先に竹竿を足して全長約
2mにする

傘 2

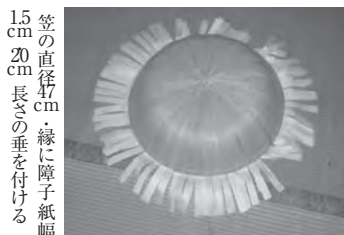
約15cmの金色の頭の下に藁を下げ、
1.57mの棒を挿す。和合では茅を用い
るので竿を回すと広がるが、日吉では
藁のため広がらないので持ったまま行
列に参加



ヤッコ 2



糸灯笼 1



笠の直径47cm・縁に障子紙幅
1.5cm・20cm長さの垂を付ける

まんじゅう笠 2

全長11.7mの竹の両端に白色の紙垂を
付け、竹の中心に紐が結ばれている



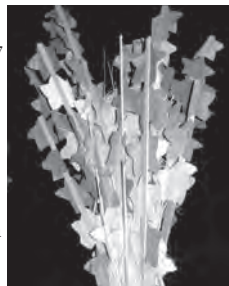
ヒツチキ 2



赤旗(幟) 1

赤地に「南無阿弥陀佛」の白抜き
年号 昭和五二年丙巳

全長1.57mの竿の先に長さ32cmの藁つ
とを麻紐で縛り50cmほどの割竹20
本に五色(赤・青・緑・黄・白)の色紙を
桔梗の花型に合せて切り、貼り付け
る。本来は細い切れ目を入れてしこ
き、柳の葉に見立てた柳もあるが、
今回はなかった。花は虫除けになる
と言われている。花は虫除けになる
慣わしがある。



花 2

行事の内容

準備 七月中旬に二十二軒を、道路の草刈りと大社念仏に使う道具類の準備に分けて作業を行う。道具類の準備には新人がいると五人要するが、慣れた人ばかりだと四人で足りる。道具類や材料は八幡社屋内に保管されている。番傘の縁に細く切った20cmほどの白紙を白糸で付ける作業を中心に、糸灯籠やハナの型に合わせて色紙を切って貼る作業がある。

(五) 演目 (詳しい芸態解説は59頁参照)

十三日 各家の行事 各家では日中にお棚飾りを済ませ、夕方陽が落ちると、屋外に墓から仏間への道を塞がぬように河原砂の箱を置き、そこにローソクを点す。鐘を鳴らしながら念仏を唱えて一年振りに先祖の霊を迎える。この日仏壇にはうぐいすと野菜の天ぷらを供える。家族も同じ物を頂く慣わしがある。

午後八時三十分頃 「地域の行事」 八幡様の屋内に日吉の人々が集

合。区、保存会の連絡事項を伝達。時間まで歓談。この日は盆踊りの歌詞集のコピーを配布。歌詞を覚えるよう要請。出席十二名。今年は二軒が新盆である。



仏壇



供物



八幡様の屋内

午後九時四十分頃

「大社念仏」 八幡様軒の電球が今夜の明かりとなる。

「庭入り」 八幡様広場端階段の上に集合。各自道具を持つ。楽器・道具類は十六個あり、人数が足りない時は一人で二つ持つこともある。この日はヒッチキ、ささら、まんじゅう笠を一人で二つずつ持っていた。持つ物は当日集まった人の中から話し合いで決まる。行事進行の要となる太鼓や鐘は慣れた人が受け持つようだ。頃合いをみて全員のヤーレイの掛け声で庭入りの行列が始まる。

① 行列 先頭から糸灯籠、赤旗、鐘、締太鼓2、まんじゅう笠2、ヤッコ2、ヒッチキ2、ささら2、傘2、花。本来はこの十六人が行列して広場を右回りに三周する。今回傘1、花3であった。

午後九時五十分

② ヒッチキ 八幡様に近い方から鐘、膜面を下にした太鼓を持った太鼓持ちが二人並び、まんじゅう笠を被った(着笠)打ち手が太鼓に向かって立つ。ヒッチキ・ささらが組みになる。やつこがその外に、その他は外周に道具を持って控える。全員による「ヤーレイ ソーレ ヒッチキチ ヒチリコヒチリコ ヒッチッチ」に合わせて太鼓は叩きながら右に回り、ヒッチッチでは横に出た足をもう一方の足で蹴るギャロップ風の足さばきがあり、ヒッチキ・ささらの組は背中合わせになりながら三歩ずつ片足で跳ねて小回りをする。

午後九時五十五分

「念仏」八幡様左手の崖に向かって鐘、太鼓持ち、その前に打ち手が立ち、その他は後ろに並び、鐘、太鼓のリズムに合わせて体を左右に揺らす。本来は全員で念仏をあげるのだが、節が難しく打ち手の一人が唱えた。

午後十時三分

小休止の後、「盆踊り」 参集した全員団扇を手にした輪踊り。

① すくいさ

② おさま（＝和尚様 三州からの盆踊り）

③ 高い山

④ 御嶽（伊那節の元唄）

⑤ 十六 盆踊りの楽譜は（64～65頁）参照

午後十一時

「和讃」 八幡様の軒下に左から鐘、左手に太鼓を持った打ち手が並ぶ。桴は一本。その他は後ろで太鼓に合わせて体を左右に揺りながら和讃を復唱する。

午後十一時三十分

「終了」 道具類を八幡様屋内に収納し、整頓して施錠。解散。

十四日・十五日

各家の行事

「たいとほし」

組の中または親族の家が新盆

の場合、世帯主が親族や組の家に日時を連絡すると、招かれた人々が新盆の家に集まり、組のリーダーが中心になって新仏の供養をする。庭に河原砂の入った缶にローソクを立て、全員でそれに火を点け、米、南天の葉で清めの水をかけて手向け、組のリーダーの念仏に合わせて皆も唱和する。念仏は五回、七回と繰り返し唱える。本来は百八本のローソクを立てる慣わしであった。昔は松の根を細かく割って燃やしたらしい。ローソクに替わったのは昭和の初めという。平成二十一年は二軒が新盆を迎えた。

「ソウリヨウ様」

各家では日付が十六日に替わると松明を焚き、念仏を唱えてソウリヨウ様墓地送りをする。迎え火は早く、送り火は遅くが祖霊への礼儀

と言われてきた。

十六日

地域の行事 「送り盆・ソウリヨウ様」

午後八時三十分頃

八幡様屋内に集合。連絡事項の伝達。お神酒あげ。出席二十四名。崖上には二軒の新盆の親族から供えられた角灯籠や盆提灯にローソクが点されて並べられている。



角灯籠

午後九時三分

「庭入り」 ①行列 一人ずつ道具をもって並ぶ。掛け声、太鼓の叩き方を確認してから行列開始。広場を三周する。

午後九時十分

②ヒッチキ

午後九時十三分

休憩

午後九時十六分

「念仏」 崖を向いて念仏をあげる 太鼓打ちはまんじゅう笠を被らない（無笠）。十三日の大社念仏には着笠、十六日の村ソウリヨウでは無笠と区別している。理由は分からないが、昔からの慣わしとなっている。

午後九時二十二分

小休止の後、「盆踊り」

① すくいさ

午後九時四十五分

午後十時四分

午後十時十二分

午後十時十五分

午後十時三十分

午後十時五十分

午後十一時八分

② おさま

③ 高い山

休憩

〔新仏の庭入り〕 ①行列

②ヒッチキ

〔念仏〕 崖上の灯籠に向いて。太鼓打ちは無笠

〔新仏の和讃〕 崖上の灯籠に向いて

休憩

〔盆踊り〕 新仏の親族も加わり全員で踊る

① 御嶽

② 十六

③ すくいさ

踊りの輪がひろがる

④ 高い山

⑤ おさま 歌詞が続かず、盛り上がり

欠ける

休憩

日が替わるまで時間を調整する

⑥ すくいさ

⑦ 高い山

この踊りに人気がある

〔送り盆和讃〕

八幡様に向かってあげ、糸灯籠は八幡様の左軒に立てかけ、鐘・太鼓（左手で持ち、桴は一本）が軒下に並び、花・ヒッチキなどを持った地区の人、供えられた角灯籠を持った親族がその後ろに並ぶ。鐘・太鼓のリズムに合わせて和讃を復唱しながら体を左右に揺らす。

〔和讃終了〕

〔ソウリヨウ（精霊）流し〕 祖霊を乗せた糸灯

十七日

午前零時五分

午前零時十七分

午前零時二十分

午前零時三十五分

午前零時四十分

籠を先頭に鐘・太鼓（棒に通して二人で担ぎ後ろの人が叩く）、その後にローソクを灯した角灯籠が続き、売木川まで旧道を下って行く。

橋に到着。糸灯籠は橋手前で止まり、親族から供えられた角灯籠を橋の上から川下に向かって倒すと、次々と燃え、火の粉を空高く上げながら川へと落ちていく。燃えつきるまで鐘・太鼓が響いている。燃えカスは朝になってから掃除をする。

〔終了〕



行列全景



灯籠を燃やす

芸 態 (＊リズム譜は66頁①～④参照)

和 讀 *楽譜は65頁参照



桴は右手に二本。節の合間には膜打ち二打毎に体を右左と揺らす。右向き



節の間は桴打ち、鐘も押さえて静かに。左向き



チャーンチャーンチャーンチャカチャン(繰り返し)

節の合間の膜打ち



後ろに控える参列者は節に合わせて体を左右に揺らし、復唱に唱和する

ヒツチキ



(ヤレソレ)ヒツチキナツ



ヒチリコヒチリコ チツチツ



ヒチリコヒチリコ チツチツ

ヒツチキとささらベア 背中合わせになり、片足で3歩跳ね、足を替えて3歩跳ねる

太鼓持ちと打ち手ベア 右、左と交互に打ち、重心も移動しながら全体右回り

先に動いた足を後の足が蹴る

行 列



ヤレソレ

輪の外向きから



ヨイ

右足を踏み込み、右膝を曲げる



ソレ

中向き左足前



ドドンドン

左足で太鼓を支え強く打つ(桴は右手一本)



ドン ドンドン

右足前で打ちながら外向き

念 仏



13日は着笠、16日は無笠 八幡社横の崖を向き、念仏の間は桴打ち、鐘も静かに



念仏の切れ目では桴を持ち替え膜打ち二打。終えて静かに桴を額で合わせ、桴先を下向きに桴打ちへ



ナムアミダンプでは強い速打ちとなるので、右足を歩前に踏み込む

六 由来・変遷・信仰

(一) 由来・変遷 日吉には二百年ほど前に和合より伝承したと言われている。しかし長い間に日吉独自のものへと変わりつつあるようだ。以前の盆行事は旧暦の七月十五日に行われ、明治の太陽暦への改暦後も新暦の七月の盆を続けていたが、昭和六十一年に和合が八月に変更した時から日吉も八月に行うようになった。和合では四日間行っているが、日吉では十三日の大社念仏と、十六日の送り盆の二日間の地域の盆行事として続けてきた。戦後一時に新盆が多く出て、穢れが大きいと中止したことがあった。一世代前には扮装も浴衣に草履ばきであったが、今は普段着で行っている。若者が多かった頃には庭入りの行列でも、ヨイの掛け声と共に地面に膝がつくほど足を曲げたと思われる。またヒッチキでは、一組のヒッチキとささらは背中をすり合わせながら飛び跳ねていたであろうが、片足で飛ぶのも大変になっている。六十歳以上が大半であるので大きな動作は望めない。若い世代への継承も試みており、わずかずつ効果がみられる。しかし念仏の唱えは難しく、現在は一人で唱えている。和讃の詞章も日吉独自の部分が挿入されている。長い和讃ではリーダーに続いて全員での復唱はしっかりと受け継がれている。盆踊りの歌詞はいずれも七七五五で、どの歌にも通用するため、配布された歌詞集で多く歌詞を覚えて踊りを盛り上げてもらいたい。

(二) 練習 家が広い地域に点在していること、勤め人が多くなり、盆の期間だけ帰省する人もあり、一定の時間に集まることが出来ず、事前の練習は出来ない。盆の行事の中で一演目毎に太鼓のリズムや掛け声の確認をしてから始めることで行事をこなしている。道具類の数だけ集まらないこともあり、一人で二つ持ったりしているが、人数の不足より、日頃中々顔を合わせにくい人々が集うことを楽しんでいるように見受けられた。古くから林業・狩・道路の草刈りなど共同の作業で培われた和を尊ぶ伝統ができており、人数は揃わなくても気持ちは繋がっている。葬式(ブク)の家は行事の中で楽器や道具類を担当できない決まりがある。

(三) 信仰 必要な時に神降ろしをして願いを届ける地域もあるが、日吉で

は神・仏は常に身近におわして神・仏の区別なく篤く応じているように見受けられた。八十代の話者によると、近い先祖は仏、遠い先祖は神。死んで百年経つと天神様になるなど、神と仏、さらに人との間にも境はないようだ。新仏の遺族も大勢で賑やかに送ってもらい故人も喜んでいと語っていた。盆は仏教の行事と思いがちであるが、地域を挙げての盆行事には八幡様屋内の棚に安置されている八幡様の厨子を開け、供え物や花が供えられているが、厨子にも入らない阿弥陀様やその他の像には横を向いているように頼み、弘法大師の厨子も閉められていた。この多くの像は、いずれも家内安全、生業の繁栄を願って各所に祀られていたと思われるが、散在して粗末にならぬように集められ、三十年ほど前から二月十一日には、八幡社、金刀比羅様、蚕玉様、稲荷様、津島様、秋葉様、庚申様、山住様、お鍬様をまとめて祀る統合祭を行っている。八幡様の建立の年代は定かではないが、神仏混淆時代に飯田市の鳩ヶ嶺八幡より分祀したという。また春のお彼岸の最終日である三月二十五日の果て願には三十三番のご詠歌と、普陀落を唱え、穢れを祓って投げ餅をする。日吉の人々の年齢差は大きく、多少神仏への考えも異なるであろうが、代々神仏を篤く祀る伝統が現在も受け継がれているように感じられた。

七 特色・所見

調査地の文章を読む時、地名などを自分流に抑揚を付けて読むと思う。そのため気のついた日吉での地名や事項についての抑揚を金田一式表記で記しておいた(66頁⑤参照)。また、誘いの言葉「行きませんか」に対し、「行かまいか」。「：だろう」に対し「だら？」と浜松でよく使われる方言が聞かれた。伊那にあって、遠州との交流も見受けられる方言と感じた。

売木川を挟んで千メートル前後の峰が連なる日吉地域は、昭和二十三年頃まで焼畑で雑穀を栽培し、その他養蚕、炭焼き、こんにゃく造りが主な産業であった。水田も川沿いの低地を利用して作られていたが、収穫量は決して多くはないようだ。平地が少なく、山間の斜面に家が点在するこの地では耕地面積も少なく、次第に若者は地域の外へ勤めに出るようになってきた。しかし県道も

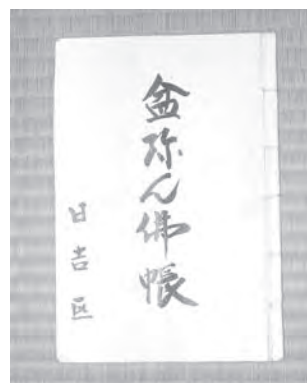
舗装され、四季ごとに表情を変える自然の美しさや、新鮮な自家製の野菜の美味しさに魅せられ、定年後は日吉に戻って暮らす人が多くなり、六十歳以上が住民の大半となってきた。子の世代のうち、一人は小学生で、和合の小学校にバス通学をしている。来年から中学生になると、通学のため毎日家族による送り迎えが必要となる。現在地域内の商店は農村時代に役場のあった中組に酒販売を中心とした商店と、日吉入口にあるたばこ・雑貨の二軒があるのみである。清流売木川では魚影も多く、釣り人が訪れるという。日吉に寺はなく、新野の瑞光院（曹洞宗）に、葬儀や七月のお棚行いをお願いしている。また宮司も売木から招く。

この日吉もかつては和合の一部であったので、和合の念仏踊りが伝承されたのは当然のことと考えてよいと思う。元和合の開墾地として定住するようになった心川にも一時念仏踊りが伝承されていたようだが、この地では昭和初期まではそれ以前にやらなくなってしまうという。日吉には和讃の念仏歌詞集、盆おどりの唄以外に念仏踊りの記録はなく、古いことは言い伝え以外には分かっていない。元々戸数が少なく、広い地域に点在しているため、家々に踊りかけられることはなく、十三日の祖霊迎えと、十六日の送り盆に地域の行事として続けられている。それでは芸能としての評価が問われるが、演目「行列」では膝が深く曲がらなくても、力強く打つ太鼓の音、「ヒッチキ」でささらとヒッチキ組が片足で跳ぶ、太鼓打ちも横に出た足をもう一方の足でギャロップのように蹴る足さばき、「念仏」の唱えの合間に桴を返す仕草など、ただ行事では済まされない要素があり、経年で観察すれば、慣れからくる技の向上も期待できるのではないだろうか。一年ぶりに迎える祖霊に見せ、楽しませ、自らも楽しむという心意にも、単なる行事とはみなされない要素を感じ取れる。来年は和合の笛を習得した子と祖父が笛を復活させたいとの心意気をみせてくれた。信頼を寄せるリーダーのもと年々続くことを願っている。

八 記録・文献

- ①『盆^{つづみ}弥ん佛帳 日吉区』筆書き 国語ノート 昭和三十一年七月十四日

- ②和讃『盆^{つづみ}弥ん佛帳 日吉区』筆書き 中折り 和綴じ
③『盆おどりの唄』日吉保存会 平成二十一年・八 筆書きのコピー A4版
ホチキス止め



九 詞章

念仏集は日吉独自のものであり、祖霊に唱えるためであるので、公開はしない。当日口述した部分のみ掲載した。

念仏和讃

和讃

東西鎮まれ お鎮まれ 鎮めて踊るひと踊り
八幡様の庭借りて おぶすな様よお聞きあれ
八幡様よお聞きあれ くへい公主^{うめし}お聞きあれ
いつか八月盆が来る 間もなく八月盆が来る
四季の念仏差し上げる 四季の弥仏を願い置く
おぶすな様の守り わたりに聞かせてくださるな
氏子一同おだやかに 世の中良かれ風吹くな
つくりへやまいの出ぬように つくりへ虫けらつかぬよう
秋の実りを楽しみに 田や畑ももろともに
黄金の波をうつように 八幡様とおぶすな様
…以下略

新仏和讃（以前は七月であったが変更してから歌詞も八月とした）

東西鎮まれ お鎮まれ …中間略

間もなく八月 盆が来た お墓参りをいたしましたよう

お墓参りをいたすには 右の御手に水を持ち 左の御手に香や花

腰には鎌を忍ばせて ようようお墓に着きました
小さい草をば手でむしり 大きな草を鎌で刈り
刈りたる草をばおし寄せて その身をそこに草枕
少しとろめくその夢に ひしゃくを曲げて水を汲み
水汲みするのもあわれなり ひしゃくの露やら涙やら
小袖の袖を絞りつつ（八十歳以上、七十歳以下は抜く）
重い病に罹られて 医者やほうばい集まりて
親や兄弟集まりて 子供もみんな集まりて
十分看護はしたけれど 看護に不足はないけれど
あわれこの世を発ちにけり 一同集まりて
唄や念仏授けそろ そろうてござれよ そのままござれ
まだまだ踊りをお目にかけ：

十六日送り盆和讃の最後の一節

いざさら揃え さら揃え これでおいとま申します
花の散る頃 かえる頃 花の散るように皆帰れ

このほか「血の池」（子供を産んで死亡した場合）、「賽の河原」（子供で亡くなった場合）などがある。

盆踊り

日吉の盆踊りの歌（『盆おどりの唄』日吉保存会より）

*すくいさ

すくいさにきたに すくいとらしよに ひとすくい
そろたそろたよ 踊り子がそろた 稲の出穂よりや まだそろた
盆よ盆よと 春から待ちて 盆がすぎたら なによまぢる
立てば芍薬 座れば牡丹 歩く姿は 百合の花

今宵一夜は 頼むぞお月 あまり晴れずに 曇らずに
心細いぞ 木曾路のたびは 笠に木の葉が 舞いかかる
切れてばらばら 扇子の要 風の便りが うすくなる
姉の霧島 妹のさつき さつき負けるな 霧島

泣いて涙を 出さない物は 千両役者と 夏の虫
歌の切れ間だに ちよいと出せ おなご：

高い峠の あの風車 何をたよりに くるくると
はるか向いに 見えます雪が あれは赤石 初雪が

桜三月 あやめは五月 菊は九月の末に咲く

*おさま

おさま甚句は どこからながりよた 三州振り草 下田から
よくもそめたよ 博労さの浴衣 かたにや鹿毛馬 すそ栗毛
三州振り草で 安いもに煙草 一両二分だしや 五だん買う
そろたそろたよ おさまがそろた 稲の出穂より まだそろた
いざり勝五郎 車に乗せて 引けよ初花 箱根山
雨が降ってきた 干し物ぬれる おめしやこげつく がきやほ泣く
きては抱きつく あの大木に 鳴いて別れる 夏の蟬
花は千咲く 成る実は一とつ 早くもだ花 散らしたい
お寺ご門堂に 蜂が巣をかけて 坊主でりや刺し 入りや刺し
お寺の坊さん 栃餅が好きで 夕べ九つ 今朝七つ
天竜くだりて 川下見れば 松が見えます 浜松が
月と一度に出わ出たけれど お月や山端に わしやここに
松になりたや 峠の松に 登りくだりの 客を待つ
何をくよくよ 川端柳 水の流れを 見て暮らす
主と別れて 松原行けば 松の露やら 涙やら
箱根八里は 馬でも越すが 越すに越されぬ 大井川

*高い山

高い山から 谷底見れば 人は丸いが 田は四角
踊りまいかよ 躍らせまいか 年に一度の盆じゃもの
こぼれ松葉を 手でかき寄せて 主の来る夜を 焚いて待つ
娘島田に 嫁や勝山に 姑ばばさは いば巻きに
咲いた桜に なぜ駒つなぐ 駒が勇めば 花が散る
わたしゃ野に咲く 一重の桜 八重に咲く気はさらさない
恵比寿大黒 何見て笑う 金のなる木を 見て笑う
おもしろうぞえ 津島の祭り 山にや提灯 川にや船
あなた百まで わしや九十九まで ともに白髪の 生えるまで

*御嶽

おんたけ山は 峰の白雪や 峰の白雪や いつ融ける
峰の白雪や 朝日に融ける 娘島田は娘島田は 寝りやとける
木曾の御岳 夏でも寒い 合わせ羽織に たびよそえて たびよそえて

笠に木の葉は 昔のことよ 今じゃ木曾路も 汽車で越す
今年や豊年 穂に穂が咲いて 榊は取りおき 箕ではかる

*十六

十六ささげのとしよ だれに摘ませる 初なりを
吉田通れば 二階で招く しかの鹿の子の 振袖で
主の寝姿 二階から見れば 五月野に咲く 百合の花
親のない子に親はと聞けば 親はお寺の客殿に
声はすれども 姿が見えぬ 姿みしよやれ きりぎりす
そばがよいのか うどんがよいか すこしや切れても そばが良い
歌の切れまだに ちよいと出せおなご はよる吉田のじよる節を
稲は穂と出て 畦よりかかる ぬしはお客に寄りかかる

盆踊り・和讃の楽譜

すくいさ

輪に沿って進み、中を向いて左足を前に上げて輪を縮め、また広げる踊り方は和合で踊られている〔御獄〕の踊りとほぼ同じ輪踊り。民謡音階による穏やかな節回し。



[すくいさ]

♩ = Ca.76



おさま

民謡音階による節は前半・後半似た旋律の反復によっている。踊りは団扇を右に、左にと翻しながら3歩前進し、手首をかえしながら両手を上げて前に、振り向いて両手を上げ、また前に上げる動作を反復する輪踊り。



[おさま]

♩ = Ca.84



高い山

都節により、A・B・A・C と形の整った節回しに、輪を縮めては手を叩き、広げてはまた叩く調子の良い踊りで人気がある。



[高い山]

♩ = Ca.74

たー かー い や まー かー ら ひ よー し を
 みー れ ばー よ ひー とー は ま るー いー が
 た は し か くー よー ア リ ワ ヨー イ ヨ イ ヨイ

いずれも七七七五の詩形であるので、歌詞はどの節にも転用できる。

和 讃

・… 杵打ち

♩ = 72

[太鼓・鐘]

[音頭]

チャーン チャーン チャン チャカ チャン チャン チャン チャン とー ざ い し ず ま れー
 [大勢]
 お し ず ま れーー イ ヤ とー ざー い し ず ま れ お しー ず まー れ

① 行列の芸態とリズム譜

締太鼓は左手に持ち、桴1本は太鼓のヒモにはさむ。右手に桴1本



太鼓以外の道具持ち役も足は太鼓にならない、持ち物もそれに合わせ、全体に前進境内を2又は3周

② ヒッチキの芸態とリズム譜

太鼓持ち・まんじゅう笠をかぶった打ち手 2組

ヒッチキ・ささら 2組

ヤツコ

その他は糸灯籠・赤旗から順に軒下から八幡社左手の崖沿いに待機して、リズムに合わせ体を揺らす
太鼓持ちは太鼓打ちの動きに合わせ、太鼓を左に右に揺らす



ヒッチキとささら

片足3歩跳ねる 足を替えて3歩跳ねとまる 繰り返し ……

ヒッチキとささらは跳ねながら、背中合わせに右まわり

③ 大社ねぶつ リズム譜

みんだえもつなみあみだ〜な
 はえもぼんむわみだはえむ
 やみんだあな むうわみだあ

3回くり返す

むんだむはむうは はむははみだ
 むうだあなあ〜はみいだ
 ははあ はえもうわは はみだはえもう
 だはえむうんも なみだはえむんわは

3回くり返す

がんにむとう くどくみようど
せいさいどおつもだいし ほうじょう

ナムアミダンボの早打ちに入る



タン タン タン タン タン タン タン タン タン タ カ タン タン タン タ カ タン タン タン || 2回目終了

念仏の間に膜打ち二打が入り、桴を静かに額まで上げ、手首を回転させて桴の先を下向きにして、念仏の間↓の桴打ちになる。鐘も押さえた打ち方。

ナムアミダンプでは強く連打するため、片足を一步前に出す。

④ 和讃の芸態とリズム譜

太鼓は桴1本を太鼓のヒモに挿み、右手で桴を持つ。太鼓は左手で持つ。



⑤ 言葉のイントネーション（金田一式表記）

地名 日吉 ヒヨシ 和合 ワゴウ 売木 ウルギ

楽 器 サ^サラ ヒッ^チキ 大社念仏 タイシャネブツ

その他 精霊様 ソウリョウサマ 八幡様 ハチマンサマ

盆踊り 御獄 オンタケ

新仏 シンボトケ

新盆 シンボン

大河内のかけ踊り

橋都 正

はじめに

長野県下伊那郡天龍村大河内のかけ踊りは、踊りだけが単独で行なわれる芸能ではない。古い盆の習俗の中で毎年八月十四日の迎え盆に、念仏堂と新盆の家に行つて、それぞれ念仏和讃の最初にかけ踊りが踊られる。そして八月十六日の送り盆においても、念仏堂の前において、念仏和讃の最初にかけ踊りが行なわれる。大河内の盆行事《迎え盆、送り盆》は、現在でも古い仕来りを守つて行なわれているのである。

大河内の世帯数・人口は、昭和二十五年に五十五世帯・三〇八人であったが、過疎化が進み平成二十二年八月現在、二十五世帯・六十五人である。

一 名称

大河内のかけ踊り

二 伝承地

長野県下伊那郡天龍村神原大河内地区

三 期日・場所

毎年八月十四日と十六日

天龍村大河内の念仏堂および新盆宅において



念仏堂



念仏堂内祭壇

四 伝承組織

大河内では、かけ踊り保存会とか盆行事保存会というような組織は無く、集落全体の、昔からの仕来りとして迎え盆、送り盆の行事が行なわれ、そのなかでかけ踊りも行なわれている。したがって集落全体で行なう盆行事の指揮を取るのには、自治会大河内区の区長であり、費用も区費の中から支出されている。

五 行事(芸能)内容

(一) 次第

個人の家では当然それぞれに、盆の行事が行なわれるが、かけ踊りが行なわれる大河内集落全体で行なう迎え盆、送り盆の行事の次第を次に記す。

八月一日朝、「盆道作り」といって、各戸一名ずつ出て念仏堂や道路の清掃を行なう。道路が舗装される以前は、道の草刈りを行なっていた。

盆道作りの後、盆行事の切子灯籠造り(大河内区として一個)や、かけ踊り



の菅笠のシデ、鳥さし棒（ヤッコともいう。六尺ほどの棒を紅白に巻いて上下に飾りをつける）、ヤナギ（ハナともいう。三尺ほどの竹を芯にワラストを巻いて縛り、竹ヒゴのヤナギを刺す）など製作のほか、かけ踊り等の準備を行なう。

同日夜八時、もう一度念仏堂に集まり（現在は集会所）、酒が出て（昔はキュウリの塩もみを肴にしていた）、青年衆はかけ踊りを踊り、皆で「お堂の前で唱える和讃」を行なう。これを「中老さまの踊り」と呼ぶ。かけ踊り、和讃、盆踊りの練習開始の意味もあると思われる。

八月六日、「盆花むかえ」で、各家では盆棚を飾る。

大河内集落としては昼間、念仏堂の左手前にソウリヨウ棚（精霊棚のこと、施餓鬼棚とも呼ぶ）を作る。瑞光院の和尚様が来て経をあげてくれる。

夜、青年衆（過疎化の現在は五十才代まで）ほか集まり、一日と同様、かけ踊り、和讃を行い、これを「若い衆の踊り」という。十四日の本番に備えた第二回目の練習ともなっている。

かけ踊り、念仏和讃が中断した昭和三十九年までは、新盆の家から願い出る「かけ込みの願い出し」を、この日に受け付けていたが、かけ踊りを復活した昭和四十八年からは、八月一日受け付けに変更された。

「かけ込みの願い出し」とは、村人たちが大勢（二十人余）で新盆の家を訪れ、新盆に盆棚へ帰ってきた新ミタマの前で、かけ踊り、念仏和讃、盆踊りを踊り、新ミタマの位牌を拝んで霊を慰める習俗。「入り込み」ともいう。施主の家では、村人全員を座敷に上げ、酒肴の接待を行う。一軒当たり二時間以上を要する。このため、あくまでお施主の願い出により訪問するので、「かけ込み（入り込み）の願い出し」と呼び、お施主は酒一升を持参して願い出る。

八月十四日の迎え盆

個人の家の迎え盆は十三日に行なわれるが、集落全体としての迎え盆は十四日に行われる。集落全体で行う迎え盆の次第を次に記す。

①夜八時 それぞれ自前の浴衣に下駄履きの村人たち（長老は浴衣に黒の夏羽織）が、念仏堂に集まり、お堂に向かって先ず、かけ踊りを行なう。引き

続き念仏和讃（地元の人は和讃とも、念仏とも言う）。お堂前での和讃が終わると、隊列を組んで「かけ込みの願い出し」を受けた新盆の家に向かう。お堂の前を出発するのは夜九時近い。

以下、十四日の具体的詳細を記す。

②かけ踊り 念仏堂前で行列を組み、かけ踊りを踊る。

かけ踊りの詳細は（三）演目・芸態の項（72頁）参照

念仏堂前のかけ踊り



③念仏和讃

堂の前で数列に整列して、神様ごとに和讃を唱えてゆく。整列

の順序は、堂に向かって右手から左へ、ア、南無阿弥陀仏の旗、イ、切子灯籠、ウ、愛宕大神の旗、エ、池大神の旗、オ、当所大伽藍（ガラン様）の旗、カ、鳴神（八王神）の旗、キ、東大神・西大神の旗、ク、水神・山の神の旗、ケ、金比羅大権現・秋葉大権現の旗、コ、庚申様の旗、サ、郷主様の旗、シ、津島様の旗、ス、神々様の旗、セ、有縁無縁様の旗、以上笹竹竿に付けられた旗等が十四本並び、その後ろに、かけ踊りの十一名、更に後ろに村人たちが並んで、念仏和讃を行なう。

南無阿弥陀仏の旗を持ち、黒の夏羽織を着た長老（先達という）が、堂の真ん中に進み、念仏和讃の音頭を取り、全員が唱和する。一節終わるごとに、かけ踊り衆の太鼓と鉦が打たれる。

和讃の最初には「東西しずまれ、おしずまれ、しずめて小唄を、お出しやれ…」の、かけ踊り特有の唄も歌われる。

大河内「かけ踊り和讃」の歌詞は、十 詞章の項（73頁）へ掲載。

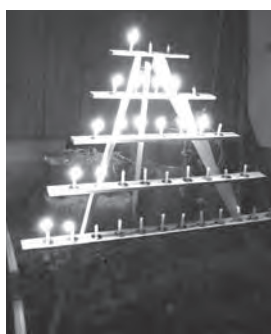
④新盆の家への《かけ込み》

新盆の家へ「かけ込み」に行くときは「背面で出よ」といわれており、かけ踊りと反対の時計回りに行列を作り、南無阿弥陀仏の旗と切子灯籠を先頭に、念仏堂の広場に出てゆく。行列の順序は、念仏堂の前で行なった「かけ踊り」の行列に同じである。道々かけ踊りの太鼓と鉦を打ちながら進む。これを《ミチユキ（道行）の太鼓》という。

ア、迎えダイ

お施主の家では、道行の太鼓の音が遠くから聞こえると、あらかじめ用意してあった《百八タイ》に火をつける。これを「迎えダイ」という。百八タイとは、松の根っこ（または松の根っこ）で作った小さなタイマツ一〇八本のことで、お施主の家（新仏が帰ってきている家）へ入る道の脇に、一〇八本のタイマツを二列に立て並べ、火が灯されている。最近松の根のタイマツが入手困難で、ロウソクで代用されることが多くなった。一〇八本の迎えダイ（迎えのタイマツのこと）を焚くことを、《タイトボシ》（タイマツ灯しの略か）という。

イ、かけ込みの行列は、新盆の家の五十メートルほど手前から一列になり、笛と太鼓と鉦を響かせ、かけ踊りを踊りながら玄関先まで入る。



新盆宅の迎えダイ



新盆宅へ向かう



念仏堂前の念仏和讃



新盆宅での念仏和讃



新盆宅の座敷の前で念仏和讃

新盆宅でのかけ踊り



新盆の霊が祀られている座敷の縁側を開け広げ、新盆棚の見える縁先で隊列を整えて、改めてかけ踊りを踊る。

ウ、続いて、一行は縁側の庭先に下駄履きで立ったまま、念仏堂前の念仏和讃と同じ隊列を組み、南無阿弥陀仏の旗を持った先達の音頭取りで、「新盆の家で唱える和讃」を皆で唱える。唱える和讃は、庭ほめ（和讃）、ならい小唄、あかつき富士和讃、返しの太鼓、新仏（和讃）、などである。新仏が十七才以下の子供の場合は、あかつき富士和讃に代えて、「十七才以下の子供の和讃」を唱える。

エ、和讃が終わると施主から、酒肴が用意された座敷へ招き入れられ、皆座敷の縁側から上る。先ず村人たちは、代わる代わる新仏の位牌が祀られた新盆棚の前に座り、《水迎え》といって、井に入った水をミソハギの花の穂で一、二滴棚に振り掛け、位牌を拝む。皆が拝み終わると、施主からお礼の挨拶があり、酒が振舞われる。これを《ミズムケの酒》（水迎えの酒の意か）という。



新盆宅の庭にて盆踊り



家族・村人も一緒に新盆宅で盆踊り

《新盆おいとま》となる。

オ、しばらく酒をご馳走になると、若い青年衆だけが座を立てて庭に降り、盆踊りを始める。新盆の家で踊る盆踊りを、《新盆踊り》という。お施主の家へ新盆で集まっていた親戚衆や村人たちも庭に出て、一緒に《新盆踊り》を踊る。盆踊りは笛・太鼓・鉦など鳴り物は一切使わず、肉声だけの唄で踊る。踊りが盛り上がってくると、酒をご馳走になっていた年配者（中老）も、庭に降りて盆踊りに加わる。新盆の霊の前で、盆踊りを踊ってやることが供養であるという。大河内で伝えられている盆踊り唄は七つ。音頭、スクイサ、おやま、高い山、おさま、十六、八幡の七つである。このうち「八幡は盆踊りの一番最後に踊るとされており、かつ一回だけしか踊ってはならない」とされている唄である。かけ込みで訪問した（故）村松信一家でも、八幡を踊ると、盆踊りは終わって、《新盆おいとま》となる。



新盆宅の座敷の前庭で念仏和讃



縁側から盆棚のある座敷に上る

カ、八幡を踊り終わると、来たときと同様、座敷の縁側前の庭に勢ぞろいして、先達の音頭で《新盆おいとま》の和讃を皆で唱える。終わると鉦太鼓を打ちながら、南無阿弥陀仏と切子灯籠を先頭に、もと来た道を念仏堂へ引き返す。駆け込みは一軒あたり、約二時間を要する。

なお、新盆が沢山ある場合は、次の家に向かうが、一晚に廻ることの出来るのは、夜明けまで廻っても三、四軒が限度。それ以上の新盆軒数があるときは、残りは翌晩にかけ込みを行ったという。

キ、念仏堂へ帰ると堂の前に整列して、先達が「新盆踊りを帰り候。この里、事無く守りあれ。今宵はこれにて、お納める」と唱え、かけ込みは終了する。

ク、かけ踊りの道具などを、念仏堂へ納めた村人たちは、堂の前で盆踊りを踊る。近所の人たちも、唄声を聞きつけて集まり、夜の更けるまで盆踊りを踊る。昔は夜明けまで踊ったそうである。

八月十六日の送り盆

各家庭では、夕方送り火を焚く。これを《送りデユ》と言う。

大河内では「盆の十六日は仏様のお帰りの日、草刈をすると仏様の足を切る」と言っており、昔から盆十六日の草刈は、行なってはならないとされていた。迎え盆の十三日も同様に言われている。

大河内区の行事として行なわれる、送りの盆の次第は次の様である。

ア、夜九時、かけ踊りの人達ほか、村人たちが各戸一、二名ずつ地区集会所へ集まってくる。若い人からお年寄りまで三十人くらい、うち女性も十人程はいる。



伊藤家の送り火の様子



念仏堂前にて「新盆踊りを帰り候」

浴衣がけの人が多い。大河内区（二十五世帯）の費用で購入した酒と肴が用意されている。酒を飲みながら午前零時を期して、精霊たちを送る《送り盆》の行事を待つのである。

イ、盆踊り ひとしきり酒を飲んだ後、三々五々外へ出て、集会所横の広場で盆踊りが始まる。主婦もおばあさんも踊りに参加している。天龍村向方小学校大河内分校跡に、集会所が出来る前は、念仏堂の庭で盆踊りを行っていた。お年寄りにとって盆踊りは、昔から楽しみ（レクリエーション）の一つであったのである。

ウ、午前零時に近くなると、村人たちは百メートルほど先の念仏堂へ移動する。念仏堂には大河内区で作った切子灯籠のほかに、もう一つ、新盆の（故）村松信一家から、信一氏の霊を象徴する切子灯籠が、持ち込まれている。

エ、かけ踊り 十四日の迎え盆のかけ踊りとまったく同じ順序と形で、かけ踊りが踊られる。

オ、念仏和讃 続いて、やはり十四日の念仏和讃と同じく、十二本の神々の旗と、南無阿弥陀仏の旗、大河内区の切子灯籠に加え、村松家の切子灯籠も、



念仏堂前の和讃 里の夏羽織を着た長老伊藤善朗氏とかけ踊り衆



念仏堂前の和讃 新盆の（故）村松信一家の切子灯籠と大河内区の切子灯籠



和讃の後ろで盆踊り



新盆の（故）村松信一家の切子灯籠と大河内区の灯籠



午前零時の送りを待つ村人

堂の前に立て、先達の音頭取りで各神々への念仏和讃が行なわれる。和讃は一時間近くもかかる。しばらくの間は村人達也和讃と一緒に唱和しているが、やがて一部の人たちは抜け出して、和讃の列の後ろで、盆踊りを踊り始める。和讃と盆踊りが同時進行する。

カ、既に午前零時を廻っており、最後の「送り盆のかけ踊り」を唱え、念仏和讃が終わる。盆踊りも最後の「八幡」を踊って終わる。

続いて、送り盆最後の「焼き納め」に出発する。

キ、昔から、焼き納め場所は、念仏堂と集会所の中間にある「庚申様」と呼ばれる場所である。庚申の石碑の他に、十数基の神・仏の石碑が建てられている。先達の持つ南無阿弥陀仏の旗を先頭に、二基の切子灯籠、その後ろに十二本の神々の旗、かけ踊りの一団、村人が続く。勿論、新盆の家の家族親戚も一緒である。

かけ踊りの太鼓と鉦を打ち、《ミチユキ（道行）》とも呼ばれる《大念仏の和讃》を唱えながら、行列は庚申様に向かう。

ク、庚申様に着くと、石碑群の前に整列し、庚申様の前で唱える和讃とされている《花の四節》を、皆で唱和する。

ケ、花の四節が終わると庚申様の脇の土手に切子灯籠、旗、鳥指し棒、ヤナギなどを積み上げ、点火される。人々はその火に手を合わせ、拝んだ後に、それぞれ家路につく。時刻は十七日の午前一時を過ぎている。

なお、「帰るときは、決して後ろを振り返ってはいけない」とされている。理由は、「後ろを振り返ると、ご先祖様や、新盆の霊が、また家まで憑いて来ちゃう」からだといわれている。



庚申様の前で「花の四節」の和讃



焼き納め

(二) 扮装・楽器・道具など

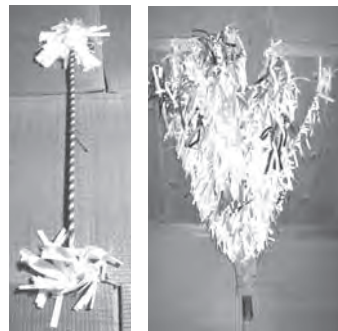
かけ踊りを踊る人たちだけでなく村人は皆、自前の浴衣に下駄履きで、集まってくる。最近では若い人や女性は、ズボン・スカートにシャツの人もある。

楽器は、かけ踊りにも使う小型の太鼓八個（締め太鼓で、一人ずつ左手に持ち、右手の桴で叩く）。笛は二～三人（過疎化のため平成二十一年は一人で吹いていた）。

かけ踊りの太鼓役が被るシデを垂らした菅笠八個。鳥刺し棒一本。ヤナギ一本。鉦一個。



タレを付けたかけ踊りの菅笠



右：かけ踊りのヤナギ（花）
左：ヤッコが持つ鳥刺し棒

(三) 演目・芸態

念仏堂前で行列を組み、①先導は長老が持つ南無阿弥陀仏の旗、②長老が持つ切子灯籠、続いて③かけ踊りのヤッコ（鳥刺し棒を持つ）、④一番太鼓（親方と呼び、かけ踊りをリードする）、⑤鉦、⑥二番太鼓、⑦八番太鼓（七人）、⑧ヤナギの順序で、総勢十三名が輪になり、反時計回りに踊る。笛の囃子に合わせ、太鼓（八人）は左手に持った小型の締め太鼓を右手の桴で叩きながら、上下左右に大きく踊る。鉦も太鼓に合わせた身振りで踊る。ヤッコ、ヤナギも上下左右に採り物を振りながら踊る。かけ踊りは三分程度で終わり、続いてすぐに念仏和讃を行なう。

六 由来・信仰

大河内のかけ踊りの由来については、昭和四十八年、当時の古老（明治生まれ）達に質問したが、「明治以前江戸時代から行なわれていることは確かであるが、何処から何時伝わったのか、定かではない」との返事であった。

七 変遷

大河内のかけ踊りは、一時中断した時期があった。大河内も昭和三十年代に入り、高度経済成長の波に飲まれ、過疎化が進行した。三十九年までは何とか迎え盆・送り盆の行事を維持していたが、昭和四十年から八十年間中断した。その間昭和四十三年集中豪雨土石流により、当時戸数四十戸弱の大河内で、死者行方不明者六名を出す大災害を受けたが、四十八年から、九年振りに再開し、昔どおりに復活することが出来、現在に至っている。

八 所見

大河内のかけ踊りは、かけ踊りだけ単独に踊る芸能ではない。集落全体で行う盆行事、迎え盆・送り盆の中でかけ踊りが踊られているのである。

今年一年間に亡くなった人の新ミタマや先祖のミタマが、盆に帰ってくるのを迎え、慰め、そして送り出す行事の中で、かけ踊りがおどられている。

大河内の盆行事を見ているとそこには死者との、対話が感じられる。したがって、新盆の家に、死んだ人と面識も無い他所者が、かけ踊りを見学に行くなどということは、以前は考えられないことであった。現在でもそうした厳しい、見世物ではないという雰囲気は残っている。

迎え盆の夜に、村人たちが新盆の家へ揃って行き、帰ってきた新ミタマの前でかけ踊り、念仏和讃、盆踊りを踊って、新盆の霊を慰める風習は、かつては天龍村々内の、近隣集落でも行なわれていた。しかし向方では昭和二十四年を最後に、坂部では明治末期に、大久那では昭和十年頃に、新盆の家を廻る風習は消滅し、大河内のみが現在でも、その仕来りを残している貴重な存在なのである。

九 記録・文献

- ① 地元大河内の歌本『大河内のかけ踊りと和讃』
- ② 『天龍村史』天龍村発行 平成十二年
- ③ 『大河内の民俗』天龍村教育委員会発行 昭和四十八年

十 詞章

『大河内かけ踊り和讃』

八月十四日に念仏堂の前で唱える和讃

一、御堂の前で唱える和讃

(一)

東西しすまれ おしすまれ
しすめて小唄を お出しやれ
ならい小唄で 一とおどり

(二) 庭ほめ

これのお庭に まず入りて
四方はるかに ながむれば
四方泉水せんすい まず見事
見事なお庭や めずらしお庭
しはすお庭で まず見事
梅にいちごを 植えませて
野菊里菊 さくら菊
お庭にかがやく まず見事
庭ほめ踊りは これまで

二、各神々への和讃

(一) 愛宕大神

お愛宕様に 一とおどり
これがお世どの ふくえの樹
鳥が住むやら 花が散る
なるこかけて 鳥おはしよ
なるこずなみは なにをしよう
あやや にしきのまるむけを
だれにひかせる このなるこ
だれと言ったら だれにしよ
三番娘の 福千代に
末すえを申さば まだ長けれども
ならい小唄は これまで

(二) 池大神

お産土様に 一とおどり
しだれ小柳ぎ 三本立つ
もとのこずゑにや なにがなる
もとのこずゑにや ぜにがなる
中のこずゑにや なにがなる
中のこずゑにや 金になる
うらのこずゑにや なにがなる
うらのこずゑにや よねがなる
そのよねさけば 村はんじよう
末を申さば まだ長けれども
ならい小唄は これまで

(三) 当所大伽藍

伽藍様へ 一と踊り
春さえ来れば うぐいすが
これの御門に 巢をかけて
なんとさえざる 出て聞けば
世の中よかれと さあよする
世の中が よければ
伽藍のお堂を たてたもう
伽藍のお堂を たてるには
上方大工を よびよせて
たる木が 千本 柱が 千本
たてし お堂の 見事さよ
末を申せば まだ長けれども
ならい小唄は これまで

(四) 鳴神(八王神)

なる神様に 一と踊り
青天竺の 天の川原
出て来て ひじりをながせし
まず一番に みのが 流れし
二番傘が 流れし
三番に つえが流れし

四番に その身が流れし
其の事が 高野にきこえし

でし子のなげきは いかばかり
でし子のなげきは ことのおろかよ
いかに親方 なげくらん
末を申せば まだ長けれども
ならい小唄は これまで

(五) 東大神 西大神

東大神に 一と踊り
西大神に 一と踊り
五郎助が今年 初めて西国へ
今朝さえ 遠くたれし
西国参りの お祝いに
酒が 千本 魚が 千本
二千本で おたちあい
いそげおゆるり ぬげはばき
末を申せば まだ長けれども
ならい小唄は これまで

(六) 水神 山の神

水神様に 一とおどり
山の神に 一とおどり
十七・十九や やれ十九
十七・十九を しのぐにわ
犬もほえるが ともなるが
あゆみ こゆみ の音がする
末を申せば まだ長けれども
ならい小唄は これまで

(七) 金毘羅大権現 秋葉大権現

金毘羅様に 一とおどり
秋葉様に 一とおどり
えちござかいの ぶなの木は
もとはえちこに 葉はさどに

種は三河の 八つ橋に
八つ橋の 真中頃に
ざしきを造りて

波にたいこを打たせ

このたいこのひびきなんぞや

千代松原の 松風

松風は 身にもしみるが

女郎待つ風は 身にしみる

末を申せば まだ長けれども

ならい小唄は これまで

(八) 庚申様

庚申様に 一とおどり

これぞ福井の いしき寺

殿子のあそぶにや 良い寺で

殿子の寺と じよの寺と

一夜しので ころりとねたら

一夜ではらんで ほんとした

もしやその子が 男なら

日本のもとの種になる殿子

あいやしまった女が生まれた

あやにしきをおらせましよう

あやちりめんおらせましよう

末を申せば まだ長けれども

ならい小唄は これまで

(九) 郷主様

郷主様に 一とおどり

鎌倉御殿の 御社の御前で

すずめがこばらをやみそろうう

どこがやめるとおんどりが

左の方の わき下が

きりり きりり とやめるのだ

わし くまたかのえさになるとも

おとをたてるな めすずめ

末を申せばまだ長けれども
ならい小唄は これまで

(十) 津島様

おつしま様へ 一とおどり

昨日生れし 鴨の子は

親に不幸な 鳥なれど

今日は仏の 池に住む

よしあし草に たたまれて

雪と氷に うめられし

何時か明年 春が来て

池のほとりで 羽のばす

鴨に生れて まずありがたや

末を申せば まだ長けれども

ならい小唄は これまで

(十一) 神々様

神々様に 一とおどり

こんど信濃の 野の池で

十三小女郎 すげを刈る

なんにしようと すげを刈る

みのにしようと すげを刈る

みさの小かさと めいたてて

いとし殿子に かぶらせて

なりとすがたを 見ていれば

あまり小女郎にや ない殿子

いとし 殿子を つれだして

八つ橋野田屋へ お着きやる

八つ橋野田屋 朝にたち

ぶせつにないを ひるにたち

田口野田屋へ お着きやる

田口野田屋を 夜明けにたちて

名古屋新町 おちついて

名古屋新町 一とおどり

末を申せば まだ長けれども
ならい小唄は これまで

(十二) 有縁無縁様

有縁無縁に 一とおどり

まもなく七月 盆が来る

親に孝行な 千松は

親の墓所に 参るには

右の手には 香を持ち

左の手には 数珠をくり

腰にはかまを しのばせて

大なる草を 鎌で刈る

今年の草を 手でみしる

草をまくらに まどろめば

誠の親を ゆめにみる

末を申せば まだ長けれども

ならい小唄は これまで

(十三)

ならい小唄に一とおどり

都下りの 西国は

なぜかわれらに やどがない

こまにけられし 道草は

つゆに一夜の やどをかす

波にもまれし 川柳

ほたるに一夜の やどをかす

あの奥山の 大木は

わしくまたかに やどをかす

末を申せば まだ長けれども

ならい小唄は これまで

きみよう生れの ほととぎす

これの御門へ 巣をかけて

なんとさえずる 出てきけば

世の中よかれ 稲よかれ

上方大工 よびよせて

黄金の倉を 千建て

依はそれへと 積みこんで

末を申せば まだ長けれども

ならい小唄は これまで

今年見そめし みそはぎを

初めて手にとり 水向

草とり分けておとらよ言うたら

山こしころばや ひまもなし

八月十四日に新盆の家で唱える和讃

一、新盆の家で唱える和讃

(一)

東西し生まれ おし生まれ

しずめて小唄を お出しやれ

ならい小唄で 一とおどり

(二)庭ほめ

これのお庭に まず入りて

四方はるかに ながむれば

四方泉水 まず見事

見事なお庭や めずらしお庭

しはすお庭で まず見事

梅にいちごを 植えませて

ぼたんにからぎく 植えませて

野菊里菊 さくら菊

お庭にかがやく まず見事

末を申せば まだ長けれど

庭ほめ踊りは これまで

(三)

ならい小唄へ一とおどり

都下りの 西国は

なぜかわれらに やどがない

こまにけられし 道草は

つゆに一夜の やどをかす

波にもまれし 川柳

すずめに一夜の やどをかす

あの奥山の 大木は

わしくまたかに やどをかす

ならい小唄は これまで

二、あかつき富士和讃

富士のふもとでおがむれば山一つ

一の鳥居くぐればたきにて

こりをとる 一の池 二の池

三の池 仙者 岩をくぐりて

おはちめぐりを いたす

あのどろ川 下に見て

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

*次早口に

なむあみにさつくくどうぼさつ

いつさいめいどあんぜん国土や

まよいほれたよ くらちゃんの

殿子に召した いばまげを

余りわかいしゅうごしよごんなれども

弓や小ずちの その中に

姓名をなのらにやみかやせよ

ごしよごんあれども汗をたらして

一とおどり

*返しの太鼓をたたく

そうでござれよ そのままござれ

そのままとどりて 見せましよう

三、十七才以下の子供の場合

もののあわれ 十七は

花にたとえて 咲かねば無念

四、新仏

ばをつくれ ばをつくれ

申す念佛は 新佛

野辺のおくりになつときは

兄と弟と あつまりて

手をよせ 足をよせ引きよせて

単衣の衣をぬいきて

手には 数珠をくり

こしきに入れて 雨やどり

かざりては かざりては

旗や てんがい さしかけて

せまき道をば 広く見せ

広き道をば せまき見せ

広き野原へ 送り出す

かそうにする かそうにする

千ばのたきをを つみこんで

一日二日は けむりたつ

一日二日は なりわたる

兄と弟と あつまりて

竹とうつきで はしこしらえ

あいばさみ あいばさみ

いこつ ひろつて

つかをつき つかをつき

墓のしるしに そとわかけ

墓のしるしに とうばたて

墓のしるしに 松をうえ
松は栄える 親こいしい

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

*早口に言う

めいど安全 国土まよい

*普通に言う

ほれたよくろちゃんの殿子
十五夜お月は わのごとく

五、新盆おいとま

東西しずまれ おしずまれ

しずめて小唄を お出しやれ

いつまで おどりても

おどり あき 来ないが

米屋に子女郎をおいて来た

米屋に子女郎ねてまつが

われまつまつ船はおきへ出た

おいとま申して いざかえる

八月十六日の送り盆で唱える和讃

一、

東西しずまれ おしずまれ

しずめて小唄を お出しやれ

来年 七月 またござれ

おいとま 申して いざかえり

二、大念仏（道行き）

*これより道行で節が変わる

大念仏が はじまりだ

どこの国でも はじまりだ

信濃の国の 大寺で

和尚たちが あつまりて

遠山堂の 広庭に

白いはとが 二羽いるちよ

そのはとの 言うことに

世の中よけれと さえするちよ

世の中が よければ

米が百に 五斗 するちよ

米が百に 五斗 すれば

こく倉 七ヶ所 たてましよう

こく倉 七ヶ所 たてましよう

かね倉 七ヶ所 たてましよう

かね倉 七ヶ所 たてましよう

やりでがもりを ゆいたつて

ぜにで ついしを つきたつて

そうりようだの下で

こはれよねを ひろつて

いものほに つつんで

いもの毛で かりげて

あさがら棒で になつて

小豆のせいを つえにつき

しでの山を のぼるちよ

ヨイサツサ ヨイサツサ ヨイサツサ

ヨイサツサ ヨイサツサ ヨイサツサ

ヨイサツサ ヨイサツサ ヨイサツサ

三、庚申様の前で唱える

花の四節

東西しずまれ おしずまれ

しずめて小唄を お出しやれ

花の四節を 申すれば

花の四節を 申すれば

正月咲くは 氷の花

二月咲くは 梅の花

三月咲くは 桜の花

四月咲くは 岩つつじ

五月咲くは ゆりの花

六月咲くは ぼたん花

七月咲くは みそはぎ

八月咲くは 菊の花

花の四節もかずあれど

菊の花で おおさめる

坂部のかけ踊り さかべ おど

星野 紘

一 名称

坂部のかけ踊り

二 伝承地

長野県下伊那郡天龍村神原坂部地区

三 期日・場所

八月十四日（かつて旧七月六日・七月十日・七月十四日）、堂の庭（熊谷山長楽寺）、金毘羅様の庭（八幡森下）



四 伝承組織

当該かけ踊りには坂部区民全員が関わっており、八月になるとこれを執行するために区の役員たちは寄付金集めを行い、一般の住民はまつりの諸道具を作製し準備を進める。

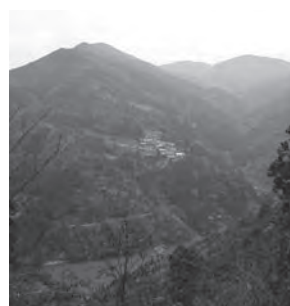
しかし、坂部集落は山間地にあるために耕地が少なく、江戸時代以来集落の戸数は二十四、五戸程度とほぼ一定していた（もともと昭和三十四年には六十八戸と急増したこともあったが、昭和四十年頃よりまた減り始めた）が、近年過疎化の波が押し寄せ平成二十年には二十戸三十五人となり、本年夏には十六戸にまで減ったということであった。このことはかけ踊りの伝承に暗い影を投げかけているようにみえた。今夏の上演には、集落外に流出して行った子供や孫、あるいは親類縁者がお盆に帰省する形でかけ踊りの助っ人としてその執行をサポートしており、上演次第や演目の省略、上演時間の短縮など芸能の衰微が見られ、集落の高齢化（天龍村の高齢化率は長野県一）が急激に伝承組織の弱体化を招いているように思われた。

五 行事（芸能）内容

（一）盆芸能の行事

八月六日に、仏壇の前に棚を設けてチガヤ（白茅）ゴザを編んでその上に位牌や旬の野菜、うどんなどを供え、迎え火を焚いて精霊を迎える。

八月十四日、迎え火を焚いてあらためて家に精霊迎えを行うが、それは八月六日に一端迎えた精霊がその後堂の庭や親類などへ遊びに出かけていたからと



坂部集落遠景



長楽寺の祠



氏子総代・関福盛氏（右）

いう解釈に基づいている。かけ踊りはこの日の夜に行われる。

八月十五日は精霊送りをする。送り火を焚き、ナスなどで送り馬をこしらえる。

(二) かけ踊りの諸役と扮装、楽器、道具など

かけ踊りの一行は次のように構成される。

先頭が幟持ち 1人 (区長の担当で金毘羅大権

現、秋葉大権現の幟を持

つ)

棒振り(露払い) 2人 (棒の長さ1m 50cm)

笹(とりひげ) 2人 (全長2m 8cmの棒で先端

部35cm紐房状のものを持つ)

槍 2人 (全長1m 77cmで刃先が35cmの槍を持つ)

薙刀 2人 (全長1m 65cmで刀部が26cmの薙刀を持つ)

灯籠(切子灯籠) 1人

端太鼓 1人 (革面直径45cm、胴長33cmの締め太鼓と桴を持つ)

小太鼓 12人 (革面直径36cm、胴長24cmの紐締め太鼓を持つ)

鉦 1人 (上部直径18cmに下部直径21cmで厚さ5cmの鉦とシ

ョウモクを持つ)



棒振りの棒



笹 (とりひげ)



槍



灯籠



薙刀



かけ踊りの一行

笛 1人 (六穴吹き口一穴の笛)

太鼓役と鉦役の扮装は、三度笠(笠の縁一面に1mほどの長さの紙シデ片を垂らす)をかぶり、白い半襦袢と腰巻を身に着し、草履を履く。



かけ踊りの太鼓役

(三) 演目・芸態

夕刻公民館に集合した一同は衣裳付け、楽器などの準備を終えて、午後七時近く坂を降りてコミュニティセンター(左閑辺屋)前の広場、堂の庭(熊谷山長楽寺)に集まって来る(この場所は最近廃校となった小学校の分校のグラウンド跡)。左閑辺屋に向かって右方の隅にお堂様形式の小さな建物(長楽寺)があり中に向かって左側に小観音像祠、その右に阿弥陀様祠が置いてある。午後七時からまずこの庭で一踊りがある(これを「堂の庭の踊り」と称す)。それを終えた一行は、次いで坂登りに集落の家並を太鼓、鉦を打ちながら(「ぎおんばやし」という渡り拍子で)上がって行って、約三〇メートル先の八幡森下の金毘羅様の庭に到着する。そこで太鼓や鉦を奏打しての念仏和讃、手拍子の盆踊りなど一連の次第がくり広げられた(これを「金毘羅様の踊り」と称す)。これが一段落すると一同はまた行列を仕立て「ぎおんばやし」で最初の堂の庭の所にもどり、そこでまた一連の次第を執り行つて(これを「引け踊り」と称する)当地のかけ踊りのおひらきとなる。

なお今日では金毘羅様の庭へ掛けるだけとなっているが、以前は新盆の家を廻っていたという。当地のかけ踊りの今日における次第は以上の通りである。続いてそれぞれの場での演目(曲)や芸態、とくに太鼓打ちの打法と足取り(踊

り)の詳細を記しておく。

堂の庭の踊り

区長の合図でここでの踊りが始まったが、それに先だつて区長は一升瓶の酒を観音様へお供えした後また下げて、踊り手一同に茶碗一碗ずつ酒をふるまった(踊り終了まで次第の区切り毎にこういった酒のふるまいが続いていた)。

ア、拍子ヨー

踊り手一同が輪になって左廻りにゆっくりと歩を進めて三周する(幟持ち、灯籠、笹、槍、薙刀、棒振り、太鼓打ち、鉦打ちの順、笛の吹き手は輪の外)。この間太鼓の打ち手は右手の桴で次のように奏打する(鉦の打ち手も同様)。

まず輪の中心に向かって足を交互に踏み入れつつ、テンテコテン テンテコテン テンテコテンテコテン (ソーレ)の囃子詞が入る)。続いて一同身体をひねって輪の外側向きとなり、それから輪なりに前に歩みつつ(左廻り)、テンテン テンテコテン テンテコテンテコテン。数周。
イ、拍子ヨー ブツキル

ここで拍子が早間のテンポに変わる。

太鼓の打ち手は奏打しつつ左足、右足、左足の順で早足に進みつつ、サツと輪の中央に向きざま右足一歩前に踏み込み、次いで左足、右足の順で後方に下がる。その打音と囃子詞は、ソーコ テンテコテンテンテコテンテンテコテン(「サツサーノヨイヨイ……サンサーノブツキリテンテンテン」の囃子詞)。

ウ、返しヨー

これもイ同様早間のテンポで、太鼓がテンテコテンテンテコテンテンテコテン



堂の庭の踊り



拍子ヨー

テンテンテンテンテンテコテンの奏打を繰り返すが、その足運びはイとは異なり複雑である。輪なりに歩を運んでいた体勢を輪の中央向きになり、左足を右足爪先前へ斜めに出し、次いで右足をその左足の斜め前に出し、それから左足を浮かしつつ前方へ振り出しその反動で元に戻しつつ後方へ一歩下がり、次いで右足も後方に下がる。この一連の輪の中心に向かう足運びと元の位置に戻る足運びを三度繰り返した後、左足半歩後へ下がり、右足も半歩下がり、その場の位置で右回りに一回転してから輪の中央に向き直る。

本年の堂の庭踊りは、以上のア、イ、ウと引き続いての太鼓等の奏打だけで終了したが、これは簡略化したやり方だという。

ぎおんばやし(渡り拍子)

一同堂の庭から三〇〇メートルほど離れた金毘羅様の庭まで、太鼓を打ちながら坂登りに練行する。その拍子を「ぎおんばやし」と呼んでいる。

金毘羅様の庭の踊り

この場所は小高くなった狭い所であり、踊り手一行が輪を広げるとそれで一杯となる。庭の奥の方には秋葉大権現の石碑があり、その横に天神様の木製の祠があつて灯明をともしお供えをする。ここで一連の演目次第が時間をかけて繰り広げられた。すなわち、ア、「拍子ヨー」、イ、「伊勢音頭(願人踊り)」、ウ、「拍子ヨー ブツキル」、エ、「拍子ヨー」、オ、「和讃」、カ、「拍子ヨー ブツキル」、キ、「手踊り」、ク、「拍子ヨー ブツキル」、ケ、「返しヨー」の九次第である。このうちア、ウ、エ、カ、ク、ケの太鼓の奏打等の芸態は前記、堂の庭の踊りのところで記述した



返しヨー



金毘羅様へ向かう

ので省略し、それ以外を左に詳述する。

金毘羅様の庭の踊り



エ、伊勢音頭（願人踊り）

アの「拍子ヨー」の囃子奏打が一段落して、踊り手一同輪になったままその場にたたずむと サーツサーノ アレワイサテナー ヨイヤサテナー と囃子詞がかかり、輪の中央に進み出た二人による「伊勢音頭（願人踊り）」が踊られる。まず笹（とりひげ）をささげ持った一人が進み出て、笹のとりひげ棒をクルクル廻しながら上下させつつ足を踏み換えて踊る。そこへ手ぬぐいで姉さんかぶりをしたもう一人も輪の中に進み出て、老母のように腰をかがめながら両手を後ろ手にして踊る。どこかおどけていて卑猥っぽい二人の組踊りである。合計三折りこれが踊られた。



伊勢音頭（願人踊り）

オ、和讃

この折り一同輪になって和讃を一区切りごとに唱え歌い（音頭一同形式である）、それぞれの切れ目毎に太鼓の奏打と踊り（足運び）の手が入る。これには「金毘羅様庭踊り」「八幡様庭踊り」「新盆かけ踊り」の三種があつて、踊り手達が所持していた『金毘羅掛踊和讃歌集』によれば歌詞は左記のようである。

- 一、東西鎮まれ御鎮まれ ソーレー 鎮めて小唄をお出しやれ
- 一、これのお庭へまず入りて ソーレー 御庭遙かに見てやれば
- 一、四方仙水やれ見事 ソーレー

- 一、金毘羅様に一踊り ソーレー
- 一、秋葉様に一踊り ソーレー
- 一、八幡様に一踊り ソーレー
- 一、末を申せばまだ長けれど ソーレー

お庭の踊りはこれまで

なおこの和讃の以前の様子は、九 詞章の項（82頁）大正十五年書写の歌本『和讃盆謡歌集 神原村坂部松井重隆』に掲載されている。

ところで右の和讃の区切れ毎の太鼓奏打と足運びの芸態は次のようである。ソーコテンテンテンテンコテンテンテンテンテンテンテン と太鼓が打たれ、足遣いは拍子ヨー ブッキル（堂の庭の踊りのところのイで表記）と同様のもの。

キ、手踊り

一同、太鼓等楽器その他を脇に置き、手踊り（盆踊り）を二曲「すくいさ」と「のうさあ」を踊った（左廻り）。「すくいさ」は次のような足運びの踊りである。まず輪なりに左足、右足、左足の順で歩を運び、次いで右足を一步輪の中央に向かって踏み出し、同時に左足を後に蹴り上げ、次いでその左足を下に降ろして踏み、右足もまた後方に戻す。次いで右足を一步左足の斜め前に踏み出し、また後方に戻す。単純なこの足遣いを繰り返して行くのである。この踊りに掛けられる歌は、

- 一、すくいさあーに來たに たんとたもれよひとすくい

次に「のうさあ」の足取りを記す（これは右廻りの輪踊りである）。所謂ナンバン風の踊りで右手と右足を同時に前に蹴り出し、次いで左手と左足を前に蹴り出して輪なりに進む。それから右足を一步輪の中央に向けて踏み出し、引き続き左足も輪の中央に送り、そして左足は後方に戻し、右足も後方に戻す。



和讃

堂の庭の踊り（引け踊り）



堂の庭の踊り（引け踊り）
左閑辺屋前の広場に到着すると、引け踊りと称し、金毘羅様の庭で踊った内容と似通った次第を繰り広げた。すなわち、ア、「拍子ヨー」（庭を三周）、イ、「伊勢音頭（願人踊り）」三折り、ウ、「拍子ヨー ブッキル」、エ、「伽藍、観音、阿弥陀踊り」、オ、「拍子ヨー ブッキル」、カ、「返しヨー」、キ、「拍子ヨー

ぎおんばやし（渡り拍子）
金毘羅様の庭の一連の踊りが済むと、一同はまた行列を仕立てて元来た道を逆にたどって囃しながら堂の庭へと戻る。

もう一度これを繰り返すが、二度目の時には輪の中央に足を踏み出した際に手拍子の一つ打つ。こういった一連の所作を繰り返しながら踊るのである。この踊りに掛けられる歌は、
一、踊りや出来たが親父さが見えぬ 親父はとなりのノウサア嫁つく
今回踊られた以上の二曲の他にも多数の踊り歌が伝承されて来たもので、九 詞章の項の『坂部の盆踊り唄集 平成二年一月 船田利長書』（84頁）を参照されたい。



手踊り

「ブッキル」である。一切の行事終了後に手踊りを行う。

六 由来・信仰

坂部は、『熊谷家伝記』などが伝え遺されてきた中世以来の由緒有る集落である。当地のかけ踊りの起源については、寛政元年（一七八九年）に発生した七日七夜にわたる長雨によって地割れの被害を受け、大池が決壊し、人家が押し流され、十三人と馬二頭が死亡。この時雨止めの願掛けとして踊り始められたものと伝えられている。

この踊りは古くは旧七月六日であったが、七月十日をへて七月十四日となり、それが八月十四日にならわって今日に至っている。明治四十年頃までは同じ天龍村神原地区の大河内や向方と同様に新盆の家にも出かけて踊ったという。ちなみに、九 詞章の項に掲載の歌詞資料『和讃盆謡歌集 神原村坂部 松井重隆』の中に、「新盆の掛け踊り歌」が記載されている。

七 所見

前項六 由来・信仰の項で記したように、当地のかけ踊りの起源として長雨止めの願掛けに始まると言い伝えられているが、隣接集落の向方や大河内のそれに類似する盆行事の中の新盆供養の和讃の踊り（太鼓、鉦の奏打）に主眼の置かれたものと推察される。もちろん手踊り（盆踊り）、伊勢音頭（願人踊り）など娯楽的な演目にも見るべきものが存在して来た。

四 伝承組織の項で言及したように、地域のここ十年來の人口の急激な過疎化状況は当伝承の明日に思わしくない影を投げかけているように思われる。

八 記録・文献

当該記述は平成二十一年八月十四日の現地探訪ノートによってまとめたが、当日お話を伺った関福盛氏（大森諏訪神社氏子総代）からのご教示、後日同人から提供のあった歌詞資料その他に負うところが大きい。次に記す文献資料からも世話になった。

①『天龍村史』（天龍村 二〇〇〇年刊）の「掛け踊り・盆踊り」の項

②関福盛筆「古き伝承の盆行事 坂部の掛け踊り」（南信州信報 二〇〇四年六月十九日）

九 詞章

『和讃盆謡歌集 神原村坂部 松井重隆』

序

今は宇蘭盆會も太陽暦、陰陽暦、月送りとして甚だ區々たるもので有る堂の庭に松明を供へる者も少ない十日の金毘羅庭の踊も青き年ともの人達、唯遠ざけて信心する人の刺激に逢いて致す時有りとも幾年も程経ていたす時代有りとも神佛と子孫には非るか 遠き祖先と思ひなば易々たる事なるべきを信ず見る者心より考へ給へ

昭和式年七月六日

重松 織

七月六日 盆踊歌の事

一、東西静まれ、御鎮まれ、鎮めて小歌を出しやれ 是のお庭へ先入りて 御庭はるかに見てやれば四方仙水やれ見事枝無小柳三本立、本の小枝に何かなる 本の小枝に錢がなる 中の小枝に何かなる中の小枝に金かなる、うらの遠くに何かなる、うらの遠くに米がなる 無米三年咲くなれば三年咲きたら郷繁昌 里の繁昌はおう母や錢金ふんだに村繁昌 末を申せばまだ長いけれどお庭踊 是迄

伽藍踊を見せます

春さへ来れば鶯が是の御門に巢を掛けて、初にほけたる声聞けば世の吉を囀る 夜は夜雨か打はて昼は天氣に打晴れて今年世の中、をいた者世の中三年ようければ 伽藍堂をば建て給う 末を申せばまだ長けれど 伽藍踊 是迄

御観音踊の歌

御観音踊を見せましよう 扱てもおならぬ御観音が見事此処にお立有る 後はたて野、前は川の根藤が岩を巻く 三年根藤が岩を巻き前をば大川流れゆく 腰に佩いたるまさかりて后から椿を伐り出して御前に末に橋掛けませふ きだ橋架けて魚釣りに十三小女郎が橋渡る、魚釣竿はくわりとすてて、十三小女郎の腰締める 魚釣竿は流れ行く 魚釣竿は流れゆくけども、締めたる腰は放しやせぬ ゆるせ、はなせ、放せやれ あとはとのつこい

たつづたりと大事ごさんなれ、ボンボラ男よ ボンボラ男の独男うらが為には 稚子竹 稚子竹の遊びし時は 天へ登りて梅の小枝に止まりし 梅ほろ／＼とこぼれし梅は眞の唐梅 刀に取りては さやまき さやまきは黄金さやまき、そいたる時はやつとの／＼むすびそめたよ、むつの國 豊よ籠屋が娘と大川越て引くとの十三になり揃ひ引かれる姫は九つよ 九つの姫のいでたちでは扱も申さぬ美人や 末を申せばまだ長いけれどお観音踊は是れ迄

長者和讃

一、長者様、是が東の長者様四方四面に倉建てて 中は長者の居る居ます身なれども長者命うすし冥土の旅へとおもむいて開きし蓮華を笠に差してますみし蓮華を笠にして 同じ蓮華を杖につき閻魔の前を通られて其れを閻魔が見るよりも長者が者やば右し時 何をけちげにくとした 何をけちげにくどせん伊勢や熊野へ十三度参り納めて供養した 愛宕様への月参り／＼納めて供養した 秋葉様へ唯八度参り納めて供養した 堂は七つの堂迄も掛けや納めて供養した 橋は参議の橋迄も掛けや納めて供養する、其の閻魔が聞くよりも宛然長者は極楽へ極楽浄土へ移りして本佛見されよ長者様、南無阿弥陀佛／＼／＼踊る若衆お心ならば汗をたらして一踊り草所の付踊とらとまればやら腰になばや品もなし 空吹く風になびかぬ草はなし 殿御に靡かぬ女はなし

金毘羅様 庭踊り 八幡様 庭踊り

新盆踊り歌

東西鎮まれ御鎮まれ 御免なされよ檀那樣御免なされよ旅若衆やら姦しいとされば一打揃うてみせませる是のお庭に先入りて お庭のかかりみてやれば白砂まかれてやれみごと 四方仙水やれ見事 牡丹に唐梅植交せて梅に七こを植まぜて七こ靡かば梅ほろり末を申せばまだ長いお庭踊りは是れ迄

館の踊り 見せましように

今日から日を見て月を見て 今日日は日もよし月も吉し屋敷踊りを召されて表のついでを見てやれば表の辻は鉄ついじ裏の辻を見てやれば裏の辻は芝ついじ北と南は切石で黄金の小柱すり立て桁とちやくろうが黒金で白金たるきをのべられて片平葺は、白板葺とよ 又片平は檜皮葺 末を申せばまだ長い 館踊は是迄

其の俗踊りおいで／＼その俗踊りみせましように 伊勢のようだの西惣記楽門今朝西國へ立ちたれば西國詣りの御悦びに 酒千石又有り二十石で買うたれば末を申せばまだ長けれどおろうふた小歌は是迄

こう屋様へ吉踊り 眞見るらん 御座れ／＼十五夜お月の輪のごとく場を作れ／＼／＼場も無き念佛は申されぬ／＼／＼杜鵑く誠の冥途の鳥ならば／＼／＼我が親の／＼／＼

我が親はくくく父字の衣にけさ掛けてくくくごんぞわらしを打ち寄いてくく死出の旅路を唯一人よくく念佛申せどもくく申す念佛はごふ屋しへ南無阿弥陀佛く南無頑西供讀 命士瀬一切才ころうとよ まよいはれたよ黒茶の殿に召した御足袋の緒をもくくたつしよ返せ返せが御所望なれば弓矢のこぐちで返いてころうじよ。せめがつきせにや、いかやせぬく

和讃の示事 野辺の送り

我が親のくくく野辺の送りの其の時はく一家一毛集まりて手取り足取り、押し寄せてく行水召さるの哀れさよく笠りき 七りき、鉢、つみくのばちや鼓を打鳴らしく撫や天じく差し立ててく廣き道をば狭くゆくく狭き道をば廣くゆきく廣き原へ送り出しく千駄薪を積み込めてく野火や山火を火葬するく一日二日は烟立ちく最早三日成りぬればく兄と弟と集まりてく竹やうつぎの箸を取りてく兄と弟と相挟みく四貴ひろふて墓をつくく墓はしるしに外は立つく外は印に卒婆立つく卒婆印に松植へてく松は榮える親恋しく

こどもをばくくくよそにみしものみそはき 今年 hands を取り水むけをよくく念佛申せども父か又母かの為にて南無阿弥陀佛く

七ツ子歌

物も哀れや七ツ子はく同断 親の御墓へ詣ると同断 右の手には鎌を持ち、左の手には香を立て同断 程なく御墓へ参りつきくた度なる草をば鎌で刈りく今年の草をば手でみしりくみしりし草をば振りすて同断、すぐに其の夜は草まくらく夜半じぶん目覚めてく親をたしかに夢に見たく文字衣にけさ掛けてくそえたる笠には鐘かけてく親をたしかに遊びみたく

賽の河原

昨日朝から今日そらしく賽の河原へ捨てられてく小砂を寄せて塔をつきく小石を寄せて塚を組みく白き赤き鬼達がく鉄てより棒つきつれてくついたる塔をばゆりくまじく組みたる塚をばつきこわしく紅葉のような手をついてくようじやうなる膝を立て同断 西へ向いては父恋しく東へ向いては母恋しく居をお地蔵見るよりもく汝が父はまだ娑婆にく汝が母もまだ娑婆にく汝が父母おれたとてく金のさくじょうで掻き寄せてくこ泳の下にや やどらせてく夜さへなくればはなされる よくく念佛申されも

花間歌

花の様なる子を殺しく餘り我が兄を恋しさにく花との寺へと参りしもく花を熟し

て眺むればく開きし花は散りもせて蕾や花が散り落ちるくよし我が子もあのごとくく鳥も古巣へ二度戻るくよくく念佛申さねば

踊り歌 油賣

我れは関東の油賣く賣らす油つ賣もせて同断、宿とか、さに目をかけてく宿との体ねざれてく油所手を皆にしたく末を申せばまだ長い同断

関東出羽の者の歌

吾は関東出羽の者く京を見たさに京に出でく京でも心がくまいてく和泉の堺で走り出でく和泉の堺の横町でく十三小女郎に行き逢うてく何処へござれと尋たればく十三殿が陣に撃たれく我等は西國すべき西國は小よりも妻子になれ姫子く妻子になるのは安けれどく手には香花七度のゴマたくそれは無になるやでござるく

米搗

鎌倉の問屋に伯りし事も大曾な事を見たく何程大曾な事を見たく白金白が八から立ちく黄金小杵が千揃く七十五人で米を搗くく七十五人の其の中でくどれが目につく旅の殿くどれと言ひたらだれだらけく錦の片平綾たすき婚禮からこが目についたく婚礼からこが目につかばく受けて召されよ旅の殿く受けて小度は安けれどく受けて行度も仕様がなくくしょうがなくんば旅の殿く太刀とかたなを御賣やれく刀は主人の末吉しく伊勢のようだの 債社様くこがね丸がは とふ持てくやつて長者になりましようにやつて長者になるなればくやつてやぐらを開けましようにくやつてやぐらを開けるならく太刀ですだれをさげましようく太刀で簾をさげるならく太刀でもがれをゆいませうく

里奉公

面いものだよ里奉公く朝は起き手水みづくそれにびん水硯水七十五匹の馬の水くそれが面さに瀬戸へ出てく瀬戸のもがれへ手を掛けてくほろりと泣いたは何時忘りよ

仙松踊り

我が弟の仙松はく今年始めて田を植えてく稲はしがれる鎌は無しく関の鍛冶屋へ鎌打にく一年待ちたがまんだこんく二年待ちたがまんだこんく三年待ちたら文がきたく文の理由がみてやれば我は鍛冶屋の婿と知るく鍛冶屋の娘を見てやればく色黒黒で眉細でく道理で我等が捨てられたく暇乞いにてやりたればく小刀三本に鎌は把るく買やく中で賣おさめく

送り念仏佛

大念佛始まる南無阿弥陀何処の國から始る／＼信濃の奥の大寺で／＼小僧達が始めて／＼國こへ廣めて おついたちの晩から十六の晩を

新盆掛踊りにては 是のお瀬戸の梅の木堂

にては十六の夜にて 遠山殿 廣庭

白き鳩が二羽出て何と囀る 出て聞けば世の中吉と囀る、世の中吉して米よくて。百に米が五斗する。五斗する米を買ひあげて 搗いて白けて上白に、飯に炊きかしまいて、酒に造りてかしまいて神々におまられて、僧侶達におがまれて／＼有象無象におまらせて、踊り子も、三ツ参り見物達も三ツ参り

この新盆終り 新盆踊り念佛済む

堂にて送り盆僧歌

いぼんちりのてこめが。地獄の釜を引きさいて はすの葉に杖で、へくさづるでかかげて 麻がら棒でかついで十六大角豆を杖につき死手（出）の山路行き越えて神々は社へ、僧侶達が寺へ有象無象は地獄へ、回れ／＼若衆送り念佛雑とやれ

此の歌本は原本堤本栄太郎家に在りて其れを借り筆記せるもの

大正丙寅拾五年七月二日陽曆八月十四日写之

コレ年大小麦豊熟梅桃季胡桃結実す 春の替地も豊作多分此の秋も豊年ならむ 稲の除草も大抵二三回行ない来る頃は二週間許りの旱天に少々早死せるも

『坂部の盆踊り唄集 平成二年一月 船田利長書』

盆踊り唄の種類と数

一、すくいさ踊り 二、のうさ踊り 三、十六踊り 四、御嶽踊り 五、高い山踊り 六、追い分け踊り 七、勘句踊り 八、新吉原踊り 九、遠洲浜松踊り 十、御様踊り 十一、音頭踊り 十二、さしう踊り 十三、八幡引き踊り 十四、笹の踊り 十五、すってんしう踊り 十六、すもう勘句踊り

盆踊り以外の唄

悪病送り唄、伊勢音頭、どっこいしょ、上棟式粉つき唄、土台石つき唄、うすつき唄、うす引き唄、柿むき唄、草刈り唄、草取り唄、等々沢山の唄が有ったが今ではほとん歌われていない 残念に思ふ

伊勢音頭

一、こりや／＼あーやとこせえのよおいやなあーりやりやんのこれはいい伊勢さあさあ やーれさんのせえ

すくいさ踊り

一、すくいさあーに來たに たんとたもれよ ひとすくい

十六踊り

一、十六のならいたかござれ 錢の四／＼五両ももつてござれ

一、錢の四／＼五両もいる事なれば 寝ばね十六まづござりよ

お様じんく踊り

一、お様じんくはどこからはよった 三洲振草 お様下田から

高い山踊り

一、高い山から谷そこ見ればよ うりやなすびの花ざかりよ あれはよいよいよい

ノウサア踊り

一、踊りや出來たが親父さが見えぬ 親父はとなりのノウサア嫁つつく

勘句踊り

一、目出度なめでたの 三ツ重なりて 鶴が御門堂にサマヨ果を掛けた

どっこいしょ

一、どっこいしょ／＼でためたる錢も 今宵一夜でちやちやめちやに

上棟式の粉つき唄

一、めでた／＼のさんぎのきねで 屋敷を広めて粉をつく

歌いかえし

一、目出度／＼の若松様は 枝も榮えて葉も繁る

一、◎返し、榮えて枝も 枝も榮えて葉も繁る

一、目出度／＼の若松様は 枝も榮えて葉も繁る

一、目出度／＼三ツ重なりて 鶴が御門堂に巢を掛けた

一、遙か向うの赤石山に 雪が見えます初雪が

一、今夜ここへ来て踊らぬ人は 家えかえりて寝ておくれ
 一、どうせこうなりや二足のわらじ ともにはいたりしかせたり
 一、踊らまいかよ踊らせまいか 年に一度の盆じやもの
 一、娘島田に蝶々が止まる 止まるはずだよ花じやもの
 一、踊りおどるなら 品良く踊れ 品の良いのを 嫁にとれ
 一、踊る踊るなら 三人でも踊れ 三隅三角 そばなりに
 一、唄いなされと 唄せめられて 唄は出もせで 汁が出た
 一、音頭取る子が 取りくたびれて 廣いお庭で 袖まくら
 一、主さ来るならうらかたおいで 表ちや車戸で 音がする
 一、こぼれ松の葉を手でかき寄せて 主の来るのを炊いてまつ
 一、今の若い衆があれだでこまる 石にこしを掛け性話
 一、私の音頭はぼたもち音頭 付けておくれよべたと
 一、お月やちよいと出て山の根を輝す 娘こしおびやこしを輝す
 一、うまくゆやがる油も付けず さらし髪とは良くゆえた
 一、うまく染めたよ馬くろさのゆかた かたにやかげ馬すそくりげ
 一、伊勢は津でもつ津は伊勢でもつ 尾張名古屋は城でもつ
 一、揃た揃たよ 踊子が揃た 稲の出穂よりやまだ揃た
 一、稲の出穂には出むらがあるが 今宵踊りにやむらがない
 一、心細いぞえ木曽路の旅は 笠に木の葉が舞いかる
 一、笠に木の葉は昔の事よ 今じや木曽路は汽車の旅
 一、唄の切れ間にやちよいと出せ女子 はよる吉田のじよろぶしを
 一、切れた切れたよ唄の根が切れた くさりなわかよまた切れた
 一、五月田植えて明け六月は いじやよ友達伊勢参り
 一、お伊勢参りに呑んだか酒を 天の岩戸の菊酒を
 一、来たか戸が鳴る出て見りや風よ 浜の松風音ばかり
 一、松になりたや峠の松に 登り降りの客をまつ
 一、今宵この場をさまざばさませ 私と主さでさましやせぬ
 一、音頭取る娘がはしごから落ちて 橋の下でも音頭取る
 一、盆のあげくの若い衆を見れば 露にはなれたきりぎりす
 一、唄いなされよお唄いなされ 唄でござりよがさがりやせぬ
 一、唄でござりよがもしさがりたら 時のそうばで上げてやる
 一、高い峠のあの風車 何を使りにくるくると
 一、稲は穂と出てあぜによりかかる 私しや主さによりかかる
 一、吉田通れば二階からまねく しかもかいこの振袖で
 一、天龍川さえ竿さしやとどく なぜにとどかぬ我想

一、東しや平岡 西しや神原よ 中を流れる天龍川
 一、私しや川ばた 船頭さの娘 早くのらなきや水が出る
 一、あなた百まで わしや九十九まで 共に白毛のはえるまで
 一、あまりしたさに桶屋さとしたら 桶のたがほどしめられた
 一、お寺はうずがとちもちが好きで 夕べ九ツ 今朝七ツ
 一、おもしろいぞえ 津島の祭り 山にやちようちん川にや舟
 一、よったよったよ 五しやくの酒に 一合呑んだらぐらの助
 一、天龍下ればしぶきにぬれる もたせやりたや 桧笠
 一、桑の中から小唄がもれる 小唄聞きたや 顔見たや
 一、娘島田に嫁やかつ山よ しゆうとばばさは いばまげに
 一、とろりとろりと流れる筏 つなぎ止めた満島に
 一、夕べよばいとが はしごから落ちて ねこのまねをして にやこにやこと
 一、出せよ大国 付けよやれ えびす 付けてまわせよ 福の神
 一、馬鹿にするなよ 枯木だとしても 藤がまき付きや 花が咲く
 一、俺等の若い時きやじまんじやないが すねに生きづたえなんだ
 一、すねに生きづたえなかりにや 腰に小銭も たえなんだ
 一、うまい事こく吉原すずめ あいつ取りたやいけ取りに
 一、お月様のような満丸顔の 色の小白い 主をほしや
 一、雨が降って来た干物ぬれる お飯しやこげつくがきやほ泣く
 一、言わば言え言えそしらはそれ 俺等も世に出りや言って返す
 一、踊りや出来たが親父さが見えぬ 親父じやとなりの嫁つつく
 一、眠くなりたに目さましょおくれ 紙につつんで のしを書いて
 一、紙につつんでのしを書くよりも 可愛い主さの顔かいて
 一、聲はかれたが かさではないよ 心おきなく かよわんせ
 一、聲がかれたら 馬の穴ねぶれ 馬けつから 肥が出る
 一、今宵おどり子にや おおしがござる 扇子ふりふりただまわる
 一、今の若い衆の 踊るふりを見れば さるが沼田を こねるようだ
 一、今の若い衆の 踊るふりを見れば ねがおきりをふむようだ
 一、たてばしやくやく 座ればぼたん あるく姿は 百合の花
 一、来いと七聲来るなど八聲 くるな八聲が来にかかる
 一、ばかに皆様 しをれてござる 二度としをれりやさとられる
 一、三千世界の 鶏ころし 主と朝寝をして見たい
 一、お前初だかした事ないか 合せ羽織のせんたくを
 一、話しやおよし唄なら歌え 話しや仕事のじやまになる
 一、元氣を出せ出せまだ夜は明けぬ 明けりやお寺の鐘が鳴る

一、出せと言われて大いやつを出した それじやないもの 唄じやもの
 一、お寺御門堂に蜂が巢を掛けて ぼうず出りやさすはいりやさす
 一、盆のぼたもちや 白羽の娘 おけばねぐさる毛もはえる
 一、ばかに踊りがじたばたするに 調子を揃えて 手をたたけ
 一、唄の返しも二度まじや良いが 三度返せば 物くどい
 一、娘こつちむけ良い物やるに ちくわかわむいて身をやるに
 一、盆の十五がやみなら良いが 娘引きます引かれます
 一、信洲信濃のしなそばよりも 私しやあなたのそばが良い
 一、主と別れて 松原行けば 松のつゆやら涙やら
 一、草津良いところ 一度がおいで 御湯の中にも花が咲く
 一、お医者様でも 草津の湯でも ほれたやまいは直りやせぬ
 一、ほれたやまいは直せば直る ほれたお方とすりや直る
 一、いれておくれよ かゆくてならぬ 私一人が カヤの外
 一、お酒呑む人 心からかわい お酒あがらぬ神はない
 一、月は重なる 身は重くなる 主の通いは遠くなる
 一、酒のよいざめしのびのもどり 足がしよどろで歩かれぬ
 一、山の中でも 三軒屋でも 住めば都よ 我里よ
 一、山の中からまた山の中 親はくれても私やいやよ
 一、虎は千里のやぶでも越すが 障子一重かままならぬ
 一、豆で来たかよ 小豆で来たか 私しやえんどでこけて来た
 一、主の来る夜は 前からわかる しめた前掛けそらほだけ
 一、子侍やちくさい どくたみくさい くさけりやよしやがれ だて男
 一、恐しいぞよ他人の中は 丸木柱に 角がたつ
 一、山で高いのは するがの富士よ まだも高いのは 親のおん
 一、色が黒くて いやならおよし 烏一羽で暮しやせぬ
 一、飯田二本松 横にとぶ鳥 銭もないのに かうかうと
 一、盆にやおいでよ 正月は来でも 死んだ佛も盆にや来る
 一、踊り踊るなら しつてこでしと 庭の小草の 枯れるまで
 一、来いと言われりや 行かりよか佐渡え 佐渡は四九里 波の上
 一、今夜ここに來て唄わぬ人は ごきりよじまんか くちなしか

向方^{むかがた}のかけ踊り^{おど}

星野 紘

一 名称

向方のかけ踊り

二 伝承地

長野県下伊那郡天龍村神原向方地区

三 期日・場所

八月十六日 長松寺^{ちようしょうじ}（送り盆）



四 伝承組織

ここ二、三年前まで向方集落の行事として八月十四日、十六日と行われて来ていたが、八月十四日に行われて来ていた「かけ踊り」は太鼓の打ち手調達が難しくなり昨年（平成二十年）から中止しているとのこと。しかも八月十六日の「送り盆」も、本年（平成二十一年）は新盆の家がなく簡略な方法で済まされた（正確なところは、実際は二人亡くなっていたのだが、それが七月過ぎだったので「送り盆」行事実施にまで至らなかった由）。八月十六日夜長松寺に村人が集まり、本堂内にて念仏の唱えがあり、一同の会食、それが終わった後で境内の六地藏様の前で「送り盆」の歌のさわりだけが披露された。

区長、副区長の話によると現在集落の戸数は四十四戸、八十余名の人口である。子供は数名しかおらず、学齢児童は新野小学校に通っているとのこと。ともかく向方集落の人口の高齢化、少子化が当該かけ踊り伝承の存続を危うくしているようだ。橋爪清春氏（昭和九年生まれ）の話では、太鼓を打つことが肉体的にしんどくなったから平成二十年、二十一年とそれを中止しているとのこと。村松英文氏（昭和二十四年生まれ）撮影の映像記録によると平成十八年の八月十四日には「かけ踊り」が、また八月十六日には「送り盆」行事の両方が行われていた。ところがその後のことについては、村松氏撮影の平成二十年八月十六日の「送り盆」の映像記録しかなかった。



長松寺



六地藏様

五 行事（芸能） 内容

以下の記述は、現行の姿が前記4項に記述のような理由でほとんど取材出来なかったもので、長松寺にて面談した村松和市（昭和九年生まれ）、橋爪清春、村松英文、村澤恒男（昭和五年生まれ）他の各氏からの聞き書きなどのノートをもとに、また次に列記する過去の記録類を参照にしてとりまとめたものである。

・武田義実「向方の『かけおどり』」（『まつり十一号』まつり同好会 一九六六年刊 所載）

・桜井弘人「向方の盆行事」（『伊那民俗第二十五号』柳田国男伊那民俗研究所 一九九六年刊 所載）

・『天龍村史』（天龍村 二〇〇〇年刊）の「掛け踊り・盆踊り」の項

・橋都正「かんびようえ様の踊り」（『伊那』伊那史学会 二〇〇五年六月号 所載）

・村松英文撮影編集映像記録『信州・天龍村向方 夏の文化』（平成十八年

八月十四日「掛け踊り」、同八月十六日「送り盆」

・村松英文撮影編集映像記録『信州・天龍村向方 夏の文化』（平成二十年

八月十六日「送り盆」

・天龍村向方の録音テープ『向方の掛け踊り―送り盆・かんびようえ踊り唄』

（一）盆の行事

八月一日には、各家ごとに墓の掃除と道の草刈りを行い、ムラではお寺の掃除と切子灯籠や切り草作りを行う。昔はこの日に「かけ踊り」の練習を始めたという。

八月六日は、各家で花迎えをし、ソウリヨ棚、タナバタや迎えダイを作る。

「かけ踊り」が新盆の家を廻った第二次大戦前まではこの日に掛け込みの願い出しを受け付けた。

八月七日には、新盆の家では親戚の手で百タイが作られるが、今はロウソクに変わっている。

八月十四日の晩は、各家ごとに迎えダイを墓で焚く。この日か翌日の昼間に僧侶を迎えて新盆の供養をした後念仏をあげ、家から墓までタイトボシをして墓参りに行く。晩には長松寺でかけ踊りと盆踊りを行う。第二次大戦前までは大河内の場合のように新盆の家を廻り歩いたという（村澤恒男氏の記憶では昭和十七年か十九年の頃戦死者の家へ出かけて行って「かけ踊り」を行った由）。八月十六日、新盆の家では未明に河原に行つてショウリヨウ送りをする。夜八時頃、残しておいた灯籠をかついで長松寺に行き、それを庭の端に立てて盆踊りをする。十七日の午前零時になると新仏を送る一連の「送り盆」の行事次第が執り行われる。送り盆の歌があり、盆踊りの最後の曲「八幡」を踊り、「かんびようえ様踊り」が行われる。それが終わると寺の山門から二〇〇メートルほど離れた所にあるマトウサンバ（納め場）へ向い、そこで灯籠を焼却し、また送り盆の歌を歌ってから、後を向かずに帰って来る。かつては女性と子供は霊に連れて行かれるからといって、この場に一緒に行くことは出来なかった。八月二十四日の盂蘭盆には長松寺で盆踊りがある。

（二）かけ踊りの諸役と楽器、衣装など

踊りの諸役の一行は、先頭から次の順である。

大灯籠 1人（この役は区長が担当）

一番柳 1人（全長1m75cmの竹の棒で、先端部を十数本にさき五色の紙を貼り付けて柳の葉のようにしてあるものを持つ）

一番太鼓 1人（革面直径50cm、胴の長さ37cmの締め太鼓と、1mほどの細長い桴を手にする。頭には直径55cmの三度笠をかぶる。

笠の縁には一面に紙シデが垂らしてある。浴衣着流しに帯タスキがけの衣裳）

二番太鼓 1人（革面直径37cm、胴の長さ15cmの締め太鼓と1mほどの細長い桴を手にし、頭に一番太鼓同様の三度笠をかぶる）

一番奴^{やつこ} 1人（日傘を手にするが、傘の縁には色紙を細く切って垂らし

てある）

鉦 1人 (下面直径21cm、上面直径18cm、高さ6cmの鉦とシユモクを手に持つ。太鼓役と同様の三度笠を頭にかぶる)

五番太鼓 1人 (太鼓と笠は二番太鼓に同じ)

二番柳 1人 (一番柳と同じ持ち物)

六番太鼓 1人 (太鼓と笠は二番太鼓に同じ)

七番太鼓 1人 (太鼓と笠は二番太鼓に同じ)

二番奴 1人 (一番奴と同じ持ち物)

四番太鼓 1人 (太鼓と笠は二番太鼓に同じ)

三番太鼓 1人 (太鼓と笠は二番太鼓に同じ)

以上の順で行列したり、輪になって太鼓等奏打の踊りをしたりする。なお最後尾に小灯籠役も1人付いており、また笛役もいる。



笠



奴



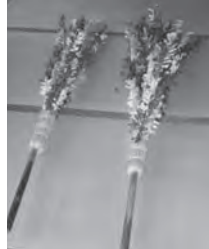
大燈籠



小燈籠



かけ踊りの太鼓



柳



一番太鼓

(三) 演目・芸態

八月十四日の晩(かけ踊り)

各家で夕べのご馳走が終わると老いも若きも皆浴衣姿となり、ゆったりとした気分です。長松寺に集まって来る。かけ踊りの諸役の者達は、まず寺の手前より寺の山門から一〇〇メートルほど南に位置したジョウドと呼ばれる空き地で、祇園ばやしで行き、三回くらいしてから最初の位置に戻る。これを「拍子どろえ」という。次に長松寺の山門まで祇園ばやしで行き、長松寺境内に迎え、ダイがともされると、一同寺の山門まで道行きし(ア)、境内に庭入りして、庭ほめ踊り(イ)、蚊ばらい踊り(ウ)、引き踊り(エ)等を行う。それぞれの芸態の詳細は左記の通り。

ア、道行き

ジョウドにて笛、太鼓、鉦が一斉に鳴りはじめて諸役の一同はお寺の門へ向かって行列して行く。その際「祇園囃子」と「渡り拍子」を奏しつつ静に進み行き、山門をくぐると「十六」になる。「十六」は笛と太鼓の囃子で、それを何回か繰り返しながらお寺の庭を三周して、円形に並ぶ。続いて動作の切れ目を意味する「ぶつきり」と称する太鼓の奏打となる(これには三種類の打ち方がある)。

イ、庭ほめ踊り

「ぶつきり」が終わると、「せー」と一斉に掛け声をして、太鼓を一つどんと打って、一足中へ踏み込んで足を揃え、一足元の所へ下がって足を揃える動作をする。その間奴役は日傘を回しながら、太鼓役は笠の上を掬を一廻し廻しながら、鉦役や柳役は足取りだけ同様にする。これを「せー」と称する。元の位置にもどると太鼓と鉦が テン・テ・テン・テン・テン(註) と鳴らされて、一番太鼓の者が「お寺様へ」と唱え歌うと、他の諸役の者も一般参加者も一緒に全員で「と、まず入って」と唱え歌い、もう一度全員で「お寺様へとまず入って」と一節続けて唱え歌う。この一節が唱え歌い終わられると「せー」と太鼓を打ち、次の一節を同様の方法で唱え歌う(所謂音頭一同形式)。こうして歌の各節を終わりまで唱え歌い進める。以下の歌詞は省略するが、そ

れについては、九 詞章の項（92頁）を参照していただきたい。

みだ　なむ　あみだ　なむ　あみだーぶつ　なむ　あみだ　と唱えながら鉦
役は鉦を打ちつつ、太鼓の打ち手は太鼓を抱えて庭を三周する。昔はこのと
ころは「和合の念仏踊り」(41頁参照)に見るように、太鼓を前に置いて和讃
を唱えて仏の霊を弔ったものだが、今はそれが出来なくなつて、なむあみだを
唱えるだけになつてしまった。

この踊りに移る前に「蚊ばらいぶつきり」をやる。これは「庭ほめ踊り」の「せー」のように前へ出たり、引つ込んだりしないで、立つたままで、

テ | テ
ン | テ
テ | テ
テ | テ
テ | テ
テ | テ
テ | テ
テ |
テ |

と太鼓を打って蚊ばらい踊りになる。まず一番太鼓の者が、今宵はくもり〴〵と唱え歌い出すと、「庭ほめ踊り」の時と同様に全員で、蚊がくい申すに青が、れましたよ音頭衆が、と唱え歌って、青がれましたよ音頭衆が、のところだけをもう一回全員で復唱する。この一節が終わると立ったまま太鼓だけが、

テーン | テン | テン | テン | テ | テン | テン | テン | テン | テン | テン |

と打ってから二節目に移る。このようにして終わりまでやる。この歌詞全体については、九 詞章の項を参照のこと。

「蚊ばらい踊り」が済むと一般参加者も加わって「手踊り」になる。これは今は種類が多くなつたけれども、昔は「すくいさ」と「十六」の二種類だけだった。これを朝の三時頃までやって、それから「引き踊り」をやつて解散したもののだが、今は「蚊ばらい踊り」に続いて「引き踊り」をやつてしまい、そして「手踊り」に移るかたちとなつた。

工、引き踊り

これは、まず「蚊ばらいぶつきり」と同様のぶつきりをやつて、一番太鼓の者が、前なる小川に、と唱え歌い出すと、その他の人達を加えた全員が、出て

見れば」と付けて唱え歌う。そうしてもう一回、前なる小川に出て見れば」と復唱して次の節に移る。この歌詞全体については、九 詞章の項を参照のこと。

なおこの「引き踊り」は、庭入りと反対に左廻りに廻って庭入りの時と同じ行列でジョウドへ戻って行き、支度や飾りものなどを全部取り去り、お寺へ持つて行つて納めておく。

八月十六日の晩（送り盆）

それぞれの新盆の家などからの灯籠、提灯の全てがお寺の庭の南側の一定の場所に勢揃いし、「手踊り」が始まる。十二時頃になると手踊りをやめて新盆を送る行事に移る。お寺の西北隅の六地藏の前の所でタイマツ（長さ20cmほどのヒイラギの木片を束ねたもの）を焚いて、一同そのまわりにしゃがみこんで「送り盆のうた」を唱え歌う。歌詞の一節ごとに音頭一同形式で復唱され、切れ目ごとに太鼓と鉦の奏打が入る（八月十四日の「蚊ばらい踊り」の場合と同様）。

この詠唱が終わる少し前頃をみはからつて、灯籠 提灯に全部に明かりをと
もす。一方お寺の門の外では「かんぴようえ様踊り」が始まる。これは、新盆
の家の親戚縁者が青竹の先に高く取り付けた切子灯籠を手にして輪をつくり、
青竹を上下に動かしながらゆつくりと反時計回りに廻る。輪の真ん中に男性(昔
は若者)が入り、ふわりふわりと揺れ動く灯籠に両手を挙げて飛びつくような
仕草を繰り返す。あたかもあの世へ帰って行く新盆の霊に別れを惜しみ、呼び
戻しているかのである。

お地蔵様の前では、さてもよい庭見事なお庭だ　来年七月またござれ」と「送り盆のうた」の歌詞の最後の一節となる。「かんぴようえ様踊り」も終わると、先述のタイマツが先頭に立つて道明けとなり、その後に灯籠が全部続いて、より　より　だんぼ　なむ　あみ　だんぼ（註）と唱え、鉦を打ちながらマトウサンバへと行く。マトウサンバでは燃えているタイマツを下にして、その上に灯籠、提灯を積み重ねて焼き捨ててしまう。焼きながら「送り盆のうた」を歌い唱える。この時の鉦、太鼓の奏打は前と同じで皆しやがみこんで一節ずつ

音頭一同形式で歌い唱えて行く。タイマツの火がだんだん小さくなって消え、あたりは暗闇となる。その折りに「送り盆のうた」の歌詞の最後の一節、秋風たてば木の葉がちりそる おいとま申していざ帰るゝが歌い唱えられ、皆がなむあみだぶつ なむあみだぶつと手を合わせて終わりとなる。なおこの「送り盆のうた」の歌詞の全体は、九 詞章の項を参照のこと。



長松寺の六地藏前でタイマツを焚く

六 由来・信仰

向方は明徳二年（一二九二）に伊勢の浪人村松兵衛菅原正氏という者が坂部の熊谷氏の許しを得て開村したものという（中村浩『かけ踊り覚書』）。

当地のかけ踊りの発祥については不明である。

八月十四日晚、かけ踊り「庭ほめ踊り」の後、大正の末頃までは大念仏と和讃が長々で行われていたという。また第二次終戦前までは新盆の家を廻り歩いたという。四 伝承組織の項で述べたように、当地かけ踊りの伝承はここ数年来伝承者の高齢化などのため中絶しかけている感がある。

七 所見

向方のかけ踊りも、今も新盆の家廻りを行っている大河内のものに近似した、新盆供養の念仏和讃に力点のおかれた伝承と言えよう。もともと八月十六日晚の送り盆の次第内容、ことに「送り盆のうた」の詠唱や「かんびようえ様踊り」などは当地独特の姿のものであり貴重である。

八 記録・文献

- ① 武田義実「向方の『かけおどり』」（『まつり十一号』まつり同好会 一九六六年刊 所載）
- ② 桜井弘人「向方の盆行事」（『伊那民俗第二十五号』柳田国男伊那民俗研究所 一九九六年刊 所載）
- ③ 『天龍村史』（天龍村 二〇〇〇年刊）の「掛け踊り・盆踊り」の項
- ④ 橋都正「かんびようえ様の踊り」（『伊那』伊那史学会 二〇〇五年六月号 所載）
- ⑤ 村松英文撮影編集映像記録『信州・天龍村向方 夏の文化』（平成十八年八月十四日「掛け踊り」、同八月十六日「送り盆」）
- ⑥ 村松英文撮影編集映像記録『信州・天龍村向方 夏の文化』（平成二十年八月十六日「送り盆」）
- ⑦ 天龍村向方の録音テープ『向方の掛け踊り―送り盆・かんびようえ踊り唄』

註

テンは大鼓の口唱歌、・は鉦を打つ場所を示している。

九 詞章

〔向方区かけ踊り歌集〕より

庭ほめ踊り

お寺様へとまず 入りて。

（お寺様へとまず 入りて。）

もがりはるかにながむれば。

（もがりはるかにながむれば。）

梅にひちこに 植え混せて。

（梅にひちこに 植え混せて。）

ひちこなびけば 梅ほろぶ。

（ひちこなびけば 梅ほろぶ。）

御門遙かに ながむれば。

（御門遙かに ながむれば。）

末を申せばまだ長けれども 庭ほめ踊りはこれまで。

（庭ほめ踊りはこれまで。）

蚊払い踊り

今宵は曇り蚊が 食い申すに

青がれましたよ 音頭衆が。

（青がれましたよ 音頭衆が。）

音頭衆様 仰ぎはせぬが

仰がれたまいの 音戸衆が。

（仰がれたまいの 音戸衆が。）

上なるみ墓が 釈迦如来。

（上なるみ墓が 釈迦如来。）

中なるみ墓が 阿弥陀仏。

（中なるみ墓が 阿弥陀仏。）

下なるみ墓が ほととぎす。

（下なるみ墓が ほととぎす。）

末を申せば まだ長けれども

蚊払い踊りは これまで。

（蚊払い踊りは これまで。）

引踊り（世の中踊り）

前なる小川に 出て見れば。

（前なる小川に 出て見れば。）

梅にひちこに 芭蕉葉に。

（梅にひちこに 芭蕉葉に。）

浮つ沈みつ 流れつ。

（浮つ沈みつ 流れつ。）

それを見つけて 取り上げて。

（それを見つけて 取り上げて。）

これが落葉の たち花よ。

（これが落葉の たち花よ。）

末を申せば まだ長けれども

世の中踊りは これまで。

（世の中踊りは これまで。）

送り盆のうた

東西鎮まれ お鎮まれ

東西鎮まれお鎮まれ

鎮めて我らの 唱を出せ

鎮めて我らの 唱を出せ

これがおせどの 福榎の木

これがおせどの 福榎の木

元が白金 中 黄金

元が白金 中 黄金

東のお枝に七つなりそる

西のお枝に九つ

西のお枝に九つ

枝葉によねが なりこだれ

枝葉によねが なりこだれ

これのおかが 果報じゃで

これのおかが 果報じゃで

白金のみ枡を手に持ち

かあけるとかけが唐金

かあけるとかけが唐金

売り手はご不足 買い手は喜ぶ

榊目をおまきやれ 枡取り

榊目をおまきやれ 枡取り

榊目をまけるは 安けれど

榊目をまけるは 安けれど

まだ葉によねが 揃わぬ

まだ葉によねが 揃わぬ

末を申せば まだ長けれども

世の中踊りはこれまで

世の中踊りはこれまで

付けて申すに お聞きあれ

付けて申すに お聞きあれ

我等の弟の 仙松は

我等の弟の 仙松は

今年始めて 田を作る

今年始めて 田を作る

丈が七尺 穂が五尺

丈が七尺穂が五尺

からはしされる 鎌はなし

からはしされる 鎌はなし

関の鍛冶屋へ 鎌打ちに

関の鍛冶屋へ 鎌打ちに

一年待ちても まだ来ぬが

一年待ちても まだ来ぬが

二年待ちても まだ来ぬが

二年待ちても まだ来ぬが

三年待ちたら 文が来た

三年待ちたら 文が来た

文の上書 見てやれば

文の上書見てやれば

関の鍛冶屋の 婿になる

関の鍛冶屋の 婿になる

まこと婿に なるならば

まこと婿に なるならば

鎌の千把も お出しあれ

鎌の千把も お出しあれ

末を申せば まだ長けれど
世の中踊りはこれまで
世の中踊りはこれまで

(この頃灯笼に火を入れる)
付けて申すに お聞きあれ
付けて申すにお聞きあれ

さても尾張の げんき殿
さても尾張の げんき殿
大きな商い 召される

おおきなあきない召される
戸板金を千枚揃えて

名馬の駒 千匹
名馬の駒 千匹

(この頃 かんびようえ様の唱のテープを掛け、灯笼
を庭へ出し、かんびようえ様踊りを始める)

駒千匹に 荷を打ちつけて

京の町へお出しやる
京の町へお出しやる

問屋問屋で だが荷と問うなら

尾張のげんきの荷と言え
尾張のげんきの荷と言え

宿のおかかみ みやげとて
宿のおかかみ 土産とて

油にしほれの ゴマ八合
油にしほれの ゴマ八合

それにしめせの 綿八把
それにしめせの 綿八把

元結紙とて 紙五束
元結紙とて 紙五束

櫛はよい櫛 黒木櫛
櫛はよい櫛 黒木櫛

針はよい針 つまかくし
針はよい針 つまかくし

宿のおかか 唱よみて
宿のおかか 唱よみて
商いよかれ 道よかれ

あきないよかれ道よかれ
世の中よくて 道よくて
世の中よくて 道よくて

世の中よかれ 風吹くな
世の中よかれ 風吹くな
世の中よかれ 風吹くな

(お寺の庭では次の様に)
さてもよい庭 見事なお庭だ
来々七月またござれ

来々七月またござれ
なんまいだんぼ
よりよいだんぼ

(くりかへしながら的納場へ)
(的納場では次の様に)

世の中よかれ 風吹くな
世の中よかれ 風吹くな
世の中よかれ 風吹くな

夜ひとよ 踊っても
おどりあきないが
我待つお舟が 沖に出る

秋風たてば木の葉は散りそる
おいとま申して いざかへれ
おいとま申して いざかへれ

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

平成十二年八月 村松武彦区長代筆

かんびようえ様
かんびようえ様のお嫁入りのしたく
タンスが七棹 長持ちが八棹
十五の唐櫃に油単を掛けて

油単七つがスッペラボンと落ちた

向こうの山で 光る物なんだ
星か 蛍か 蛍でもないが

姫を迎えの タイマツの明かり
子供も髪結つて 今様のはやり

かんびようえ様へ 質置きに参れ
質は良い日に お盆を質に
もしも その日に 流れたならば

かんびようえ様の 朝茶の子
道端の竹の子を ボトンとひっぺしより

キリリと引き抜いて
スッペラボンと投げた
投げた後から液が出る 液が出る

向かいの畑に段々がござる
帯解く段に タスキの段に
婆つさと爺つさの寝る段もござる

かんびようえ様のお別れの時刻

満島神社の秋祭り（かけ太鼓）

星野 紘

一 名称

満島神社の秋祭り（かけ太鼓）

二 伝承地

長野県下伊那郡天龍村平岡

三 期日・場所

（期日）

毎年十月の第二土・日曜日（かつては明治四十年まで九月十五・十六日、翌年から大正十二年までは九月二十七・二十八日、その翌年から平成二年まで十月十四・十五日、平成二年より現在の日取り）

（場所）

原の森（満島神社）と南の森（前宮）、それに道中及び途中のお旅所三ヶ所



四 伝承組織

満島神社の秋祭り（お練祭り）は満島神社及びその氏子組織の全体が関わって運営されているが、「かけ太鼓」の部分はそれの中の青年衆によって執行され、彼等の間で満島神社氏子青年委員会が組織される（委員長、副委員長、会計長などの役職がある）。青年衆はかつては十四歳から二十五歳の者に限られたが今日それが崩れはじめている。年齢上の上限も下限もなくなっていて、若い者ならば中学生でも可能であり、結婚すると太鼓は叩けなくなる。そして青年団をやめれば壮年衆（かつては二十六歳から四十歳の者で、獅子神楽、大名行列を担当）の方にまわるとのこと（恩澤知副委員長談）。活動内容は祭りの一ヶ月半前からの「かけ太鼓」の稽古、宵祭り、本祭り当日でのその執行が主たる役割であるが、その他に御輿用の竹切り、煙火打ち上げのための各町内からの寄付金集めといった祭り全体に関わることも行う。

満島神社氏子は平岡地区の約一〇〇〇人（六〇〇〜七〇〇世帯）である。当行事は町場の伝承であって、山間地の神原のもの（坂部、向方、大河内）とは同一視は出来ないが、高齢化率五十六％（長野県一位）という天龍村内の伝承であり人員調達も以前の様子とは変わりつつある。平成二十一年の「かけ太鼓」実施のために八人の氏子青年が都会地から帰郷した。



満島神社（原の森）



「南の森」から「原の森」(右の山)を望む

五 行事（芸能） 内容

（一）満島神社秋祭りのお練り

満島神社秋祭りは、宵祭りでは夕刻に原地籍の満島神社（原の森）から御輿を中心としたお練りの行列が出発し、途中三ヶ所のお旅所で休憩しながら町筋を練り、南地籍の前宮（南の森）に到着し、御輿はそこで一泊する。翌日の本祭りには前宮から行列が出発し、三ヶ所のお旅所を経て本宮（満島神社）へ戻る。

この間のお練り行事（芸能）次第は次のようである。宵祭りの日では、満島神社本殿での神職による祭典、境内前庭の神楽殿での獅子神楽上演、「かけ太鼓」の「四方名所の唄」「原の森の唄」などの歌と太鼓、笛の奏打（踊り）があつて、その後一同行列を仕立てて原の森から町へ降りて行き、前宮（南の森）に向かう。行列の順序は、少年達による「満島神社の奉納旗」、青年衆の「かけ太鼓」、壮年衆の神楽獅子や大名行列の「宿入れ」、中学生達の「ご宝物」、神職・氏子総代・神社関係者・巫女等に守られた「御輿」、老年衆の温古団による「傘づくし」のお囃子と総勢約二〇〇人ほどである。このお練りの途中、民家、商家、会社などからの所望がかかると、「かけ太鼓」、「獅子神楽」、「大名行列」、「傘づくし」の祇園囃子を披露しご祝儀を受ける。また本祭りの日は、前宮で神職による祭典の後、その前庭にて「かけ太鼓」の「四方名所の唄」「南の森の唄」が歌い踊られるなどあつて、一同行列を仕立てて原の森（満島神社）へと向かう。その次第内容は前日同様であるが進行方向が逆である。このお練り行列が原の森の満島神社境内に到着すると、「かけ太鼓」の「四方名所の唄」「原の森の唄」と「鎮めの唄」が歌い踊られる。これが終わってから「花取り」の奪い合いの次第がある。前庭に立てた二本の杭の先端の藁ヅトに刺したバセウの葉と桜・桔梗の造り花を青年衆などが我先にと取り合うのである。これで一切終了となるがそれが毎年の九時過ぎとなる。

行事次第



本祭りの夜の「花取り」の花



本祭りの夜の「花取り」の踊り



本祭りの夜の花の奪い合い



本祭りでの温古団の「傘づくし」



本祭りでの商家での神楽の披露



本祭りの夜に行列に使った道具類



本祭りでの宿入れ



本祭りでのご宝物



本祭りでの御輿



宵祭りでのかけ太鼓



宵祭りでの獅子神楽上演



宵祭りの行列出発

(二) かけ太鼓の諸役と楽器、衣装等

「かけ太鼓」の青年衆の太鼓の打ち手は、平成二十一年は八名であった。その先頭の者を「花馬」と呼称し、また最後尾の者を「殿」と呼ぶ。彼らは熟練者が担当して一行をリードする。太鼓(革面直径45cm、胴の長さ36・5cmの締め太鼓)を左手に持ち、右手に細長い桴二本持つ。笛役も何名か付き添っている。衣装はハッピー姿に足袋・紙緒の草履履きで、菅笠(他地区かけ踊りのような笠の縁一面に紙シデを垂らすということはない)をかぶるが、本祭りに満島神社へ練り込む時にはその紐を首にかけて背に負う。



かけ太鼓先頭の「花馬」



「殿(しんがり)」(最後尾)



太鼓

(三) かけ太鼓の演目・芸態

かけ太鼓の青年衆一同は行列の先頭部に位置し、お練り全体のリード役であるとともに、威勢の良い太鼓の奏打や掛け声で見栄えのする役割を演じている。その芸態は、祭礼唄のいくつかを歌いつつ踊る(太鼓のリズムを刻む)次第があり(満島神社と前宮の境内にて)、お練り「道中」における太鼓等奏打(踊り)の際の見事な足捌きの歩行があり、さらに「十六」というお練り途中の歩行(太鼓奏打とともに)の手もある。それらの詳細を左に記す。

宵祭りの満島神社境内の「かけ太鼓」

十月十七日(土)、神社本殿での祭式、湯立ての神事(例年は前庭の大釜の所で行うが、平成二十一年は降雨のため神社本殿で実施)が終了すると、「かけ太鼓」の青年衆一同は神楽殿前を時計の針と反対廻りに行進しながら太鼓

笛を奏打することから始めて次のように演ずる。

ア、左手で太鼓の締め緒を握り、右手で二本の桴を合わせ持ち、一方の足の膝を高く前に持ち上げ、他方の足を後方に跳ね上げたりして歩を進めつつドン ドン ドン ドン ドン と太鼓をゆっくりと六回打ち、引き続きドンドンと早く三回打つ。これを繰り返しつつ行進する。

イ、その後一同は神殿に向かって左側の庭へ太鼓を同様に打ちつつ移動する。ウ、「四方名所の唄」「原の森の唄」

神殿に向かって左手の前庭に行き、そこで「四方名所の唄」「原の森の唄」の二曲を歌い踊る。その詳細は次の通り。輪の中央に位置した歌い手と輪を作っている一同の者とが次のように音頭一同形式で歌う。歌い手(音頭)が「東は熊伏」と最初のくだりの第一節目を歌い、太鼓衆一同が「東は熊伏」とその節を反復詠唱する。このようにして合計四節有るひとくたまりを同様に反復して歌い続け、それが終わると、太鼓と笛の奏打の囃子が挿入される。このようにして歌と囃子とが繰り返されて行くのである。

この一連の流れにおける歌と太鼓の奏打と足遣いを細かく左に記す。

歌い手(音頭) へ東は熊伏 その他一同へ東は熊伏 と反復詠唱している間に、太鼓の打ち手は太鼓を右腰の上に据えて歩を運び、この一節の歌い終わりのところで、左手で握った太鼓を上方に振り上げる。このようにして第二節目へ秋の月、第三節目へ西には名高き、第四節目へ川がある も同様にして詠唱されるが、太鼓の打ち手の所作歩行(左廻り)はいずれも前同様。こうしてひとくたまりの歌が済むと、次のような複雑な太鼓の奏打と足運び(踊り)が挿入される。

- ・ 輪になったその場の位置で、一打ちドン
- ・ 輪の中央に向かって右足を一步踏み出して太鼓を一打ちしドン、そして太鼓は右腰に控える

- ・ 次いで左足で一步元の位置に下がって一打ちドン、引き続き中央に向かって一步足を踏み出して一打ちドン、元の位置に下がりつつドン ドン ドン と早打ちを三つ

・引き続き右足を一步中央に出し、左足も同様に一步出してドンと一打ちし、引き続いて早打ちをドンドンと二つ

・その場でゆつくりと力強くドン ドン ドンと三つ打ち、引き続いて小刻みにドン ドン ドン ドン……と打ち続ける

・また同様に小刻みにドン ドン ドン ドン……と打ち、引き続きドンと一打ち

・元の位置でゆつくりとドンと一打ちし、太鼓を右腰に控える

以上の一連の所作がふたくだり目以降も繰り返される。このようにして「四方名所の唄」三くだり、「原の森の唄」十三くだりにおいて同様に反復繰り返される。このふたつの唄の歌詞は、九 詞章の項(99頁)を参照のこと。

エ、続いて太鼓の二団は、アのところまで記した太鼓の奏打をしながら神楽殿前方へと庭を移動して行き、そして時計の針と反対廻りに湯釜の背後を迂回して、境内から下へ降りて行く石段の手前、鳥居の所に到着し縦列に整列する。

オ、「道中」

ここから「道中」の太鼓奏打、歩行振りが披露される。その場の位置で、まず左足をゆつくりと持ち挙げて左方外側へ蹴り出し(この時左足の爪先は下を向いている)、次いで右足を同様に右方外側へ蹴り出し(同様に爪先は下に向く)、次いで左足を蹴り出し、次いで右足を蹴り出し、次いで左足を蹴り出して後、右足で一步前へ進みつつ太鼓の早打ち二つドン、次いでゆつくりドンと一打ちして太鼓を右腰に控える。以上の一連の動作を繰り返しながら前進して行くが、この道中の歩行速度は大変のろい。先頭の花馬役の動きに合わせて八人の太鼓打ちが一斉に同じ動作をするので見栄えがよいが、大変念の入った踏み方をするので進行には時間がかかる(例えば、花馬役は初めの階段に到達した時、同じ位置で七回踏み返した後にやっと第一歩を進めるという仕来りがある)。

宵宮祭りの前宮までのお練り

平成二十一年は雨天のためこれが中止となった。



宵祭りでの「原の森」のかけ太鼓



宵祭りでの「原の森」のかけ太鼓



宵祭りでのかけ太鼓の「道中」

本祭りの前宮の境内の「かけ太鼓」

十月十八日(日)、午前九時半過ぎから十時半頃にかけて前宮の庭で、前日宵宮祭りの満島神社(原の森)の境内にての項で記述した、ア、イ、ウ、エ、オの「かけ太鼓」の次第がここでも執り行われた。ただしウの祭礼唄のところは、「四方名所の唄」と「南の森の唄」であった点が異なっていた。



本祭りでの南の森「前宮」のかけ太鼓



本祭りでの「南の森」を出発

本祭りの満島神社までのお練りにおける「かけ太鼓」

十時半過ぎ、前宮石段を降り終わったお練りの一行、その先頭を切って「かけ太鼓」の一団は一路満島神社(原の森)へと向かった。途中三ヶ所のお旅所で休憩しながらお練りは歩を進めたが、「かけ太鼓」連中は路上で、前日満島神社の項で記したアの芸態を基調として演じ、時にウの「四方名所の唄」の次

第やエの「道中」の足運びを見せた。その他にも「十六」の足運びをも見せたので、その「十六」の芸態の詳細を左に記しておく。

まず「道中」の時のように右足、左足と順次外側へけり出した後、太鼓を右腰に控えてから太鼓を一打ちドン、続いてドンドンと早打ち二つする。次いで一歩前へ運んで太鼓を内股に控えてからドンと一打ち。引き続き「道中」の時のように左足、右足と外側に蹴り出してから、左足、右足、左足の順で歩を前に進めて止まり太鼓を腰に控えてから一打ちドン。次いで三歩前進しつつ一打ちドンと引き続いての早打ち二つドンをするが、これを三度繰り返す。次いで左足を一歩前へ進め運び太鼓を腰に控えて一打ちドン。以上の七折りの手を三度繰り返す。



本祭りで平岡駅前でのかけ太鼓



本祭りでの「十六」

本祭り満島神社境内での「かけ太鼓」

「かけ太鼓」の一同は午後五時過ぎ、満島神社の参道下から出発し、時間をかけて「道中」を行いながら神社境内の方に登る。六時過ぎそれを登り切り、後列の「宿入れ」の獅子神楽、大名行列その他のグループも境内に到着するのを待って、彼等は前日宵祭りの時と同様にア、イ、ウ、エの四次第を順次演ずる。前日と違っていているのは、ウの祭礼唄の歌い踊りの次第が、「四方名所の唄」「原の森の唄」の後に「鎮めの唄」があったことだ。なおこの時の太鼓奏打と足運びは前二者の場合と同じであった。



本祭りで「原の森」へ登り始める



本祭りでの「原の森」のかけ太鼓



本祭りで「原の森」に戻ってきた
かけ太鼓

六 由来・変遷

満島神社の秋祭りのお練りは、明治四十二年神社合祀の際、北東の端に位置する原の森に満島神社を置くにあたり、地区内に不公平が生ずることから地区の繁華街に近い南西端の位置に満島神社の遙拝所「前宮」を造り、南の森と呼ぶようになった。そして明治末頃満島地区内にあった祭りや芸能を一つにまとめ、新しい次第や芸能をも付け加えて仕上げたのが今日の全体の行事次第であるという。この中の青年衆担当の「かけ太鼓」は、神社合祀前には一体どこの集落の伝承であって、それがいかなる性格の芸能次第であったかについては今は不明となっている。しかしながら、次のような理由から、天龍村の他地区に見られる伝承に類似の盆の「かけ踊り」がなんらかの経緯で満島神社の祭礼行事の中に組み込まれたものではないかと推定されている。ひとつは、「四方名所の唄」の歌詞が他地域の盆の「かけ踊り」の和讃の歌い出しの文句「東西し生まれ、おし生まれ、しずめて小唄を……」に範をとったと推察される。つま

り「四方名所の唄」の歌詞は、満島神社の周囲東西南北の名所を読み込んでおり、ここに「東西」が尾を引いていると考えられる。ふたつには前宮での「南の森の唄」の歌詞に他地域の「かけ踊り」の和讃で詠み込まれている「秋葉様」や「金比羅様」が入っている。さらには現在「かけ太鼓」と呼称しているが、昭和三十年頃までは「かけ踊り」と呼んでいたという伝承があるのである。

七 所見

当該伝承を即同じ天龍村神原地区の「かけ踊り」と同一のものと見なすことのできないことは既述の通りである。これは盆の供養行事に組み込まれたものではなくて、満島神社の祭祀行列の一パートとして位置づけられたものである。しかしだからといって、中村浩が『かけ踊り覚書』の中で、これを「つまりかけ踊りの一番衰退した形と思われた」とくさして記していたように全く取り上げるには足らない伝承と断ずるわけにはいかない。というのも中村氏自身もこれを下伊那のかけ踊りを考察する上において看過出来なかったのである。筆者もまた違った視点から見過すわけにはいかない伝承であると考ええる。一つには中村氏も指摘していたが、「四方名所の唄」「原の森の唄」「南の森の唄」「鎮めの唄」は盆の「かけ踊り」における和讃を近代風に改めた感があり、踊りかけて訪問した神社仏閣などを誉める「かけ踊り」の庭ほめのスタイルをとっている。しかも「鎮めの唄」は「かけ踊り」の引け踊りに通ずるものだろう。つまり伝統を引いた新展開の一例がここにあるということだ。二つにはこれも中村氏の指摘にあるのだが、「十六」という太鼓奏打の足運びの次第が、坂部や向方の「かけ踊り」で踊られて来た盆踊りの「十六踊り」に通ずるものがあるだろうという点である。盆踊りと太鼓奏打の足運びと様相を異にはしているが、名称のこの共通性はおそらく拍子が似ているからではないかと推察する。いずれにしても下伊那のかけ踊の芸態の異同についての議論がこれまでほとんどなされて来なかったが、芸態においてもまた、同種のものの継承や新たな展開が行なわれていることを如実に示唆している事例のように思う。三つめは、旧来の伝承を新しくする過程で見栄えのするかたち、というか変化する時代になん

とか命脈を保てる芸態を創り出していたことが窺える。そのことは「道中」の次第において左右の足を交互に外側へ蹴り出す振りに現れている。あるいはこれは大名行列の奴の歩行振りあたりにヒントを得たものかもしれないが。ともあれ、これを演じた太鼓打ちの青年衆はこの歩行振りにおおいに神経を払っていたし、またこれが一般見物客の目をも魅するものとなっていた。

八 文献・記録

- ①『天龍村史』（天龍村 二〇〇〇年刊）所載の「満島神社のお練り」
- ②郊戸八幡宮宮司遠山景一氏提供「満島神社の由来」
- ③「満島神社氏子青年打ち合わせ会決定事項について」（平成二十一年八月三十一日）
- ④小岩秀太郎調査員の聞き書き

九 詞章

（「満島神社掛け太鼓」歌集より）

一、四方名所の唄

東は熊伏 秋の月 西には名高き 川がある
其の名も清き 天竜川 南は精進 滝がある
北には十方 峽がある 四方名所の その中に

二、原の森の唄

今日は目出度き 祭礼で この森はるかで 来て見れば
さても立派な 御鳥居は 檜造りで さて美事
檜樫や 松や杉 数多の雑木が さて美事
御庭をはるかで 眺むれば 四方四角で その中に
さても立派な 神楽堂 八段登りて 眺むれば
右手の方には 社務所あり 左の方には 宝倉
さても立派な 松の木は 久通宮殿下の 御手植よ
三十二段の 石段を 登りてこの宮 眺むれば
檜づくりで さて美事 森誉め宮誉め 誉め置きて
祭礼踊りを 上げませう 満島神社へ 一踊り

蚕玉様へも 一踊り 御稻荷様へも ひと踊り
満島神社の 御待ちかね 悪事災難 無きように
傘が揃たら 若い衆 笛や太鼓で 引き出す

一、南の森の唄

今日は目出度き 祭礼で この森はるかで 来て見れば
さても立派な 御鳥居は 檜造りで さて美事
御庭をはるかで 眺むれば 桜を植えて さて美事
檜樫が 又美事 美事御庭の その中で
祭礼踊りを 上げませう 山の神へ 一踊り
秋葉様へも 一踊り 金比羅様へも 一踊り
満島神社の 御待ちかね 悪事災難 無きように
傘が揃たら 若い衆 笛や太鼓で 引き出す

一、鎮めの唄

当座鎮まれ 御鎮まれ 鎮めの御唄を 上げませう
この場において 神々へ 御礼踊りを 上げませう
細かに申せば 程長く 漏れ無きように 御受け取り
御礼踊りは これまでで 神々様へも 残り無く
御立帰りを 願います 御別れ惜しくも 我々が
鳴り物鎮めて 座を作り 御手を叩いて 花を取る

中井侍秋例祭なかいざむらいあきれいさい（宿入り・道中囃子しゅくい どうちゅうばやし）

久保田裕道

一 名称

中井侍秋例祭（宿入り・道中囃子）

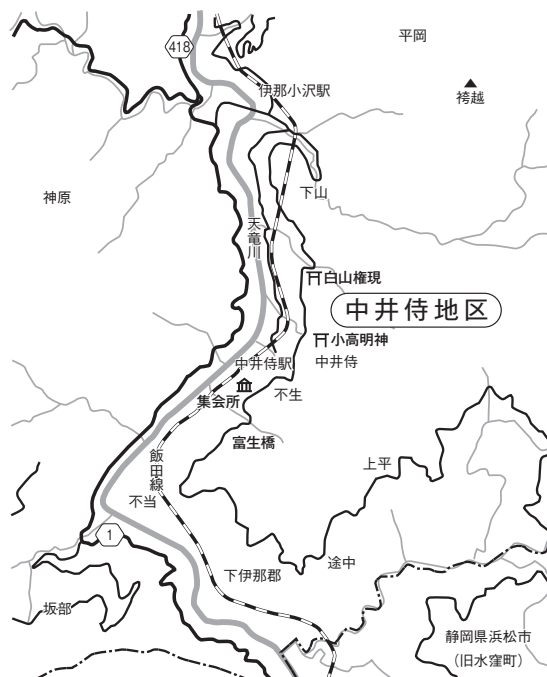
二 伝承地

長野県下伊那郡天龍村平岡中井侍地区

三 期日・場所

十一月末の土曜日（宵宮）・日曜日（湯立て祭り）
小高明神・白山権現（隔年交代）

*平成二十一年は小高明神で開催。



四 伝承組織

祭りの執行は、現在は「若連」が中心となつて行う。半被には「中組若連」と書かれているが、これは戦前から下山、中井侍、上平をそれぞれ中組上、中、下と呼んでいたことの名残である。若連といっても特に年齢制限があるわけではなく、八十歳代のメンバーもあり、実際には地区の男性が全員関わっていることになる。

現在では十九戸で約五十名の若連参加者がいる。これは普段は中井侍に居住していないとも、祭りになると帰郷する者も含めてのことである。お練の少女も、六名のうち三名は中井侍に居住していない。

祭祀の中心となるのは、「欄宜」と呼ばれる司祭者で、集落内に欄宜を代々務めたネギヤと呼ばれる家があった。しかし一時期、集落内で誰も欄宜を務めることができなくなったために、静岡県の水窪町（現浜松市）から欄宜を呼んで祭りを行っていた。この欄宜は中井侍の欄宜に教えを受けていたという。こうしてしばらく水窪の欄宜による祭りが続いたが、やはり地元で欄宜がいた方がよいということで、今度は水窪の欄宜より習って中井侍でも欄宜が復活した。



中井侍遠景



集会所から小高明神を望む

平成二十一年現在、二名の禰宜役がいる。ただし、禰宜は家族に不幸があった場合には、ブク（服）といって祭礼には関わらない。

また、祭りはかつて小高明神か白山権現と、十四所権現とを行き来していたが、開催地となった宮元の家では、供物から地面に敷くむしろまで、すべて自家で用意しなくてはならなかった。そのため近年、十四所権現の宮元（屋号が「お家」）が辞退するようになり、現在では白山権現の宮元である宮澤家（大屋）と小高明神の宮元である原田家（三河屋）とで受け持つようになっていく。なお、原田家は宮澤家の隠居分家であるため、実質的には両社とも宮澤家に関わっていることになる。屋号が三河屋なのは、三河から婿入りした者がいたためだという。

五 行事（芸能）内容

（一）次第

平成二十一年は宵宮が十一月二十八日（土）、本祭が翌二十九日（日）となった。以下、時間を追って記す。まず準備は、二十八日の午後に行われる。この年は小高明神に集まり、十六時前には終了し、銘々は一旦自宅に帰った。なお、祭りに先立つ練習は特に設けられていない。参加者が集まった際に集会所で行う場合もあるといった程度である。



宵宮（小高明神社殿）



宵宮の「宿入り」

十九時三十分をまわると小高明神に人が集まり出す。二十時ちょうど、社殿前で太鼓が叩かれ、続いて社殿前の小さな広場にしつらえられた囲炉裏の周囲を、太鼓役が取り巻いた。大傘は社殿に近い方に立ち、笛は反対に社殿に遠い側に並ぶ。まず最初は「宿入り」。「東西しずまれ、おしずまれ」まで歌うと、「そーれい」と合いの手が入り、続けてもう一度「東西しずまれ、おしずまれ」と歌うと、今度は「ひょーう」合いの手を叫んでから笛・太鼓が入る。続いて「しずめて踊りを出しませう」「そーれい」「しずめて踊りを出しませう」「ひょーう」でやはり笛・太鼓というように、各歌詞を二回ずつ歌う。そして、そのまま同じメロディで「宮ほめ」に移る。これも同様に「はるかに」お宮を 眺むれば「そーれい」「はるかに」お宮を 眺むれば「そーれい」「はるかに」お宮を 眺むれば「ひょーう」、笛・太鼓、「檜ぞろり」で「そーれい」「檜ぞろり」で「そーれい」「檜ぞろり」で「そーれい」「ひょーう」と各歌詞を二回ずつ繰り返して笛・太鼓を挟む構成になっている。

二十時八分、「宮ほめ」が終わると、太鼓役は太鼓を首から下げて叩きながらの行進となる。ここからが本来の「宵練り」である。御神体の入った木箱を先頭に、太鼓と笛が入り交じって列を為す。この時は大傘と神輿は軽トラックに載せた。この時は道中囃子で、二曲あるために途中で変えながら進行する。



宵練り（道中囃子）



小高明神を後にする「宵練り」



富生橋を渡る「お練り」



山間を進む「お練り」



「お練り」

翌二十九日は、十二時前に集会所に少女たちが集まり、着付けを行う。十二時近くなると、一行は不生^{ふしう}にある富生橋^{ふしやう}の南側に集まり「宿入り」「宮ほめ」を行う。それが終わると橋のたもとで花火が打ち上げられ、道中囃子が始まる。



不生での「宿入り」



不生での「宿入り」



富生橋での花火

二十時三十三分、集会所に到着すると一階部分のシャッター前にあるコンクリートのスペースで、再び「宿入り」「宮ほめ」を小高明神同様に行う。この時には大傘役は再び大傘を持ち、歌を歌うことになる。こうして二十時四十二分に終了となると、宵宮は終了となる。



宵練り（道中囃子）



集会所「宿入り」

集会所を出発、道路を進んでゆき、傳法橋を渡って中井侍に入る。小高明神へ上がる道の分岐にさしかかる手前から、二度目の「笠くずし」が始まる。十三時十分から十三時十八分まで。その後で休憩。十三時三十分、分岐点から小高明神を目指して道中囃子で上り始める。ここから踊りの少女の後に御神体



集会所を出発



お練り

橋を渡って進んできた一行は、十二時十七分、家があって見晴らしのよい地点まで来ると「笠くずし」を踊る。「笠くずし」では、歌の部分は実際には「一ツ人目をしのぶには女心や吉野笠吉野笠吉野笠女心や吉野笠あーそれぞれえ、よいとせえ」と歌い、太鼓と笛に移る。この時、踊りは歌の時はゆっくりと前進し、太鼓と笛の部分で左右を向き変えつつ手の幣を振って踊る。十二時三十三分、笠くずしが終わって休息になる。五分程度休んですぐに出発。次は最初の集会所に戻って十二時四十五分～五十五分が休憩。



笠くずし

行列先頭は白丁姿の「塩ばらい」で、続いて踊りの少女、そして太鼓・笛が続く。その集団の前より笠役が笠を持って進む。その後ろに神輿などを載せた軽トラツクがゆっくりと続き、さらにその後方に旗を持った婦人（踊りの少女の母が多い）がついた。本来は旗は「露払い」と称して、男子が担い、先頭をゆくものであったという。

それが終わると十三時四十七分、小高明神前の囲炉裏のある祭場へ入る。囲炉裏の周囲で、「宿入り」「宮ほめ」を踊って十三時五十七分、終了。これ以降は、湯立て神事及び神楽の行事となる。最初に「火起こし」に始まって「湯立て」「湯伏せ」「湯祓い」が行われ、「津島の舞」「剣の舞」の二舞が演じられた。またその間、境内に設けられた囲炉裏で里芋が焼かれ、参加者にふるまわれる。そして最後に「神返し」「注連切り」を行うと、周囲のザセチなども参加者が銘々に剥がしてゆく。



小高明神の手前で「笠くずし」

の木箱を持つ者が加わり、その後ろに大傘、笛・太鼓と続く。こうして上ってゆき、一番上の原田家の庭を通って茶畑の間の細い道をゆくと、小高明神前に幟旗が二本立てられている。十三時四十三分、そこを過ぎたあたりで三度目の「笠くずし」となる。



小高明神へ登る「お練り」



茶畑を進む「お練り」



茶畑を小高明神へ向う



餅まき（おくよう）

十五時三十分、一連の湯立て神事が終了すると、最後に社殿に向かって右の水神の祠側からの餅まきがあり、すべての行事が終了となる。この餅まきのことを「おくよう」とも言う。その後一部を片付け、本格的な片付けは翌日の朝から行われる。ただし、この年は翌日が雨だったために片付けも延期された。



湯立ての釜



ザセチ



湯立て神事「火起こし」



湯立て神事



剣の舞

(二) 扮装・楽器・道具など

太鼓

古くは皮を張った太鼓がなく、石油缶や酒樽・醬油樽。味噌樽も叩いたというが定かではない。現在のような太鼓は大正期からではないかとも言われている。

現存する太鼓の中で最も古いのが大太鼓で、踊りだけではなく、湯立て神事にも用いられる。この大太鼓だけは戦前から使われていたもの伝えられている。直径が55cm、胴の長さが44cm。桴は長さ26・5cm、直径が元3cm、先2cm。残りの小太鼓は、佐久間ダム建設の際の報奨金で購入したものが多い。小太鼓は、直径34・5cm、胴の長さが14・5cm。桴は長さ27cm、直径は元が2・3cm、先が2cm。別の桴は長さ31・5cm、直径は先が1・8cm、元が2・0cm。購入前には、中井侍の南にある上平の集落から借りてくることもあったという。



大太鼓



小太鼓

大傘

歌役が持つのが朱の大傘。柄の長さ141cm、骨の長さが67cm。骨の末端には高さ31cmの黄色い布が一周ぐりとつけられ、そこに歌の歌詞が墨書してある。かつてはもっと多くの歌詞があったが、歌本が失せた後は、ここに書かれた歌詞だけが伝えられている。



大傘の持ち手



大傘

扮装

基本的に参加者は紫色の「中組若連」の半被を羽織っており、他は普通の洋装となる。踊り手は、きらびやかな振袖を銘々で着ているが、帯は「三尺」と呼ばれるものを用いるが、色が黒で統一されている。なぜ黒い帯を使うのかについては定かではない。頭には頂点に紙の花をつけた花笠を被り、右手に幣、左手に扇を持つ。足には草履。

この他、神輿を運ぶ軽トラックの運転手と祭祀をおこなう禰宜役は、白丁を身にまとい、烏帽子を被る。この役は湯立て神楽の際に湯立て神事や舞を行うが、本来は、現在上からはおつている「舞帷子」が伝統的な衣装とされており、背中に大きく「奉献各神社」と墨書されている。神輿はかつては人が運んでいたが、携わる人間が少なくなつてトラックに載せて運ばれるようになった。

(三) 演目・芸態

太鼓踊りの演目は大きくは三つに分けて考えることができる。第一は、行列が出発する際と到着した際に演じられる「宿入り」「宮ほめ」の踊り。これは「宿踏み」とも言われるという。第二は「道中囃子」と呼ばれる、道行の囃子。第三は道行きの途中で演じられる「笠くずし」の踊り。

太鼓

「宿入り・宮ほめ」では、小太鼓は左手で胴の紐を持って右脇に抱え、右手は桴を持って添える。「よーっ」の声でその太鼓を左に持っていくドン、右に持っていくドン、左に持っていくドン。このドンドンの時に足を後方に伸ばして身体を低くする。

大太鼓は、左手で胴の紐を掴んで、そのまま左に下げている。右手は桴を持つてぶらりと下げている。

「東西しずまれ、おしずまれ、そーれい、東西しずまれ、おしずまれ」の時は、足を交互に前に出し、普通にゆっくりと回る。この時は反時計回りである。続いて「ひょーう」の掛け声の後に「ひゃらードン、ひゃらードン、ドンドンドン、それ、ドンドンドン、ドンドンドン」(「ひゃらー」は笛、「それ」は掛け声)

と叩き、次の歌に入る。この繰り返しである。最初の「ひょーう」の声の時に右足を軸に左足を後ろに下げドン、続けて左足を前に踏み出すと、その足を軸に右足を後ろに下げてドン、これを繰り返す。

「道中囃子」と「笠くずし」では、太鼓を首から下げているので、これを叩くだけの所作となる。

踊り

子どもが大人について一緒に足を踏むのは、昭和の初期に始まったものではないかと言われている。「宿入り」「宮ほめ」の際には、太鼓にあわせた動きになる。「東西しずまれ、おしずまれ、そーれい、東西しずまれ、おしずまれ」の時は、足を交互に前に出しながらの前進。「ひょーう」の掛け声の後に太鼓にあわせてまずドンで左足を左側に曲げて踏み出し、その足を軸に次のドンで右足を回すようにして揃える。身体の向きも輪の内側を向くようになる。次のドンでは右足を外側に向けて踏みだし、さらに次のドンでその足を軸に左足を回してきて揃える。今度は身体の向きが外向きになる。なお、右手に幣束、左手に閉扇を持っており、歌で前進の際には右手の幣を上下に振り、「ひょーう」の後には足を踏み出して揃える毎に身体の前で輪を描くように幣を大きく降る。

「笠くずし」の際には、右足を進行方向左横に踏みだして左足を添える、次に右足を進行方向右横に向け、左足を添える。これで道の左右を交互に向きながら踊ることになる。

笛

特に動きはない。笛は六孔の篠笛を使う。基本的には六本調子が多いが、かつては七本調子が多かった。六本と七本が混ざると音がバラバラになってしまうが、六本の中に一人でも七本がいると音が整うという。曲の調子は平岡（満島）よりも早いとされる。

六 由来・信仰

由来については不明である。湯立てを行うことから、「湯立て祭り」の名で

も呼ばれてきた行事である。湯立ては、周辺の霜月祭で行われるものに類するが、現地では湯を立てて不浄を祓うといった意味があると伝えられている。その湯立ての祭りになぜ太鼓踊りがつくのかについては、特に説明はない。かつて盆の時期にそのような踊りがあったとも伝えられておらず、由来、伝来毛色ともに不明である。ただ、中井侍の南の上平、あるいは宇連という地区には同様の太鼓踊りがあったというが、現在は廃絶している。

一方、祭場となる小高明神・白山権現、そしてかつて祭場となっていた十四所権現であるが、それぞれの社の由来についても判然としていない。中井侍は、その中がさらに三つの集落に別れていて北から中井侍、不生、不当^{ふとう}となるが、白山権現と小高明神が中井侍、十四所権現が不生に属する。小高明神は、古高明神とも書き、どちらが正しいのか判っていない。ただ、幟やザセチなどに書かれている文字は「古高」を使っている。小高社は、社殿の中にやや大きめの小祠を中心として、左右に二つずつ、五つの祠がある。祭神については知らない者も多く、この時の調査では明らかにできていない。社殿の裏手に回ると小さな祠があり、これは「若宮」と呼ばれている。社殿の右手の高くなったところには、さらに小さな祠があつて、ここに「水神」が祀られている。

なお、秋の湯立祭りの他に大正、昭和初期にかけては「お清めの祭り」と呼ばれる臨時祭もあつたという。これは多くの舞を有するために昼過ぎから真夜中までかかったという。



湯立て神事



囲炉裏と湯立ての釜

七 変遷

祭りは、戦時中から戦後にかけて一時中断したことがあったが、宮澤和己氏の尽力によって古老から話を聞いて復活させた。

祭日は、現在は十一月末の土曜日・日曜日を当てているが、平成十年までは十一月二十三日であった。また戦前は十一月二十五日が祭日であったという。さらに明治以前は旧暦だったはずだが、日付ははっきりしていない。またかつては本祭の翌日を「宿の祭り」あるいは「あと祭り」「勘定祭り」などと称して、祭りの片付けを兼ねて酒を飲みながらの慰労の行事があったという。道中練りの踊りなども、その時に娯楽として踊られ、それが練習の場にもなっていた。



小高明神社殿



白山権現の鳥居

祭場に関しても大きな変遷がある。古くは地区内の五社程度を順に回って行つたとされる。例えば不生から天竜川方面に下ったところに「新開祖^{しんがいにそ}」という一軒だけの地域があり、皇大神宮が祀られ、そこでも祭りをしたという。ただし、どこで行う際にも、練り歩くのは不生と中井侍の間だと決められていた。やがて後に白山権現、小高明神、十四所権現の三社持ち回りとなって続き、現在は白山権現と小高明神のみが舞台となる。

祭りに集まる人々をもてなすためには、少なくとも三、四品の料理がなくては重箱に詰めることもできない。そこで宮澤氏が一計を案じ、里芋を串に刺してクルミ味噌をつけて焼いてふるまうようにしたのが約二十年前のことである。それが好評となって、現在では「いも祭り」の名で呼ばれるようになった。



小高明神祭場に入る少女たち



団炉裏端の里芋

所役について、少女による「お練り」は、戦後始めたもの。戦前は、小学生の男子児童が女性の着物を着て同行したという。戦後、少女の少ない時には、男子が女装して踊ったこともあったという。また、現在は練りの途中二ヶ所では「笠くずし」を踊らないが、本来は道中ずっと「笠くずし」を歌っておどらなければならなかった。

傘は、戦前からあったはずだが、古い時代にはなかったかもしれないと言われている。この他、現在行列の出発時に打ち上げる花火にも伝統があつて、昭和初期から木筒による花火の打ち上げを行っていた。

津島の舞

なお、湯立神楽については、平成二十一年には「津島の舞」「剣の舞」しか演じられなかったが、本来はさらにいくつかの舞がある。前段儀礼の「浜水注ぎ」「火起こし」「神寄せ」に続き、「五方の舞」として「笹の舞」「紙の舞」「五方の舞」があり、続いて「湯立て」「湯伏せ」「湯祓い」を行ってから「津島の舞」「剣の舞」「扇の舞」「幣の舞」と続いて最後が「舞い納め」。舞い納めでは剣、扇、幣のどれかを持って舞う。そして「神返し」「注連切り」「火伏せ」で終了となる。



八 所見

中井侍は、落人が開いた村だとされている。古くは焼畑主体の生業であった。米はほとんど収穫できず、麦や粟が主体であって、正月の餅もモチアワで作っていた。その後、戦前には楮を栽培し、紙にしたものを出荷するようになった。しかしバルブによる製紙が増え楮の需要が減ったために、再び麦や粟などの畑作に戻る。戦後になって昭和三十五年から、その気候を利用して茶の栽培が始まり、中井侍の銘茶として現在に至っている。

戸数はかつて三十戸ほどあったが、現在では十九戸。現在、集落の中ほどを林道が南北に通っているが、この林道は戦後作られたもの。それまでは、宮澤家のある位置に細い山道が通っているだけの交通事情であった。ただし昭和十一年に中井侍駅が開業した後は、鉄道を使って町に出ることはできた。なお、駅名は当初「なかいざむらい」であったが、交渉して「なかいさむらい」に変わったという。

ここでの太鼓踊りは、記憶されている限りにおいては、盆に踊られたことはないという。盆には戦前には各集落で盆踊りが踊られた。盆踊りは新野と同じものとされる。戦後は過疎になったため、神原地区倉ノ平にあるニセンジ公園（かつて仁善寺があったと伝えられる）に十二地区が集まって「夏祭り」として盆踊りを始め歌謡ショーなども行うようになった。なお、地域の旦那寺としては平岡の自慶院があるが、太鼓踊りや盆踊りには特に関係しない。

九 記録・文献

①『天龍村史』二〇〇〇年

十 詞章

かつては紙に書いたものがあったが、いつしか紛失され、大傘に書かれた歌詞だけになってしまった。したがって、実際に歌うのも傘に出ている歌詞だけとなっている。

「笠くずし」

一ツ人目を しのぶには 女心や 吉野笠
二ツ深川 越えて来て 一夜も逢えずに 別れ笠
三ツ見もせぬ 客さんに 上れ、およれの 遊女笠
四ツ夜な夜な 門に立ち 人がとがめりや 隠れ笠
五ツ今迄 通い来て いまじや心が 変り笠
六ツ 紫小紫 顔にちらちら 紅葉笠
七ツなじまぬ 客さんに 上れおよれの 遊女笠
八ツ山城 身のおわり 愛をへだて、 おおみ笠
九ツ今宵の 客さんは 風にゆられて ゆられ笠
十で常磐の 待つ君は 客にもまれて もまれ笠

「しゆく入」

東西しづまれ おしづまれ
しづめて踊りを 出しませう

「宮ほめ」

はるかにお宮を 眺むれば
檜ぞろりで さて見事
お宮のまわりを 眺むれば
千年古木で さて見事
お宮のお庭を 眺むれば
四方四面で さて見事
此の世のお宮で ひと踊り

なお、道中囃子に歌はつかないが、かつてはその音曲にあわせた文句があったという。例えば出だしは「おらがいの、手水鉢叩いてお金が出るならば…」などというものであった。

ぬくた
温田の
くれきおど
樽木踊り

— 名称

温田の樽木踊り

二 伝承地

長野県下伊那郡泰阜村温田地区

三
期
日・場
所

毎年八月第四土曜日（日曜奉祭）（平成二十一年度は二十二日（二十三日））
南宮神社秋の祭典・お祭り広場（平成十九年から）・南支所多目的センター・
お稲荷様鳥居前・本宮・南宮神社



中村茂子

四 傳承組織

传承团体名

温田南宮神社氏子会（平成二十一年度 区長 宮内銀太郎・氏子総代長 高橋寛・総務 中島重行・神社担当 秦 正則・会計担当 久保田益司・南宮神社全氏子）

歴史的には、昭和二十八年発行の冊子『南宮神社 くれき踊り唄』に、「くれ木踊り保存会」と記されていることから、当時から保存会が組織されていた可能性はある。しかし、平成十年に、当時の氏子総代長であつた高橋勲夫氏（昭和七年生）の呼びかけにより、改めて規約を作成し、保存会を結成した。保存会員として三十六名が名前を連ねた名簿が残されているが、十年足らずで解散したまま現在に至っている。

費用は、区費より捻出（一戸七五〇円を毎月積み立てる（温田一一八全戸（含む外国人）・十一班の班長が毎月集金する）。行政からはご祝儀程度を受けている。

五 行事（芸能）内容

(一) 次第(平成二十一年八月二十二日)

午前八時、基本的に各戸の戸主が多目的センター広場に集合し、「お庭草（踊りに使用する用具の準備をする）」を行う。十一時五十分に終了。

午後二時、区長・氏子総代長以下、役員・榎木踊りの踊り手・来賓（泰阜村村長・学校の先生・その他）が多目的センターに集合し、挨拶の後「榎木踊り



南宮神社



本宮



南支所多目的センター



お祭り広場

気負い酒（酒宴）」を行う。



お庭草



お庭草



気負い酒

午後二時四十五分、お祭り広場で「お祭り広場の踊り」を踊る。踊りの一行は、すぐに行列を整えて笛吹きの子「渡り拍子」「そそり」につれて坂道を下り、村道添いのお稲荷様へ向かう。行列次第は、次の通りである。

① 南宮神社の旗 ② 赤張り提灯（赤い紙が貼られた弓張り提灯）1張 ③ 切子灯籠5本（白1・青2・赤2） ④ 柳1本 ⑤ 音頭2人（含む継承者） ⑥ 笛9人（大人2・3人・他は中学生） ⑦ 太鼓4人（大人1人・他は中高学生） ⑧ 鉦4人（中学生） ⑨ 熊野神社旗（本来は各社の旗多数が加わる） ⑩ 氏子衆の順序である。

午後三時十分、お稲荷様鳥居横の道路で「お稲荷様鳥居前の踊り」を踊る。終了後、婦人たちが準備していた飲み物をいただく。再度行列を整えて県道を渡り、天竜川に架かる南宮大橋の袂に鎮座する南宮神社本宮へ向かう（本宮は南宮大橋架橋の際、現在の場所へ移転した）。

午後三時三十分、狭い本宮境内では小さな輪を作り、ほとんど所作無しで「本宮前の踊り」（約十分間）を踊る。終了後行列の順序は乱れ、諸役が県道沿いの商店先に準備された飲食物を思い思いに頂戴しながら、降りてきた坂道を逆に登り、お祭り広場の脇を通り過ぎて、さらに高い位置にある南宮神社鳥居前に到着する。

午後四時、「南宮神社鳥居前の踊り」を終了後、さらに参道の坂道を登って南宮神社拝殿前へ到着し、午後四時二十分、「南宮神社前の踊り」（約十



お祭り広場の踊り



お稲荷様鳥居前の踊り



行列



本宮前の踊り

分）を踊る。終了後、諸役がそれぞれの道具を持って、一旦お祭り広場まで戻り、道具を広場脇に置くと、中休みになる。

午後五時三十分、祭礼役員・中高生などが多目的センターに集まり、夕食をとる。

午後六時～六時三十分、南宮神社拝殿にて神職、役員（十人程）が宵宮の神事を実施する（祓い詞・一同修祓・四人の伝供による献饌・祝詞奏上・玉串奉奠・撤饌など）。

午後六時四十五分、お祭り広場に集合して「笠破き」が踊られ、すぐ道具類

が多目的センター一階に設置された倉庫に収納される。
午後七時十五分、子供たちを中心に線香花火などを大人もいっしょに楽しんだ後、専門家が「中国花火」を打ち上げ、午後八時から多目的センターで直会があつて、「樽木踊り」は終了する。

翌日（八月二十三日）には本祭が行われた。



南宮神社へ向かう行列



南宮神社鳥居前の踊り



「渡り拍子」で神社参道を登る



南宮神社前の踊り



南宮神社拝殿内宵宮の神事



お祭り広場「笠破き」



「中国花火」の打ち上げ

(二) 扮装・楽器・道具 扮装

①揃いの浴衣（白地に「南宮神社」「くれき踊り」の文字を藍染で意図的に無秩序に並べた模様）・黒の兵児帯・菅笠・素足に草履をはく。主として年配の人々の扮装である。

②祭り半纏（青地に腰の部分格子柄に白く染め抜き、背中に赤字で大きく「祭」と染め出し、黒襟を掛けた左側に「南宮神社」、右側に「くれき踊り」と白く染め抜いてある）・ズボン・スニーカー・菅笠は、主として鉦・笛の中学生の扮装である。

楽器

③後ろに従う氏子の中にはズボン・シャツ姿の人々が多い。

①締太鼓4（大太鼓1・中太鼓2・小太鼓1）

大太鼓↓直径60cm・内側（打面）48cm・胴の長さ48cm・胴を締める杵8cm
杵（桐材）長さ47cm

中太鼓↓直径52cm・内側（打面）40cm・胴の長さ43cm・胴を締める杵7cm
杵長さ46cm

小太鼓↓直径37cm・内側（打面）29cm・胴の長さ29cm・胴を締める杵3cm
杵の長さ39cm

②鉦4（大1・中2・小1）

大鉦↓直径23・5cm

中鉦↓直径21cm 20cm

小鉦↓直径17cm

③笛 15本（各自が所有）長さ42cm・七穴



鉦



大太鼓



太鼓杵



中太鼓



締太鼓

道具

① 旗8本↓長さ3・5m余・太さ5cm弱の竹竿に白木綿並幅3m弱の布地に、神社名を黒字で書いたものと、紺地の布に白で染め抜いたものの二種類がある。当日準備された旗は「南宮神社・多賀大明神・塩竈大御神・八幡大神宮・津島牛頭天王・本宮神社・諏訪大明神・熊野白山大権現」の八本であつたが、他にも多数の旗が存在するという。

② 弓張り提灯1張（赤「南宮神社」と黒字で書かれている）

③ 切子灯籠5張↓長さ67cmの細い棒の中心に、麻葉模様を切り抜いた和紙を貼った灯籠を下げ、その両脇に灯籠に貼った和紙と同じ色の長い紙垂を、灯籠の本体が見えなくなるほど多く下げた華やかなもの。白1本・赤2本・青2本



切子灯籠

④ 柳1本↓長さ3m余、太さ10cm程の竹竿の先端に長さ50cm程藁を巻き付け、そこへ白い短冊を多数貼り付けた割竹約50本弱を刺し、枝垂れ柳のように作る。藁の先端には白い御幣を立てる。



柳

(三) 演目・芸能

平成二十一年に行われた現行「温田の樽木踊り」演目は、以下の通りである。

- ① 「お祭り広場の踊り」↓行列
- ② 「お稲荷様鳥居前の踊り」↓行列

③ 「本宮の踊り」↓行列

④ 「南宮神社鳥居前の踊り」↓行列

⑤ 「南宮神社前の踊り」↓（中休み・夕食・南宮神社拝殿の宵宮神事）

⑥ 「笠破き」（お祭り広場）↓花火・直会

平成七年頃までは、踊り宿を務めていた相戸^{あいど}（原田家）の庭で「相戸の庭」を踊り、宿から行列を繰り出して、お練りの道筋に祀られている祠堂を拝し、褒め称える歌と踊りを奉納して、最終的に南宮神社に到着した。「南宮神社前の踊り」のあと中休みとなる。夕食後宵宮の神事に続いて、平成十九年までは南宮神社の庭で「笠破き」が踊られていた。平成二十年は大雨に降られ、「南宮神社鳥居前の踊り」を踊っただけで、「南宮神社前の踊り」は中止になった。平成二十年は、番外的に新しく使用できるようになった「お祭り広場」で「笠破き」を踊ったが、二十一年には「お祭り広場」で「笠破き」を踊るのが以後の恒例になりそうな様子であった。かつて、踊り宿から南宮神社までの行列の途中で歌い踊った祠堂の名称は、「御薬師様」「天王様」「夏焼上の山の神」「大古平峠」「権現様」「金比羅様」「御稲荷様」である。これらが記された踊り歌は、昭和二十八年と平成十三年に「くれ木踊り保存会」名で発行された『南宮神社くれき踊り唄』（文献①②）によって知ることができる（十 詞章（115頁）踊り歌参照）。

平成二十一年八月二十一日に踊られた踊りの中で、「南宮神社前」と共に広いスペースを有する「お祭り広場」の踊りについて、『南宮神社くれき踊り唄』（平成十三年三月 くれ木踊り保存会）の歌詞の後ろに付録として付された、「くれき踊りの手順」を参考として記す。この付録は、平成十年代の前半に温田樽木踊り保存会長であつた高橋勲夫氏が作成したものである（文献②）。

① 本来は行列を練って庭入りする（当日は、行列することなくいきなり「お祭り広場」の庭で配置についた。行列次第も、すでに記した当日のものと若干の違い（赤い切子灯籠が後方の神社旗の前に位置していた）が見られ

る)。

②踊りの輪(お祭り広場・南宮神社などの大庭の場合だけに以下の芸態が可能になる)。

柳を中心にして、笛と音頭が柳を囲み、その外側に踊り手である太鼓と鉦、さらにその外側に切子灯笼・旗・氏子衆が位置して、三重の輪になる。

③笛の前奏で踊りが始まる。

④笛が「そそり」「渡り拍子」の前段になると、太太鼓(踊り手の主役)が「サイッ」というかけ声をかける。太鼓打ちと鉦打ちが、輪の内側と外側へ交互に向きを変えながら楽器を打ちつつ順回りに踊る。輪の内側を向く時は、右足を輪の順廻り方向へ内向きに踏み出し、左足を右足に揃える。輪の外側を向く時は、左足を順廻り方向へ外向きに踏み出し、右足を左足に揃える。この時、中心の柳を支えている役が、柳を順回り・逆回りに交互に回転させる。

⑤歌が始まり、音頭が歌の一節を出すと、続けて全員が「エーハー……」というかけ声の後で、音頭と同じ詞章を繰り返す(歌が始まると踊り手は動きを止めるが、柳だけは静かに回転を繰り返す)。

⑥笛が「間奏」(歌一節ごとに入る)を吹く。

⑦歌の終わりは、音頭が「お末を申せば……」という詞章をうたい、全員「エーハー」ご祭礼踊りはこれまでぞ」と歌って終了する。

⑧笛が「間奏」を吹き、太太鼓の「サイッ」というかけ声で、笛が「渡り拍子」に変わり、二回目に太鼓のかけ声で「そそり」になる。

⑨この間に行列を整え、「渡り拍子」で次の場所へ移動する。

以上のような順序で踊り、広い庭で踊る場合の時間は、約十分である。

六 由来・信仰

泰阜村はかつて南山庄と称し、温田・大畑・田本・御佐野・漆平野・我科・野尾の七か村で構成されていた(『信州の芸能』による)(文献③)。現状からも推測できるように、典型的な山国であり、古くから山林の伐採が当地の主生

業であった。下伊那郡泰阜村「樽木踊り」(文献④)によれば、慶長六年(一六〇二)に幕府は伊那郡に天領を設けて樽木奉行を置いたが、伊那で「樽木奉行・樽木成村・樽木山」が確立するのは、寛永年間(一六二四〜四四)以後であろうという。「樽木祭り」が行われた六か村を併せた石高が、五百八十五石二斗八升三合であったことから、この祭りを「南山五百石祭り」と称した。樽木踊りは、年貢の代わりである樽木を完納したことを祝い、氏神に感謝して奉納する祭礼踊りとして行われるようになったという。上納の樽木は、主として屋根板として用いられる樫であった。『泰阜村誌』(文献⑤)によれば、樽木の上納は梅雨期の水かさが増した天竜川へ渡入し、管流しによって遠州へ流送されたと伝えられている。従って、完納祝いの祭礼時期は、梅雨明けの旧暦七月二十日に、山元の漆平野村を皮切りとして毎日順送りに踊り継がれ、梨久保の池野神社で踊り納めたという。踊りは各村の神社氏子によって行われ、一年間にわたる労役の末に無事樽木を完納できた喜びを氏神に報告したという。祭りを行った六か村とその順序は、以下の通りである。

旧七月二十日・漆平野村・小鷹神社、七月二十一日・我科村・八幡神社、七月二十二日・温田村・南宮神社、七月二十三日・大畑村・諏訪神社、七月二十四日・田本村・池田神社、七月二十五日・同村梨久保・池野神社である。「樽木踊り」は、年貢として樽木を完納できたことを祝い、氏神を初めとする神々に感謝して行う祭りに奉納されてきたものと伝えられている。しかし、伝承されている踊り歌の詞章には、樽木の完納を祝うばかりでなく、地区内のあらゆる神々・精霊にいたるまでを歌で褒め称え、踊りを奉納することで、「水難除け・火難除け・無病災難除け・獣の禍除け・害虫害鳥除け・悪魔外道の禍除け」などと共に、「五穀豊穡・蚕繁昌」を祈願している。そして祭りの最後に、氏神南宮神社の庭で「笠破き」を踊ること、氏子の災難除けと祈願成就を願い、神々の依り代である柳の先端につけた御幣を集めた全ての神々・精霊を踊りに巻き込んで移動させ、氏神の庭へ祝い鎮める呪いを完了するのである。この祭りが、かつて五つの地区で一日送りに日をずらして、次々に「樽木踊り」を行っていた事実は、「南山五百石」と称された地区全体で、きめ細かく荒ぶる神々

を氏神に祝い鎮め、来年も樽木を完納できる禍のない平和で豊かな村である約束が完了し、果たされると信じられた故であろう。

七 変遷

樽木踊り創始の年代については、鎌倉時代に検視役人が鎌倉から来て、天竜川河畔の南宮島で材木改めを行った時以来という伝承がある。また、樽木踊り歌には「鎌倉」についての詞章も見られるが、踊りの芸態は室町時代末期から江戸時代初期にかけて、京都を中心に大流行をみた風流踊りを継承したものである。風流踊りとしての樽木踊りの用具は、輪踊りの中心に立てられる柳、その外側に位置する華やかな色彩の五張の切子灯籠と笛、さらに、それらを囲んで踊る太鼓打ち・鉦打ち、その外側に並ぶ多数の神社旗である。風流踊りの大きな特色を示すこれらの用具は、天龍村や阿南町に伝承されている盆の「かけ踊り」「念仏踊り」とも共通している。これらの踊りは風流としての用具ばかりでなく、踊りの構成、技法、音楽、踊り歌といった芸態全般にわたっても、共通部分が多い。「樽木踊り」が、周辺地域の「かけ踊り」「念仏踊り」と決定的に違うのは、その信仰的な部分と、かつて、祭りを行っていた五地区が日を追って踊り継いでいく形式だったことである。

この形式が五地区全てで伝承されていた時期が、何時頃まで継承されていたかは、すでに不明である。昭和六十三年四月に発行された向山雅重著作集『山国の生活誌』第四卷「山国の四季」には、「南山の樽木祭り」という記述があり、「今、漆平野・温田・梨久保に伝えられている」と記されている（文献⑥）。しかし、『日本のまつり』（ぎょうせい）からの転載であり、実際には何年の記述かを確かめることができなかった。梨久保の踊りが、平成十七年を最後に行われなくなり、平成二十一年現在では、温田の「樽木踊り」が唯一の伝承となっている。文献④によれば、温田の樽木踊りは本来、地区を切り開いた家である相戸家（原田氏）を踊り宿として準備を調べ、夕刻「気負い酒」の後に庭で「相戸の庭」を踊った。「相戸の庭」の踊り歌には、「鍛冶屋と関屋の山の神」「山住様へも差し上げる」という詞章が見られ、これらの神々に氏子の無病息災と

蚕の繁昌を祈願し、さらにお礼を述べる歌を歌い、踊りを奉納しているのである。相戸家から行列を繰り出し、「御薬師様」「天王様（御津島様・おおさき・きみさき・山の神）」へ踊りを奉納し、「夏焼上の山の神」「大古平峠（伽藍姫宮山の神・しし岩様）」を経て、日没頃「権現様」へ到着したところで踊りを中断し、各自自宅に帰って夕食を取る。夕食後、再び「権現様（熊野白山大御神）」「金刀比羅様（天神様・秋葉様）」「御稻荷様」の踊りを済ませると、南宮神社「本宮」（かつて南宮島にあり、平岡ダムができて戦時中に現在地へ移転）で奉納し、ようやく「南宮神社」で踊った。神職による祭事後花火があり、直会の後に「笠やぶき」が踊られた。地区内に祀られている全ての神々（二十余）に落ちのないうよう踊りを奉納し、午前零時過ぎに終了したという。相戸家から行列を出さなくなったのは、平成七年頃からであるといい、また平成二十年は雨のため「南宮神社前の踊り」を踊らずに引き上げ、二十年からは多目的センターの庭に設置された「お祭り広場」で「笠破き」を踊った。平成二十一年の場合も、前年の例を継承して南宮神社の庭で「笠破き」を踊らずに、お祭り広場で踊ることになった。

八 所見

「樽木踊り」は風流踊りの一種であり、その芸態は周辺地域の天龍村・阿南町に伝承されている「かけ踊り」や「念仏踊り」と、多くの点で類似している。「かけ踊り」・「念仏踊り」との大きな違いは、一つは、氏神の祭礼に奉納される祭礼芸能として奉納されていること、もう一つは、かつて五地区で日を追って踊り継いでいく形式であったことである。したがって、大きな特色を示す後者は、梨久保で行われなくなった平成十八年以前よりさらに前、日を追って行われなくなった時点で消滅したことになる。現在の伝承地は温田のみであり、ここでも様々な点で年々、変化・退化する方向を余儀なくされている。例えば、すでに述べたように、平成二十年には雨降りを理由に、お祭り広場で「笠破き」を行うことになったが、二十一年からは時代の流れとして、お祭り広場で「笠破き」が行われた。「笠破き」は、信仰的に氏神の庭で行うことにこそ、重要な

意味があったはずである。

踊り宿である相戸家から、「樽木踊り」の行列が出なくなつてから十数年が過ぎ去つた。さらに平成十年に新しく決意を持つて発足した「南宮神社くれき踊り保存会」も、平成二十年に消滅した。踊り宿については、かつて草分けの旧家として、地域で物心共に大きな力を持っていたであろう相戸家が、「樽木踊り」に必要なあらゆる負担を一身に引き受けることができて、初めて成立するものであつたと推測される。時代の流れの中で、さまざまな理由が重なり、やむをえず省略されることになつたのは、踊り宿も例外ではない。また、保存会の消滅は、祭りの経費の全てを区費でまかなわなければならない時代に突入したことで、その存続には問題が多く、継続が困難になつたようである。

現状の踊り手である太鼓以外の太鼓・鉦、および笛吹の多くは、中学生の参加によつて成立している。一見、継承上の問題はないように考えられるが、平成十八年以後、「樽木踊り」が出来なくなつた梨久保では、中学校の生徒たちの協力は得られる状況にありながら、彼らを受け入れる梨久保地区の体力が残つていなかったという。毎年目に見えない形で縮小の傾向にある温田でも、梨久保の方々のこのような経験談を、自分たちにもあてはまるものとして受け止める必要があるだろう。

九 記録・文献

- ① 『南宮神社くれき踊り唄』（くれ木踊り保存会 昭和二十八年八月）踊り歌の詞章だけを記したもの。

- ② 『南宮神社くれき踊り唄』（くれ木踊り保存会 平成十三年三月）踊りの詞章と共に、当時保存会長であつた高橋勲夫氏の執筆による「桜拍子」（太鼓の口唱歌）・「宮かぐら」（笛の口唱歌）「くれき踊りの手順」「くれき踊りの鳴物」「くれき踊りの笛の吹き方」が付録の形で付されている。
- ③ 『信州の芸能』（信濃毎日新聞社編集局編 昭和四十九年二月二十八日 信濃毎日新聞社）

- ④ 下伊那郡泰阜村『樽木踊り』（泰阜南小学校・泰阜南中学校 昭和五十

年六月三十日）

- ⑤ 『泰阜村誌』（泰阜村誌編纂委員会 昭和五十九年十一月）
- ⑥ 向山雅重著作集『山国の生活誌』第四卷「山国の四季」（山国の生活誌編集委員会編 昭和六十三年 長野県飯田市新葉社）

十 詞章

（下伊那郡泰阜村『樽木踊り』（記録・文献④）による）

「相戸の庭」

御座をつくれ座をつくれ 是が子供も笠ぞろい 氏子のこらず集りて 樽木踊を取そ
ろへ 一節そろへ御目にかけ 産神様へと差上る 御すゑを申せばまだ長い 御祭礼
踊はこれまでぞ

御庭をはるかで眺むれば 四角四面でさて見事 屋敷をはるかでながむれば 東用水
西かいどう 南用地に北林 つば木をはるかながむれば 金木銀木植ならべ 御末
を申せばまだ長い 御祭礼踊はこれまでぞ

鍛屋と関屋の山の神 御祭礼踊を差上る 山住様へも差上る 氏子無病と守らせよ
あくまげどうのさわりなく 蚕はんじょと守らせよ あたりましはいでん 御
祭礼踊を差上る 御末を申せばまだ長い 御祭礼踊はこれまでぞ

「御薬師様」

御薬師様へとまず入りて 御祭礼踊の通りがけ 御薬師様へと差上る あたりまし
すはいでん 御祭礼踊を差上る 御末を申せばまだ長い 御祭礼踊はこれまでぞ

「天王様」

天王様へとまず入りて 御庭をはるかでながむれば 四角四面でまず見事 御社頭は
るかでながむれば 黄金の鳥居でさて見事 御社頭はるかでながむれば 飛騨の匠に
たくませて 武田の番匠に建させよ 千本たる木にこけらぶき 八つ棟造りでさて見
事御末を申せばまだ長い 御祭礼踊はこれまでぞ

宮立はるかでながむれば 桜杉の木植ならべ うらが繁つてもとずいて うしろは竹
林とりまいて 七仟八仟の種類あり さても涼しき宮立よ こゝにますます津島様
御末を申せばまだ長い 御祭礼踊は是までぞ

氏子のこらず集りて 三日三夜の志ようじよして 御祭礼踊をまず仕上 御津島様へ差上る 柝城いりにましまする おゝさきみさき山の神 御祭礼踊を差上る けものわぎをよけ給ひ 害虫害鳥よけ給ひ 御末を申せばまだ長い 御祭礼踊はこれまでぞ

「夏焼上の山の神」

通りがゝりの花おどり 夏焼上の山の神 御祭礼踊を差上る 御末を申せばまだ長い 御祭礼踊はこれまでぞ

「大古平峠」

通りがゝりの花おどり 大古平にましまする 伽藍姫宮山の神 御祭礼踊を差上る 志、岩様へも差上る あたりましますいはいでん 御祭礼踊を差上る 御末を申せばまだ長い 御祭礼踊はこれまでぞ

「権現様」

権現様へとまず入りて 御庭をはるかでながむれば 四角四面でさてみごと 鳥居をはるかでながむれば 金の鳥居でさてみごと 石段はるかでながむれば みかげぞろいでさてみごと 御社頭はるかでながむれば 飛驒の匠でたくませて 武田の番匠に建させよ 八ツ棟造りでさて見事 お末を申せばまだ長い 御祭礼踊はこれまでぞ 宮立はるかでながむれば 松、杉の木植ならべ 前に立たる大さかき うらが繁つて元すいて さて見事な榊あり 古き時代の頃よりも 熊の林と音に聞く さても涼しき宮立よ ここにちんざましまする 熊野白山大権現 御すゑを申せばまだ長い 御祭礼踊はこれまでぞ

例祭八月二十二日 氏子のこらず集りて 前なる天竜でこりをかけ 三日三夜志ようじよして 榊木踊を取そろへ 権現様へと差上る 来る災難相よけて 氏子無病と守らせよ 御末を申せばまだ長い 御祭礼踊はこれまでぞ

「金刀比羅様」

御祭礼踊の通りがけ 天神様へ差上る 金刀比羅様へも差上る 秋葉様へも差上る 水難火難あいよけて 御すゑを申せばまだ長い 御祭礼踊はこれまでぞ

「御稻荷様」

御祭礼踊の通りがけ 御稻荷様へ差上る 五穀成就を守らせよ 御すゑを申せばまだ

長い 御祭礼踊はこれまでぞ

「南宮社」

南宮様へとまず入りて 御庭をはるかでながむれば 四角四面でまず見事 鳥居をはるかでながむれば 石の鳥居でさて見事 御社頭はるかでながむれば 千本たる木でこけらぶき 八ツ棟造りでさて見事 御すゑを申せばまだ長い 御祭礼踊はこれまでぞ 鎌倉殿の御卑族が 天竜川すじ御巡検 こ、は時又川ぎしか 通る筏にうちのりて げきもちょうしもうちのりて 是が温田の南宮か こ、に御あがり遊ばして 天竜川のまんなかに かけずくずれず岩立の さても堅固な宮立よ 又おはちに御のほりて 朝日かがやく景のよき 夕日たなびく風涼し 南宮氏子呼び集め 東西しづまれおしづまれ しづめて事も御聞きあれ 南山榊木かり出して ゑる木千本数千本 南宮島に積下し 南宮神社の祭礼に 榊木踊をおこなはれ 時は鎌倉御世の頃 御すゑを申せばまだ長い 御祭礼踊は是までぞ

向ふ戸山のあさいけで 姫や小姓がすげを刈る なんにするとすげをかる みのじやあるまいかきである こ、で作した三度笠 天竜下りのしぶきよけ 是を神社にそなへ置き 南宮神社の祭礼に 榊木踊を取り揃へ 踊る子供にうちきせて 一節そろへて御目にかけ 氏子のこらず集りて 御受いたした折からわ 又も筏にうち乗りて 笠をいただきおかわりに 是が信州の松笠 是を御持ちてしぶきよけ いざ皆さらばとこぎ出る むかい送りの笠ぞろい 榊木踊の例祭を 産神様へと差上る 御すゑを申せばまだ長い 御祭礼踊はこれまでぞ

「笠やぶき」

宮立はるかでながむれば 松、杉の木、松、姫子 かじやもみじやつがの木や うらが繁つてもとすいて さても涼しき宮立よ うしろは大川前は池 高さは天竜一の鳥徑もならびなし二百尺 おはちにまします不動様 御祭礼祭を差上る 御多賀様へも基上る せんげん様へも差上る 蚕玉様へも差上る 塩竈様へも差上る 弁天様へも差上る 耕地残らずいらいでん 御祭礼踊を差上る 志んぜはずしもござるとも 受取はずしの無いように そこで氏子の笠破き

「南山五百石榊木踊歌」

東西静まれおだやかに 静めて小歌をお聞きあれ 頃は天文御世の頃 お上様より御発布で 庄屋のさず集りて 三百有余の百姓が 山に登りて木を伐りて 南宮島へと送り出し 天竜おくれ木下す時 鎌倉殿なる御卑族 こ、は時又川すじか 通る筏に打ちのりて こ、は温田の南宮の これにお登り遊ばして 天竜川の真中に かけ

ずくずれず岩立の　さても堅固な宮立よ　　またも御はちに登りて　朝日かがやく景の
よき　夕陽たなびく風涼し　榎千本、杉千本　此処に御樽木積み下し　首尾よく検分
相済で　拝樽木踊りを一踊り　南宮島の祭礼に　おくれ木おどりをおこなはれ　向ふ
登山の浅いけで　姫よ小姓が菅を刈る　是で作った三度笠　是を神社に供へおき　御
樽木踊をとり揃へ　踊る子供にうちきせて　一節揃へて御目につけ　氏子残らず集り
て御受け致した折からに　また筏にうち乗りて　笠をいただきおかわりに　これは信
州の桧笠　是を御持ちてしぶきよけ　天竜下りのしぶきよけ　いざ皆さらば漕ぎ出で
て　むかい送りのしぶきよけ　これをめいめい持ちかへり　産神様の例祭に　樽木踊
りを差上る　是非とも受取りたべ給へ　是より二里の奥山に　もとより名高き樽木山
　桧　榎　杉　姫子　縦つが落葉松繁りては　さても見事なくれ木山　中に栃城神社あ
り　鎌倉御世の其の頃に　樽木踊の仕来たりを　祭礼踊りになへれば　産土神へと
さしあげる　氏子揃ひと思召せ　通るいしかも相よけて　ふり来る災難相よけて　五
穀成就を守られよ　後末を申せばまだ長い　祭礼踊はこれまでぞ

「くれ木踊りの口笛」　南宮神社

・前奏

ヒーリ　ヒリ　ヒヨロ　ヒーリ　ヒーリ　ヒーリ　ヒヨロ　ヒリ　ヒーリ　ヒ

ー

・渡り拍子

トヒリ　ヒリヒヨロ　ヒーリ　ヒヨロ　ヒヨロー　ヒヨー　ヒヨ　（ソリヤ）

ヒーリ　ヒーリ　ヒーリヒヨロ　ヒーリ　ヒーリ　ヒーリ　ヒー繰返ス

・渡り拍子唄の間へ

ヒーリ　ヒーリ　ヒーリヒヨロ　ヒヨローヒーリー　ヒヨロ　ヒヨノーヨウ

・そ、り

トーヒーリ　ヒリヒヨロ　ヒーリヒヨロ　ヒヨ　（サイ）　チーチー　ヒーリヒ

ヨロ　チーリヒヨロ　ヒヨ　（掛声）　チーチー　ヒーリヒヨロ　チーリヒヨロ

ヒヨ　（掛声）　チーリ　ヒヨロ　チーリ　ヒヨロ　チーリ　ヒヨロ　ヒヨロー

チーリ　ヒヨロ　（掛声）　チーリ　ヒヨ　（掛声）　チーリ　ヒヨロ　（掛声）　ト

ーヒリ　ヒヨローヒヨー　（マードー）　ヒーリ　ヒーリ　ヒリ　ヒヨロ　ヒ

ヨー　トーヒリ　ヒヨロー　ヒヨー

第三章

中断、廃絶している
「下伊那のかけ踊」調査報告

平成十七年、最後に行われた梨久保の「樽木踊り」

中村 茂子

はじめに

平成二十一年八月二十三日（日）

午前十時、梨久保地区生活改善センターに到着、市瀬尚三郎区長（大正十五年生）と柿下武氏子総代長（昭和五年生）のお二人に、池野神社境内へご案内頂き、境内に建てられた保管庫に納められている樽木踊りの楽器類、道具類を拝見した。市瀬氏は、かつて「樽木踊り」で踊り手の中心となる大太鼓打ちであつた頃を思い出して、振りを付けながら大太鼓を打つて下さった。午後から、毎月第一日曜に行われている全戸主（現在十戸）出席の昼集会に参加させて頂き、聞き取り調査を行った。以下は、その時の記録とすでに刊行されているさまざまな資料・記録類を参考にして記した。

なお、梨久保の「樽木踊り」は、昭和五十七年十二月十一日、泰阜村無形民俗文化財に指定され、平成十一年十二月三日に国の記録選択を受け、平成十二年九月二十一日に長野県無形民俗文化財に指定されている。しかし、平成十七年に実施された踊りをもって、梨久保の「樽木踊り」は中断となった。



梨久保住民への聞き取り



大太鼓の振り

一 名称

梨久保の「樽木踊り」

二 伝承地

長野県下伊那郡泰阜村梨久保地区

三 期日・場所

実施期日は、以下の通りである。

平成十七年十月九日に実施されて以後中断となった。本来は、旧暦七月二十五日に行われていたが、ある時期から十月九日に行われるようになり、過疎によって継承が困難になり、中断に至った。

実施場所は、かつて結婚や新築など、その年に祝い事があつた家を「踊り宿」として、宿から行列を繰り出し、池野神社鳥居前と神社境内で踊った。平成元年になって、「生活改善センター」が設置されたのを機会に、ここを「踊り宿」として活用するようになり、「生活改善センター」の庭で踊った後、池野神社へ向かつて行列を繰り出すようになった。





池野神社鳥居



池野神社拝殿

四 伝承組織

伝承団体名は、梨久保地区住民の間で保存会はいらないという意見になったため、正式名称としての伝承団体名は存在しない。

『長野県の民俗芸能―長野県民俗芸能緊急報告書―』（長野県教育委員会編・発行 平成七年三月三十一日）には、以下のような記述がされている。

「樽木踊り保存会が出来ているが、転出者が多く、残った氏子と帰省者で支えている。泰阜中学の樽木踊りクラブが参加するようになった」。平成五年当時の戸数は十五戸であったというが、平成二十一年八月の調査の時点では十戸であり、そのうち一人暮らしが四戸で、全人口は二十人であった。平成七年以後に、地区住民の中から保存会は不必要という意見が出てきたようで、保存会は消滅し、平成十七年以後中断となった。

五 行事（芸能）内容

（一）次第

「踊り宿」となった「生活改善センター」に集まって御神酒をいただき、その後宿の庭で踊りをして、行列を整え、池野神社へ向かう。行列の次第は以下の通りである。



以前使われていた屋台

①旗2本（池野神社ほか）②切り灯笼4張（白・赤・青）③柳1本 ④笛2本 ⑤太鼓4個（大2・中2）⑥鉦2個 ⑦音頭3人・他氏子衆多数（戦後のある時期までは、子供たちが屋台を引いた）。
「踊り宿」から繰り出した行列が鳥居前に到着すると、場所が狭いため鳥居横に全員が立ち並び、「秋葉様・金比羅様・蚕玉様・庚申様・地藏様・明神様」に対して踊り歌を奉納するだけである（「鳥居踊り」の詞章による）。鳥居を抜けて参道の石段を登り、神社の庭に至って行列の順序で輪になり、三周してから所定の位置に柳を立て、「樽木踊り」を踊る。その後、社務所に上がって「おふるまい酒」を頂き、一息ついた後（かつて、祭りが旧七月に行われていた頃は、盆踊りを踊った）、踊り手以外の人々も参加して「笠破り」を踊り、踊りに用いた諸道具を全て神社境内の倉庫へ納めて終了する。

（二）扮装・楽器・道具

扮装

『長野県の民俗芸能―長野県民俗芸能緊急報告書―』（長野県教育委員会編・発行平成七年三月三十一日）によれば、「梨久保の樽木踊り」の執筆者（桜井弘人）が調査を実施した平成五年の祭りには、法被姿であり、これは平成五年八月に行われた信州博覧会に出演した時に詠えたものであったという。それ以前の



菅笠



菅笠

主役は、紋付き羽織、着物の裾を端折り、白ももしき、黒足袋に草履をはき、菅笠を被って踊っていた。

楽器

太鼓4個 ①花太鼓（大太鼓）直

径 63 cm ・ 皮面内側 51 cm ・ 胴の長さ 48 ・ 5 cm ・ 胴締め 8 cm

② 大太鼓 (古いもの) 直径 65 cm ・ 胴の長さ 48 ・ 5 cm ・ 胴締め 8 cm

③ 中太鼓 直径 51 ・ 5 cm ・ 胴の長さ 45 cm ・ 胴締め 7 cm

④ 同じく 直径 51 ・ 5 cm ・ 胴の長さ 45 cm ・ 胴締め 5 cm

⑤ 桴 長さ 27 cm ・ 直径 5 cm (桐材・房付き)

鉦 2 個 直径 34 ・ 5 cm ・ 内側 29 cm ・ 厚み 9 ・ 5 cm

桴 (槌形) 柄 33 cm ・ 槌の長さ 10 cm ・ 直径 4 cm

笛 2 本 七穴



太鼓と鉦



大太鼓



桴

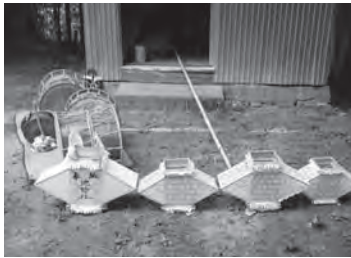
道具

柳 1 本 心棒の竹竿 299 cm ・ 先端に巻き付け
た藁の長さ 79 cm ・ 直径 23 cm (藁の先端
には白い御幣を立てる) ・ 五色の短冊を
付けた柳の枝約 3 m

旗 2 本 「池野神社」 ほか

切子灯籠 4 張 池野神社 (諏訪大明神・御岳・

浅間を合祀) の切子灯籠だけが
白で、他は赤と青である。色和
紙を切り抜いた麻葉模様を貼



切子灯籠

り重ねたもので、かつては 5 張あったようであるが、平成
二十一年保管庫にしまわれていたのは 4 張だけであった。

(三) 演目・芸態

演目は、「宿踊り (笠揃え)」「鳥居踊り」「御宮踊り」「笠破り」の四曲である。
「宿踊り (笠揃え)」は、「生活改善センター」の庭が狭いため、歌だけを歌
っていた。

笛の道中囃子「岡崎」「祇園囃子」「桜拍子」で神社へ行列を練って行く (か
つては「数え歌」「真金」があった)。

「鳥居踊り」(鳥居横に立ち並んで歌だけを奉納していた)

「御宮踊り」(池野神社の庭)

「笠破り」(踊り手以外の人々も加わって池野神社の庭で踊る)

柳を踊りの輪の中心に立て、その周りを神社旗・灯籠・笛が囲んで立ち、そ
の外側で踊り手である太鼓と鉦打ちが、楽器を演奏しながら輪の内外を交互に
向きつつ順回りに踊る。この時、笛の囃子は「十六拍子」で庭入りし、大太鼓
の「サイ」というかけ声で「ソソリ」に移る。踊り手は輪の内外を向きながら
大きな振りで踊る。音頭取りが歌を出すと、踊り手は振りをつけずに静かに進
行方向へ進む。このような一連の所作を歌の節の数だけ繰り返す。但し、宿(生
活改善センター)の庭が狭い
場合には、「宿踊り」と「鳥居
踊り」は輪踊りにならず、そ
の場に立ったまま歌だけを奉
納する。



「柳」の心棒

六 由来・信仰

温田同様、年貢としての樽木を完納した祝いとして、江戸時代の初期に祭りの奉納芸として、行われるようになったと伝えている。

信仰的にも温田同様、樽木完納祝いとして行われ、地区の神仏全てに感謝する祭りであったと推測できる。しかし、信仰的には「鳥居踊り」の詞章中に、「秋葉様・金比羅様・蚕玉様・庚申様・地藏様・明神様」が見られ、それぞれに「花の踊りはなむけを（略）差し上げる」と歌われていると同時に、「明神様」のみは、「御宮踊り」「笠破り」にも何度も繰り返されているので、池野神社主祭神である諏訪大明神に対する奉納踊り・奉納歌という意識が強かったようである。「宿踊り」を祝う事があった家から、生活改善センターにかえ、詞章をその家・センターにふさわしい内容に変化させつつ歌い踊って来たことで、祭り全体の信仰に、焦点が合わない部分が出てきたように見える。

七 変遷

旧暦七月二十五日に行われていた当初は（樽木成り村六カ所で行われた「南山五百石祭り」の最終日）、樽木踊りの後で盆踊りも行っていたようである。戦後、何時の頃からか生業の一つであるコンニャク取り入れ前・十月十一日から十二日に祭りを行うようになり、「宿踊り」は、その年に祝う事のあった家で踊った。踊り宿は、昭和五十九年には中島元教育長宅が宿となり、また平成元年に生活改善センターが出来てからは、ここを宿とするようになったが、一度だけ祝事のある家が宿となったことがあるという。

「樽木踊り」は、平成五年に行われた信州博覧会に参加し、その時は「屋台」も出て中学生が屋台囃子を覚えて演奏した。最後の樽木踊りとなった平成十七年の祭りには、当時の小学校教諭であった天龍村出身の仲るみ子先生が熱心に協力し、四月から柿下氏・市瀬氏などが何度か小学校へ指導に行き、梨久保地区民全員が参加して、にぎやかな祭りになった。その時の費用は、一戸当たり五千元であった。梨久保地区では、何事かがある度に、区費として一戸あたりの平均額を徴収する決まりになっている。

八 所見

梨久保の「樽木踊り」は、かけ踊り形式の一種であり、六地区で一日毎の村送りとした祭りの、踊り納め地区である。地区には、最後まで古い伝承を残して踊っていたと伝えられているが、具体的には提示される点はなく、中断した事実を残念としかしいようがない。現在（平成二十一年）の泰阜村村長である松島貞治氏夫人が、梨久保地区出身者であることから、さまざまな面で協力をしてもらうことができた。また、他の地区からも多くの人々が祭りに見に来て応援してくれた。平成十七年には、小学生で囃子方として参加してくれた子供たちが、中学生になり、今後も中学校として協力してもよいという申し出を受けたが、梨久保地区として、その申し出を受け入れるのは不可能と判断した。梨久保と温田では、囃子や踊り方にも微妙な違いがあるので、子供たちが両方の技法を習得するより、温田の踊り専一に協力してほしい旨を、教育長に願ったという。

梨久保の「樽木踊り」は、平成十七年十月九日を最後として中断し、平成二十一年には梨久保の全戸数十戸、うち一人暮らし六十五歳以上の戸主が四戸という状況で、梨久保地区そのものが、所謂「限界集落」として漸く維持されている。池野神社境内に保管されている樽木踊り諸道具の保管庫や事務所の物置場には、道具一式が揃っているし、踊りの指導も可能なので、踊りに参加できる人間さえ確保できれば復活できないことはない。しかし、現状の梨久保地区では池野神社祭礼としての踊りは無理であるという。戦後、徐々に地区から出て行った人々は、盆・正月・祭りなどには梨久保へ戻って来たが、当日祭りを見物するだけで参加できずに帰る事を長年くり返し、準備の段階を経験させる努力をしなかった。危機を感じ始めた早い時期に、祭り当日だけでなく無理をしても準備段階から来てもらい、当日何かの役で参加してもらってれば、これほど早期の中断はなかったと思うと述べられた市瀬区長のお言葉が重く心に残った。さらに、こんなに早期に中断の日を迎えようとは、夢にも思わなかったという。このような梨久保区長のご意見は、現在「樽木踊り」唯一の伝承地になった温田の人々に、大いに耳を傾けてほしい。

九 記録・文献

記録

- ① 昭和五十八年「泰阜ものがたり」昭和五十七年に村指定の無形民俗文化財になった時に、記念として制作したもので、ビデオを各戸へ寄贈してもらった。
- ② 平成五年 信州博出演記念としてビデオが作成された。

文献

- ① 『長野県の民俗芸能―長野県民俗芸能緊急報告書―』（長野県教育委員会編・発行 平成七年三月三十一日）
- ② 『信州の芸能』（信濃毎日新聞社編集局編 昭和四十九年二月二十八日 信濃毎日新聞社）
- ③ 『泰阜村誌』（泰阜村誌編集委員会 昭和五十九年十一月）
- ④ 三石稔「樽木踊り」（『目で見る信州の祭り大百科』郷土出版社）
- ⑤ 下伊那郡泰阜村『樽木踊り』（泰阜南小学校・泰阜南小学校 昭和五十年六月三十日）

十 詞章

（記録・文献⑤による）

「宿踊りの唄」

何時も変らぬ事なれど 氏子残らず集りて 前なる小川で垢離よ取りて 三日三夜も
清浄して 五色の飾りを立て並べ 五色の飾りを催して 踊る子供を引連れて 踊る
子供の笠揃い 明神様へと差上げる

お庭はるかで眺むれば 四角四面でさて見事 泉水なんぞの見事よ 御門はるかで眺
むれば 四ツ足御門でさて見事 垂木尻には金銀で 黄金広きでさて見事 馬屋遙か
で眺むれば 七間馬屋に馬七つ 毛揃ひ召されてさて見ごと 東の御倉は御金子倉
西の御倉は穀御倉 御家はるかで眺むれば 飛驒の工匠にたくまして 武田の番匠に
建てさせて 四ツ棟造りの御茅葺 御座敷はるかで眺むれば 綾や錦のうすべりを

毛抜き合せに敷き揃し 中の間はるかで眺むれば 金の唐紙金屏風 床の間はるかで
眺むれば 三丈の風をば掛け揃し 奥の間遥かで眺むれば 菊の籠掘り掘り透かし
檜の間はるかで眺むれば 檜が千筋さて見事 薙刀千筋さて見事 東御縁でさて見事
明神様へと差上げる この御庭へ差し枝は 黄金花咲く金が成る さればこより
鳴子引き 黄金の薄板掛けまして 鳴子綱には何をする 七子竹をば綱にする 鳴子
引きには誰が良い 俺が妹の乙姫を 鳴子引きにとやりたれば 引くべき鳴子は引き
もせず いとし殿御の袖を引く お末を申せばまだ長い 踊る子供の宿踊り 御宿踊
りはこれまでも 明神様へと差し上げる

「鳥居踊りの唄」

通りかかりでお悪いが 花の踊りのはなむけを 京から雀が三羽来て 一羽の雀の言
う事に こはますます良い所 あなたの鳥居へ巣をかける 十二の卵を産み揃し
十二の卵を産み育て 親子諸共立つ時は 吾らも長者となる仕度 秋葉様へと差し上
げる 金比羅様へと差し上げる 蛭玉様へと差し上げる 庚申様へと差し上げる 御
地蔵様へと差し上げる 明神様へと差し上げる

「御宮踊りの唄」

あなたのお庭へまづいでし 五色の飾りを立て揃し 五色の飾りを催して 踊る子供
を引連れて おどる子供の笠揃ひ 御庭はるかで眺むれば 四角四面でさて見事 泉
水なんぞの見事さよ 鳥居はるかで眺むれば 四ツ足鳥居でさて見事 御庭御宝眺む
れば 松や桧を植え交せて うら葉茂りて元すいて さてはずしき宮立ちよ 飛驒
の工匠にたくまして 武田の番匠に建てさせて 四ツ棟造りの御茅葺 ごはい柱の頭
には 獅子や牡丹を切りつけて 木ばなに柵を組み 上り下りに両透かし 垂木尻に
は金銀を 黄金の開でさて見事 明神様へと差し上げる 向いに猿楽ある時は いじ
やよ友達見物に 行きたいけれども帯がない おじ御の所へ帯借りに 帯は御座らぬ
早よ帰れ さてさて無念や腹立ちよ かたびらなくては行かれまい 何時か来年春来
たら 麻種求めて麻播きて 三つ葉なりたら中打ちて 四つ葉なりたら幹うちて 揉
んで細めて燃かけて 京から御手を呼び具し 一日一夜に織り崩し 何と晒さぬ此の
布は 白くて着てはげんじろし 浅黄に染めてはげさぎない 友禅花とも晒しましょ
う 肩には竜波風車 袖には玉章染めつけて 裾には稲の出乱を 染めておくれよ染
屋さん さてさてむずかしこの染は 千貫取りてもやで御座る 明神様へと差し上げ
る

「笠破りの唄」

これより東の浅池で 十三娘が菅を刈る 何にするよとたずねたら 蓑にするよと刈

りよせる みのではあるまい筈ならず さそり小笠にぬき立てて 踊る子供にかぶらして 村なる小町へ押し出して 前なる小町で笠摘い 明神様へと差し上げる

俺が弟の千松は 今年はじめて作をして 作はしがるし鎌はない 関の鍛冶屋へ鎌打ちに 一年待てどもまだ出来ず 二年待てどもまだ出来ず 三年三月に状が来て 状の上書一寸見たら 関の鍛冶屋の婿となる 明神様へと差し上げる

今年は豊年穂に穂が咲いて 榊は取置き箕で量る 七間眠の倉を建て これに積みおきやよたのし 五穀穰にお目出たい 明神様へと差し上げる

吾等奥州出羽の国 秋葉参りと心掛け 氏は信州飯田かな 飯田一夜の宿を取り 氏が飯田の今宮様よ 今宮様へと伏し拝む 氏が飯田の三霊様よ 三霊様へと伏し拝む 氏が八幡の八幡様よ 八幡様へと伏し拝む 長野原をば早越して 氏が時又観音様 観音様へと伏し拝む 流れし筏に打のり下り 氏が遠州秋葉様 秋葉様へと伏し拝む 氏が森沢天宮様よ 天宮様へと差し上げる 氏が橋上神々様へ 橋上まし社へ差し上げる 氏幕岩山神様 幕岩まし社に差し上げる 氏が黒沢山神様 黒沢まし社に差し上げる 氏が栃城神々様 栃城まし社に差し上げる 氏が鍵懸山神様 鍵懸まし社へ差し上げる 氏が関子屋山神様 関子屋まし社へ差し上げる 氏が本岩不動様 お不動様へと差し上げる 氏が川端神の様 川端まし社へ差し上げる 氏が胡桃久保神々へ 胡桃久保まし社へ差し上げる 氏が野平神々へ 野平まし社へ差し上げる 氏が貝久保神々へ 貝久保まし社へ差し上げる 氏が越久保神々へ 越久保まし社へ差し上げる 氏が大根の山神へ 大根まし社へ差し上げる 氏が本村神々へ 本村まし社へ差し上げる 氏が田本東側 東側まし社へ差し上げる 氏が田本西側 西側まし社へ差し上げる 氏が田本神々へ 田本総仕^{つとめ}へ差し上げる 拝みはずしはあるとても受け取りはずしの無い様に お末を申せばまだ長い 踊る子供の笠踊り 祭神踊りはこれまでよ 明神様へと差し上げる

(昭和二十二年十月吉日 梨久保青年会)

中断以前の「梨久保の樽木踊り」

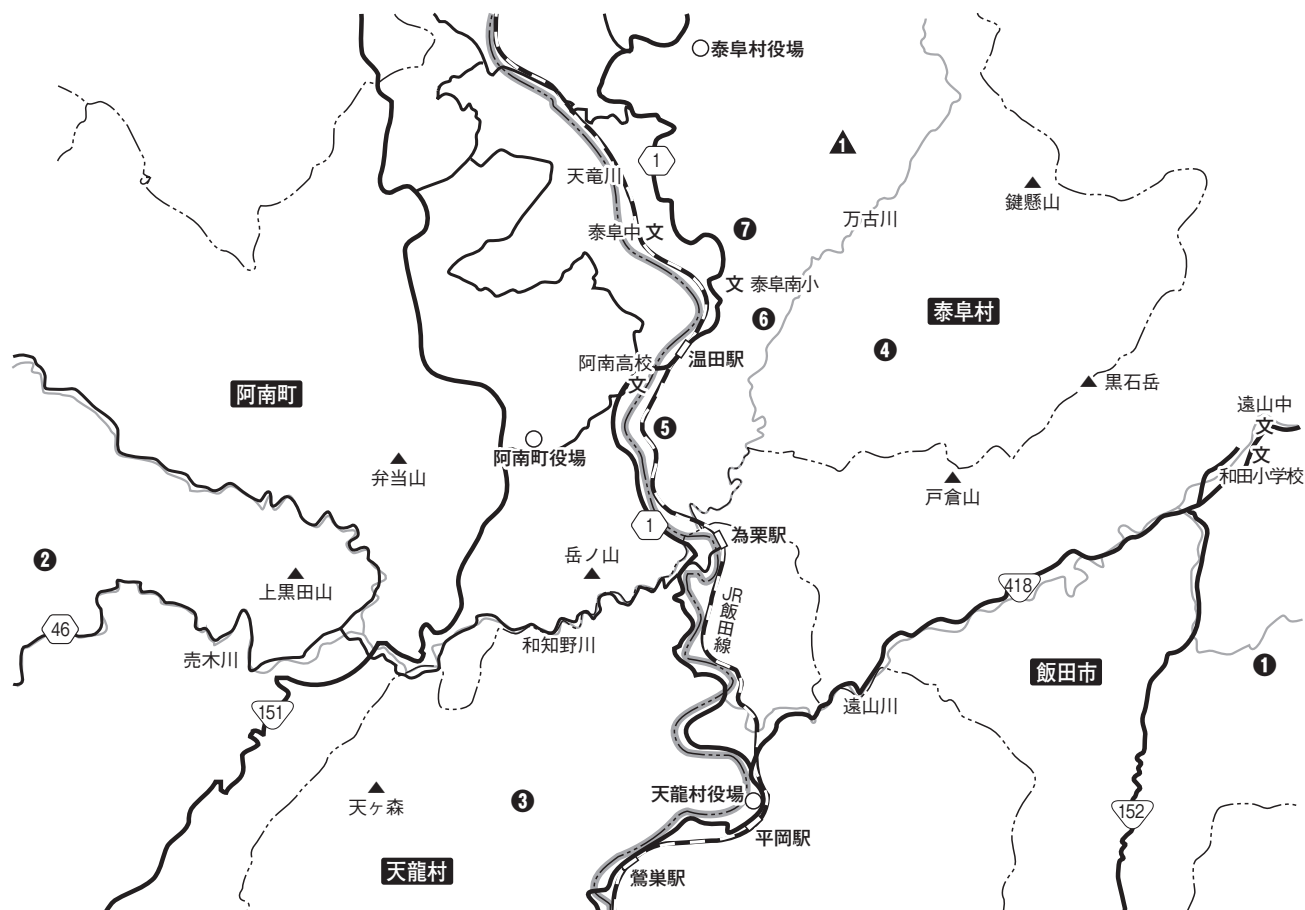


梨久保の樽木踊り (昭和 49 年 10 月 12 日 橋都正氏撮影)



梨久保の樽木踊り (平成 11 年 10 月 9 日 橋都正氏撮影)

中断、廃絶している「下伊那のかけ踊」分布図



中断している「下伊那のかけ踊」

- ▲ 梨久保の樽木踊り〈泰阜村梨久保地区〉

廃絶した「下伊那のかけ踊」

- ❶ 須沢のシデ踊り〈飯田市南信濃須沢地区〉
- ❷ 心川の念仏踊り〈阿南町和合心川〉
- ❸ 大久那のかけ踊り〈天龍村神原大久那地区〉
- ❹ 漆平野の樽木踊り〈泰阜村漆平野地区〉
- ❺ 我科の樽木踊り〈泰阜村我科地区〉
- ❻ 大畑の樽木踊り〈泰阜村大畑地区〉
- ❼ 田本の樽木踊り〈泰阜村田本地区〉

※所在地名称は各市町村教育委員会からの回答による

第四章 悉皆目錄

悉皆目録 凡例

- ◆本目録は、本調査員による調査を基に作成した。
- ◆伝承地名は各市町村教育委員会からの回答による。
- ◆芸能の名称は平成二十一年調査時の確認による。
- ◆期日・場所、および現況は平成二十一年調査時のものであるが、留意すべき点については、出典・備考欄に記した。
- ◆掲載頁欄は、本報告書の現地調査報告掲載頁を示す。

伝承地	芸能の名称	期日・場所	現況	出典・備考	地方指定等
飯田市上村下栗地区	下栗のかけ踊り	八月十五日 拾五社大明神社	実施		市指定…「下栗掛け踊り」*「下栗掛け踊り」で旧上村指定(平成十年十一月二十七日、平成十七年に飯田市に合併し市指定)
飯田市南信濃須沢地区	須沢のシデ踊り	八月十五日 川東の阿弥陀堂(元) 宇佐八幡社	廃絶	橋都正調査員による聞き取り・昭和十五年中断、昭和二十五年に度だけ行われた	
阿南町和合	和合の念仏踊り	八月十三日、十六日 熊野社(大屋(宮下家) 林松寺 八月十四日、十五日 林松寺	実施		県指定…「和合の念仏踊り」 昭和三十八年二月十一日
阿南町和合吉	日吉の念仏踊り (日吉の大社念仏)	八月十三日、十六日 八幡様	実施		
阿南町和合心川	心川の念仏踊り	———	廃絶	城所恵子調査員による聞き取り	
天龍村神原大河内地区	大河内のかけ踊り	八月十四日 念仏堂(新盆宅 八月十六日 念仏堂(新盆宅、庚申様	実施		
天龍村神原坂部地区	坂部のかけ踊り	八月十四日 堂の庭(熊谷山長楽寺) 金毘羅様(堂の庭	実施		
天龍村神原向方地区	向方のかけ踊り	八月十四日 長松寺 八月十六日 新盆宅(長松寺	実施	八月十四日次第は平成二十年から中断中	
天龍村平岡	満島神社の秋祭り (かけ太鼓)	十月第二土曜日(宵祭り) 満島神社(前宮 十月第二日曜日(本祭り) 前宮(満島神社	実施	平成二十二年は十月第三土日曜日に実施された。また平成二十二年の「宵祭り」は雨天中断された	村指定…「満島神社の秋祭り」 昭和四十二年二月一日
天龍村平岡中井侍地区	中井侍秋例祭 (宿入り・道中囃子)	十一月末の土曜日(宵宮) 小高明神(集会所 十一月末の日曜日(本祭) 富生橋の南側(小高明神 *平成二十二年実施時	実施	小高明神と白山権現で隔年交代での実施	
天龍村神原大久那地区	大久那のかけ踊り	旧七月十四日・十六日 新盆宅・阿弥陀堂	廃絶	橋都正調査員による聞き取り・昭和十年頃廃絶	
泰阜村温田地区	温田の樽木踊り	八月第四土曜日 お祭広場(お稲荷様(本宮(南宮神社	実施		県指定…「泰阜村南山の樽木踊り」 平成十二年九月二十日
泰阜村梨久保地区	梨久保の樽木踊り	十月第二土曜日(旧七月二十五日) 池野神社祭礼	中断	平成十七年から中断中	県指定…「泰阜村南山の樽木踊り」 平成十二年九月二十日
泰阜村漆平野地区	漆平野の樽木踊り	旧七月二十日 小鷹神社祭礼	廃絶		
泰阜村我科地区	我科の樽木踊り	旧七月二十一日 八幡神社祭礼	廃絶		
泰阜村大畑地区	大畑の樽木踊り	旧七月二十三日 諏訪神社祭礼	廃絶		
泰阜村田本地区	田本の樽木踊り	旧七月二十四日 池田神社祭礼	廃絶	泰阜村誌	

127

127

127

127

120

109

127

101

94

87

77

67

127

53

41

127

30

掲載頁

第五章

「下伊那のかけ踊」

調査を終えて

「下伊那のかけ踊」調査を終えて

期日 平成二十一年十二月七日(月)

場所 (社) 全日本郷土芸能協会事務所

出席者(五十音順 敬称略)

調査員

城所 恵子

久保田裕道

中村 茂子

橋都 正

星野 紘

記録員

北河 直子

内容

「下伊那のかけ踊」調査を終えて

※コーディネーター 星野 紘 調査報告書作成委員会委員長

(一) 趣旨説明

星野 紘

(二) 現地調査の報告

①下栗のかけ踊り

橋都 正

②和合の念仏踊り

久保田裕道

③日吉の念仏踊り(日吉の大社念仏)

城所 恵子

④大河内のかけ踊り

橋都 正

⑤坂部のかけ踊り

星野 紘

⑥向方のかけ踊り

星野 紘

⑦満島神社の秋祭り(かけ太鼓)

星野 紘

⑧中井侍秋例祭(宿入り・道中囃子)

久保田裕道

⑨温田の樽木踊り

中村 茂子

⑩梨久保の樽木踊り

中村 茂子

(三) ディスカッション

「下伊那のかけ踊」とは

(四) 総括

星野 紘

星野

下伊那のかけ踊りにつきまして中村茂子先生より、総説のところですでに「下伊那のかけ踊り」の地域的特色と歴史的展開」ということで書いていただいております。折口信夫の『行列に巻き込んで移動させる目的を意味しているのが掛け踊りである』と折口が結論的なところで書いているところを引用してそう捉えてみたというような説明があるので、あえてとは思いますが、「かけ踊り」というのは、かねてより研究者の間でどういうものなのか、というのが議論されて来て、早くから中村茂子先生なども考察を加えてこられたわけです。中村浩さんの『かけ踊り覚書』というのがありますが、なかなかすっきりと説明出来ないところもありまして、それぞれこの度調査員の方々が各現地を調査されまして、それぞれ知見を得られたことと思いますので、その辺をご発表いただきながら、中村浩さんの考えを中心に含めまして、『覚書』の覚え書きではないですけど、もう少し議論を展開してみたいかがかな、ということで提案させていただいたわけです。

では最初に中村浩さんのかけ踊りについての捉え方を簡単に見てみたいと思います。

―大雑把に平均的とでも言うのであれば、おおよそ十二、三人から二十人内外の青年衆が中心の、太鼓踊りの組で練り歩く、なるほど念仏



星野 紘委員長

風流とも見られる行列だが。二種類あつて村の産土様をはじめ神仏を踊り回ると、それもするが、主たる目的を新盆の家の踊りにおくのとある。踊りはまず「庭入り」に始まり、次に「お庭踊り」、大変あいまいだが「庭ほめ」と言ったりもしている。ともかく中心になる踊りが何曲かあつて、そのなかに念仏と手踊りがあるのが普通のようなのだ。そして最後に「引け庭踊り」これも「お暇ま踊り」と言ったりして決まらない。こうした踊りを盆の十四日の夜からはじめて、一晩に二、三カ所ずつ、新盆が多ければ二晩も三晩もかけて踊り歩いたという。今は便宜に従つて形が大変崩れてきているが、それでも面影は残っている。ただし、先にも触れた下栗の踊りと満島とだけは、一方が雨乞い行事の祭りの名となり、満島は秋祭りに踊る幾種類もの踊りの中の太鼓踊りの一曲名になっている。雑な話だがそんなこと――

ではないかと捉えて、いろいろ現地を訪れたりしての調査メモをまとめておられるんですが、最初に申し上げましたように、調査された先生方の各調査地について得られた知見と申しますか、見解を最初に一人ずつご発表いただいて、それから少し深めていければなあと思っております。

最初に橋都先生の下栗からお願いします。

橋都 それでは私の方から飯田市上村下栗のかけ踊りについて、ご説明したいと思います。

いま星野先生からお話のありました中村浩先生は、このかけ踊りというものは二種類あつたと分類できるんじゃないかというふうに説を書いておられるということで、一つは村の神仏を踊り歩く。もう一つは

新仏の、新盆の靈魂を慰める、二通りあるというような中村浩説ですが、下栗のかけ踊りの場合はむしろ一番目の村の神仏を歩いたというのが歴史的な事実だと思います。最近では調査報告書などでも雨乞いの踊りであつた、というふうに言われておりますけれど、支那事変の昭和十一、十二年頃までは「シデ踊り」というような名称で、菅笠にシデ、紙垂れを垂らすんで、そのシデ踊りというような名称と、かけ踊りとも言った向きはありますけれども、地元ではシデ踊りという言い方でおこなわれて、八月の十五、十六日に地元の神仏を踊つて歩いたというものが戦前昭和十二年頃に中断して、それ以降昭和四十七年まで復活できなかったと。三十七、八年間ブランクがあつたところで、復活したときから「雨乞いの踊り」というふうに変つてしまつたようです。

従つて今度の報告書も最近やっている下栗のかけ踊りの実態の報告と、半分は戦前までおこなわれていた旧暦七月十四、十五の踊り、それともう一つは雨乞いの時にも戦前から使われていたというんで、雨乞いときにはどうやってやったか、というようなことの三つの点で報告書を書いておきました。

下栗の場合は、現在八月十五日午後村の人達が村の産土神である十五社大明神神社に集合して、それから準備を始めて一時間ぐらいで手分けして準備が終わつて、まず神社の「シキリの祭り」、「式札」と書いて「シキリ」といっていますが、式札のお祭りというのを行います。これは祝詞を中心に、神仏混淆の向きがありましたから、般若心経まで唱える。それが三十分ちよつとかかりまして、三時頃から三箇所までシデ踊りを行う。神社の拝殿の中で一回、境内へ出てもう一回、すぐ近くの地区集会所センターの三回行います。一回が十分から十五分くらいで終わりますので、三回やつても一時間そこで終わりになる。そんな形で和讃と言いますか「東西鎮まれお鎮まれ」ですが、いまは復活した後は「東西東西お鎮まれ」にかなり変化してますが、昔はた



橋都 正委員

くさんの神様ごとの和讃もおこなわれていたということが記録にもあります。そんな形で現在では行なわれております。もう少し具体的な話もあったほうがいいですか？

星野 先に先生のお考えをお述べいただければ。

橋都 昔の行われ方ですが、この下栗という地区は南アルプスの最後の集落と、海拔千メートルから千二百メートルくらいのところに開けた集落

で急傾斜地を耕して田んぼが一枚もない。雑穀、麦、稗、粟、そういったもので生活してきた集落なんです、それが下から上まで約六キロぐらい点々と人家が分散しているわけですね。

下栗本村とその次が屋敷、小野、大野の四集落があるわけですが、その大野まで旧暦七月十四日には本村、七月十六日その大野まで六キロの途中にある神様を拜んで踊って行ったということです。それがだんだん大野まで行けなくなり、一年おきに大野まで行っていたが、それもまもなく全然行かなくなり、本村だけではやっていった。それでも昭和十一年までで昭和十二年から中止になってしまったと言われています。

それから願掛けの雨乞い、これには大野まで踊って行った。雨の神様、

お池神社の神様にお祈りしても雨が降らない場合に、このかけ踊りを大野まで踊って行った。踊って行ってもまだ雨が降らないときは逆さ踊りということありまして、大野へ一泊して、今度は大野から六キロメートルを踊り返してきたというようなことにも使われていました。特別な日照りと言うことですから、十年にいったんぐらいいしかおこなわれていなかったし、昭和二十二、三年頃大変な日照りが

あって、そのときが最後であったそうです。雨乞いという戦後の記憶があったものですから、雨乞いの踊りということに変わってきてしまったのではないかな、と。そんな風に感じております。以上でございます。

星野 では続きまして、久保田さん。和合をお願いします。

久保田 はい、じゃあまず和合の方から。四日間に亘ってやりますので、話

すと長くなりますので問題点だけをお話させていただければと思います。

まず場所との問題なんですけれども、八月十三日に最初に熊野社で踊りはじめまして、途中大屋と呼ばれる宮下家、これはこの地区の草分け的な家ですけども、その庭で踊ります。そして林松寺に上がってそこで庭入りだけをやりまして終えるわけですね。

十四日と十五日は新盆供養でして、本来は新盆の家に行ってその庭で踊っていたわけなんですけれども、現在はそれをやらなくなりました。夜、新盆の方たちが林松寺にやってきてまして、そこで念仏踊りも行方というかたちになってます。この二日間、念仏踊りに先立って盆踊りも踊られます。かつては念仏踊りのあとに踊っていたらしいんですけれど。

十六日がこれは念仏踊りの行事ではないのですけれども、十六日を迎えたとなん、午前零時を過ぎると、各家で送り盆の行事をするそうなんです。飾っていたものとか供え物を近くの沢に持って行って燃やします。そしてその日の夜に、念仏踊りが十三日同様に熊野社から宮下家、大屋、林松寺というふうに通って行く形になっております。構成からいうと最初に庭入りというのをやりまして、その中にヒツチキ囃子というピョンピョンはねるものもあるんですけども、それをして次に念仏を唱えまして、そして三番目に和讃を唱える。これが一セ

ツトの組なんですけれども。最終日だけは庭入りしかやらない。念仏と和讃はやらない。というのもその日の未明に各家で新仏の霊を送ってしまってますので庭入りしかやらない、ということになってます。そういう形をみていきますと、ひとつに当然ながら新盆供養の目的が見られると思われれます。特に十四日、十五日には、かつては各家を廻っていたということで、新盆供養の要素が強かったのではないかと思われます。ただ最近は廻らないので、ちょっとそのへんは欠けてきているのかな、ということもありますけども。

新盆の家は新盆の家で現在もタイトボシといまして、十四日から十五日に庭に百八本のロウソクをたてまして、そこで火を付けてお水とお米をあげまして念仏を唱える。そのあと座敷で和讃を唱えるということとを各家ではやっており、これは現在でも続いています。そういうところから見ますと、この和合の念仏踊り自体、新盆供養的な要素がまづは見られると。とくに十六日は、もう送ってしまったので、あえて念仏も和讃もやらないというのは、理屈に合っているんだと思います。もう一つの神仏を廻るということなんですけど、これもよく見てきますと結構問題になるところだなと思ひまして、まずそもそも熊野社から始めるという点ですね。一日目、十三日の熊野社で行なって、それから大屋にいきまして、寺に行く。最終日も現在は一日目と同じように熊野社、大家、林松寺なんですけども、昔は林松寺から始まって大屋、熊野社にいったそうなんです。ただ、これは元々は昔そうだったのか、昔は道具一切を熊野社に置いてあったんでそれで片付けやすいようにしようとしたんだって話もありますので、はっきりはしないんですけども。信仰的な具合から考えていけば逆に行った方がいいのかな、という気もするんですけども、その辺は定かではありません。

いずれにしても熊野社というのも新しく明治以降につけられた名前前で、丸山様とか——近くに丸山という山がありまして、その祀られている山の神なんですけれども、それをはじめとしてたくさん



久保田 裕道委員

様が祀られている。言ってみれば十五社神神のように、たくさん集めて祀ったような意味合いの所なんじゃないかと思ひます。

中井侍なんかも非常に細かい神様がたくさん祀られている所ですので、そういうのを祀るという認識がひとつにあるのか。この念仏踊りについても神の庭の庭褒めというのを先にやりますので、そうしたものに對する褒める和讃がある。これは、やはり先ほどの新盆供養とはまたちがった要素じゃないかというところが問題だと思います。

中村浩さんの『かけ踊り覚書』を見ていきますと、それについても結構書かれておられまして、ひとつは十三日については神様のお盆である、というふうな、私はこれは聞けなかったんですけども、和合について書かれているものを見ますと「神様の盆」であるということを言っておられる。最終日につきましても念仏衆の神送りをするんだ、「念仏衆の神送り」という言葉がある。

一つの推論として書いておられるんですけども、庭褒めと言うのは本来予祝的な意味でやっていたんじゃないかと。それに邪霊除けみたいな要素がくっついてきて、それが念仏がそういう要素を持つてるもんで、本来予祝の儀礼に念仏でも取り入れようじゃないかということが始めたのではないかと、というふうなこともお書きになっておられます。ですので、新盆供養として死者に對する供養だけではなくて、そういう地帯の予祝的な儀礼としての念仏踊りというものをひとつ考えることができるのかどうか、というのが念仏踊りの大きな機能を考える上で重要な、というふうに考えております。とりあえず問題提起としてそのくらいですか。

星野 はい、ありがとうございます。それではつづいて日吉の城所さん、

お願いいたします。

城 所

はい、日吉は和合と同じ村であったけれども、この念仏踊りもやはり和合から二百年ぐらい前に伝えられたというふうに言われております。それで今、和合についていろいろ説明いただいたんですけども、同じようなことをやってはおります。ただここでは神社、お寺というのは一切関係がありませんで、十三日と十六日が地域としてやる迎え盆、送り盆になります。そして十四日、十五日というのはそれぞれの家でやる盆で、タイトボシと言いまして、新仏があるときには地区の人達が集まって一緒に盆を迎えてあげるのです。地区としては十三日に迎え盆と言いまして夜八時頃に八幡社に集まります。八幡社というのは飯田市にあります鳩ヶ嶺八幡神社を勧請してきたのだそうなんですけれども、非常に大事にしておりますで、そこには阿弥陀様やその他たくさんのお仏様がいますが、なぜかこの迎え盆・送り盆には八幡様だけ開けて、他は厨子を開けないでいる。阿弥陀様も祀られているのですが、阿弥陀様は厨子に入っていないむき出しのままで「今日は横を向いてくれよ」というふうに頼んでおいて、盆行事とは全然無関係なのです。ですから寺とか神社ではなく、地域の行事としておこなわれているということがはっきりとわかります。それは昔からそうだったかというのは一代前のことぐらいまでしかわからないものですが、二百年前はどうかはとも週れないんですけども「神仏混淆でずっと来てるよ」というお話や、地域の年中行事からみるとの中から神仏とは関係なかったのではないかというふうには私は感じております。十四日、十五日はそれぞれの地域でおこないまして、十六日の零時を過ぎますと、それぞれの家では盆送りをしてしまうんですね。だけれども十六日には地区として送り盆をいたします。そして十七日に日付が変わると川まで持って行って焼くという、そこで地域としては初めて送り盆を済ませるという形をとります。

地区の迎え盆・送り盆の内容は、十メートル四方くらいのせまい境内がある八幡様の境内に集まって全部おこなわれます。十三日も十六日もまず庭入りから始まります。庭入りとはまず行列から始まって三回右回りに境内を回って、それからヒツチキというのがあります。ここに和合で行なっている太鼓踊りの片鱗が見られます。どういう事かと言いますと、右の足を深く曲げて太鼓を打つらしい部分があるというだけしか言えないのですが、三回まわるなかでこれが一応太鼓踊りの部分かなと思います。

それから念仏になります。八幡様の横が崖になっていて、そちらを向いて念仏をあげます。そのときに念仏の太鼓は杵打ち、合間合間には二打膜打ちが入ります。一通り念仏をあげた後は非常に激しい太鼓の打ち方などがあります。そういうところに芸能の片鱗が見られると思います。

続いて和讃があり、これは八幡様に向かってやります。和讃の中に他の地域では庭裏めのような歌詞があるのですが、ここの和讃の中にはそういうものは一切ありません。「東西鎮まれお鎮まれ」から始まりまして、「今日は迎え盆だから、送り盆だからお墓にきました」というような内容の歌詞です。ですから迎え盆・送り盆の内容の歌詞しか載っていないということです。

和讃が終わりますと、一応集まった人達で手踊り、盆踊りをやります。そのときの盆踊りも高い山、すくいさ、十六、それぐらいしかできません。やっているうちにだんだん歌える歌詞がなくなってしまうて普段は何となく時間稼ぎをして終わっているのではないかと思います。が、たまたま私たちが行ったときには歌詞集ができたのと大勢若い人達が行ってくれたものですから、一生懸命手踊りをしてくれました。そんなことでやる気になれば手踊りもちゃんとやっている。十三日はそれで終わります。

十六日は庭入りがありまして、夜九時頃から一通り送り盆の念仏・和



城所 恵子委員

讃・盆踊りをします。十時過ぎになりますと、新仏のための和讃が始まります。ここでは同じような内容ですが一応和讃をあげ、そこから送り盆が始まるわけです。ここから十二時にむかつて盆踊りをしながら時間稼ぎをして十二時過ぎるのを待ちます。崖の上にはそれぞれの親戚から供えられてきた角灯籠がたくさんあります。ひとつが二万円もするような

灯籠が十幾つもあがっていました。それを持って川まで行きます。太鼓、鉦を先頭に川まで皆灯りをつけて列を組んで行きます。川につくと糸灯籠という元々盆行事のための灯籠は燃やさないで、供え物としてあげられた灯籠を川下に向けて倒すと、自然とロウソクから火がついてみんな灯籠が燃えていく。そして橋から川に投げて終わりにする。零時半に送り盆を終わって行事を終えます。ここには仏様・神様ではなくて、祖霊迎え・祖霊送りしかないなと思っております。

日吉は人数が少なく戸数も二十二戸しかありません。一番多くても三十数戸だったそうです。傾斜のきつい地域ですから田畑も生業として満足がいくほどは出来ませんので、皆外へ出てしまつて定年を過ぎてもから帰ってくる。六十以上の人がほとんどなんです。一人小学生がいまして和合の小学校に行っておりますけども、大体年寄りばかりの中でやっているのです、飛んだり跳ねたりはとでもできない。ですから一応は和合でやっていたようなことを気持ちのなかではやっていても、現実、目で見た形では表れていないというふうに、なくならな

いであるといいなあとという、そんなところがありました。以上です。

星野 はい、ありがとうございます。それでは続きまして天龍村の方に参りたいのですが、最初に大河内のものについて橋都先生、お願いいたします。

橋 都

それでは天龍村大河内のかけ踊りについてご説明いたします。この天龍村大河内が古い形を下伊那のなかで一番残しているんじゃないかなと、そんな風に感じます。と言いますのは迎え盆にしても新盆の家へ「駆け込み」というんですが、村人達が行列を作つて新盆の靈魂が帰つて来た盆棚へかけ踊りや和讃を奉納するというような昔からの風習、そういったものがいまだに残されているという、そういう地域が大河内であろうと思います。

大河内の場合八月一日から色んな行事、いまでも盆道作りと言う名称で集まつて舗装道路になる前は仏様を通つてくる、あるいはお墓へ行く道の草刈りをおこなつて、八月一日にお盆の準備を行う。それからお盆の行列のための切り子灯籠、かけ踊りのため菅笠に紙を垂らしたシデの垂らしだとかそういった準備を全部おこないまして、八月一日からかけ踊りもやるということで、これは中老様の踊りと言つてますが、結局は本番八月十四日のための練習だったんだろうと思います。それから八月六日は盆花迎えというふうに地元では言われてますが、この日はやっぱり若い人が集まつてかけ踊りの練習を行います。

それから新盆のお家は、全部押しかけていくんではなくて、新盆のお家の了解が得られなければ、無理矢理押しかけるわけにはいかないから昔から八月六日に申し出をします。それはお酒を一升新盆の家で持つてきて、それがお願いしますという挨拶になるわけです。そういったことも今でも行われております。

まず八月十四日が迎え盆、八月十六日が送り盆ということで、地域全体として行う行事が行われます。八月十四日は念仏堂というお堂がありまして、そこへ集まつて正式にかけ踊り、和讃などが行われます。これはまず夜八時に集まりまして支度、それぞれ浴衣で下駄履きで皆出てきまして、まずお堂に向かってかけ踊りをおこないます。

続いて念仏和讃で全部で十二くらいの神々様に一本ずつ幟旗も用意しまして、それをお堂の前へ並べて一つずつの神様に対して和讃を唱え

る。かなり長く一時間以上かかります。昔はおそらく一つずつの神様のところへ行つて歩いたものをまとめて念仏堂へ旗だけ立てて、そういうことをやってるんだらうと思います。

それを済ませてから、もう九時半過ぎですが、新盆のお家が今年は一軒だけありまして、このお家へ行列を作つて「駆け込み」という行事を行うわけです。道々、鉦・太鼓を叩きながら行きますから、新盆の家ではその鉦太鼓の音を聞いてタイトボシ、これは松明ですね、松明を灯すからタイトボシに火を点けます。しかもその松明はかつては百八本、お墓からずつと並べたそうです。初めてお墓へ行つた仏様ですから帰りの自分のうちがわからなくなっちゃ困るということでお墓から百八本並べたといわれてるんですが、現在は自宅の入り口へ松明を焚きます。ただ最近、そのアカシというのは松の根っこです。アカシの松明が採れなくなつたもんですからロウソクで代用しております。今年の場合もロウソクの代用で、自宅の入り口へ点々と何十メートルに渡つて並べるといことがなくて、葬儀屋さんの三角形のロウソク立ての台へ四十八本か四十本そこそこのロウソクが五センチ刻みぐらゐに点されていました。その火で照らされながら駆け踊りの行列が新盆の家へ入っていく。そして座敷に新盆の靈魂を祀つたお棚が、新盆棚があるわけですが、その庭で縁側の外で和讃とかけ踊りをおこなうわけです。それが終わりますと、新盆の家から招き入れられて、玄関先でなくて座敷の縁側から全員入ります。ミズムカエ（水迎え）という茶碗に水を入れてあつて、それをミソハギというお盆には必ず飾らなきゃいけない盆花なんです、その穂先、花の先で二、三滴ずつ、新盆の位牌へかけて拝むといったことを一人ずつおこなつたあと、一杯ご馳走になるわけです。ですから新盆のお家でも接待がなかなか大変になるわけですね。酒肴の用意をして何十人も入ってくるんですから。そうしているうちに若い人からまた下駄を履いて縁側から外へ出て盆踊りを踊ります。次々踊つて一番最後は大河内の場合は「八幡」

星 野

という踊りが踊られます。その盆踊りが始められると、一緒に新盆で集まつた親戚の人達も家族も踊ります。新盆の靈魂の前で踊つてやる形になるわけですね。そうして八幡が終わると、「新盆おいとま」という短い和讃がありまして、それを踊つて念仏堂へ帰ってきます。帰つてくれば十一時過ぎです。十二時近くという、だいたい新盆の家でお酒も頂戴してくると最低一時間半以上、二時間前後はかかります。昔は一年に五軒も六軒もその新盆があつた場合には、一晩明け方まで歩いてもしぜいぜい三、四軒ですか、そうすると六軒あると残りの二軒は翌日の十五日の夜に行つたといひます。

八月十六日が送り盆になりますが、十六日は午前零時を待つて靈魂を送るわけです。したがつて八時頃には集まつてくるんですが、皆さん集まつて集落全体の集会所で、地元の区費から出したお酒が出るわけです。それを飲みながら、盆踊りを踊つて十二時までを待つわけです。そして念仏堂へ移動しまして、そこでかけ踊り、それから念仏和讃を唱えて十二時を待つて焼き納めに出発します。庚申様という場所が焼き納める場所になつてゐるんです。そこへまた行列を作つて新盆の家から出された切り子灯籠、地区として用意した切り子灯籠、その他に八月十四日に拝んだ各神様の十何本の旗、それを全部持つて庚申様の前で和讃を唱えて火を付けます。それから全部焼き納めるとうしるを振り返らないように各家へ十二時過ぎに帰つて行く。こういう形で非常に古い形がそのまま残されているのが天龍村大河内かな、とそんな気がします。その大河内も昭和四十年代に八年くらい中断しました。過疎化してきて、大災害にあつたりして八年くらい中断したんですが、その中断の期間が短かつたもんですから、昔通りに復活して、今でもそれが続けられてゐると、こういうことでございます。

では残りの天龍村の坂部と向方について、それと満島、三つ続けて申し上げたいと思います。

まず八月十四日に坂部で「かけ踊り」が行われました。この一日でかけ踊りは済むことになっておりますが。ここは新盆の供養で掛ける踊りをするというのは大正ぐらいでなくなっておりまして、それをやらない形になっております。公民館から楽器等を持って来て、小学校の跡地で、今はコミュニティーセンターのある所ですけれども堂の庭と称している所に支度をした人たちが一同集まりまして、そこで踊りを踊ります。

本来ならいろいろな次第で踊られたんですけども、今年は省略した形でやりました。庭入り程度のことでしたが、一同輪になって、ちょっと拍子の太鼓を打って、その程度で次の金毘羅様、八幡森下の金毘羅様・秋葉様の所へ移動しました。約三百メートルほど離れておりますけれども、その移動の時には渡り拍子っていうか、祇園囃子と称しておりますけれども、要するに鉦太鼓をトントン叩きながら移動するわけです。その金毘羅様の所に着いてからの踊りが割りあい従来の踊りが行われました。最初に庭入りの円く輪になって太鼓鉦を叩く踊りから、続いていくつかの囃子ごとの後、「ヤットコセー」の掛詞で伊勢音頭っていうのが入るんです。その伊勢音頭のかけ声を掛けながら太鼓奏打をしている間に、二人が輪の真ん中に入ってきてまして願人踊りを踊るんですね。一人はヤナギという持ち物を持って、もうひとり頭は女性の形をした手ぬぐいをかぶりまして、男女対の踊りを踊ってみせるんですね。そういうのがあった後、ブツキリという拍子が入りまして、それから和讃が唱えられて、太鼓鉦の囃子が入るんです。昔は数多くの和讃の曲目があったんですけども、今は本当に簡単なことしかやっておりません。具体的に言いますと、金毘羅様とか八幡様とかそういった二、三の和讃を形式的にやるぐらいになります、その和讃のやり方というのは一節ごとに和讃がかけられて、その一節ごとに太鼓と鉦の拍子がドンドコドンドコと入り、同時に打ち手が回りながら、または踊りの輪の中央に切り込みながら所作します。それを踊

ると称しているわけなんです。それがひとしきり終わりますと、「すくいさ」というのと、「のうさあ」という手踊りを踊りました。「のうさあ」というのは例のナンパンの手でございまして、足を蹴る振りが非常に印象的でございました。これらを踊って一時間ばかり行いましたでしょうか、一区切りします。渡り拍子で先ほどの堂の庭へ戻って行きまして、堂の庭で踊ることを引け踊りと称しているんですが、先ほど金毘羅様の所と同じようなプログラムを繰り返すということでございます。

このかけ踊りの性格ですけども、由来につきましては寛政元年に大変な大雨がございまして、村人が十三人も亡くなり、馬も何頭か亡くなったという非常な雨続きでした。被害を受けてから、雨が止んで欲しいというような意味合いで願掛けをしたのが踊り始めだということです。下栗の場合は雨乞いの踊りという性格があったということが橋都さんからご説明ございましたけれども、この場合は「雨止め」の願い事が踊りの主旨だろうということになっております。しかし大正までは新盆の家の供養のかけ踊りも行われたように、やはり新盆供養の形をとどめております。新盆供養の形と下栗的な願掛けの踊りと両要素が見えるかと思えます。

次に八月十六日に向方へ参りました。向方から大河内が分村したわけで、今は非常に綺麗な形で新盆供養の次第を残している大河内の元になったのは、実は向方だ、向方の人はそのように自慢をされているんです。あにはからずや、今年はほとんどやってくだいませんでした。理由は新盆の家が今年はなかったからということなんです。それで形ばかり、送り盆という二十センチほどのヒイラギの松明を六地藏の前で燃やしながら、送り盆の唄を歌うということを形式だけやってくれるにとどまりました。本来ならばその後向方に特徴的な新盆を送るための「かんびようえ様踊り」とかがありまして、その後一同新盆の

家から寄せ集められました切り子灯笼、提灯などを一緒に持って、長松寺からそれらの焼却の場へと向かいます。長松寺の門の外でかんぴようえ様の踊りがあります。この「かんぴようえ様の踊り」ってどういう特徴かといいますと、新盆から集められました切り子灯笼に灯りをつけてそれを持ち上げてフワリフワリとさせて、その下方にひとりふたりの人が居て、灯笼に寄りつこうと、飛び上がったらしいんですね。その意味は切り子灯笼自体が新盆の霊であり、色んな家からの霊を集めてこれから送りに行きますよ、というような意味合いなんだそうです。そうした後で今度、一同は長松寺から二、三百メートル離れたマトオサンバという場所がありまして、そこへ行って切り子灯笼を持って行ってそこで焼くという次第があるんです。本年度はそういうことは一切ございませんでした。

八月十四日に本来ならば「かけ踊り」を長松寺で行うんですが、それはもちろん見せてもらえませんでした。いろいろ様子を探りますと、平成十八年までは八月十四日かけ踊り、八月十六日送り盆、きちっと次第をやったんですね。地元向方の村松英文さんの撮影したビデオテープがあつて確認できるんですが、どうも平成十九年、二十年、少なくとも二十年、二十一年とですね、「かけ踊り」はやってないというお話を伺いました。その後村松さんからもひとつ映像記録が送られて来まして、それは平成二十年の八月十六日に送り盆だけはやっていたようなんです。このようにかなり集落の人口の過疎化、高齢化が厳しく、当伝承は危うい状態にあるということをつくづく感じました。坂部の場合も、居住人口が今まで二十四戸あったのが十六戸にこの十年間ほどで急速に減少しております、次第やら歌詞やら演目やらかなり省略されたやり方で行われておりまして、この二箇所の今後の伝承はかなり厳しいものがあるなあと感じました。

向方の特徴ですけど、大河内のものに近く、新盆供養の、送り盆のところが特徴がある形です。新盆の家までは今は訪れません。訪れな

くてむしろ新盆のあった家から長松寺へ切り子灯笼を持って来て、「かんぴようえ様の踊り」を踊り、新盆の霊を送って行って焼くということをやっております。

新盆の家まで行って踊りかけたのは戦時中、第二次大戦終戦直前まで、昭和十七年か十九年頃やったという記憶があります。第二次大戦後はやっておりません。いずれにしても大河内の形式に近いものであるということが言えるかと思えます。かけ踊りも色々調べてみますと和讃がいくつかございまして、その和讃の一節ごとに「蚊ばらい踊り」だとか、「世の中踊り」だとか「庭褒めの踊り」、この三つは踊られていたわけですけども、一節ごとに、太鼓の区切りごとに太鼓を持った者が体を揺すり足を運びながら太鼓を打ちつつ拍子をいれるという、そういう形の踊り方でございます。

最後に満島でございますけれども、こちらは十月十七日、十八日の満島神社の秋の祭りの練り行列の折りにおこなわれたわけです。

満島神社というのは明治四十二年に合祀されて、今日に至るものです。それ以前に村社とか無格社みたいなものがあり、それらがいろいろ祀られていた。氏族の祀りみたいな形のものも含まれていたそうですけどもそれらが全部統合されました。十月十七日にお神輿に御魂入れをして、原の森という所に満島神社があります。そこで御魂移しをやって神輿が南の森まで巡行するわけでございます。そこで一泊しまして、十八日に南の森から原の森までお帰りになる、という祭礼次第でございます。そういう祭礼次第の中に「かけ太鼓」というのが組み込まれております。かつては「かけ踊り」とも言ってたそうです。中村浩さんは、満島のこのかけ踊りは「かけ踊り」というものが最も零落した姿がここにある「みたいな、かなり満島の人が怒るんじゃないかと思うことを述べています。「かけ踊り」の視点から見ると、確かにそうとは言えるんですけど、しかし祭り全体は盛大で立派な

のでした。特に「かけ太鼓」の部分を担当する若者は練習にも力が入り、その踊り振りがこの行列の先頭に立って道行きしたりするんですけど、足を綺麗に左足・右足・左足と捌きながら格好よく前進する振りで非常に立派なものです。ただ、「かけ踊り」の視点から見るとそのような零落した姿ということが言えるのでしょうか。他に獅子舞がついたり、吉野踊りと称している風流傘みたいなのがついたり、その他大名行列がついていたり、祭礼の行列形が作られています。ところが、その先頭にこの「かけ太鼓」の若者が位置しておりまして、いくら聞いてもどういう経緯でどういうふうにかが行列の次第に組み込まれるに至ったか解らないんですね。でもその「かけ太鼓」というのは、行列風流の中心になっておりまして、かなり重要視された位置づけがなされているということを感じました。

それからもう一点は、「かけ太鼓」なるものが神社でひと踊り踊られるわけです。和讃に相当する「四方名所」、要するに現代名所尽みたいな歌詞に読み変えられてるんですけども、それから褒め歌ですね、原の森神社を褒めるとか、あるいは南の森を褒める褒め歌、それから鎮めの歌とそういう歌が一節ごとにかがられて一節ごとに太鼓と鉦の囃子が入り、打ち手は輪の中央に寄ってみたり回転してみたりというそういう踊りを見せる。尚、「十六」という次第もありますが、それは満島の場合には、その太鼓鉦を打つ時の打ち人たちの踊りの手であると同時に、また道中を行列する道中の囃子の時も十六という囃子があるんですね。だからその点どういう関係があるか検討してみる必要があるかなと思ってるんです。なによりもその太鼓の奏打、鉦と太鼓を打ちながら踊りをやるわけで、その形というのは変形はしているけれども、大河内なんかもそうだと思うんですけども、坂部とか向方の天龍村の方で見たような盆踊りにも通ずると思うんです。変形はしてるけども、足取りとかの基本はそういう伝統は引き継いでいるんじゃないかなという印象を受けました。そういう意味で、零落した姿と

だけ評価して言っているのかなと思ったんです。そういう印象をお伝えしました。

星野 それでは続きまして、中井侍お願いします。

久保田 中井侍の報告をいたします。十一月第四の土日で行います。

満島がもつとも零落した姿だとすれば、それよりさらに大変なんですけども、名前が秋例祭となっていますが、地元の人も色々な言い方をされますけども一つには、「湯立て祭り」なんだと。また最近では里芋を串に刺して焼いて田楽で食べさせるのが流行っております、ここ二十年のことらしいんですけど「芋祭り」なんていう名前でも呼ばれております。ですので秋の祭りで湯立て神楽を行うわけなんですけども、それが本来の中心、祭りの中心であつたかと思えます。

村自体が断崖絶壁みたいな所なのですが、その一番高いところの林の木立の中に、案内がなければ絶対わからないような神社があります。小さい祠の集まった社殿の前に若干のスペースがありまして、そこに囲炉裏がぎってあります。そこで湯立ても行わなければならない、前日の夜にそこに集まりまして、そこでかけ踊り的なことをやって、そして離れた場所にある集会所まで練り歩いていきます。舞台となる神社は、古くはもつと何カ所かあつたらしいんですけども、最近までは三カ所ありました。白山権現と小高明神と十四所権現というところだったので、十四所権現の方はやらなくなってしまうとして、今では白山権現と小高明神だけでやってるようになってます。この両者とも屋号を大屋という宮澤家が祀つてるお社なんです。本来であればその白山権現か小高神社から出発してその十四所権現まで行きます、それが前日ですね、宵宮のお渡しをして、そして翌日そこから戻ってくるという形。あるいは十四所権現の方で祭りをやる時には白山か小高明神に一回行きまして、翌日そこから戻ってくるという、そう

いう二社のあいだを渡るお祭りになってるんですけども、現在その片方がやめてしまったもので、前日は村の集会所まで練り歩いていくというかたちになってます。ほとんど真っ暗で灯りもない、月明かりだけのなかを太鼓を叩きながら練って行きます。

翌日が、本祭りの日なんですけど、十四所権現があつたところまでは行かないんですけども、その地区の端っこまで一回行きました、そこから練り歩いてそこでかけ踊り、先ほどの夜の歩いていくところもかけ踊り的なことをやりながら、今年の場合は小高明神まで上がりまして、そこで湯立ての神楽が始まるという形になっています。

どんなことをやるかというと、まず三種類ありまして、ひとつが道中囃子、これは祇園囃子ともいうそうなんですけど。これは楽曲だけです。太鼓と笛だけで進んでいくものでありまして、非常にリズムカナルなテンポの良い賑やかな曲で行進していきます。そして途中で踊りを踊るんです。これは現在は女の子が六人、三人は村の外から来てもらっているんですが、その女の子たちが御幣を持って踊るんですね。ただこれはどうも戦後から始めたようです。そういった踊り、もちろん太鼓も打ちながら踊る形になるんですけども、この時の曲は「笠くずし」といって、「ひとつ人目を忍ぶには」という感じで数え歌を歌っていく形になっています。「笠くずし」と言ってるんですけども、「笠くずし」ではないかと言われております。そしてお宮に入るところで「宿入り」と「宮褒め」が歌われます。宿入りは「東西鎮まれ」の文句でして、宮褒めのほうは「遙かにお庭を眺むれば」で始まるものです。祭り自体は先ほど申し上げましたように湯立ての神楽の祭りです、それから村の小さなお社の祭りとして、それも地域の草分け的な人が祀っているところですので、そういう個人というか村の草分けによる、村の祭りにもなっている。そういった小さな神仏の祭りとして行なわれていて、その中の行進の部分でかけ踊り的なものが活用され、利用されているのではないかと。お盆にはまったくこれはやりませんし、仏

供養するという意識はまったくなくて、あくまでも秋の神祭りの中にそういったかけ踊り的なものが応用されて使われているんだということが言えるかと思っています。

この祭りは禰宜さんが仕切るんですけども、今年はその禰宜さんにご不幸があつたということで全く参加しなかったんですね。それぐらい湯立ての祭り自体は神事でありますので、むしろ仏教的な、供養的なものは全く排除して、むしろ忌むべきこととして取り入れないというふうな意識でありました。

これまで見てきたものの応用編といえましょうか、神祭りのなかに形式が応用されて使われているという点では非常におもしろいなと思いましたし、坂部の場合も冬祭りで最初に火之王社から諏訪神社に練り込んでくる時はかけ踊りの太鼓を叩きながらあがってきますので、そういうところでも本来の意味とは別に活用されてるんじゃないか。元々かけ踊りのほうも神々を回るといふふうな意識があつたので、どこかでそういう繋がりがあったのかなというふうにも感じました。そういう意味ではとても興味深い祭りでした。

星野

はい、ありがとうございます。中村さん、温田と梨久保を。また皆さんのお話を聞いてある程度他地区の状況が伝わったことかとは思いますが、そういうまとめた言い方で。

中村

榑木踊りは、現在温田の南宮神社祭礼として八月の第四日曜日に行われております。今年は八月二十二日が実際に行われた日なんですけども、午前八時頃から準備が始まっております。かつては相戸といわれた「踊り宿」で行われていた次第を、現在では多目的センターというものが出てきて、平成二十年から「お祭り広場」で踊られるようになりました。実際の行列、踊りは午後二時頃から始まって、「お祭り広場」で最初の踊りが行われます。その後行列を練って「渡拍子」と「そそ

り」という囃子で坂を下り、村道沿いにお稲荷様へ行き、そこでお稲荷様の「鳥居前の踊り」を行います。これは実際に踊るといふよりはむしろ歌を奉納するだけです。

次に、行列を練って南宮神社の本宮へ行きます。そこでも境内が狭いので、少し振りのような感じを出して踊りますが、「お祭り広場」のような踊りはできません。引き返して南宮神社の「鳥居前の踊り」では、そこも狭いので歌が中心になり、さらに南宮神社の境内に行つて、約十分ぐらいの踊りを行います。南宮神社前の踊りを踊つて、六時から宵宮の神事が行われます。本来は、そこでいったん休憩になつて最後に再び南宮神社の境内で、「笠破き」を踊るはずなんですが、今年は「お祭り広場」で「笠破き」を踊りました。以上が現在の温田の「樽木踊り」の次第です。ここ二十年、二十一年でかなり変わつて来ているということが言えると思います。「笠破き」があつた後は花火をやつて、直会があつて終わりになります。

念仏踊りの要素はまったくありませんで、踊り歌から推測すると「樽木踊り」という名称からも明らかのように、由来に基づいて樽木を完納した感謝の気持ちを神々に捧げるための祭りだと思ひます。かつては六つの地域で次々に日を追つて行われていましたが、現在は温田だけに伝承されています。これからお話しする梨久保の「樽木踊り」が平成十七年を最後に行われなくなつたということも含めて、たつたひとつの伝承地である温田は、非常に貴重なのですが、ここ二、三年の変化をどういふに捉えたらいいかは結構大きな問題だろうと思ひます。

歌から推測すると、地域のあらゆる神仏、精霊といったものを鎮めて、地域が安全であり、樽木が来年も無事に完納できることをあらゆる地域の神々、精霊に対して祈願している内容になっています。この地域の踊り、念仏と祭りの踊り歌を考える上で重要なのは、行列を作つて次々に違う場所に移動していくのが大きな特色になっています。



中村 茂子委員

梨久保ですけれども、平成十七年を最後に行われなくなつてしまいましたが、実施当時は、十月九日というかなり遅い時期に行われていました。本来は旧暦の七月二十五日であつて、いつ頃からかはつきりしません。過疎によつて継承が困難になり、急激に、中断に追い込まれました。

実施場所は、かつて結婚式とか新築とかお祝い事があつた家を宿として「宿踊り」を行いました。宿から行列を繰り出し、池野神社の鳥居前と神社境内で踊りました。平成元年になつて生活改善センターが設置されたのを機会に、ここを踊り宿として活用するようになりましたが、このセンターの庭も非常に狭いので、ほとんど歌だけの形式でここから行列を繰り出し、神社の鳥居前に行きました。

かつて、「樽木踊り保存会」があつたようですが、『長野県の民俗芸能緊急調査報告書』を執筆された桜井弘人さんは、平成五年に調査を行った時に、一応保存会があると記録されています。その当時は十五戸と書かれていましたが、今年は十戸、そのうち一人暮らしが四戸で、全人口二十人というのが現状です。

生活改善センターで御神酒をいただき、そこから行列を繰り出して、鳥居に行き、鳥居のところできざまな歌詞、たとえば秋葉様、金比羅様、蚕霊様、庚申様、地藏様、明神様に対して踊り歌を奉納する歌詞が含まれていますので、すべてをその鳥居のところで済ませてしまいます。参道を登つて境内で「樽木踊り」を踊ります。センター設置以後、実際に踊っていたのは、神社の境内だけだつたと思います。終つたあとで社務所でお振る舞い酒があつて、一息ついたあと全員で「笠破り」を踊っていました。

中断した理由は、過疎なんです、お話を伺つた区長さんと氏子総代

長さんは、平成十七年の十月九日には、村中が参加して非常に賑やかなお祭りになった。そのあと、その当時小学生、中学の方々が協力をしてくれると言ってくれても、すでに村で彼らを受け入れるだけの力が残っていなかったというお話をなさっていました。村の方々全員が、これほど早く中断に追い込まれる自覚もないまま、あつという間に中断してしまったと仰っておられました。

星野

ありがとうございます。いちおう順序に沿いましてそれぞれのご調査された内容のご報告とコメントをいただきました。

まず今、中村さんのご説明で、温田の樽木踊りで、行列をつくって次々と神様等移動して回って行くところにこの「かけ踊り」というものの特徴があるというふうに捉えるべきではないか、というご発言がありました。

中村浩さんの覚え書きを読んでもいろんなところで「かけ踊り」という言葉が出てくるわけですけど、それをどのように捉えるのか、決して簡単に結論というのは出せるわけでもないんですけど、いろんな考えを出しあって少しでも、議論を前に進めてみたらどうかと思います。

まず中村さん、前から「かけ踊り」についてずっと考察を進められてこられてきて、さきほどのお話のような地点に今行き着かれたと思うのですけど、なにかもう少し、ご見解を。

中村

はい、考えていることはありますが、まだ具体的にまとめるということにはなっていないです。

踊り歌を見る限り、風流踊りを受け入れていることは確かなんだと思います。しかし、芸態的には、風流踊りというよりはむしろ風流拍子物に近いと考えています。『風流拍子物』、『念仏拍子物』に盆踊りを追加した形式で伝承しているのが下伊那のかけ踊り、あるいは念仏踊り

の特色であろうと考えています。地域的に風流踊りを芸態的に演じることができなかったために、詞章だけが残されていると考えています。

星野

ああ、なるほどね。要するに当該かけ踊りの小唄踊り、例の和讃のところで出てくる小唄のあたりに関連してかけ踊りをどう解釈するかの問題ですね。

中村

はい、ええ。

星野

そのところですね。私もわかります。中村浩さんのご説明でも踊り歌として当時の流行歌的なものがあり、「米搗き唄」、「米研ぎ歌」だとか非常におもしろがらせるいろんな内容のものがあるわけですね。それからあるいは毬つき歌や遊び歌的な要素もあるとか、その辺のところだと思うんですけども、いまのご説明で、だいたい性格を概括的に捉えていたと思うんですが。

ほかにどうでしょうか、中村先生の方で説明いただいた通りかと思うんですけど久保田さんとか城所さん、お二人あたりからそれぞれなにかご見解ありましたら。

さきほど久保田さんをご報告なさったあたりに中村浩さんの著書の結論的なところがあるわけですね。

中村浩さんはそのところを次のようにまとめているんですね。

―南伊那の古い村々の盆踊りの芯は、大方かけ踊りといわれていたものが多い。しかもその踊りは精霊（神仏として公称されている以外の霊）を対象において、我他人ともに型に従って楽しむ集団の踊りだ。「庭入り」「庭ほめ」「引け庭」の三つの式の踊りを動かないものとして、各村々で多少の違い、手足の技の出入りはあっても、大方は祝い歌、豊作祈願の踊りと言える類だ。表現がいろいろで、なぜこんなと

思われる歌もあるが、つまりはおめでたいことになる歌だ。もつとも、和合などには、念仏と称しているからもあるうが、血ノ池や西院ノ河原などもあるが、これは念仏が今風になってからのことで、かけ踊りのもとからの式の歌とは思えない――

いまの中村茂子さんのご説明と重なっているところが多いんですけども、ただ新盆供養と予祝的な祝い歌とか豊作祈願のものではないかと考えるあたりが、中村浩さんがずっと最初からこだわっていたところかなと思ったんですけど、その辺についてのご見解、お考えをお願いします。

久保田

予祝とまでははっきりと言えないようなところがあると思うんですが、やはり一種の神送りの、そのひとつに一番最初にも仰られていましたように、新盆供養の問題の目的とするものと、神仏精霊を回るといふものがあるというのは事実だと思います。

新盆供養がひとつの機能としてあるのは当然だと思うんですけども、もうひとつの神仏を回るといふことを見えますと、ひとつに邪霊とかいわゆる格の低い精霊みたいなものを送り出すというふうな機能が果たしてあるのかどうか。盆行事自体にそういった無縁仏のようなものを鎮めるといふふうなことがあると思いますので、そういうところでかけ踊り・念仏踊りが機能してきているのか。ただ、和合の念仏踊りなんか見てもダイレクトにそうは言っていないので、どうかとは思いますが、それが考えられるのかな。

例えば中井侍の秋祭りの湯立て神楽のような、霜月の祭り、湯立ての神楽の方でも、神楽の機能として格の低い精霊や悪霊の類を追いかうというのはひとつあると思います。

坂部なんかでもかつてやっていましたが、中井侍の「津島の舞」では、赤い御幣を持って舞ったあとに最後にそれを崖からゴミのようにポイ



と御幣を投げ捨てるということをします。神楽の方にもそういった格の低い精霊たちを追いかうことが顕著に見られますので、そういうところで重なってきて念仏踊りにも同じような機能を持たせているのかな、という気もするんですけども。

ただ現状のやり方を見ていると別に「庭ほめ」とかはしますけど、追い出すということはしていないので、踊り、念仏踊り、かけ踊りそのものからは、はっきりとは見られないんですが、お盆と冬の祭りに共通する要素として見ていきますと、そんなところが両方に応用されるようになったのかな、と思います。

星野

うーん、なるほどね。ひとつの新しいご見解ですね。小さな悪さをする神を送るといふあたりと、和合の血の池とか西院の河原とかを唱える新盆供養の形が結びついたのかなあ、というひとつの仮説ですね。

久保田

ええ。

星野

なるほど。それでは、城所先生。

城所

私の見ているところは日吉で、それだけ見ていたらわからないんですけど、いまお話を聞いているのと、部分的に写真を見たりしているなかで思ったのは、ちょっと今のことは違うんですけど、これをやっている人達に三つのグループがあるかなあというふうに思ったんです。

どこでもはっきり分かれてるんじゃないんですけど、場所によっては念仏をあげる人達は羽織を着て、着流しですけども羽織を着ている。念仏をあげるのはわりあい年上の人達で、だけれど太鼓を持って跳ね

星野

たりするのは若い人達、男女混ざってそこに集まった人達で盆踊りをしたりする。そういう三つのグループがあるなあっていうふうに思いました。そのなかで一番いろいろと変化をつけて流行的なものなどを取り入れたのは太鼓踊りを中心とした若い人達で、お堂の行事と若者のアピールが合体したのかと思ってみたのですが。

なるほど。まあ確かにね。

それじゃあ橋都先生、大河内が一番古い形を残しておられるということですね。文化庁がこれを記録選択した理由書を見ましても、南信濃といいますが、下伊那のかけ踊りの特徴的なものは大河内のあたり、その辺にあるんじゃないかみたいな説明がなされているんですけども、今までのお話を聞いて、なにかご見解ございましたらお願いしたいと思います。

橋都

たしかに精霊を送るということと、それから神仏を拜んで歩くという二通りがあったのかなとも思いますが、「アラボン」「シンボン」の家へ、下伊那ではシンボンという言い方なんです、その家へ練り込んでいたのは大河内だけでなくて、大河内の近隣でもおこなわれていました。向方では昭和二十四年が最後だった、坂部は明治の末期まではそれをやってたが、大正に入ってからやれなくなつたと聞いております。それから天龍村の大久那という集落では新盆の家へまわることは昭和十年頃でできなくなつたと言っております。それから阿南町和合も確か大正くらいまでは各家をまわってたが昭和に入ってから出来なくなつたというふうに聞いてます。そして大河内のみが現在新盆の家への「かけ込み」を行っているということなんです。

そんな訳で天龍村および阿南町については新盆の精霊を送るという要素が強かつたんじゃないかなというふうには思ってます。

それから泰阜村の樽木祭り、我科とか漆平野は昭和五十年頃私が気が

星野

ついたときには止めちゃってた、もうやってなかったんです。梨久保は何度も行きました。昔、夜中にぼんぼりを付けた子供の山車なんかまで出てたんですが。樽木祭りは時期も八月十五日とか七月十五日っていうお盆の時期からははずれてますし、樽木が納め終わったお祝いというようなことは言ってますので、そういう要素もあるのかな、新盆の靈魂とは関係ないのかな、ちょっとわからずにおります。下栗については、今の人達はそういうことを忘れてしまっていますけれども、昔はお盆の時期におこなってたということは事実です。四十年ぐらい前に私が聞いて、今でも録音テープがありますけれども、旧暦の七月十五、十六日、昭和の初め頃からか新暦に変わったんで、それからは八月十五、十六日に六キロも歩いて大野までかけ踊り（当時はシデ踊りと呼んだ）を行ったというから、お盆にはやっぱり関係あったんだろうなと思います。そのあとは下栗でも盆踊りを踊ったという事です。

なるほど、はい。中村浩さんの『かけ踊り覚書』で、新野の盆踊りが、周辺のかけ踊りとか太鼓とか、和合の念仏とかと関わりが強い内容を有しているように書いておられるんですね。

記録選択する時には新野を入れなかったのは、これ自身がすでに個別に記録選択の無形民俗文化財になっており、重要無形民俗文化財指定にもなったこともあり外してるんだと思うんですけども。

この著書で中村浩さんが次のように村人の話を紹介してるんですね。

「古老の語に、私ら子供の頃にはかけ踊りと言いましてね」と言ってる、新野の盆踊りをかけ踊りという言い方もあったということですね。私はこれに非常に注目してるんですけども。なぜ注目したかと言いますと「かける」ということについては中村浩さんも色々「踊りかける」「願をかける」とかと述べていたし、中村茂子さんが仰ったように行列をしてどこかへ出向くとか、新盆の家へ行くのも「かける」というん

ですね。中村茂子さんの総説で述べてることに従えば「行列してどこか皆で行く」とかっていうようなことですよ。

星野

私に結論はないんですけども、盆踊りっていうのをどう考えるか、それが「かけ踊り」にどう位置づけられるものかってことも非常に大事だと思ってます。

橋都 大河内も「かけこみ」って言うんです。

星野

ええ、言いますよね。色んなところで「かける」って言葉が出て来てるわけですが。盆踊りはわりあい全国的にそうなんですけども日を違えて、日を違えてといっても盆踊りの日ですけども、だいたい周辺の集落は日にちを違えて行っているんですね。だから若い衆は、「今日はここの盆踊り」「次はどこそここの盆踊り」と言っただけで押しかけて行くんですね。そういうしきたりっていうのがありますから、ああ、なるほどな、じゃあ新野でもそういうふうな意味合いで存在していたのかなと推察するわけですが、そういうことをかけると言った古老の話なのかと個人的に勝手に推察しているんです。

盆踊りがこのかけ踊りといわれている踊り全体の中でどういう位置を占めるのかっていうことは従来の盆踊りの始源論と関わっているように思える。例の風流の太鼓踊りって言いますか、風流踊り全体の中のひとつのがわ（側）の人達の手踊りの連中が現在の盆踊りの元になったものらしいということは、いろいろ説明がこれまでもされてきたわけですけども、それで私はその辺がその説明で十分だったのかなあと思っているんです。この「かけ踊り」の中への盆踊りの入り方っていうのは色々順序があり、変遷も色々あったのではないかな。しかし次第の最後に盆踊り「八幡」を踊る、あるいは新野の場合は「能登」、あれが全体の次第の中で非常に重要な意味をもっていますよね。

橋都

大河内では盆踊りの最後に「八幡」を一回だけ揃って踊るとその日の盆踊りは終了する。他の唄は一晩の盆踊りの中で二度も三度も踊るところがありますが「八幡」は最後に一回だけしか踊らないのです。

和讃は風流の小唄のようになってるんですけども、例えば「かけ踊り」の場合は只今中村さんより「念仏拍子もの」というご説明があったように太鼓踊り、あるいは鉦踊りのものですよ。それを見ていますと、「なににに踊り」「世の中踊り」とか「引け踊り」とか「庭裏め踊り」という踊りになっているんだけど、踊りっていうのは囃子ものの部分なんですよ。まず歌を一節一節ずつ聞くんですよ。どうも歌にウエイトが置かれているように思うんですね。「かけ踊り」っていうのは太鼓・鉦の囃子ものなんだけど、形態としては歌を聞くところにウエイトがあるんじゃないかと思われます。

実は柳田国男が盆踊りには二種類があると説明していた。一つは甚句踊り、七・七・七・五の甚句踊りなんかがそうなんですけども、要するに本来は歌はなかったものなんですよ。「ドッコイショ」とか「ソラヨ」とか「ドッコイサ」とかっていう囃子詞があればそれでよかったものですよ。後になってそれにだんだん歌がついてきたのだと。そういう形式の踊りが一種の盆踊りなんですよ。それは手踊りが大部分で、今は甚句形式になってるんですけども。

ところが、近世以降の甚句踊りの流行以前は、色んな歌の詩型がありまして、七・五・七・五とか五・七・五・七、あるいは語り物は七・七・七・七なんですけども。

柳田はもうひとつの種類の盆踊りっていうのは、「歌を聞かせるところにウエイトのある踊りだ」と言っている。それが今では口説きになってるんですね。口説き音頭という関西方面で多い形の盆踊りなんですけど、そういう二つの分け方をしているんです。

この説明からヒントになるのかどうか、「かけ踊り」の中で一つは和讃的、かけ踊りの部分は聞かせる、歌の文句にウエイトのある踊り

橋 都

である。他方盆踊りの方は歌詞はついてますけど、あんまり歌詞自体に意味がなくて、迎えた精霊を送り返すとか鎮めるとかということに色々繋がってくるんだと思うんです。つまり動作、足拍子にウェイトの置かれている踊りです。ま、これはひとつの考え方ですけども、盆踊りっていうものと、かけ踊りをどういうふうと考え、位置づけていくかっていう課題は今我々が調査対象とした「かけ踊り」の意味を明確にするひとつの方法ではあるまいかと思っています。

私は専門的な研究をしていないものですから、詳しい関連や位置付けは分かりませんが、唯一下伊那の現地にいる人間として四十年ぐらい前から最初は写真という観点で、写真撮影の方から興味を持ってお祭りや盆踊りは見ておりました。

「新野の盆踊り」の最後にはやっぱり和讃がおこなわれるんです。「かけ踊り」の時に使われる太鼓と鉦も揃って叩きながら、踊りの振りはもうなくなっているんですが、「新野の盆踊り」の中心になる音頭取りが登る櫓やぐらがあります。その櫓の下に市神様という神様があって、その市神様の前を中心に盆踊りをおこなうのです。十七日の明け方、六時か七時ぐらいから、その櫓の下で和讃がおこなわれるんです。行者の禰宜がお供え物をして祈って、その裏で和讃がおこなわれるんです。そして御大師様が村はずれにありまして、そこまで行列をして行きます。各家から新盆の各家一軒ずつから切り子灯籠が一本ずつ盆踊りの場へ持ち込まれます。だいたい新野は人口が多いから十幾つか二十本ぐらい切り子灯籠が出されます。それは死んだ人の数だけ出てくるんですけども、それを集団で行列で送るわけです。だから一軒ずつで新盆送りはやっているんですが、その他に十六日の夜、盆踊りの輪の中へ各新盆の家一軒ずつから、一個ずつということに決められて出て来る、これを持って行者が先に立って、灯籠を先頭に鉦・太鼓がこの裏について、そうして御太子様へ行って、御大使様から折り返して

星 野

くる時に昔は空砲を撃って、その音を聞いて盆踊りは「能登」の踊りに自動的に変わるんです、村人全員が。盆の切り子灯籠の行列が「能登」の踊りの中を通り越した時は、それ以降来年まで盆踊りを踊っちゃならない、とされています。集団の靈魂の送り、新盆の送りだと思っ
うんです。

橋 都

ええ、前日の八月十五日に新盆の各家では新盆供養を行います。柳田国男は『信州随筆』の中で「新野の盆踊り」という項目で書いてます。「新野の盆踊り」は神の時代の仏教が渡来する前のしきたりを残しているのではなからうか、っていうようなことを書いてます。

星 野

なんかこの点についてほかにご意見というか、ご見解を。

城 所

わたしは設楽郡や浜松の放下や大念仏を調べた中で、自分で歌詞を作った歌いながら盆踊りを踊ったのはそんなに古くはなかったように聞きました。今は作ることはないの、伝えられている歌詞を覚えて歌うしかないけれど、二十年くらい前ですが、その時の年寄りたちの若い頃にはみんな自分で作って歌っていたと言っていましたね。あの辺りでも同じような形で庭入りをして念仏をあげて、最後に踊りを踊って、また引き庭で帰ってくる形をとるのですが、盆踊りの時にはいろんな歌が出てきたと聞きました。

橋 都

やっぱりこれは、静岡県あたりの方から伝わって来たものかもしれないですね。

城 所

町田佳聲の『民謡大観』では全国の民謡から民俗芸能で歌われている歌まで楽譜と解説付で地域別に纏められているのですが、その中の中部編、長野・静岡・愛知を読み返してみました。例えば田峰観音の盆行事と踊りの項では、行列・はね込み・念仏・盆踊り・庭踊り・引き揚げの順で盆行事が書かれていました。盆踊りでよく歌われていたのが「おさま甚句」「高い山」「こらさ」「とよえ」「十六」「御嶽」「能登」「しようんがいな」「数え歌」「すくいさ」などで、愛知県の設楽郡各地や長野県下伊那郡新野地方のものほとんど一致しているとありました。

もうひとつ、長野県の解説の中で海のない県では、生活をする上で必需品である塩を得るために、戦国時代の武将たちは塩の採れる地域を自分の領土にするために攻略をかけたらしいとありました。塩は浜松辺りでも造れたが他地域に送るほどの量は出来なかったので、四国から運ばれたようです。それには船で渥美半島の中程に送り、そこから幾つかのルートで山地方面へ運ばれたようです。そのルートの中に伊藤良吉氏が念仏踊りの系譜に示したルートと一致するルートがあり、塩ばかりでなく海産物も運ばれたのです。つまり物資の流通ルートに乗って民俗芸能も少しずつ形を変えながら伝わってきているのだと思います。渥美半島の盆行事にある棒踊りが和合ではヒツチキという形で残っているのかと思ってみました。

星 野

『まつり』十一号の伊藤良吉さんの念仏踊りの流れ系譜を読みますと、渥美半島から設楽、信州街道から豊根へ入ってずっと北へ連なっている一覧表が載せてあって、豊根村あたりからは「かけ踊り」という名称の所が愛知県の方にもあるというのが載ってるんです。もうひとつはこの系譜が伊勢・熊野へと通ずる道もあり、その辺も関わりがあったんじゃないかなというようにも言われているようです。

中村さん、わりあい早くからあっちの羯鼓踊りとか三重とかあの辺の

ことも視野に入れ考察されてたというふうに承ってるんですけど。

中 村

星野さんがさっき「新野の盆踊りが問題になる」と仰られました。確かにそうかもしれないんですが、橋都さんが仰られたように「新野の盆踊り」も周辺の新盆供養のかけ踊りと別の伝承ではないのです。ただ、盆踊りの部分が肥大しただけだと考えているので、まったく同じなんですね。新しく構成された満島とか、中井侍の祭りはまた、ちょっと違った形式になってますが、かけ踊りの新盆供養も新しい祭りも、行列を練って次々に踊り継いで行きます。踊れないところでは歌だけをかける。ともかく行列をして踊り込むところが「かけ踊り」の大きな特色だと思います。それが「盆踊り」だろうが、「念仏踊り」「風流踊り」だろうが関係なく、「かけ踊り」の形式だと考えています。

星 野

ええ、わかりました。

橋 都

中村先生じゃなかったですかね？「駆け込み」とか「大念仏」だとか新盆の家を「かけ踊り」が訪れる、静岡・愛知県側の呼び名は。長野県側では大河内が「かけこみ」という言い方で一箇所ぐらいしか残っていないんですが、向こうでは何と呼んでいるのですか。

中 村

「はねこみ」というのがあります。ともかく行列を作ってどこかに練り込み、踊ったり歌ったりする形式を「かけ踊り」とか、「かけこみ」とか「跳ねこみ」という言い方をするんであって、これらは踊りの形式を表現した名称だと考えています。

星 野

わかりました。もうひとつ私はそういう行事とそれを伝えている村々の関係を実は視野に入れてもいいんじゃないかなとは思ってはいたんです。ちょっと抽象的な言い方なんですけれど。

これはほとんど紹介されていないんですが、中村茂子さんが調査報告書を書かれてます寒水の、奥美濃の掛け踊りっていうのがあるわけですけど、かつてその折に「場所踊り」っていうのが掛け踊りの終わった後で行われていたんです。

実はその「場所踊り」が地元ではかなり突っ込んで問題になってまして、寺田敬蔵と言う十年ほど前に亡くなられた郡上八幡の郷土史家の方ですけども、この「場所踊り」の説明をしていて、「場所踊り」の「場所」をどう理解するかっていうのが問題になりまして。

あの辺一帯で大きな芭蕉の葉状のものを背負う踊りがあり、それでこれはその「芭蕉踊り」のバシヨじゃないかっていう説も一時広まったんですけど。「場所」はどういうことかという問題ですが、「場所名乗り」っていうのをやるんですね。それと関わりがある。

ある村で盆踊りがありますと周辺の村の若者が集まって来る。踊り開催地のAの村が「ショウガをおろす」ことから始まるんです。あるいは小歌かもしれないんですけど、このショウガって正しい歌と書いて、正歌をおろすって言って、例えば小栗判官の筆の段の語り物、五七五七の詩型の歌を歌うんですね。それが「場所踊り」で、踊りとは言うけども正歌を歌うことが中心なんです。踊りはただ足をちょつと前へ出したり引っ込めたりしているくらいで、輪になって一周するのに二時間もかかるぐらいの踊り振りなんです。その時にA村の盆踊り主催村の人がB村、C村の人が集まって来ているのを見つけると「やあ、B村の若い衆がこの盆踊りに来てくれた」って言って、「どうかB村の若い衆、次はあなたの所で正歌をおろしてください」って名指すんですね。その名指すことを場所名乗りというんだそうです。名指されたことによってB村の若者は「それは畏れ多いけれども、せっかく名乗られたので、私の所もお返しとして正歌を歌い返ししましょう」と言って、正歌を歌って「場所踊り」を踊るんですね。そういうふうにしていくつかの村の人を順に名指す、それが「場所踊り」なんです。



最初に言ったように、盆踊りを目を違えながら近所の集落の人が出かけたり押しかけたりするっていうのとこれが関係あるんじゃないかと思ってるんですけど。

ある谷合の川筋であるとか、村々が次々と開拓されて行ったプロセスでいくつかの集落共同体ができる。歴史的に繋がりがああるのかもしれないんですけどもそれら集落間に交際しているかやりとりがあつて、そういったことが踊りの場で表れて来ているひとつの例かなとも思ってるんです。この場所名のりのやりとりを地元では「歌盃」と称していて歌垣の掛け合い歌みたいなことなんですけども。近隣の集落同士のあいだでの何かこういった関わりが、踊りのやり方に関わっていたのではないか。ちらっとそういうところも考えて行くと、より広がりのある議論の展開になるのかなとは思ってます。

橋 都

盆踊りに関してはあまり聞いていないんですが、霜月神楽、湯立て神楽については長野県と隣の愛知県、三河の花祭り行ったり来たりがありますし、例えば今度のかけ踊り調査を行った大河内ですが、大河内と豊根村とは結婚、親戚関係も非常に濃密です。したがって霜月祭り、向こうの花祭りに対してはこっちからも親戚先にもなるから行く。行って大河内の舞をひと舞奉納させてもらうとか、向こうから逆に来て大河内で舞を舞うとか、そういったことはかつてはかなり行われていました。したがって「テホへ、テホへ」に似た旋律も大河内へ伝わってきてるとかということがありますから、それは冬の祭りですけども、夏でも当然そういうことがあり得たと思います。それから中井侍あたりは静岡県の水窪あたりと結婚、婿養子に行ったりとか、お嫁にむこうから来たとかそういう交流かなりありますから、この「かけ踊り」の

伝播っていうものは当然あったし、さっきの城所先生の塩の道のお話もそういった色んなものが組み合わさって伝わって来てるのかな。従って愛知県、静岡県、長野県のこの国境地帯に似たようなものが分布してるのかなっていう感じはいたしますけれども。

星野

「かけ踊り」は本当におもしろいっていうか、なかなか考えさせられますよね。いい勉強になりました、本当に。じゃあ久保田さん、なにかありましたら。

久保田

地域のお話でふと疑問に思うんですけども、もっとたくさんあったのがどんどんなくなってこういう大変な場所に残ったのか、それとも大変な場所に元から伝わっていったものかなっていうのが、とても疑問に思いました。

新野みたいに大きな町場に盆踊りはあるのは当然と思うんですけども、この念仏踊りがいま伝わっているのが割に山奥の所なので、それはなにか地域的な理由があるのかなという、単純に疑問なんですけど、その辺はどうなんでしょうかね。歴史的にそこに残ったってことなのか、それとも元々そういう地域に伝わって行ったのか。

星野

「かけ踊り」、「念仏踊り」に限らないわけなんですけど、中世からの開村とか開拓とか非常に関わっているように感じるんですけど。例えば和合念仏踊りの宮下大家宗家があれば中世に開村したのでしょ、鎌倉が崩壊してからですよ。

それから坂部が『熊谷家伝記』のある所ですよ。熊谷家はあれは中世、鎌倉ですよ。坂部にもうひとつ『関家伝記』っていうのもあって、関福盛さんっていう人がその十八代目らしいですけど、あそこも歴史が古いんですよ。あそこも伊勢から来た流れらしいんですよ。割あい開拓、開村っていうか、そういう形で入りこんだ村に残っている

て、それがなぜ伝えられているのかっていう……。

久保田

神楽の方はそういう開拓開村伝承とくっついて、そういうところで始めたって研究が出てますけど、「かけ踊り」もそこに後から入り込んで行ったのか、それともなにか地域的な特色と関係があって、そこだけに残ったということなのか。

星野

中村浩さんの場合は、誰がなんの伝えたのかっていうと、やっぱり行者とか山伏的なそういう人の存在していたことを仄めかしてるわけですよ。その辺はどうなんですか？

城所

『熊谷家伝記あたりの村々』っていうのの村の始まりを読むと、読んだ時に、一村が出来るってとても大変なことらしくて、あの辺はいっぱいそういうのが、誰々が鎌倉時代の戦いで逃げて来た。それでも五、六人ぐらいで逃げて来ても一村ができあがらないわけですよ。上手くないかな。まずは水場のある所に家を求めるんですけども、それでもリーダーがいないと上手くまとまっていけないので、そういう時に近くの同じような逃げて来た人達がいて、そういう中でくっついていたり離れたりしながら開墾をして行く、そうやって村々が出来て行ったっていうんですね。

そうなると非常に人数が少ないから一代、二代は中の人達ですませるかもしれないけど、血が、やっぱり新しい血が欲しいというので村々の交流がとても盛んだったっていう話を聞きました。ですから村を開くっていうのはとても大変なことだった。特にあれだけ傾斜地でなかなか作物の採れない所に、よきリーダーを得てひとつの村にして行くまでには、くっついたり壊れたり起きて長い年月がかかっていったみたいですね。

和合の心川、あれも和合の開村、開拓地なわけですよ。

久保田

もともと霜月神楽系ですと、まず開拓村があつて、そこから分かれていった村があつてそういう所が共同で、お互い寄り合いで祭りを始めたつていう伝承がありますよね。ですから霜月神楽系は近くの村、関係する村と繋がりがあつたから。「かけ踊り」というのも繋がりをもつた所に入つてきたのかなつていう感じも漠然とするんですけども。

城所

大きい祭りを作るにはそれなりの財力がなくちゃいけないので、大きな庄屋さんとかまたは領主であつたとか、やっぱり大きい村でないとなかなかそういうものを取り入れられなかった。だから神楽などを取り入れるには相当な財力が必要だつたみたいですけどね。

星野

別件ですが「かけ踊り」の話じゃなくて、さっき言いました「場所踊り」なんですけども、実はなにか信仰が関わつていたようなんですね。それが白山信仰なんです。白山に三つの馬場がありまして、その一つの石徹白が美濃馬場つて言うんですね。その馬場の近くに長滝寺があるんですね。その長滝寺がこの踊り伝承に非常に関わつていたみたいですね。

これは宮本常一が『石徹白民俗誌』つていう著書に書いてるんですけども、七月十四日なりますと周辺一帯の若者が白山へ登るんですね。頂上で白山をお参りして来て帰つて来ると、まず長滝寺の講堂で踊るわけです。その後順々に下の村の方へ踊り掛けて行つたんだそうです。その長滝寺で踊る時は「白山の正歌をおろす」つていうんですね。白山を褒める歌、を順々に村々におろして行つて寒水地区の方まで行くんですよ。

全然「かけ踊り」の話じゃないんですけど、そういう信仰的な道みtainなものもあるいは「かけ踊り」に想定されないのかなとも思つたんです、ちょっと申し上げたんです。一般論としてそういうことが言える

星野

のかどうかわかりませんが、白山の「場所踊り」の場合はそういう流れがあつたようです。

ともかく「下伊那のかけ踊」について皆さん現地の実地調査をしていただきその要点をご紹介いただきました。または中村茂子さんよりこれまで長年調査研究をやつてこられたご成果から「かけ踊り」つていうものは何なのだというところについての総論を披露していただきました。またそれに関連することを、中村浩さんも色々これまで書いて来たわけですが、それをまた元にしながら、話がだいぶ展開出来たんじゃないかなと思います。

特に橋都先生の方から現地の情報、あるいは城所先生の方から色々遠江や三河その他各地のお話、また久保田先生からも神仏、小さな祀られざる神仏を供養する、それと念仏が関わつてゐるみたいな見方が披露され非常にもろい視点じゃないかなと思ひました。この場においてより話が広がつたような感じとなり、今後の調査研究の一層の進展をうながす契機を作り得たのかなと思ひます。

以上をもちまして終了といたします。

第六章

「下伊那のかけ踊」

関係資料

文献資料【※今回の調査で参考にした文献】

		書名		編著者・発行者		発行		備考等	
下栗のかけ踊り	『霜月祭々事記』	下栗区・下栗霜月祭保存会		平成七年十二月		「下栗の霜月祭・かけ踊り」歌集			
	『南信州上村 遠山谷の民俗』	上村民俗誌刊行会		昭和五十二年二月					
和合の念仏踊り	『遠山谷北部の民俗』	飯田市美術博物館・柳田國男記念伊那民俗学研究所		平成二十二年三月					
	『和合の念仏踊り』	念仏踊り保存会		平成十九年三月					
日吉の念仏踊り (日吉の大社念仏)	南信州の秘境『和合の念仏踊り』	和合念仏踊り保存会		平成四年八月					
	『盆おどりの唄』	日吉保存会		平成二十二年八月		筆書き			
大河内のかけ踊り	『盆弥ん佛帳』 日吉区	日吉区		昭和三十一年七月		筆書き 国語ノート			
	『盆弥ん佛帳』 日吉区	日吉区		不明		筆書き 和綴じ			
坂部のかけ踊り	『大河内かけ踊り和讃』	大河内地区		平成十八年七月		歌集			
	『南信州・天龍村 大河内の民俗』	天龍村教育委員会・信濃路		昭和四十八年七月					
向方のかけ踊り	『和讃 盆謠 歌集』	松井重隆		昭和二年七月		筆書き、坂部の松井重隆が大正十五年八月に原本を写したもの			
	『坂部の盆踊り唄集』	船田利長		平成二年二月		筆書き			
『まつり11』 特集 念仏踊り	『かけ踊り』	向方区		不明		歌集			
		まつり同好会		昭和四十二年八月		武田義実「向方の『かけおどり』」収載			

総合的なもの	『信州の芸能』	信濃毎日新聞社編集局…信濃毎日新聞社	昭和四十九年二月	
	『写真集 伊那谷のまつり』	橋都正・向山雅重…すずさわ書店	昭和五十年十二月	
	『かけ踊り覚書』	中村浩…信濃毎日新聞社	昭和五十八年七月	
	向山雅重著作集『山国の生活誌』四巻『山国の四季』	山国の生活誌編集委員会編…新葉社	昭和六十三年四月	「南山の樽木祭り」収載
樽木踊り	『樽木踊り』	やすおか「ふるさと文化のむらづくり」実行委員会… 泰阜南小学校、泰阜南中学校	昭和五十年六月	平成十二年再版
	『泰阜村誌』	泰阜村誌編集委員会…泰阜村役場総務課	昭和五十九年十一月	第三節 芸能（399～410頁）
梨久保の樽木踊り	『「くれ木踊り」の唄』	梨久保地区	昭和五十八年十月	歌集
	『くれき踊りの唄』	梨久保地区	不明	歌集
温田の樽木踊り	『南宮神社くれき踊り唄』	くれ木踊り保存会	平成十三年三月	詞章と共に、高橋勲夫氏（当時保存会長） による口唱歌が付録の形で付されている
	『南宮神社くれき踊り唄』	くれ木踊り保存会	昭和二十八年八月	歌集
天龍村のかけ踊り	『天龍村史』 下巻	天龍村史編集委員会編…ぎょうせい	平成十二年十二月	「掛け踊り・盆踊り」（872～878頁）、 「満島神社のお練り」（886～890頁）、「中井侍の祭り」（852～856頁）
満島神社の秋祭り	『満島神社の由来』	満島神社	不明	A3、1頁
	『満嶋神社掛け太鼓 歌集』	満島神社氏子青年会	不明	A4、2頁
向方のかけ踊り	『伊那』 2005年6月号	伊那史学会	平成十七年六月	橋都正「かんびょうえ様の踊り」収載
	『伊那民俗』 第25号	柳田國男記念伊那民俗学研究所	平成八年	桜井弘人「向方の盆行事」収載

総合的なもの					書名	編著者・発行者	発行	備考等
					『まつり69』特集 三信達の民俗芸能	まつり同好会	平成十九年十二月	坂本要「南信州の念仏踊り掛け踊りその他」収載
					『目で見る信州の祭り大百科』	長野県民俗の会・郷土出版社	昭和六十三年十二月	
					『芸能の科学』3	東京国立文化財研究所芸能部編・平凡社	昭和四十七年三月	前嶋茂子「かけ踊の研究」収載
					『日本歴史地名体系』第20巻 長野県の地名	平凡社	昭和五十四年十月	
					『角川日本地名大辞典』20 長野県	編纂委員会 竹内理三編・角川書店	平成二年七月	
					『全国市町村要覧』（平成17年版）	市町村自治研究会編・第一法規	平成十七年十二月	
					『長野県の民俗芸能 ―長野県民俗芸能緊急調査報告書―』	長野県教育委員会編・発行	平成七年三月	
					『折口信夫全集』第三〇巻	折口博士記念古代研究所編・中央公論社	昭和四十三年四月	
					『信州 伊那谷』素顔の日本あります。 伊那谷学びの里ガイドブック	三隅治雄・向山雅重監修／ 飯田市商工会議所観光委員会編集・新葉社	昭和六十年八月	

調査報告書作成委員会

調査報告書作成委員会・執筆者一覧

調査報告書作成委員会 ※委員職名は平成二十一年度当時

委員長

星 野 紘 独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所名誉研究員

委員

城 所 恵 子 横浜市文化財保護審議会委員

久保田 裕 道 國學院大學兼任講師

中 村 茂 子 独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所名誉研究員

橋 都 正 長野県文化財保護指導委員

城 井 智 子 (社) 全日本郷土芸能協会専務理事

笹 生 昭 (社) 全日本郷土芸能協会常務理事

森 下 春 夫 (社) 全日本郷土芸能協会常務理事

事務局

西 田 昌 代 (社) 全日本郷土芸能協会職員

小 岩 秀 太 郎 (社) 全日本郷土芸能協会職員

執筆者(五十音順、敬称略)

城 所 恵 子

久保田 裕 道

中 村 茂 子

橋 都 正

星 野 紘

調査報告書作成委員会開催日 ※会場(社)全日本郷土芸能協会事務所

第一回調査報告書作成委員会

平成二十一年 八月 七日(金)

第二回調査報告書作成委員会

平成二十一年 九月十四日(月)

第三回調査報告書作成委員会

平成二十一年十一月 六日(金)

第四回調査報告書作成委員会

平成二十一年十二月 七日(月)

第五回調査報告書作成委員会

平成二十二年 一月十八日(月)

「下伊那のかけ踊」現地調査実施日・調査班

第一班

和合の念仏踊り〈阿南町和合〉

平成二十一年八月十三日(木)、十四日(金)、十五日(土)、十六日(日)

調査員 久保田 裕 道

森 下 春 夫

記録員 山 口 拡(成城大学大学院)

第二班

日吉の念仏踊り(日吉の大社念仏)〈阿南町和合日吉〉

平成二十一年八月十三日(木)、十六日(日)

調査員 城 所 恵 子

調査員 笹生 昭
記録員 佐藤 真康（成城大学大学院）

第三班

大河内のかげ踊り〈天龍村神原大河内地区〉

平成二十一年八月十四日（金）、十六日（日）

調査員 橋都 正

小岩 秀太郎

記録員 林 敬範（成城大学大学院）

下栗のかげ踊り〈飯田市上村下栗地区〉

平成二十一年八月十五日（土）

調査員 橋都 正

小岩 秀太郎

記録員 林 敬範

第四班

坂部のかげ踊り〈天龍村神原坂部地区〉

平成二十一年八月十四日（金）

調査員 星野 紘

笹生 昭

記録員 北河直子（成城大学大学院）

瀬川 渉（成城大学大学院）

向方のかげ踊り〈天龍村神原向方地区〉

平成二十一年八月十六日（日）

調査員 星野 紘

記録員 北河直子

記録員 瀬川 渉

第五班

温田の樽木踊り〈泰阜村温田地区〉

平成二十一年八月二十二日（土）

調査員 中村 茂子

城井 智子

記録員 小岩 秀太郎

梨久保の樽木踊り〈泰阜村梨久保地区〉

平成二十一年八月二十三日（日）

調査員 中村 茂子

城井 智子

記録員 小岩 秀太郎

第六班

満島神社の秋祭り（かけ太鼓）〈天龍村平岡〉

平成二十一年十月十七日（土）、十八日（日）

調査員 星野 紘

小岩 秀太郎

記録員 瀬川 渉

第七班

中井侍秋例祭（宿入り・道中囃子）〈天龍村平岡中井侍地区〉

平成二十一年十一月二十八日（土）、二十九日（日）

調査員 久保田 裕道

森下 春夫

記録員 小岩 秀太郎

協力者一覧（敬称略、順不同）

※肩書職名は平成二十一年度当時

長野県教育委員会

飯田市教育委員会

飯田市上村自治振興センター

阿南町教育委員会

天龍村教育委員会

泰阜村教育委員会

下栗のかけ踊り

野 牧 知 利（下栗保存会会長）

胡桃澤 三 郎（下栗自治会長）

野 牧 武（現公民館長）

久保敷 俊 一（宮元禰宜）

仲 井 榮（禰宜）

熊 谷 清 登（禰宜）

和合の念仏踊り

平 松 三 武（和合の念仏踊り保存会会長）

佐々木 勅（和合の念仏踊り保存会前会長）

大屋 宮下家

日吉の念仏踊り（日吉の大社念仏）

脇 坂 寛 至（日吉大社念仏保存会会長）

安 野 久 兵（日吉大社念仏保存会役員）

佐々木 良 都（日吉大社念仏保存会役員）

後 藤 崋 一（日吉大社念仏保存会役員）

金 光 利 秋
小 泉 健 一（阿南町振興課）

大河内のかけ踊り

伊 藤 文 博（大河内地区長）

伊 藤 善 朗（大河内地区長老）

竹 田 保 彦（大河内地区長老）

白 川 五 朗

坂部のかけ踊り

久 下 勝 義（坂部地区長）

関 福 盛（坂部地区氏子総代）

関 京 子（天龍村柚餅子生産者組合組合長）

向方のかけ踊り

村 松 克 一（向方地区長）

橋 爪 誠

村 松 英 文

満島神社の秋祭り（かけ太鼓）

秦 正（満島神社氏子総代）

遠 山 景 一（満島神社宮司）

上 野 洋 平（満島神社氏子青年委員長）

恩 澤 知（満島神社氏子青年副委員長）

宮 下 正 和（氏子青年副委員長）

大 澤 和 也（氏子青年会長）

村 松 美 里

中 島 俊 博

中井侍秋例祭（宿入り・道中囃子）

宮澤 和 己（中井侍地区長老）

羽田野 七郎平（中井侍地区長・禰宜）

原田 幸 文（小高明神宮主・氏子総代）

柿下 公 喜（若連会長）

温田の樽木踊り

高 橋 寛（南宮神社氏子総代）

宮内 銀太郎（温田地区長）

高 橋 勲 夫

高 島 精 吉

中 島 清 人

原 田 圭 介

高 島 文 七

半 崎 一 彦

梨久保の樽木踊り

市 瀬 尚三郎（梨久保地区長）

柿 下 武（梨久保の池野神社氏子総代）

◎本調査にあたり、各保存会、各神社氏子の方々並びに各地区の方々には、多大なるご協力を賜りました。ここに御礼を申し上げます。

平成二十一年度

文化庁「変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成の推進事業」
「下伊那のかけ踊」調査報告書

平成二十二年二月二十五日

発行 文化庁文化財部伝統文化課

〒一〇〇―八九五九 東京都千代田区霞ヶ関三―一二

作成 社団法人全日本郷土芸能協会

印刷 江戸クリエート株式会社